
IS [インフィニット・ストラトス] WHITE BLADE & LION SOUL

rihito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 「インフィニット・ストラトス」 WHITE BLADE
& LION SOUL

【Nコード】

N8969S

【作者名】

r i h i t o

【あらすじ】

女性にしか使えないパスワードスーツ、IS。しかし、世界で同時に2人の男の適合者が見つかった。1人は世界最強のIS使いの弟。もう1人はISとは全くの無縁だったオーストラリアの学生。2人が出会った時、世界と彼らの周りの少女たちの心が動き出す。

オリジナル設定

【2011年 10月22日編集】（前書き）

これは本編における最新話までのオリジナル設定が書かれています。

ネタバレになる恐れがあるので当話を読むのは注意してください。

オリジナル設定

【2011年 10月22日編集】

……オリジナルキャラクター……

リオン＝マードック イメージCV『神谷浩史』

15歳。オーストラリアでISを起動させた少年。オーストラリア人の父と日本人の母を親に持つハーフ。金髪を肩まで伸ばしたぼさぼさの頭と日本人と同じ茶色の眼を持っている。顔は上の中、頭は中の下である。5歳の誕生日に両親が交通事故で亡くなり、その後は孤児院で生活していた。孤児院への援助を条件に、オーストラリア政府からのIS学園の入学とオーストラリアの専属になることを了承した。

性格は賑やかで明るく、周りを笑顔させるムードメイカーである。恋愛事に対しては鈍くは無いが、結構な奥手である。また両親の事故の影響か、命を軽く見ていたり、人を見下している者には普段からは信じられないほどの怒りを見せる。

白月日華 しろつきひつか

イメージCV『水島大宙』

16歳。オーストラリア生まれの純系日本人。短い黒髪に眼鏡をかけた姿が基本スタイル。ISの適性は無いが、ISの整備及び開発においてオーストラリアでは右に出る者はいないと言われている程

の腕の持ち主。12歳で大学にISの論文を提出し、14歳でオーストラリア初の第3世代ISを開発した天才である。リオンの専用機を開発したのも彼と彼のスタッフである。リオンとは昔からの幼なじみであり、彼のIS学園入学と一緒に学園に入った。

はまぐらもみじ
羽桜紅葉 イメージCV『南條愛乃』

15歳。1年2組所属の元クラス代表。山吹の髪と同色の目が特徴の少女。1人称は『僕』。あるきっかけで一夏と知り合い、そのまま一夏達のグループに加わる。リオン同様、明るく活発で人を笑顔にさせるムードメイカー。

実家は、日本最大の企業、『四季』の4つの分家の1つの『羽桜』の生まれ。彼女の専用機『刃風』もここから誕生した。ISの操縦は元クラス代表だけあつてかなりの物である。ただ、人一倍勝利にこだわる様子があるが、その理由は現在不明である。

……オリジナルIS……

オーストラリア第3世代機『ライオンハート』リオンの専用機。

開発者……………月白日華、及びそのスタッフ。

カラーリング……………ライオンを思わせる黄金色を基盤に所々に山吹色の牙や爪の様に描かれている模様。胸部の装甲は黒を基盤に赤色で描かれた横向きのライオンの顔が描かれている。

特徴……………他のISと比べ装甲が薄く防御力は低い、その分とも動きやすく軽快な動作ができる。ウイングスラスターは両肩部に1機ずつと背中に開かれた両翼の型の1機の計3機で、広範囲、あらゆる角度での瞬時加速を発動することができる。
イグニッションブースト

メイン武装……………『ライディング』リボルバー式の銃と片刃の剣を合体させたガンブレード。普通の銃、普通の剣としても使用できるが、斬撃の瞬間に銃のトリガーを引き、銃撃で発生した振動を生かした『超振動剣』と弾丸による2重の攻撃も可能。(ファイナルファンタジー?の主人公の武器を想像してください)

サブ武装1……………『ゲイル&ライトニング』腰に装着している4つある刃の付いた三日月型の近接ビット兵器。半自動的に発動でき、機動力が群を抜いている。本物の鳥のように動き多角的攻撃ができる。欠点としては、攻撃力と耐久性が低いため攻撃が当たれば簡単に破壊されてしまう。

サブ武装2……………『ファンクバルカン』手首部についているビームレーザーのバルカン。ライオンハート唯一のビーム兵器。かなりの速射だが、威力とリーチが問題。(ガンダム00のアリオスの装備を想像してください)

オーストラリア第3世代量産機……『ティガーズ』ライオンハートの元となった現在のオーストラリアの主力IS。カラーリングは小金色一色で、武装は『ライディング』と比べ、低威力のオートマチックタイプのガンブレード『ブラスト』。量産機であるが、他国の専用機との勝負でも見劣りしない出来になっている。

と、オリジナル設定においてはこのようになっております。今後の展開ではまた追記いたします。

プロローグ First Contact (前書き)

はじめまして。生まれて初めての小説投稿となります。ここでちょっとした注意事項を。

・この小説は、IS インフィニット・ストラトス の二次小説です。

・オリキャラ、オリジナルISが出ます。

・ストーリーは基本、原作に沿いますがオリジナル展開にしていく予定です。

・ファントム・タスク亡国機業は出さず、オリジナルの敵対組織を出す予定です。

以上の事を踏まえて、お楽しみください。

プロローグ First Contact

……『IS』……正式名称インファイニット・ストラトス。宇宙空間での活動を想定され開発されたマルチフォームスーツである。しかし今では、宇宙空間での使用ではなく飛行可能のパワードスーツとして軍事転用され各国の主戦力として観られている。

このインファイニット・ストラトス、使用すれば最強ともいえるものでありながら1つの欠点があった。『ISは男性には使えない。起動できるのは女性だけ。』というものである。

このことから、社会にも大きな影響が起こり、自然と『女尊男卑』という女性優先の社会ができあがってしまった。仕方ないことだ。もし、男と女が分かれ戦争が起こったら、ISを使えない男側は1日も持たずに全滅してしまうのが目に見えている。

現在の社会で男で優先されるとすれば、モデルやホスト等の顔が良く女に気に入られるか、IS関係の仕事で貢献するかのどちらか位である。

そして、この物語はそんなISとは全くの無縁だった“2人”の少年から始まる……

日本とオーストラリア、国境を越えた少年たちが出会った時、世界は動き出す……

……日本・高校入学試験会場……

「ここか。馬鹿にでかい会場だな」

寒い空気が肌を打つ中、少年はぼそりと呟いた。彼の名は、織斑一夏。私立藍越学園への受験にやってきた15歳の少年だ。この受験会場は、彼が住む場所から4駅も離れた場所に位置する多目的ホールである。

(それじゃ、さっさと会場に向かうか。こんな所にずっと居たら風邪ひいちまう)

一夏は足を進ませホールの中へと入って行った。

「藍越学園の受験会場は2階の北側の部屋になります。頑張ってください」

「はい。ありがとうございます」

ホールの受付の女性に説明を受け、一夏は2階への階段を探し始め

た。

(それにしてもほんと広い会場だな。他の高校の受験もやるみたいだし、部屋を間違えないようにしないとな)

混雑はしてはいないが、一夏と同年代の少年少女達がちらほらと見える。

(それに、どうやらISの試験もここでやるみたいだな。………
…ISか………)

ISの事を考え始めた時、一夏の耳に何か聞こえてきた。

「………ここを右で………の階段で………そしたら………だから………」

「………はい………はい………りました………」

「ん？」

ふと聞こえてきた声の方を見ると、スーツを着た係員らしき人に何かを聞いている少女が見えた。腰まで伸ばした長髪をリボンでポニテールにした後ろ姿が印象的だった。

「係員の人か。俺も詳しく聞いてみるか」

2階への階段が見当たらなかったので一夏も聞いてみようと思いつきをそつちに向けた。

「分かりました。教えて下さってありがとうございました」

「いいのよ。それよりESの試験でしょ。倍率高いんだから、リラックスして頑張ってね」

近づくこと2人の会話もはつきりと聞こえてきた。どうやら少女はES学園の入試に来ているらしい。

「それじゃあ、これ返すわね」

係員は手にした少女の受験票を返した。本当にその受験者がどうかの確認のために受験票を見してもらったらしい。

「頑張っつてね、」

篠ノ之尊しのののの「ん」

(……………え?)

一夏は、聞こえてきた少女の名前に耳を疑った。

(し……………しのの……………ほうき……………箒!?)

慌てて少女の方を見た。しかし、少女は曲がり角を曲がってしまい黒い長髪がなびいて視界から消えてしまった。

「っ!」

一夏は、受験に来たことも完全に忘れ、少女の姿を追い始めた。本当に一夏の知る女性かどうか確かめるために、そして……………

「……………迷った」

がむしゃらに追い始めたせいで、一夏は会場の地下エリアで完全に道に迷い、15歳にして迷子になってしまった。

「ぎゅっしゅぎゅっしゅぎゅっしゅぎゅっしゅぎゅっしゅ……………」

完全にパニックになってしまった頭を抱え、途方に暮れながら更に歩きさまよっている。

「あ」

大きな扉の前に立っていた。

「と、とりあえず入って、誰か居たら道を聞こう」

そう決め、扉の取っ手を掴み開けてみると、

「ん？あれは……………」

その部屋には人っ子一人いなかった。唯一の明かりに照らされていたのは……………」

「……………IS……………」

起動していない、着る者を待っている鎧のごとくその存在を醸し出しているISが置かれていた。

「IS……………生で見るのは初めてだな」

只の学生である一夏にとって初めてその目で見たISは、写真やTVと違い重々しく、そして絶対的な存在感を放っていた。

(……………少しだけなら……………)

軽い気持ちでISに近づき手で触れようとする一夏。そして……………

……………

触れた。ただそれだけだ。それ以上の事など絶対に起こらない……
……はずだった。

……キイイイイイン!!!

「へ？」

突然と甲高い音が部屋中に鳴り響いた。

「い、これって……まさか……」

一夏がISに触れた時、世界は大騒ぎになっていた。TVで流れた日本、いや、世界中に流された速報のテロップにこう書かれていたからである。

『世界初！ISを起動させた“男性”がオーストラリアで発見！！』

その数時間後、再びTVに速報が流された。

『日本初！日本の”男子学生”がISを起動させた！！！！』

この日、日本とオーストラリア。違う国で2人の男性のIS適合者が現れた歴史的な日となった……………

第1話 クラスに男子が2人（前書き）

一夏は、原作と比べISに関しては結構な知識を持っている設定となっています。

第1話 クラスに男子が2人

……太平洋上空・政府専用機内……

「ぐう……ぐう……ぐう……」

オーストラリアから飛び立った飛行機。その座席の中の1つにぼさぼさの金髪を肩まで伸ばした少年がいびきをかきながら眠っていた。

『あと、30分程で日本の空港に着陸いたします。機内の皆様は、機から降りる準備をして下さい』

機内にパイロットのアナウンスが流れる。しかし、少年に起きる気配は全く無い。すると……

「こら、いい加減起きろ。リオン」

バシン！と心地いい音を出しながら少年の頭を平手打ちするもう一人の少年が現れた。

「んがあ！」

その衝撃でついに起きる少年　　リオンは半開きになった茶色の眼を擦りながら目を覚ました。

「心地いい眠りを邪魔しやがって、何すんだよ、日華！」

リオンを叩いた少年

白月日華しつぎにっかは眼鏡を掛けた顔をリオンに向

けた。
「はいはい、いいからさっさと起きる。もう少して日本に到着するんだから、それまでにその寝ぼけ切った顔、ちゃんとしろ」

そう言い、手に持っていたおしぼりをリオンに向け投げる日華。

「はいはい。分かってるって」

おしぼりで顔を一通り拭くりオン。

「それにしても日本か。どうだ日華初めての故郷に行く感想は？」

顔を拭き切ったリオンが黒髪茶色の眼の日本人の日華に聞いた。

「まあ、生まれてずっとオーストラリアに居たから、日本が故郷って意識はあまり無いけど、正直いつかは行ってみたいと思ってるから嬉しいかな」

「そうか……………良かったな。願いが叶って」

そう言い、窓の外の景色に目を向けるリオン。そこからは、青い海と空、そして摩天楼が並び立つ都会の景色が見えてきた。

オーストラリアの政府専用機が日本に着いて1週間後……………今日は、
IS学園の入学式……………

ジ……………ッ……………

……………これは、想像以上にきつい……………

さっきから背後から居殺すかのような視線がビビシと突き刺さる
のが痛いほど感じる。今なら海外から来たパンダの気持ち分かる。
まあ仕方がないと言えば仕方がない。

このクラスで男は俺“達”だけだからだ。

今、自分、織斑一夏は今年の春、新しい学園に入りスタートを切っ

ただが……

入った学園は、入ろうとした藍越学園ではなく、女性にしか縁のないIS学園なのだ。

なんで男の俺がここに入学したのかというと……

日本で初めて、ISを起動させた男性になったからだ。

あの入試の日、偶然に触れたISを起動させてしまい、起動させた瞬間から物事がとんとん拍子で進み今現在の状況になってしまった。これはあれか、神様が与えた罰ゲームか？

……トントン

「ん？」

背中を小突かれ、後ろを振り向くと、

「なあ、一夏。かなりきつくはないか？」ヒソヒソ……

「お前もやっぱ視線感じるか、リオン」ヒソヒソ……

後ろに居たのは、今日の入学式で出会ってすぐ意気投合出来た、俺と同じく男でISを起動させたオーストラリア人、リオン＝マードックだった。リオンは、顔はTVで何度か見ていたが実際に会うと

かなりの良い奴だと分かり、会って5分で互いに名前で呼び合うほどに仲良くなれた。

「俺、今パングの気持ちがかなりよく分かる」「ヒソヒソ……」

「俺も、日本に行ったコアラやカンガルーの心境が分かる」「ヒソヒソ……」

2人でヒソヒソ話をやっている……

「あの……お、織斑君。織斑一夏君」

「え？」

姿勢を前に向けると、眼前の教卓から身を乗り出すようにして俺に顔を近付けるクラス副担任、山田真耶先生の姿があった。特徴は緑の髪に、子供じみた体格。そして胸元の自己主張が激しい2つの丸い物だ。

「あの、何ですか？」

「あ、あのですね。今自己紹介をされていて、席順で今は織斑君の番なので自己紹介をお願いします。あと、一応HR中ですのでヒソヒソ話はやめてくださいね」

そういえば今は自己紹介中だったな。

「あ、はい。分かりました」

そついい、椅子から立ち上がり自己紹介を始める。

「え〜っ、織斑一夏です。ISの起動に関しては完全に素人なので、皆の足を引っ張らないようにがんばっていきたいです。よろしくお願いします」

パチパチパチパチ!!!

言い終わったと同時に拍手が教室になり響く。

(聞いた！織斑君の生の声！)

(うん！思ったより澄んでて綺麗だった！)

(あの声で話しかけられたい！)

(私は、愛の告白されたいな〜！)

………ついでに何かが聞こえた気がしたが気にしないことにしよう。

これ以上目立つのは嫌なので、そのまま自分の席に着席する。

「織斑君。ありがとうございます。次はリオン君お願いします」

「お！はいはい！」

名指しされ、良い返事をして立ちあがるリオン。こいつはどうするか………

「オーストラリア代表候補生、リオン＝マードックです。………以上！……！」

ドドドドドドッ！！！！

クラスに居た全員がずっとけた音が聞こえた。俺もガクッと来た。

「え？そ、それだけですか？」

「うん。面倒くさい！」

にっこりと良い笑顔で答えるリオン。

すると……………

バシン！！！！

「つつつたあああああ！！！！」

心地いい音を放ちリオンの頭に何かか直撃した！

「何？何だ？テロでも起こったか？」

「馬鹿もの。自己紹介くらいきちんとせんか、まったく」

頭を抱えるリオンの傍らにいたのは、黒のスーツをキチツと着こな
し黒の髪をなびかせている……………

「ち、千冬姉え！な、なんでここに…………『バシン！！』ううおお
おおおっ！！！！」

リオンを襲った音の正体は、千冬姉が手に持った出席簿であると身
をもって理解できた。

「私はここの教師だ。呼ぶなら『織斑先生』とよべ馬鹿ものが」

「あい……………すみません……………」

「ソーリー、ティーチャ。」

涙目になった俺たちは一緒に謝った。

「諸君、私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で
使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ私の言う事はよく聞き、よ
く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事
は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私
の言う事は聞けいいな」

教壇の山田先生の隣に立つと自己紹介をした千冬姉。ここで教師を
していたのか。つか、そんなきつく言わなくなっただけいいじゃない
か。そんな風に言うと皆、付いて行かな……………

「キヤー————！！」

「千冬様よ、本物の千冬様！」

「ずっと憧れでした！」

「私、お姉様に会う為にこの学園に来たんです！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて本望です！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「その声でもっと叱って罵って下さい！」

訂正。我がクラスの女子は皆たくましいみたいだ。つーか何か1人危ない発言が聞こえたぞ。

「って、あれ。織斑君。千冬様と同じ名字？」

「それに千冬“姉”ってことは2人は姉弟？」

「それじゃあ世界で唯一男でISを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

何かまた聞こえたが、まあ姉弟なのは本当だからいいか。

「ほら、次の者、さっさと自己紹介をしる。HRの時間を自己紹介だけで終わらせる気が。時間をもっと大切しろ！」

「は、はい。すみません」

リオンの後ろの席の女子が慌てて自己紹介を始める。

その後は、なんの問題もなくHRが終わって行った。

「うう〜、頭が陥没するかと思ったぜ」

「出席簿って、武器にもなるって分かったな」

ヒソヒソヒソヒソ……

HR後の休み時間。俺とリオンはさっきのHRでの出来事を振り返っていた。

「一夏。あの人お前の家族だろ？なんでここに居るって教えてくれなかったんだ？」

「いや、俺もさっき初めて知ったんだよ。千冬姉、家では仕事の事は一切話してくれなかったから」

ヒソヒソヒソヒソ……

「……………なあ、息苦しくないか？」

「っーか、生きた心地がしない」

さっきから遠巻きにこちらをちらちらと見ながらクラスの……いや、廊下にもあふれている他のクラスの女子たちがこっちを見ながらヒソヒソと話していた。

「……………別の所に行こうぜ」

「同感だな……………っと……………1人連れてきていいか？」

「ん？」

そう思い、屋上にも行こうとして席を立ち、俺は目当ての席にまで歩いた。

「……………箒。ちょっといいか？」

「……………一夏か」

窓際の最前の席に座った、腰まで伸びた黒髪をリボンでポニーテールにした、俺の幼なじみ……………

6年ぶりに再会した、篠ノ之箒に声を掛けた。

第1話 クラスに男子が2人（後書き）

もう少しオリジナル部分が固まれば、オリジナルの設定のまとめを掲載します。

感想・評価お待ちしております。

第2話 獅子の怒り（前書き）

筈がヒロインなのに、あまり書けなかったorz

次こそは必ず！それでは第2話どうぞ！

第2話 獅子の怒り

……リオンSide……

……一夏の連れてきた彼女を連れて、屋上にやってきた俺達。それにしてもあの子は一体誰なんだろう？つーか……

「……………」

「……………」

呼んだなら呼んだで何か喋れよ！さっきから黙りっぱなしじゃねえか！お互い緊張でもしてんのか？…………… ったくしゃあねえな……………

「なあ、一夏？」

「んん！あ、ああ何だ？」

俺から話しかけると、かなり驚いたような返事を返す一夏。そんなに緊張してたのよ。

「お前の連れてきたこの可愛い子誰なんだよ？知り合いなのか？」

「か、可愛い……………」

俺の可愛い発言で顔を赤く染める彼女。結構うぶみたいだな。

「あ、ああ。この子の名前は篠ノ之箒。俺の小学校時代の幼なじみだよ」

「ほお、幼なじみか」

「この学園で6年ぶりに会えてな。ちょっと話したくなっただよ」

「じゃあ、さっさと……えっと……しなのの……さん？に話してやれよ」

「篠ノ之だ。“の”が1つ多い。えっと……」

「リオン＝マードックだ。リオンでいいぜ」

「では、私も篤でかまわん。よろしく頼む」

お互いにそう言い握手を交わす。さて、それじゃ……

「じゃ、俺は先に戻っとくぜ。後はお2人でどうぞ」

そう言い残し、一足先に席を外し教室へと戻った。

………一夏Side………

………リオンの奴、余計な気遣いやがって。ま、一応は感謝してくか。

「あ……あのさ、篝」

「な、何だ？」

「その……剣道の全国大会、優勝したみたいだな、おめでとう」

「な、なんでそれを知っている！」

「何でって、新聞に載っていたの見たんだよ」

「よ、よくそんな小さな記事を見つけたものだな」

「ああ……まあな……」

「……」

「……」

あ~~~~~っ、え~~~~~っ、と、……

キーンコーンカーンコーン！

「あ……予鈴だな、戻るとするか」

鐘の音を聞き、教室に戻ろうとする篝。

「……ほ、篝！」

戻ろうとする筈の後ろ姿に向けて声を発した。

「な……………何だ？」

「その……………元気そうで良かった。もしかしたらもう2度と会えないかもしれないって思ってたから……………また会えてよかった」

「っ……………そそ、そうか。わ、私も会えて……………嬉しいぞ」

そう言うと、赤みを増した顔を隠すかのように走り去って行った。

「……………まあ、言いたいことは言えたから良いか……………」

……………って、やばい遅刻する！！！」

千冬姉の授業に遅刻＝死、の方程式がもう頭の中に出来ている俺は全力で教室めがけて走りだした。

……………結果を言うならば、頭に強い痛みが起こったと言えば分かるだろうか。

「初日にいきなり遅刻をするとはいい度胸だなこの馬鹿者が」

漆黒のスーツの担任が、こめかみの血管を引きつらすその姿と言葉が記憶に良く刻まれているよ。

「ああ〜〜つ、このままだといつか骨が陥没しそうだ」

「そんな事無い…………と、自信を持って言えないのはなぜだ？」

授業が終わり、まだ痛みが残る頭を摩りながらリオンと会話を
をする。

「まさか、出席簿だけであれほどの破壊力を生み出すなんて
失礼だが、彼女は本当に人間か？」

「失礼なことを言っな！俺のたった1人の姉だぞ！人間…………の、
はず…………」

本人がいれば、間違いなく気絶するまで殴られ続けられる会話をし
ている俺たちに…………

「ちょっとよろしいかしら？お2人とも？」

「んあ？」「おう？」

「なんですその気の抜けたお返事！？ 私に話しかけられるだけでも光栄なのですからもっとしつかりとした返事は無いのですか！？」

金髪ロングヘアーで所々がロール状になっている、ブルーの瞳が印象的の女子が俺たちに声を掛けてきた。つか、手に取るようなお嬢様口調の話し方だな。貴族っぽいからイギリス辺りの出身だろうか？

「えーと、すまん。いきなり話しかけられたから、つい。それに君が誰だかわからないし」

「ごめんね。俺も一夏と同意見だ。すまないが自己紹介をしてくれ」

「ここに、このセシリア・オルコットを知らないと！イギリス代表候補生であり、入試主席のこの私を！？」

代表候補生……つまり、リオンと同じ国家代表のIS操縦者の候補生ってことか。

「へーえ、イギリスの候補生か」

「で、その候補生様が俺たちに何か？」

「そうですね代表候補生。つまり、私は選ばれた数少ないエリートなのですよ！その私に声を掛けられただけでも幸福に御思いなさいー！」

狂わされた調子を取り戻したのか、再び高らかに話し始めるセシリア。

「大体……よくこの学園に入れましたわね？ 男I Sを操縦できるというだけであって入れたようなものですわよね」

まだちゃんとした訓練もしてないのに、そこまで言わなくてもいいだろう。

「まあ、私は優秀ですから、泣いて頭を下げれば教えて差し上げてもいいですよ」

そりゃ、結構、教えてほしくなったら担任を頼る。

「なんせ私、入試で唯一、教官を倒したエリート中のエリートですから」

ん？入試で？

「入試ってあれか？I Sに乗って1対1で戦う？」

「それ以外、なんだと……俺も倒したぞ、教官」……………ハ
イ？」

あ、絵に描いたように目が点になってる。おもしれー顔。

「まあ、倒したっていうか、いきなり突っ込んで来たから、かわしたついでに足払いを掛けると、壁にぶつかってそのままダウンした
だけなんだけどな」

起こったことを嘘偽りなく伝えると、

「わ、わ、わ、私だけだと聞いていましたけど………」

喉から振り絞って出したかのような小声で聞いてきた。

「それってあれじゃないか？女子ではってオチなんじゃ」

「あ、多分それだな」

「あなたも！？ あなたも教官を倒したって言うのですか!？」

我を取り戻したセシリアは、声を荒立て、怒りに頬を紅潮させ、眉は釣り上がった顔をこっちに迫った。

「お、落ち着け………なっ？」

「これが落ち着いて !?!」

キーンコーンカーンコーン!

「おっ、予鈴だ。」

「っ………!またあとで来ますわ!逃げないことね!宜しいですわね
!」

そう言い放つと、そそくさと自分の席へとセシリアは戻って行った。

「はあ、なんだか疲れたな」

「そりゃ同感。あーゆーの、かなり苦手だわ俺」

「そりゃ俺もだ」

その会話の直後、教室の扉から魔のBLACK BOARDを手にしたこのクラスの独裁者が現れ……ドガン!!!!!!

「今、何か不愉快なことを考えていなかったか？顔に出ていたぞ？」

「……ず、すいません……でじだ……」

「……今、あの出席簿から爆音が聞こえた。火薬でも仕込んでるのか？」

机にめり込みそうになった顔を上げると、気絶しそうな意識を奮い立たせて授業に集中した。もうこれ以上、脳細胞を破壊されたくないからな……

なんかかんやあつたが、ついに本日最後の授業となった。今日は入學式と簡単な説明も兼ねた授業だけで終わり、昼過ぎで本日の授業は終わりである。

「では最後に、今月末に行われる対抗戦に出るクラス代表者を決めたいと思う」

クラス代表者？

「おりむらせんせ。クラス代表者ってなんですか？」

後ろの方から間延びした、今にも眠ってしまいそうなほんとした声の質問が飛んできた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長のようなものだな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないから軽はずみでなったりするな」

「なるなる！わかりました！」

さっきと変わらない伸びた発言が聞こえる。仮にも先生に対してその話し方でいいのか？つか怖くないのか？あの先生に対してそんな口調で？

つまり、普通の学校で言う所の代表委員みたいなものか。絶対にやりたくねえな。

「立候補はもちろん、自薦他薦も構わん。誰か意見はあるか？」

「はいはい！私は織斑君がいいと思います！」

……………え？

「あ、私もそれが良いと思う」

「私もその意見に1票入れま」

「じゃあ私はリオン君を推薦します！」

「あ〜ん！私が最初に言いたかったのに〜！」

「織斑君、リオン君に1票ずつ入れま〜す！」

おいおいおい！何勝手に話進めてんだよ！俺が代表者！まじで！な
つてたまるか！

「先生！」「ティーチャ〜！」

「俺はリオン君が良いです！」「自分は織斑君を推薦します！」

「……………え？」

俺とリオンの声が同時に重なった。

「おいリオン。俺を売るつもりか？」

「お前こそ、さらっと人になすりつけんじゃねえ！」

「いやいや、自分は醜い争いになる前に自ら身を引こうと……………」

「嘘つくな！代表者になってたまるかって、顔に出てるんだよ！」

「なぜ分かった？心でも読んだのか？」

「本当に思ってたのかよ！」

「しまっ！自ら墓穴を……………バシン！」納得いきませんわ！男が代
表者になるなんて！……………」

何かを叩きつけるかのような音と同時に大きな声が響いて来た。声
の方を向くと、セシリアが不満全開の表情で俺とリオンを睨んでき

た。

「男が代表になるなんて、このクラスがいい笑い者になるのが目に見えてますわ！ここはこの私、セシリア・オルコットが立候補いたしますわ！」

「……………だったら、最初からそう言っとけ、高飛車女が……………」
「ぼそっ……………」

耳を澄ませないと聞こえない程の声で、悪態をつけると……………

「あなたっ！！！！今、私のことを何とおっしゃいまして！！！！」

……………どうやら聞こえたらしい。

「このような文化の低い島国に学びに来ていますのよ！いつそ私に代表を譲るべきなのでは？」

……………やべえ、さすがにイラッときた！

「イギリスだって立派な島国じゃねえか！しかも料理もくそ不味いくせに、その自覚すらないのか？」

売り文句に買い文句。頭に結構な血が上った俺は更に続ける。

「だいたい、何だ？学びに来たくなきゃ最初からここに来なけりや良いだろ。自分が1番で1番良いと思ってる国で。そんなに嫌ならさっさと尻尾振って国に帰りやがれ！」

「一夏……………気持が良いほどズバツと言っね」

「……………わ、私の祖国を侮辱していますの……………」
顔をうつ伏せ、フルフルと怒りで体を震わせているのが見て分かる。
しかし、ここまで来たらもう後には引けない。

「最初に侮辱してきたのはそっちだろうが。まさか、それすらも分かんないか？」

「……………もう結構……………決闘ですわ!!!!!!!!!!」

怒りを込めた指先を突きつけ、セシリアが叫んでくる。

「おお、いいぜ？ 四の五の言うよりは、よっぽど分りや……………ムガ！」

……………リオンside……………

さすがにこれ以上熱くさせるのは、色々と厳しいな。そろそろクー
ルダウンさせるか。

「まあまあ、いい加減落ち着いて一夏」

「ひ、ひほん（り、リオン）…」

俺は、少し血が上ってる一夏の口に手を当て、これ以上事を大きくするのを防ぐ。

「ちょっとあなた、何を邪魔していますの!」

「まあまあ、少し待っててセシリアさん」

そっぴい、一夏の耳元で小さい声で話す。

(いいじゃない、このままセシリアさんに代表を譲ったら。もしそうだったら、代表なんて面倒くさい事やらなくて済むんだよ)

(む、ほうか(あ、そうか)……)

(彼女は一夏に対してはもう悪い印象しか持っていないから、後は俺に任せてくれ)

(ふぁ、ふぁあつは。(わ、分かった。))

小声での会話を終え、一夏から手を離すと、セシリアに体を向けた。

「セシリアさん。一夏が代表をセシリアさんに譲るって」

「な、人にあそこまで言っておきながら何を……」

「いやあ、僕も一夏もまだISの起動に慣れていないんだ。そんな状態で、代表になっても結果は見えてるでしょ。だったらここは、ISの専用機も持ってて、数少ない代表候補生でもあるセシリアさんの方が適任だって、今、一夏と話し合っただめなんだよ」

「し、しかし……」

「あれ？イギリスの貴族さまは他者からの素直な贈り物を手にできないというのですか？」

「い、いえ、そんなことはありませんわ。仕方ありませんわね。そこまで頼むと言うのならその贈り物、喜んで受け取りますわ」

……ふっ、チヨロいな。

心で黒い笑みを浮かべながら、『代表生譲り』が成功した事に喜んだ。

「まあしかし、賢明なご判断ですわ。全くと言っていいほどISに乗ったこともない方に……」

“大した苦勞も努力もせずに”オーストラリアの代表候補生になった方と比べれば私が良いのは当然の事ですわね」

……ピキ……

「では、私セシリア・オル……取り消せ……」………「はい？」

「今の、大した苦勞も努力もせずにと言った、今の発言を取り消せ………」

自分でも驚くぐらいに、冷たく、低い声が出ているのが分かる………

「な、何をいきなりおっしや………『ドガン！！』………ひっ！？」

自分の机を拳で殴りつけた。でも、そんなことぐらいじゃ、俺の怒りは消えない！！！！

「もう一度言う！発言を取り消せ！！！」

「な、なんなんですよ。代表を譲ると言ったかと思えば、今度はいきなりお怒りになるなんて！やっぱり代表になれなかったのが悔しいんですの？」

………「こいつにはもう、普通に言っても絶対に分かりっこない。」

………「だったら………」

「織斑先生！」

「………どうした、マードック」

事の展開を静かに見ていた織斑先生が刺激しないように声を掛けてきた。

「この高飛車女との決闘の許可を下さい！」

「えっ！」「うそ？」「なんで？」「譲るって言ったのに？」

「お、おいリオンどうしたんだ？」

心配そうに一夏が声を掛けてくるが、そんなのもう関係ない。

「先生。許可を」

「……マードックはこう言っているが、オルコット。お前は どうする？」

「いいでしょう。そこまでおっしゃるなら、喜んでお受けいたしますわー！」

「分かった。では、1週間後の月曜日！放課後、第3アリーナにおいて、リオン＝マードックとセシリア＝オルコットの代表生決定を 決める試合を行うー！ー！」

そう高らかに宣言した後、IS学園の初日は終わった……………

第2話 獅子の怒り（後書き）

次回、リオンとともに来た日華の正体が、皆様の感想が、作者のアドレナリンとなります。感想・評価お待ちしております。

第3話 天才の幼なじみ

……………一夏Side……………

……………一体どうしたってんだ？リオンの奴？あいつとは今日初めて会ったばかりだけど、あんなふうに怒るだなんて考えられない……………

……………

『今の発言を取り消せ！！！』

頭に過る、絶えず纏っている温かな雰囲気と笑顔が完全に消えた、鬼の如き表情と言動。

……………考えても仕方がない。直接会って話そう。

そう思い、教室の席に座りっぱなしだった俺は立ちあがり、リオンを探そうとすると……………

「あっ！まだ教室に居たんですね織斑君！」

教室の扉から、クラスの副担任である山田先生が現れた。

「山田先生。どうかしたんですか？」

「はい。実はですね、織斑君の寮の部屋が決まりました」

はい？

そう言って部屋番号が書かれた札の付いた鍵を渡してくれた山田先

生。

このIS学園は全寮制である。よってこの生徒はこのIS学園で24時間ずつとここで生活を送ることになっている。……のだが、

「あの、山田先生？俺って確か、当分は自宅からの通学になっているはずなんじゃ？」

「あ、それがですね……「学園側が無理をしてお前の部屋を急遽用意したんだ。」…織斑先生」

山田先生の背後から、我が姉、織斑千冬が腕を組んだ姿でこちらを見ている。

「無理してって、どうしてですか？」

「お前、今の自分の状況が分かってないのか？また、政府や海外の機関からもみくちやにでもされたいのか？」

「あ〜、そっか」

俺がISを動かせるってニュースが流れてからマスコミやら各国大使やらが詰めかけて来たんだ。中には研究素材にしたいとふざけた事を言ってきた所もあった。最近はなんとか沈静化してきたが、また来ないとも限らないからな。

「最悪、お前を誘拐しようともする者たちが現れる可能性も0ではないからな。そうだった事も踏まえて、お前をここに置いておくのが一番いいと学園側も考えたらしい」

「そう言うことなら、分かりまし……あ、でも俺、宿泊用の荷物何も持っていない……心配するな。ここにある」……へ？」

そう言うと、千冬姉は大きめのリュックサックを背後から取り出した。そのリュックは俺が中学時代にも愛用していたものだった。

「着替えに寝巻き、あと生活雑貨に携帯の充電器がある。まだ必要なものがあるなら休みにでも取りにいけ」

こちらにリュックを放ってくる。もう少し優しく渡してほしい。

「ああ、ありがとう。……って本当に大丈夫？」

「何がだ？」

「いや、いつかの修学旅行の時みたいに、歯ブラシと剃刀を間違えたり、歯磨き粉と洗顔フォームを間違えたりして……『ズドン！……！……！……！』……あい、すいません。僕が悪かったです」

「分かればよろしい！」

一瞬で離れた間合いなんて構わず、千冬姉は手の出席簿で俺の頭を強打した。その近くで山田先生が、「い、今のはまさか縮地！？」とか驚いているがまあいい。

「と、ところで、ちふ……織斑先生。聞きたい事があるんですけど」

「何だ？」

「リオンの事です。あいつに何かあったか、分かりませんか？」

「……………私はお前達の担任だ。仮に知っていたとしても、たやすく生徒のプライベートを軽々しく口にはできんさ」

「そうですか……………」

「……………ちなみに、リオンは今、アリーナ近くの第1整備室に居るらしい」

「え？」

「……………私と話してるは暇があるなら、さっさと行け。馬鹿もの」

「……………」「ペコッ！」

千冬姉に感謝の思いを込めて頭を下げると、俺はその場所に向おうと……………

「最後に織斑。今度の休みの土日の予定は開けておくように」

「何ですか？」

「ああ、実は……………」

「ふふつ、織斑先生。優しいお姉さんですね」

「そんなのは関係ない。ただ、居場所を伝えたただけだ」

「そんなこと言っちゃって、ほんとに織斑君の事大好きなんでしょ。彼がここに入寮するって聞いたたら、一目散に家に向か……」

「……………山田先生。今から実践を兼ねて、先ほどの移動術を教えてくださいよう」

「へ？」

「心配するな。明日両足が重度の筋肉痛になるくらいで済む」

「い、いえ、その……………」

「遠慮するな、さあ、逝こうか。山田君」

「じ、字がちが、いや、やだ、誰か……………!!」

悲痛な彼女の叫びに救いの手を差し出す者は居なかった。

「ここが、第1整備室か」

教室から走ってきた俺は、千冬姉が教えてくれた場所に着いた。

「……………とりあえず、入ってみるか」

そう思い、入口の扉の取っ手を掴もうとすると……………

「スト~~~~ストップ！ストップなんだよ~~~~！！！」

「ん？」

後ろからどこかで聞いたのほんとした声が聞こえてきた。

「ここは、普段着では入れないのだよ~~~~！！」

後ろを振り向くと、

「ここではISスーツの着用が義務付けられてるんだよ~~~~！！」

半開きの今にも眠ってしまいそうな目に、キツネの模様の髪留めを付けた女の子が、体のラインを強調しているISスーツを着用して立っていた。

「あ、ああ、そうだったの。え~~~~っつと……………」

「お、誰かと思えば、同じクラスの織斑くくくんだくく！」

「え？同じクラス？」

「そうだよくく、同じ1年1組の、布仏のほとけ本音ほんねだよくくくく！」

布仏 本音……略したら本当に“のほほん”になるな。と、自分の中で彼女のあだ名を決めると、気になることを聞いてみた。

「えっと、布仏さん。ここには普段着では入れないの？」

「そうだよくく。ここではISの装着したり起動させたりしなきゃいけないから、ISスーツが必須になってるんだくくよくく」

そうだったのか。しかし、今ISスーツが手元には無い俺には痛い話だな。このままじゃ入れない。

「ちなみに、無視してこのまま入ろうとすればどうなる？」

「うくくくん、整備室の担当の先生に注意されて、説教と反省文のコンボがくるかなくくくく？」

「……………そうか分かった。諦めるよ。教えてくれてありがとね」

「いえいえく。それじゃ、私は“かんちゃん”のお手伝いがあるからもう行くねくくくく。」

「ああ、頑張つてね」

「うん。それじゃね、おりむ〜。また学校でね〜。」

「うん……………て、おりむ〜?」

言われたことのないあだ名を付けた彼女はパタパタと言った感じで整備室の中へと走って行った。

……………て、リオンには会えないな。どうしよう……………

……………日華Side……………

白月日華。彼はオーストラリア生まれの純系日本人である。短い黒髪に眼鏡をかけた姿が基本スタイル。ISの適性は無いが、ISの整備及び開発においてオーストラリアでは右に出る者はいないと言われている程の腕の持ち主。オーストラリア初の第3世代ISを開発した天才でもある。

基本スタイルに黒のカッターシャツを全身に纏い、研究者の様な白

衣を着た白月日華は、手に持った黒い板から空中に投影されているISのデータを見ていた。

「おい、日華。調子はどうだ？」

「問題ないよ。シンクロ率、コアの状態、フィジカルデータ、向こうの時と一緒に相変わらず良い数値が出てる。ただ、新しい武器データがまだなじめてないみたいだから、戦闘も兼ねた起動は明日まで待っててほしい」

「おう、分かった」

ISを簡易装着した、リオンがISの装着を外し降りてくる。

「じゃあ、新しい武器のデータと、あの高飛車女のISのデータと戦闘の映像記録、まとめて全部見せてくれ。明日の朝までに全部に目を通したい」

「もう出来てるよ、ここに」

そう言い、懐からデータをまとめたディスクの入ったケースを取り出した。

「さすが“オーストラリア内最高のIS開発者”だな。仕事が早いぜ」

そう言い、手を伸ばしてくるリオンだが……

「待ってリオン」

「何だ？」

ディスクを遠ざけ、リオンの手を制止する。

「これは、幼なじみとしての頼みでもある。戦うとは言わない。

……けど、恨みと憎しみを抱えて戦うのは、絶対にしないでくれ」

「………なんで分かった」

「一目で分かるよ。とてつもない怒りを内に宿しているのが。だからこそ、自分を見失わずに、ISと共に戦ってほしいんだ」

「………」

「………リオン………」

「………分かってるよ。お前にも、アイツにも………『ライオンハート』にも恥ずかしくない戦いをする」

そう言い、ディスクを手にし、そのまま整備室を出ていくリオン。

「………リオン」

口ではああ言っているが、実際に戦い始めるとどうなるか分からない。ISを起動できない僕には、もしそうなたらリオンを止めることができない。

.....頼れるとしたら、“彼”しかいない.....

「.....織斑一夏」

.....そう言えば、僕はリオンと同じ部屋だけど、彼は1人部屋？それとも女子との同室？どうなんだろう？

第3話 天才の幼なじみ（後書き）

次回、一夏と箒の同室騒動です。
感想・評価お待ちしております。

第4話 相部屋の同居人は……（前書き）

自分なりに一夏と筭を甘くさせました。

それではどうぞ。

第4話 相部屋の同居人は……

……………一夏side……………

日が傾き、学園が夕日で照らされている中、俺は寮の方へと足を向けていた。

あの後、色々と考えたがりオンと話すのは、とりあえず寮に戻ってからにしようと思った。よく思ったら、この学園の生徒で男は俺とリオンだけだ。と、なれば同室のなるのは目に見えている。最初からこうしとけば良かったんだと思う。

「……………1025室、ここだな」

寮に着いた俺は、1025と書かれている扉の前に立ち、部屋の中に入った。どうせリオンはまだ帰ってこないだろうし、ゆっくりと待つとくか。

「……………おお、どこかの高級ホテルも顔負けの部屋だな」

部屋に入ると、一目で最高クラスの部屋であると理解できた。柔らかそうな羽毛布団のベットに、勉強等で使うデスク。それから1つ1つが一学生が使うべきものではないと物語っているようだった。

と、部屋の凄さに驚いていると……………

……………キョッ……………

「……………誰か居るのか？」

「……………へ？」

入口近くの扉の中、恐らくシャワールームであると思うそこから何かを閉めたかのような音と、“女性”の聲が中から聞こえてきた？

「もしかして同室になったものか？これからよろしく頼むよ」

ガチャ、つと扉が開かれ、中から現れたのは……………

「こんな姿で申し訳ない。シャワーを使っていたのでな。私は、篠ノ之……………」

「……………箒？」

「えっ……………なっ！！！」

髪が濡れており、水滴が張り付いている体にバスタオルを巻いている、一糸まとわぬ姿の幼なじみ、篠ノ之箒が現れた。……………
……………箒、あんなに胸大きかったのか？……………って、アホな事考えるな俺！！！！

「……………い、一夏……………」

「……………お、おっ……………」

お互いに、何が起こっているのかが分からない。しかし、徐々に頭が覚醒されていき……………

「み、見るなあっ!!」

「う、ゴメン!!」

箒の声にハツとした俺は物凄い早さで体を捻り目をそらした。

「ど、ど、どうしてお前がここに居るんだ!？」

「いや、なんでって、ここ、俺の部屋になって……ってことは、俺、お前と同室だったことなのか!？」

「っ!!!!」

俺がそう言った瞬間、箒が超スピードで部屋に立てかけてあった木刀を手にすると俺に刺突の構えで俺に……って、死ぬ死ぬ死ぬ!!

命の危機を察知した俺は、一目散に出口に向かい廊下へと脱出した。

「はあ、はあ、はあ、助かつ……」

閉じた扉に背中を預け、ほっ、つとため息をすと……

ズドオン!!!!!!

「い!?!」

俺の右ほほ5センチの所から、扉を貫通させた木刀の先端が飛び出て来た。

更に背後から感じる更なる殺気。まずい！

ズドドドドドド！！！！

更に背後から木刀の先端が、モグラ叩きのモグラの如く飛び出し俺に襲ってきかた。その一撃一撃を察知しかわしていく俺。最後の突きをかわし廊下をゴロゴロと転がり扉から距離をとる。

「危ねえよ！本気で殺す気かよ！」

と、扉の向こうに居る同居人に言っていると、

「なにになに〜？なにかあった〜？」

騒ぎを聞きつけたのか、わらわらと人が集まってくる。いや、集まってくるのは別に良いのだが……………

「あゝ、織斑君だ〜！」

「え〜っ、ここが織斑君の部屋なんだ〜っ！ いい情報、ゲットしちゃった〜っ！」

やって来たのはもちろんのこと全員女子、しかもまるで我が家に居るかのようなくつろぎモード。当然の事ながらラフというか、警戒心希薄な格好である。なので丸出しの太ももや胸元の谷間が見えてしまっているのだ。

「箒！ 箒さん！？ 入れてください！！ 今すぐにつ！！ 謝り
ますから！ このとーりっ！！」

両の手を合わせ、ドアの向こうの剣神に祈る。この状況はひっじょ
ーにまずい。とくに俺の精神的に。

……2、3分後、扉に刺さりっぱなしだった木刀が引き抜かれ目の
前の扉が開かれた。

「……………入れ……………」

剣道着に着替えた箒が、木刀片手に仁王立ちしており俺を部屋の中
に呼び入れた。

「お、おう」

このまま女子の群の中に居たくなかった俺は、穴だらけになってし
まった扉を閉め部屋の中に入った。

部屋に入ると、箒は奥側のベッドに腰かけて窓の外の方に視線を向
けていた。

「あ、奥のベッド俺が狙ってたのに」

「……………お前が、私の同居人ということなのか……………」

「ああ。どっちらそっちらいぞ」

「どっちらもりだ！」

「……………は？」

いきなり強い口調になると、こちらに顔を向いて話してきた。

「どっちらもりだと聞いている」男女七歳にして同衾せず、常識だぞ！？」

……………って、篤さんあなたはいつの時代の人ですか？

「まあ、確かに15歳の男女が同棲……………いや、同居すると言つのは色々問題があると思うけど……………」

「お……………お……………」

「お？」

「……………お前が……………希望したのか？ 私の、部屋にしろ……………？」

声を少し震わせながら、照れくさそう顔を俯かせてこちらに聞いて来た。

「いや、俺、本来なら、来週までは自宅からの通学になってたから、入寮するのが今日だって知ったのさっきだったんだよ。だから希望も頼みも出来ないって」

「……………そうか」

「まあ、でも……………」

「？」

「見ず知らずの相手より、少しでも親しい篤と同室になれたのは嬉しいかな」

「っ！…！そ、そ、そうか。うん。そうかそうか！」

「？」

突如、赤みが増した顔を俯かせ、なにやらぶつぶつと言い始めた。まあ、なにか知らないが困ってるわけでも怒ってるわけでもないから良いか。

「…………じゃあ、篤」

「な、何だ？」

「これから、同居人としてよろしく頼むよ」

「あ、ああ。こ、こちらこそ、よろしく頼む」

そう言い、お互いに手を差し出し握手する俺達。

その後、備え付けのキッチンでお茶を煎れ、それを飲みながらシャ

ワー時間等の部屋の決まりを決めていると……

「なあ、そういえばこっつてトイレ無いのか？」

「ああ、廊下の隅に2つあるだけだ」

「……なあ、そっつて男子用のってあるのか？」

「……無い……な」

「……」

「……」

……………え？大問題発生？

「じゃ、じゃあ俺どこでしたらいいの？」

「私を知るか！先生にでも聞け！」

「あ、そうか」

すぐさま俺は、携帯で千冬姉に連絡を取った。数回のコールの後、千冬姉の声が出てきた。

『何だ一夏？今は職員会議中だったのだが？』

「そうか、ならちようど良かった。聞きたいがあるんだ」

『何だ？』

「その……俺って、トイレってどこでしたらいいの？」

『トイレ？』

「うん。トイレ。さすがに女子の所でするわけにはいかないし」

『……………』
『す、少し待っている!』

珍しく慌てたような声を出しながら、会話を中止する千冬姉。通話が切れていない電話から慌しく相談しているのが聞こえてくる。

『待たせた』

「おお。で、結局どうなったの?」

『お前はしばらくは職員用を使うことになった』

「職員用……………って、ここから結構遠くないか?」

『我儘を言っな!仕方がないだろ!全く予想していなかったのだから!』

「は、はい。分かりました」

『しばらくの我慢だ。ちゃんと対策はする』

「はい、お願いします」

『他に問題は無いか?』

「あ、あともう一つ」

『何だ?』

「なんで俺が筈と同室なんだ?普通ここはリオンじゃないのか?」

『ああ。マードックには、生徒ではないが他の男と同室となっていてな。必然的にお前が1人余る事になるんだ』

「他の男?この学園にまだ男がいるの?」

『まあ、それは置いといてだ。何だ?篠ノ之と同室では不満か?』

「いや、そういうわけじゃないけど……………」

『ならいいだろう。姉の好意は素直に受け取っておけ』

「好意?」

『……………久しぶりに再会した初恋の幼なじみだ。せいぜい華を咲かしてみる』

「ブフウ!!!」

何か分からないが、吹いた。そりゃあもう盛大に。

「ちちち、千冬姉! なな、何言ってる!!!」

『ま、でも、学生としてあるまじき行為はするなよ』

「あ、あ、あ、アルマジロ……………」

『まだ会議があるからな、もう切るぞ、じゃあな』

プツッ、ツーツーツー……………

「……………あの姉は……………」

「一夏? どうした? 何か変な事でも言われたのか?」

「い、いや、別に何でもなし。うん。うん。あ、トイレは職員用になるみたいだ」

「そ、そうか」

熱を持った顔に気づかれないうつ、向こうを向いたまま返答する。

「……………やはり、私と同室は嫌だったか?」

「は?」

「いや、さっきの電話で、リオンと一緒に良いとか言っていただろ」

「いや、別にそんな事は……………」

「無理をしなくていい。分かっているさ。私の様な剣道好きの女と一緒に嬉しいはず……」

「そんな事ねーよ!」

「っ!」

自分でも大きな声だと分かる声を出す。

「お前と一緒に嫌?そんな事ねーよ!6年前、いきなり別れてからずーっと会いたいと思ってたんだぞ!そんなにお前想ってたのに嫌がるわけないだろ!」

「えっ……」

「あっ……」

「……」

「……」

勢いでかなりの事を言ってしまった……まずい、かなり気まずい……

「「あの……」」

と、同時に口を開いた瞬間、

コンコンコン……

「ん？」

扉のノックする音が聞こえてきた。もしかしてリオンか？

「俺が出るよ」

出ようとした筈にそう言い扉へと向かう。

「はい、誰ですか？」

扉を開けるとそこに居たのは、

「……………あれ？」

「……………君が、織斑一夏だね」

そこに居たのは、眼鏡を掛けた初対面の日本人だった。

「えっと……………どちらさまで？」

「僕の名前は白月日華。リオンのルームメイトって言えばいいかな？」

「あんたが、リオンと同室の奴か？」

「そういうことだよ」

柔らかい笑みを浮かべてこちらを見てくる。

「で、俺に何か用か？」

「ああ。君にしか頼めない事がある」

「何だ？一体？」

先ほどの笑みとは一転、真剣そのものの顔になり口を開いた。

「……………リオンを、守ってほしいんだ」

そして、1週間後、リオンとセシリアの対決の日がやってきた。

第4話 相部屋の同居人は……（後書き）

次回、リオンの専用機と戦闘の初描写です。
感想・評価お待ちしております。

第5話 獅子の心 (前編)

..... 一夏 side

今日は、リオンとセシリアの戦いの日だ。クラスの皆は、第3アリーナの観客席で2人が出てくるのを今か今かと待っている。俺は今、リオンのピットに居てあいつの傍に居る。

「リオン大丈夫か？」

「おいおい、何不安そうな事言ってるんだよ？まさか俺が負けるとでも思ってるのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだが」

「ALL RIGHT ALL RIGHT、絶対負けねえよ。負けたら向こう1カ月、お前の昼飯奢ってやるぜ」

「言ったな。ちゃんと守れよ」

「おつよ」

『リオン、聞こえている？』

ピット内で聞こえてきた日華の声。日華はピット内の制御室みたいな所から、こちらに指示を出しているらしい。

『今、セシリア・オルコットが向こうのピットから出てきた。あとはリオンが行くだけだよ』

「分かった。それじゃあ……………行きますか」

リオンは首に掛けてある、金色でカラーリングされた獅子の顔が掘られているドッグタグに手をやった。リオンの専用機の待機状態の物である。

「行くぜ、『ライオンハート!!!!』」

瞬間、リオンの体が眩しい光に包まれていき、その身にISを展開させていく。

金色の色を基盤にカラーリングされ、所々に橙色で描かれた牙や爪の様な模様。胸部の装甲は黒を基盤で、右側には赤色で描かれた横向きのライオンの顔が描かれている。

背中ofウイングスラスタは両肩部に1機ずつと、背中of真ん中に左右対称の小型の翼の様な型のが1機の計3機付いている。これだけでも高い機動力があると見える。

『どつ、何か不具合は感じる?』

「いや、特にこれといった問題は無いな。No Problemだぜ」

手を開いたり閉じたりして感触を確かめていくリオン。その顔には、ISに乗ることができただけが浮かべる笑みがあった。

『それじゃ、カタパルトに乗って。これ以上お客さんを待たせるわけにはいかないからね』

「ああ。そうだな」

重々しい足音を出しながら、ピットのカタパルトに足を固定させ、射出準備を済ませるリオン。

「……………リオン」

「何だ？」

「……………思いっきり楽しんでこい！」

「……………おお！」

笑みを浮かべた俺に、親指を立てて応えるリオン。全然緊張してないみたいだな。

「よし、行くぜ日華！」

『いつでもいいよ！』

「ライオンハート！リオン・マードック！行くぜ！！！」

ドシュツウウウウ……………

髪を逆立てる程の物凄い風と音を残し、金色の獅子は大空へと飛び立っていった。

……リオンSide……

ピットから飛び立ち、ある程度進んだ空中で俺は制止し、相手を見つめた。

右手には大型のライフルを持ち、特徴的な突起を背後に4つ付けた、蒼い鎧を身につけし存在……

イギリスの第3世代機、“蒼い雫 ブルー・ティアーズ”

『あらあら、逃げずに来ましたか。誉めて差しあげますわ』

「ああ。ここで逃げたら男の名が泣くからよ」

オープンチャンネル
開放回線から聞こえてくる相手の声。ハイパーセンサーで相手の口の動きまではっきりと見える。

『今なら、最後のチャンスを差し上げますわよ？』

「チャンス？」

『私があなたに圧勝するのは目に見えますわ。今ここで謝罪し、代表を私に譲ると言うなら許して差し上げますわよ。』

相も変わらず上から目線の態度。本気で矯正しないと一生治らないな。

「そういうのはチャンスって言わないな」

『あら、そうですね……………なら!』

「っ!?!?!」

目標IS、射撃準備完了、初弾エネルギー確認

ライオンハートから伝わってくる情報。即座に身構える俺。

「お別れですわね!?!?!」

ドオオオン!?!?!

響く銃声と、銃砲から飛び出てくる蒼い光線。

「くっ!」

映像以上に早く感じ、腕を交差してガードする。

このライオンハートは、他のISと比べ装甲が薄めに設計されている。その為……………

『あらあら、たかが1撃で結構なシールドが取られてますわね』

防御力がかなり薄い。さっきの1撃でシールドエネルギーの10%程が削られた。

『さあ、踊りなさい。このセシリア・オルコットの奏でる円舞曲^{ワルツ}で
』！』

もう一発撃ち込もうとしてくるが、

ドオオオン！！！！

『……………はい？』

弾丸はそのまま直進し、グラウンドに土の粉末と破片を飛び散らした。

確実に捉えたと思っていたセシリアの声が聞こえてくる。

「どこ見てんだ？」

『……………！！！！』

一瞬でセシリアの真下に移動した俺を見つけ、驚愕を露わにする。

『くっ！！』

位置を変え、再び銃口をこちらに向けてくる。

ドンドンドンドン！！！！！！

蒼い雨が降り注いでくるが、全てかわしていく。

『くっ、この、なんですのこの機動力は？』

……………日華 side……………

「な、なんですか？この高い機動力は？」

「あれがライオンハートの特徴です」

「特徴？」

ピット内で画像から流れるリアルタイムの映像に山田教諭と箒さんは驚いていた。映像から流れてくるライオンハートの動きは2人が今までに見た事のない程の高機動な動きだったからだ。

「ライオンハートは他のISと比べ装甲が薄く、防御力がかなり低めのISになっています。しかし、その代償としてかなりの高機動力を持っている、超ハイスピード戦闘を可能にしています」

「しかし、今はセシリアの攻撃をかわしてばかりいるぞ？それほど高機動ならば一気に攻めたりしないのか？」

箒さんがライオンの今の動きの状態を見た疑問を口にする。

「それはリオンの癖です」

「癖、ですか？」

「ああ。あいつは実際に戦う時は、相手をしばらくの間は見て、観察して、攻めるタイミング・使用する武器・相手の軌道予想を瞬時に組み込むんです」

……そう、あいつは何事に対しても手を抜かず、とてつもない努力をしてきた。だからこそ、そんな自分を侮辱してきた彼女には悪いが、この勝負は彼女は負けるだろう。

「それにしてもリオン君、ISの特徴を抜きに考えても、1か月前にISの適正が出てからの動きとは思えませんね」

「IS適性が出てから、しばらくは政府との交渉やライオンハートの運搬や最適化、更に日本に来てからは先週まで乗れない状況でしたから、向こうでISに乗って訓練していたのは1週間足らずでした。その間かなりの時間をISを動かすのに時間を使っていた」

「そうですか、1日3、4時間ぐらいとしたら、20時間ぐらいですか？」

「いえ、1日10時間以上、1週間で100時間は向こうで乗っていました」

「……………はい？」

山田教諭が目を点にして驚いているが、今はリオンの方はどうだ？

画面を見てみると、リオンがついにメインの武装を右手に取り出し肩に乗せるように置いていた。

白銀に輝く片刃の刀身。

黒く塗られたグリップに、その柄頭に付いた獅子の横顔の付いたキ―ホルダー。

鐳の部分の8つの弾丸が装填できる回転式のリボルバー。

ライオンハートのメイン武装、ガンブレード『ライディング』を…

……

第5話 獅子の心 (前編) (後書き)

本格的な戦闘は次回。リオンとライオンハートが大暴れします。
感想・評価お待ちしております。

第6話 獅子の心（後編）

.....リオンside.....

さて、セシリアとブルーティアーズの特徴も掴めたし、そろそろこ
つちも攻め始めるか。

ライオンハートのメイン武装、ガンブレード『ライディング』を取
り出し相手に切っ先を向ける。

『中距離射撃型の私にそのような近接武器で挑むつもりですか？』

セシリアが取り出した武器を見ながら言うてる。

心配するな。見た目では近接用だが.....

ドオン！！！

『なっ！』

ちゃんと遠距離での攻撃も可能だぜ！

ドンドンドン！！！！

『な、何ですか？この武器は？剣ですか？銃ですか？』

「両方だよ！」

初弾は正面に命中、その後の射撃は回避行動を取られるが、掠る程度には当たっている。

『ライディング』。片刃の剣と8連装のリボルバーの銃を適合させた剣。剣としての近接戦はもちろん、狙撃ライフルで使用される12.7×99mm弾と言う遠距離射撃に適している弾丸を利用して、いるため射撃でも大きな戦力となる。

「よし、次は……」

弾切れになったため、弾丸を取り出し弾倉に装填しながらセシリアに正面から近づいて行った。

『来ますわね!?!』

近づいて来る俺に大型ビームライフル、スターライトmkIIIを構え照準を合わせてくる。

「……………ハッ!」

ギョオン!!!!

その刹那、セシリアの視界から消えてやった。

『なっ!どこですか!?!』

「後ろだよ!」

ハイパーセンサーでもまだ感知できなかったセシリアに親切に教え

てやった。

ドンドンドン！ ガンガンガン！

セシリアの背後から、銃撃とその反動を利用した斬撃をリズムよく繰り返していく。

『イグニッション・ブースト 瞬時加速！？でも、一体どうやって背後に？』

「そいつは企業秘密だな！」

切りのいいところで攻撃を止め、弾倉に5発残して距離を取る。

さて、そろそろ来るか？

『このまま黙ってませんわ！行きましたよ！』

ブルー・ティアーズの装甲の突起が、ISから離れ宙に浮くビット兵器となり高速でこちらにやって来た。

（来たか、ブルー・ティアーズ！）

ドドドドドドン！！！！

ビットから連続で光弾を撃ってくる。事前の映像データで見ていたので大体は分かっていたが、やはり実際に目にするのとはかなり違う。地表スレスレを低空飛行でアクロバティックな動きをしながらかわしていく。

『なかなか出来ませぬね。しかし……』

前後左右からビットに囲まれたのを感知。上にしか逃げ場が無い状況になった。

(畏だとしても上しかない！)

撃ち出されたビームを上へ逃げ、紙一重でかわした。

『右腕、頂きますわ！』

ドオン！！！！

瞬く間にビットを戻したセシリアのライフルから蒼い光弾が迫ってくる。

回避は間に合わない判断し、迫る光弾に合わせてライディングを振り……………

カチン……………

カアアアアーン！！！！

引き金を引き、銃撃と斬撃を同時に放ち光弾を掻き消した。

『な、何ですって！今のを、ふせ……………』

動揺しているセシリア。そこを見逃したりはしない。

ドンドンドンドンドン……………！！！！

残った4発の弾丸をブルー・ティアーズに撃ち込み破壊した。

『しまつ、ブルー・ティアーズが!』

「そろそろ、終いにするぜ!」

一気に決めるため弾丸を装填し、動揺が消えぬうちにセシリアに飛び込む!

……………日華side……………

「ただの斬撃で、光の弾を斬れるものなのか?」

さっきのリオンの斬撃に驚愕の表情を露わにする篤さん。仕方が無い。“弾丸を刀剣で斬る”など常識で考えても出来るはずのないことだ。

「篤さん。常識では無理だと思っても、ISのハイパーセンサーや機動力を使えばそれ程難しい事ではありませんよ。もっともそれを行える武装の有無にもよりますけど」

「あの、“がんばれーど”とやらにはなぜ出来た?普通では刀身が折れてしまうと思うんだが」

「ISの装甲や武装はそう簡単には壊れないように出来てます。まあ、さっきのは只の斬撃ではありませんし」

「只の斬撃では無い？」

「“振動剣”です」

「し、しんどうけん？」

聞き覚えのない言葉に疑問符を頭に浮かばせてるのが分かる。

「さっきの斬撃は、斬撃を繰り返すと同時に弾丸を発射させ、その時の刀身の振動、銃弾、銃撃の衝撃を掛け合わせて斬撃の威力を数倍向上させたんです」

「ようするに凄まじい斬撃なのだな」

「口にするのは簡単ですが、実際に行えるのはかなりの難度です。斬撃と射撃を同時に放ち、且つそれを目標に放つには1000分の1のズレも許されないものです」

「そうか、弓矢を刀で斬るより難しそうだな」

「そんな事した武将が昔にでもいたのですか？」

「いや、私がやったことだ」

.....はい？

「えっと、したのはISを起動した状態ですよね？」

「いや、中2の頃に生身でだ。もちろん本物の弓矢を真剣の居合斬りでだ」

.....彼女が少し怖くなった。中2でなんて事を、と言っより事実なのか？

今現在、セシリア・オルコットは困惑していた。

今の現状は自分がイメージしていた未来とはかけ離れていたからだ。本来なら自分は優位に立っており、まだISにまともに乗ってすら

しない相手を完膚なきまでに叩きのめし勝利を手に行っているビジョンを1週間前から想定していたからだ。

しかし現実とは違った。当たった攻撃は最初の1撃だけ。後の攻撃は全て予想以上の動きによけられ、自分は攻撃を為すすべもなく叩き込まれる。更には自分の奥の手でもあるブルー・ティアーズも全て撃ち落とされてしまった。

（どうしてですか！？全てにおいて私が優位のはず！私は“あの時”から心魂を削る努力をしてきましたのよ！）

頭に過る、3年前に亡くなった両親が残した財を、地位を、家を守るためにあらゆる事を学んだ事を。ISの起動におけるA判定を貰い代表候補生と言う強みを手にした事を。それからISにおける血汗の滲む努力を今までしてきた事を…………

（負けるわけにはまいりません。あのような、何の努力も無しに候補生になったような輩に……………何の……………努力も……………）

その時、セシリアの頭に疑問が過った。

彼は、本当に何の努力もしていないのかと。

3年前からISに乗っていた自分をここまで追い詰めている彼が。

ライフルの光弾を数回見ただけで見切りそれを斬り伏せた彼が。
イグニッション・フイスト
瞬時加速と言う、一朝一夕では習得出来ない技能を使いこなしている彼が。

更に過つてくるのは1週間前の出来事。

“大した苦労も努力もせずに”と言つ自分の発言。
そしてそれを聞いてからの彼の激昂。

(もしかして私はとんでもないことを言ってしまった……………)

だとしても、今のこの勝負の勝敗には関係のない事。

今、自分に残されているのはスターライトmkIEEと隠している
ミサイルビットである。自分に飛び込んで来るリオンの動きに合わ
せ撃ち込み、そこにスターライトmkIEEの攻撃を加える。残さ
れた手を最大に利用し勝利を勝ち取って見せる！

(……………まだ……………まだ……………)

今ですわ！)

考えうる最適の距離。迫ってくるリオンに放つ2つのミサイル。そ
してすかさずライフルを構え狙いを定める。

そして……………

ギョオオオオン！！！！

（なっ！？）

全く予想してない動きが起こった。

今まで見た事のない“瞬時加速での後退”が目の前で起こったのだ。

一瞬で後退したりオンは迫るミサイルに向け左腕を突き出す。

カシュン！

そして左腕の装甲が左右に割れるとそこから小口径の銃口が現れ、

ガガガガガガン！！！！ ドドン！！！！

2つのミサイルを、マシンガンのように放たれた空色のビームバルカンによって撃ち落とした。

（まだあのような武器があったのですね！）

時間にして一瞬、目の前の出来事に気を取られた刹那の隙が現れた。

.....リオンside.....

「これで、最後だあああああ！！！！」

一瞬、現れた隙。相手のシールドエネルギーは残り少ない。ここで決める！

「おおおおおおおおおお！！！！！」

瞬時加速で迫り、最後の1撃を.....

カチン.....

ズドオオオオン！！！！！！

“振動剣”で叩き込んだ。

手に伝わる確かな1撃。それを放つと同時にすれ違いざまに通り抜け、

『試合終了。勝者、リオン・マードック!』

試合終了のアナウンスがアリーナに響いた。

ガクツ……

「え!?!」

後ろから聞こえてきた音に振り向き、

「っ!?!?!」

残ったエネルギーのほとんどを使用した、全力の瞬時加速で地上目がけて移動し……

ガキイイイン!!!

装甲がぶつかり合う音を響かせ、地上2、3メートルの所で落下していったセシリアを抱えた。

「お、おい!?!大丈夫か?」

「ん……………うん」

目を瞑り、気を失ったかのような反応が返ってきたが、すぐに目を開きこちらを見てきた。

「わ、私は……………」

「大丈夫か？すまん。最後の攻撃の威力が強すぎて、一瞬だが意識が飛んだんだと思う」

「そ、そうですね……………私……………負けたのですね……………」

「痛みは無いか？具合が悪かったりするか？」

「い、いえ。特には何も……………って！」

セシリアは今の自分がどのような格好をしているか気がついた。

片腕は膝下に、もう片方は肩を抱くように腕で抱えられている……………

つまり、“お姫様だっこ”の状態であった。

「ななな、何をしていますの!？」

「いや、危なかったから助けた……………」

「そそそそ、そうではなく……………」

「いいからじっとしてろ。一瞬だが意識が飛んだんだ。ゆっくりしてろ」

「は……………はい……………」

いきなり動きだそうとしていたが、腕の中でセシリアはおとなしくなった。少し顔が赤くなっているように見えたが大丈夫だろうか？

「ど、どうして助けたのですか？」

「ん？」

「ISを展開している以上、この程度の高さから落ちても何の怪我もありませんのに……………」

「どうしてって、変なこと聞く奴だな？」

「へ、変とはなんですか!？」

「だってそうだよ。」

人を助けるのに理由があるか？」

「な……………」

セシリアは何とも言えないような表情をこちらに向けてきた。そんなに変なこと言ったか？

「わ、私は、あなたを侮辱したのですよ。それなのに……………」

「そんなのは助けない理由にはならないよ」

「ですけど……………」

「それとも、俺みたいな奴の助けは“貴族さま”には必要なかったかな？」

「っ……………」

少し意地悪そうな笑顔をしてセシリアに問いかける。先週言った“貴族さま”を彷彿させる言い方で。

「……………先週はすみませんでした。あのような失礼な事……………」

「それは、もう良いよ。俺も一夏ももう気にしてないし」

「ですが……………」

「それに、助けたのに“すみません”は無いだろ」

「
……………」

無言のままお互いの顔を見つめあう俺達。

「フフッ」

腕の中のセシリアが優しく微笑みながら、

「ありがとうございます。リオンさん」

「どういたしまして。セシリア」

お互いの名を呼び合い、代表者選抜戦は幕を……………」

いや、まだ閉じないぜ……！！

第6話 獅子の心 (後編) (後書き)

まだまだもう少しだけ代表決定戦は続きます。

感想・指摘・評価お待ちしております。

第7話 代表者選考戦 2戦目開始(前書き)

初めて筭とセシリアを絡ませました。上手くできてるかどうか……

第7話 代表者選考戦 2戦目開始

……………一夏side……………

……………何だつてこんなことになつたんだ？

俺は今、昨日リオンとセシリアが戦ったアリーナのピットでISを展開して待機している。

千冬姉が言っていたこの間の土曜日に用意された俺の専用機、夜空に輝く月の如く白き輝きを放つ存在、IS『白式』だ。

事の発端は、昨日の戦いの後からだ。

「では、明日はマードックと織斑で対決をしてもらう」

「……………え？」

戦いが終わった後、ピットに戻ってきたリオンがISを待機状態に戻すと千冬姉がこう言いに来た。

「ど、どうゆう事だよ千冬姉」

「織斑先生だ。どうもこうもない。明日の放課後にリオンと戦ってもらおう。それだけだ」

「いや、リオンが勝ったんだからリオンが代表で決定だろ？」

「これはそのマードックの提案だ」

「はい？」

リオンの名が出たので、後ろを振り向くとにこやかな表情をしてこつちを見ていた。

「いやあ、このまま俺が代表になったら一夏を推薦してくれた人たちに申し訳ないだろ。だから、もう1戦お前と戦って、勝者を代表にしようって先生に言ってたんだよ」

「……………本音は？」

「このまま逃がすか。正々堂々ガチンコで最後は決めようぜ」

「とりあえずブン殴っていいか！？つーか殴るわ！俺まで巻き込むんじゃねえ！！！」

「やかましい。話をちゃんと聞け」

このままヒートアップすると、出席簿アタックが来るのでおとなしく千冬姉の方を向いた。

「とにかく、これは決定事項だ。クラスの奴らにはもう伝えてあるし変更も無い」

「……………はい。分かりました。戦^やればいいんですよ、戦^やれば!!」

と、まあこんな事があつたためこうしてアリーナでISを展開している。

『織斑。聞こえるか?』

スピーカーから千冬姉の声が聞こえてきた。

『どうだ?初めての実践は緊張するか?』

「まあ、それなりに」

『落ち着け。土日と2日間だけだが、私が付きっきりで指導してやったんだ。経験では向こうが上だが覚えた事をきちんとやれ』

「勝ってみせろって言うてくれないの？」

『そんな鼻屑するわけないだろ』

『でも、織斑先生さっきから少しそわそわしてますよ。なんだかんだ言っで心配して……………』

ズドン！！！！

…………… 打撃音と共に山田先生の遺言が聞こえた気がした。

『向こうはもう出てきている。精々頑張ってこい』

「分かった。行くぜ！」

カタパルトを射出して戦いの場へと飛び立った。

…………… 5分前・校舎内……………

「ほらほら、かんちゃん早く早く~~~~！もう始まつちゃつよ~~~~」

「ちょ、本音。そんなに引つ張ら……それに、わたし整備室に行きたいのに……………」

1年1組所属の布仏本音は、幼なじみである更識簪（まじしきかんざし）を強引に引つ張りアリーナに向かっていた。

「もう、そんな事はつかだと友達出来ないぞ~~~~！」

「別にそんな、大きなお世話……………」

「いいからいいから~~~~！たまには息抜きも兼ねて他の機体を見るのもいい勉強になるよ~~~~！」

「で、でも……………」

「とにかくさつさと、ねっつぱ~~~~！！……！」

ドドドッ、と土煙が出来そうな程のスピードで強引にアリーナに向かって行くのであった。

…… 3分前・アリーナ観客席……

「もうそろそろだよね？どっちが勝つかな？」

「やっぱりリオン君じゃない？昨日すごかったし」

「いや、ここは大穴で織斑君かもよ！なんたって千冬さまの弟なんだし」

「この間の土日にISの特訓してたって聞いたよ。いい勝負かもしれないね」

「……………」

アリーナに集まった面々が今日の対戦の結果がどうなるか雑談をしていた。その中で、長い黒髪を持つ少女は祈るかのような表情で少年を待っていた。

（……一夏。ISがまだ無かった時に剣道で鍛えてやったんだ。負けたら承知しないぞ！…………いや、でも、万が一負けたら優しく慰めてやれる……………って何を考えて！？）

少女、篠ノ乃箒は頭の中で勝って欲しい気持ちと負けてもいいかもしれないという気持ちが戦争をしていた。無理もない。小学生からの想い人と6年ぶりに再会し、そのころから変わらない恋心を胸に秘めているのだ。少しでも良いように思われたいのは当然である。

「お隣、よろしいですか？」

そう思っていると隣から声を掛けられたのでそっちを向くと、

「失礼いたしますわ」

昨日の試合でリオンに敗れたセシリア・オリコットが隣に腰を下ろした。

「……………随分と元気そうだな。昨日は負けて気絶していたのに」

「ええ。あの子の精密検査でも問題はありませんでしたわ」

「そうか」

試合が始まるまで他愛ない会話をしていたが……………

「今日はどのような結果になるのでしょうか？」

「ふん、そんなの決まっている」

「ま、そうですわね」

「一夏が勝つな」「リオンさんの勝利で決まりですわ」

「……………ん？」

互いの種火に引火性の高い油を投下してしまった！

「何か、空耳が聞こえた気がしたんだが？」

「奇遇ですわね。私もですわ」

「……………」

先ほどの朗らかな空気は消え去り、空間が歪みそうなたてつもなく重苦しい空気が2人の周りを取り囲んでいた。

「昨日の試合を見るからに、2人の戦いは接近戦が主な戦いだ。そうなれば一夏の勝ちが決まっている！」

「あら、リオンさんは射撃での遠距離攻撃も出来ましてよ。それに近距離攻撃もかなりの高威力ですわ！」

「一夏は私が認める程の剣の使い手だ。リオンの剣は特徴的な形で我流な構えと剣さばきだ。基礎的な剣の稽古を付けてない！」

「あの高機動な動きがあれば一夏さんの攻撃は当たりませんわ。蝶のように舞い蜂のように刺す彼の動きは見事なものですわ！」

「あの、紙の様な防御力では数発で沈むだろうな……！」

「専用機とはいえ、2日間だけしかISの起動をしていない方にリオンさんは捉えられませんわ!!!」

「……………っ!!!」

(こ、怖い！息が詰まる！)

(何？このカオス？ここはいつから戦場になったの？)

(助けて〜お母さ〜ん……………)

いつの間にかお互いに立ちあがり正面をきつて言い争っていた。その周辺の黒いオーラと2人の背後に炎と龍虎の幻覚が見えるのは気のせいではないだろう。周りの生徒達はその重圧に耐えきれず少し距離を取り始めた。何人かは涙目になってしまっている。

「あ、ああ！で、出てきたよ！2人とも!!!」

凄まじいプレッシャーの中、この空気が消え去るのを期待し声高らかに一夏とリオンが出てきたのを伝えた勇者が現れた。

「来たか！一夏！」

「お待ちしてましたわ！リオンさん！」

空気一転、鬼をも門前払いしそうな空気が霧散し元の正常な空間に戻った。

（（た、助かった！出てきてくれてありがとう！！）（）

多くの観衆が2人の登場を（いろんな意味で）感謝した。

……………一夏side……………

「よう一夏。逃げずに来たか」

「そっちが招待したくせに、そんな口は無いだろ？」

アリーナから飛び立ちPICで空中で静止しリオンと向かい合った。
その距離約15メートル。

「まあ、無理やりな感じでこうなったけど恨んだりするなよ？」

「かまわねえよ。それに……………」

「それに？」

「遅かれ早かれ、こうなるのは分かってたしな。ここまで来て四の五の言ったりしないって」

そう言い白式の唯一の武装、かつて千冬姉が搭乗していたIS『暮桜』が使用していた武装『雪片』の後継武装『雪片式型』を展開し

両手で構える。

「……………そうだな。ここまで来たら言葉は無用……………」

リオンもライディングを取り出し片手でトリガー部分に指を入れ、数回振りまわすと肩に担ぎこちらを見る。

「正々堂々正面から！」

「思いつきりぶつかりあおうぜ！」

『それでは、試合開始！！！！』

試合開始の合図の瞬間、

フォン……………ガキイン！！！！

一瞬の風斬り音の後、白と金のISが各々の得物の刃を交差させ火花散る鏝迫り合いを繰り広げていた。

「行くぜ！リオン！！！！」

「楽しもうぜ！一夏！！！！」

今ここに、ISの歴史上で現れた2つの例外同士の初めての戦いが

始
ま
っ
た
。

第7話 代表者選考戦 2戦目開始(後書き)

本格的な戦闘は次回！熱く震えあがるような出来にしたいです！

第8話 CRASH BLADE (前書き)

戦闘描写がかなり難しいと実感しました。

拙い描写ですがどうぞ。

第8話 CRASH BLADE

…… IS学園・校舎内……

「ねえ、なんかアリーナの方が騒がしくない？」

「そうだね。誰か模擬戦でもやってるのかな？」

校舎内の2年生がアリーナの方向から聞こえてくる騒音に気づき疑問に思い始めた。

「おい！大ニュースだよー！」

「どつたの？薰子？」

その中から黒いフィルムカメラを首から掛けた新聞部部員、まゆみ薫子が小走りでやってきた。

「今アリーナで例の1年男子2人が戦闘してるんだって！スクープだわ！スクープ！」

「ほんと！」

「だったら見に行こうよ！私まだ生で見たことないんだよ！」

「もちろんよ！私の愛機カメラが彼らを求めているわ！いざ出陣！……！」

まるで死地に向かうかのような勢いでアリーナに向かう面々。

この情報が学園内を駆け巡るのに時間はあまり掛からなかった。

……………第3アリーナ……………

「くっ！」

「うおっ！」

開始早々互いに全開、一切の緩みなく己の刃に込める力を抜かず鏝
迫り合いを繰り返す。

「片手の構えでよくここまで力が出せるな！」

「そっちこそ、よく俺の動きを見たな！普通ならそのまま正面衝突
してたぞ！」

ジジジジジジ！！！

まるでチェーンソーがぶつかり合うのようになり、盛大に火花を散らし

合う2人。

「っ…………らああ！！！！」

その均衡をリオンが破り、一夏を弾き飛ばした。

「くっ！！」

弾き飛ばされ空を舞う一夏。しかし、すぐさま体勢を立て直し視線をリオンに向ける。

「逃がさないぜ！一夏あ！！」

すかさずライディングを構え、トリガーに指を掛け照準を合わせてくる。

ドンドンドン！！！！

「っ！！」

撃ち出された銃弾に反応するも2、3発が命中。白式のシールドが削られる。

（遠距離じゃこちらが不利だ。一気に間合いを詰める！！）

「そう簡単に近づけさせないぜ！！」

そのまま連射される弾丸。一夏は高速で動きまわり狙いを定めさせない。

(5……………6……………7……………)

ドン……!!

(8発目!今だ!)

ギョオン……!!

「な!?!」

リオンの弾切れの際に一気に近づくと一夏。

ガキーン!

再び交り合う刃。しかし今度は不意を突いた一夏がリオンを押し
ていた。

「人の嫌なタイミングで来やがって!」

「お前は弾切れするとすかさず装填するからな。来るなって言う方
が無理な話だ」

「それぐらい見逃せよ」

「悪いがそれは……………」

グッ……………ギーン……!!

リオンの刃を流し、払いのけた一夏は、

グルツ……ドオン……!!

「無理な話だな!」

その勢いを殺さず空中で前回りをし、リオンの左肩に踵落としを繰り出した。

「うぉあ!」

攻撃を受け地面に向かって落下していくリオン。

……ウウウウン……!!

しかし衝突の寸前、PICで地表すれすれ、背中を下に仰向けに浮くりオン。その視線の先には……

グウウウウウ……!!

雪片式型を突き刺す様に持つ一夏が雷の如く急降下してきた。

「って、ヤベエ……!!」

回避は無理と判断し、すかさずライディングを構える。

ガキイイイイン……!!

凄まじい衝突音が響き、アリーナの地面には一夏が突き刺した雪片を、地面にめり込みながらもライディングを両手で支え、腹の部分で防ぎきつたりオンがいた。

「け、結構過激だな攻める時」

「こつちにはお前みたいに遠距離用の装備は無いからな。攻めるときは攻めないと」

「こごとばかりに一気に雪片式型を突き刺す一夏。その力にリオンも焦るが……………」

「……………その攻めの姿勢、箒にもしてみたらどうだ？案外コロツと落ちるんじゃないのか？」

「な、なな、何言つて！！！！」

「隙あり」

「ガン！！！！」

わずかに一夏の力が緩み、リオンは雪片式型を払いのけ一夏に蹴りを繰り返した。

「ぐおっ！！」

その勢いを活かし体勢を当てなおし再び空中に飛び上がるリオン。

「て、てめえ卑怯だぞ！！」

「卑怯？何言つてんだい一夏君？俺はただ俺なりの意見を言っただけだぜ？」

空中で静止しながら弾丸をフル装填し切っ先を一夏に向けるリオン。

「そ、そういうお前はどんなだよ!? 昨日はセシリアといい感じだっただろ! お姫様抱っこもしてたくせに!」

「あ、あれは緊急で仕方なくだ! 他意は無い! つてごちゃごちゃ言うなあああ!」

「言いだしたのはお前だあああ!」

お互いに叫び合いながら再び斬り合う2人。今度は拮抗はせずに斬つては離れを繰り返しながらアリーナのフィールドを翔び回る。

……アリーナ管制室……

「凄いですね織斑君。リオン君相手に良い勝負していますね」

制御室のモニターから流れてくるリアルタイムの映像を見ながら山田先生は感心していた。モニターから流れてくる一夏の動きは専用機とはいえISを起動してから2・3日とは思えないほどの動きだったからである。

「これくらいは造作もない。なにせ私が付きつきりで指導してやったからな」

山田先生の隣で立ちながらモニターを見ている千冬は淡々と山田先生に受け答えしていく。

「仮にも専用機が配備されたんだ。しかも世界で2人だけの男のIS操縦者だ。わずかな時間で物にしないと宝の持ち腐れになるからな」

「なんだかんだ言っつてやっぱり家族想いですね。織斑先生」

「勘違いするな。あくまで一指導者として当たり前の事だ」

そう言いながらモニターに顔を向ける千冬。心なしか顔に赤みがあるのは気のせいではないだろう。

「そんなに照れなくてもいいじゃないですか。ふふっ、織斑先生つてやっぱりブラコ……………」

ガゴン！……………！！

「……………へ？」

山田真耶は、眼の前を何かが高速で通り過ぎたのがかろっじで感じた。恐る恐る何かを通った後を見ると、そこには金属の壁に深々と突き刺さっている出席簿があった。

「すまない山田君。ついっつかり手が滑ってしまった」

突き刺さった出席簿を壁から軽々と引っこ抜く千冬。壁には刀の斬り口のように綺麗な長方形の穴が出来あがっていた。

「ただ、もしかしたら“また”滑ってしまうかもしれないから、そうならないよう気を付けてくれ」

「は……はい…気を付けましゅ……………」

軽く涙目になっている山田先生。この人の隣に居るのは色んな意味で覚悟しとかねばならない。そう思う山田先生であった。

……………アリーナ観客席……………

「おっ！凄い！そこだ！」

「行けえ！リオン君！撃ち抜いちゃえ！」

「織斑君！頑張れえええ！！！」

一夏とリオンがぶつかり合う様子を見つめ歓声をあげるクラスメイト達。その中で更に熱気をこめて戦いを見ているのが2人いた。

「一夏！いいぞ！そこだ！！……………ああ、おしい……………」

「リオンさん！そのまま狙って……………ああ、弾切れですわ……………」

箒とセシリア、それぞれの想い人の行動一つ一つに一喜一憂する2人。お互いにいい動きはするが決定的な1撃がなかなか撃ち込まれずそわそわとしてしまう。

早く相手に勝利し心一杯誉めてあげたい……………そう思っているよ…
…………

「と~~~~っちやく!~!~!」

「はあ……………はあ……………本音……………早すぎる……………」

「ん?」

箒の隣の席に2人が腰かけた。1人はクラスメイトの布仏本音。もう1人は水色の髪をした初めて見る人だった。

「お!ほうきん!いたんだね。おりむーの応援?」

「お、おりむ?一夏の事か?」

「本音。その変なあだ名で人を呼ぶの止めて。恥ずかしい」

「そんなつれない事言わないでよ、かんちゃん!」

「だから止めてって……………」

この2人は本当に観戦に来たのか?そう思ってしまう箒だった。

「お!結構過激にぶつかり合ってるね!さすがは男の子だね!」

パシャパシャパシャ！！！！

「ん？」

観戦していたセシリアの隣でシャッター音を切る音が聞こえてきた。

「うん！良い角度だよ！絵になる！明日の1面に行けるわ！」

カメラを掲げ一心不乱にシャッターを切る人物がいた。

「あの、隣でパシャパシャとうるさいですわよ！別の場所で撮ってくださいませんか？」

「ん？おお！1年で専用機を持つてるセシリアちゃんだ！後で写真撮らせてくれる？」

「お話を聞いていますの？集中して観戦できませんの！撮るなら他の所で！」

「そんな事言われても、ここが撮るには最適なポジションなんだもん。広い目で見てよ」

「そう言いましても……」「ここで撮らせてくれるなら、後で優先的に好きな写真プレゼントするわ！一夏君はもちろんリオン君の雄姿を捉えた奴まで、どんなショットでも好きなだけ！」存分にお撮り下さい！何ならISで空中まで運んでさし上げますわ！！！」

「あ、ありがとね……」

まさかここまで喰い付くとは思って無かった黛薫子は驚いたがすぐさまカメラを再び2人に向けてシャッターを切った。

「くっ！！！！」

「らあっ！！！！」

互いの剣を弾き空中で間合いを取る一夏とリオン。2人の顔には汗が何筋も流れ、息も肩を動かすほど荒くなっている。

「はあ、はあ、つたく、まさかこうも長引くとは思ってなかったぜ」

「っは、こっちもこんなに喰いつけるとはな。千冬姉に感謝しないとな」

「元・最強のIS使いの指導か。ちょっと妬けるな」

「経験ではそっちが上なんだからこれくらいは当然だ」

空中で静止しながら一瞬の油断もせず睨みあう2人。

「なあ一夏。これ以上長引かせたら、明日にもかなり響くと思う」

「確かに。授業中にも眠ってしまいそうだな」

もしそんな事になればクラスの独裁者に黒き鉄槌（出席簿）が繰り出される。

「だから、そろそろ終わりにしようぜ！」

そう言うと、リオンの腰の左右の部分から長さ約50センチ程の三日月型の刃が4つ飛び出てきて空中で静止した。

「そうだな。じゃあこっちも全力で行くぜ！」

雪片二型に込める力を強めると、刀身が分かれそこから蒼白いエネルギー状の刃が現れた。

「ケリ付けるぞー夏あー！！！」

「上等だ、リオオオオン！！！」

高速で接近する2人。決着への最終局面が始まった。

第8話 CRASH BLADE (後書き)

決着は次回となります。

感想・評価お待ちしております。

第9話 FIGHTERS END (前書き)

現時点での最長話となりました。

ダラダラかもしれませんがどうぞ。

第9話 FIGHTERS END

雪片式型から光刃を発現させた一夏。対して4つの浮遊ピッドを取りだしたりオン。さっきにも増して場で2人は睨み合った。

「なんだそのフワフワと浮いてる鳥っぱいの？」

「鳥じゃねえ、近接戦闘用ビット『ゲイル&ライトニング』だ」

「ゲイル……ライトニング…… 『疾風迅雷』ってか」

「ああ。日華が洒落てつけた名なんだが、意味知ってっか？」

「激しく吹く風と激しい雷。事態の変化が急で行動が迅速なこと……
… だったと思う。名前負けしてくれてる事を祈る」

「だったら、その身で確かめな！」

ギョオオン！！！！

リオンの発言を機に風斬り音と共に一斉に迫る4つの刃鳥。まだ性能を見極めてない一夏は、雪片式型のエネルギー刃を消し空を縦横無尽に飛び回った。

(これは、昨日見たセシリアのブルー・ティアーズのビット兵器と同種の武器か?)

まるで得物を狙う野鳥のように一夏を攻めてくるゲイルとライトニング。その間を潜り抜けるように飛び回る一夏。

(なら今、リオンはこいつらの操作に集中していて動けないはず！
ここで叩き込む！)

迫りくる刃鳥を無視し高スピードでリオンに刃を振りおろす一夏。
その刃は……………

ギーン！！！

「なっ！？」

リオンには届かず、その手前で喰い止められていた。

「お前、何で……………」

ビービー！！！！

『後方より熱源4点！高速接近中！』

ISのセンサーから伝えてきた情報！一夏は剣を引き離脱しようとするが、

ザザザン！！！！

れるっての……………」

「確かに、それは簡単に想像できるな」

軽く会話をしながら立ちあがり雪片式型を構えなおす一夏。

「その闘志に応じて教えてやるぜ一夏。このゲイル&ライトニングの特性を」

「特性？」

「お前はこう思ってただろ。これは昨日見たセシリアの兵器と同種。つまりこいつを動かしてる時、俺は自由に移動する事ができないって」

「ああ、そうだったが……………違うみたいだな」

「ああ、こいつの中心部の緑と黄色のコア、見えるか？」

言われてよく見ると、ゲイルの中心部に緑の、ライトニングの中心部に黄色の球体が埋め込まれているのが見えた。

「こいつはただの飾りじゃなく、高性能のAIが組み込まれてんだ」

「AI？」

「俺以外の攻撃対象を俺の動きに合わせてながら自動警撃するって基本プログラミングされてるんだよ。俺に従順な賢い奴だぜ」

リオンが左手を横に出すと、ゲイル2機が掌をクルクルと回り始め

た。その姿は、主人の掌の上で仲良く戯れる鳥のように見える。

「つまり、お前もそいつらも制限なしに動きまわれるって事か」

「ああ、俺の相棒、白月日華が作り上げた第3世代兵器。実戦で試すのはお前が初めてだ。光荣だと思いな」

左手を下げ、両手でライディングを構えるリオン。

「今度はこいつらと一緒に俺も行くぜ。俺とこいつら……計5手の攻撃、耐えるもんなら耐えてみやがれえ!!!!」

高スピードで一夏に迫るリオンとその後に従うゲイルとライトニング。

「ちっ!」

ドオオオオオオン!!!!

次の瞬間には一夏のいた所が爆散し、グラウンドの土が空高く飛び上がった。

「な、なんですのあの武器は。私のブルー・ティアーズと違い高性能だなんて」

観客席から観戦していたセシリアは驚愕していた。昨日の自分との戦闘には使われてない武器。しかも自分の十八番であるブルー・ティアーズを軽く上回る性能が存在すると信じられなかったからだ。

「おお、凄いねオーストラリア。あんな新兵器が出来てたなんて。これもいい記事になるわ……………って、ど、どうしたのセシリアちゃん？」

隣で相変わらずカメラのシャッターを切っている薫子が暗くなっているセシリアに気づきそちらに顔を向けると……………

「そうですね……………所詮私はその程度の人間……………あの人の全力に応える価値もありませんわ……………どうせ私なんか私なんか私なんか私なんか……………」

暗いオーラを纏い今にも消えてしまいそうな雰囲気なセシリア。見てしまった以上何とかしようとする薫子。こんなのが隣に居たのは撮影に集中できないからである。

「あ……………あつ、そう、あれじゃない？セシリアちゃんみたいなレディには使うのを躊躇したんじゃないのかなあ？」

「……………」

やっぱり言い訳苦しかったか？そう思う薫子だったが……………

「……………ふふ……………」

「……………」

すると先程とは打って変わって明るめになった声が聞こえてきた。

「そうですね。さすがはリオンさん。私をそんなにまで思って下さるなんて。私、感激ですわ!」

ホホホ、と優雅そうに笑うセシリアを見て薫子はこう思った。

(さっきの撮影許可といい、この子、どんだけちよろいんだろう)

…………と。

「…………一夏」

その傍で、両手を祈るように握って、篝は一夏の勝利を強く願った。どのような状況でも勝ってくれるように…………

「っはあ!…!」

土煙から出てきた一夏。白式の装甲には切り傷が走り、シールドがかなり削られていた。

(ちくしょう、厄介だなあの鳥!…………シールドの残りは200と少し。さっさとあの鳥を落とさないとジリ貧になる)

シュンシュン！！！

そう思っていると、土煙の中から迫る刃鳥が現れた。

(ひとまず後退だ！あれがどういいうものかとことん観てやる！)

グウウウ……………ドオオオオン！！！！

ウイングスラスタ―から響く爆音。白式で今現在出せる最高速度でフィールドを駆け巡る一夏。

高速で飛び回る一夏とそれを追いかけるゲイルとライトニング。空中で4対1の超高速鬼ごっこが繰り広げられた。

「どうした一夏？逃げ回ってるだけじゃ何にもなんないぜ！」

更にその後ろを付いて来るリオン。

だが一夏は落ち着いてゲイルを見て気付いた。

(ゲイルはライトニングと違って、動きが直線的で、綺麗に俺に付いてきてる……………)

ライトニングは稲妻のようにギザギザのような軌道を描いているが、ゲイルは直線的に綺麗な軌道で追いかけてきているのに一夏は気づいた。

(……………映画で見ただけだけど、“あれ”やってみるか！)

一夏は、昔見た今の状況に似た映画のワンシーンを思い出しその時と同じ行動を取った。

グウングウングウン……………

(ん？何だ？一夏の奴？)

後ろから見ているリオンは、一夏がさっきからの直線の動きから螺旋状に回りながら飛び続けるのを疑問に思った。

(ヤケになったか？それとも疲れてコントロール出来なくなったか？)

深く考えずそのまま追いかけていたが、大きく螺旋に動いていた一夏だったが徐々に動きを狭めて行った。

(コントロールは出来てるみたいだな。じゃああの動きは……………ん？)

ここまで来てリオンはゲイルの動きに気づいた。

(ゲイル、一夏に合わせてあいつらも回りながら追ってやがる)

一夏の後ろを追うゲイルも標的の動きと同じように追跡していた。しかも一夏の動きにぴったり合わせているため2機の間は触れるか触れないか位しか無い。

(……………あいつ！まさか！)

一夏の狙いにリオンが気づいた瞬間、一夏は自分の螺旋の動きを反

転させた。

するとゲイルはその動きに対応したが、2機はかなり急接近していたため……………

ガン！ドオオン！！！

急反転したため激突し爆発した。

（ゲイルの追尾能力を利用しやがった！）

ゲイルを落とされ動揺していると、

ズン！！！！

ゲイルの爆煙から雪片式型の切っ先が現れた。

「やべー！！！！」

ズドオン！！！！

「うばあ！！！！」

反応するも時すでに遅し。腹部に雪片式型を突き刺され地上に激突するリオン。

「み、見事にやり返されたな……………」

先ほどと違い今度は自分が地面に叩き落とされた。リオンがそう思い立ちあがると、

ブウウウン!!!

舞い上がった土煙の中から、雪片式型からエネルギー刃を発動させた一夏が迫ってきた。

(さっきも思ったが、あれは触れるだけで絶対にヤバイ!)

「ここで決めるっ!」

右片手で構えた雪片式型をリオンに向け突き刺す一夏。

「っ!」

だが突き刺さる刹那、体を捻り右脇下に刃を通す様にかわしたりオン。エネルギー刃は右胸をかすっただけだったが……

ピピピピピピ!!

(は?なんだこのエネルギーの減りは!?尋常じゃねえぞ!)

かすっているだけのはずが見る見る削られるシールドエネルギーに戸惑うリオン。このままでは一気に負けると焦ったりオンは、

ぶん!……がしい!

右手に持っていたライディングを上放って、その手で一夏の腕を取り自分から遠ざける。

ガシン!

更に左腕の装甲から、昨日のセシリア戦でミサイルを落としたビームバルカンを出し一夏の体に当てる。

「喰らえ！零距离『ファングバルカン』！」

ガガガガガガ！！！！

零距离から撃たれ、シールドが削られる一夏。

「っ！！……………っそがあ！！！」

すかさず足を振り上げリオンの腹部を蹴り上げる一夏。

「まだまだあ！！！」

蹴り飛ばされ、手を離れたリオンの背後から一夏の腹部に突撃するライトニング。

「っ！！！！」

しかし、そのライトニングにリオンのファングバルカンの光弾が当たり……………

ドオオオン！！！！

近距離で、2人の中で爆発するライトニング。

「ぐわっ！！」

「うっ！」

爆発の衝撃で吹き飛ばされ地面に寝てしまう両者。

吹き飛んだ一夏の手から離れ地面に落ちた雪片弐型。リオンの傍には上に放ったライディングが地面に突き刺さっている。

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………」

「ふう……………ふう……………ふう……………」

激しく息をしながら地面に横たわる両者。立ちあがる気配すら感じない。

「す、凄いね2人とも。ここまで出来るなんて」

「1年生であそこまでなんて……………ぐずぐずしてたら追い抜かれるわね」

「もう……………限界かな、2人とも」

「ここまで戦ったんだし、ドローでも良いんじゃない……………」

今度は、その隣で座っていた金髪の少女が立ちあがりリオンを呼び始めた。

「リオンさー！後少しですわー！頑張っ……頑張っ
て勝利を掴んで下さー！い……！」

「一夏あー！」「リオンさん！」

「負けるな……！」

2人の心からの叫びが、周りの観客の『もういいか』という想いを動かし……

「確かに、ここまで来て決着が見れないのは嫌ね」

「後少し！2人とも！がーんばーれ……！」

「おりむー！りーくん！ふあいと……！」

「ふ、2人とも、頑張れー！……大声、恥ずかしい……！」

「行け……！織斑……！」

「立て……！マードック……！」

観客のあちこちから2人の激励が響いた。この素晴らしい戦いを見せてくれた2人の戦士に向けて。最後の決着を。そのワンシーンを

見るために……

「はぁ……はぁ……」

(き、きつい……もう立てねえ……)

地面に横たわり、一夏は茫然と空を見上げていた。もう日は傾き始め空に赤みが増してきた。

(リオンも立てないみたいだな。……なら。このままグローでも……)

もう勝負はここまででいいか……そう思っていると……

「立て……！一夏あぁ……」

(え……ほ、筈?)

突如、聞こえてきた幼なじみの叫びにも似た声。声が聞こえてきた方に目を向けると、顔を赤くして懸命に自分を呼び掛ける筈の姿が見えた。

うおおおおおおおおおおおおおおおー！！！！

「お互い、あと1撃だけだー！！負けんなー！！」

「2人とも、ファイトー！！！！」

2人が立ちあがると同時にアリーナから戦士の帰還を祝う歓声が響いた。

「……………リオン……………お前、聞こえたか？」

「……………ってことは、お前も聞こえたんだな」

「ああ……………この歓声の中でもはっきりと聞こえる」

「俺もだ……………今、最高にいい気分だ」

お互い、それぞれ想ってくれる人からの激励。消えかけた闘志を燃えあげてくれた言葉。一字一句が己の支えになり、最高のコンディションで立ちあがる事が出来た。

「お互い、シールドはもうギリギリだな」

「ああ。ここまできたら小細工なしで、」

「全身全霊を込めた一撃で、」

「この戦いの」

「幕を引こう！！！！」

ズザアアアアツ!!!

立ち位置が入れ替わった一夏とリオンが地面を滑りブレーキを掛ける音が響いた。

この間、3秒も掛かっていないにも関わらず、見ている側には数十秒に感じる程の感覚があった。

「お、終わったの?」

「ど、どうなったの?どっちが勝ったの?」

「2人とも立ったまま動かないよ」

そのままフィールドに立ったままの2人の様子にアリーナに不安な空気が漂う。

すると、

ぐひん………

雪片式型を握ったまま、一夏が前のめりに倒れ………

ざん！……！

「倒れ……………るかぁ……………」

かけたが、雪片式型を地面に突き刺し杖代わりにして倒れるのを防いだ一夏。

その瞬間、

どん……………

後ろから、何か倒れる音が聞こえた一夏が振り返ると、

「……………リオン……………」

仰向けに倒れたリオンの姿を見た一夏。白式のモニターに、ライオンハートのシールドエネルギーが『0』になっているのが表示されていた。

そして……………

『試合終了！勝者！織斑、一夏ああああ！！！！』

わああああああああああああああああ！！！！！！！！

勝者の名前が告げられた瞬間、アリーナ中から最大最高の歓声が響き渡った。

「カッコいい！2人とも、最高だよー！！」

「おめでとう織斑くん！サイン下さい！」

「惜しかったよリオンくん！次頑張ってね！」

「織斑、マードック、お疲れー！！」

アリーナの生徒達から送られる歓声。それを聞きつつ体を引きずる感覚のままリオンに近づく一夏。

「……………大丈夫か？」

「……………全力で斬り合っておいて、心配するのは野暮じゃないか？」

「大丈夫みたいだな」

「仮にもISに乗ってんだ。そんな危険な事にはならねえよ」

倒れているリオンの傍に立ち、話しかける一夏に淡々と返すリオン。リオンの表情には負けによる悔しさが現れていた。

「何とか……勝てたな」

「……仮にも代表候補生なのに、ISに乗って3日足らずの奴に負けちまったな」

「そんな言い方ないだろ」

「けど、事実だぜ」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

お互い、掛ける言葉があるはずなのに、なかなか口に出せない状況が続く。

「……………次は……」

「ん？」

何かをぼやきながら立ち上がり、一夏に顔を向け立ち上がるリオン。

「次は、絶対に負けねえ。俺は、もっと強くなる……だから、」
「……………」

「その時は、もっといい試合をしようぜ、一夏！」

その時のリオンの表情には、先程の悔しさは消え、友人に向ける温かな笑みがあった。

「…………… ああ、その時は俺ももっと強くなるぜ、リオン！」

そっぴいがつちりと握手を交わす2人。そしてそれをみて再びアリーナに歓声が響いた。

こうして、1組の代表者を決める選考戦は、多くの絆を深め終わりを告げた。

第9話 FIGHTERS END(後書き)

一夏が見た映画は、『スターウォー〇』のエピソード3の事です。分かる人いるかな？

次回は、リオンがなぜISに関わってしまったか。そして関わってどうなったかを描く予定です。

感想・評価お待ちしております。

第10話 ありがとう(前書き)

リオンの過去を書くのに結構躊躇してしまいました。

重くしてしまったかと不安ですがどうぞ。

第10話 ありがとう

…… IS学園・寮・1025室……

「ああーっ、疲れたーっ……もうなーんにもしたくないー」
つい数時間前まで激戦を繰り広げていた一夏。部屋に着くなり自らのベットにダイブしそのまま目をつむろうとしたが……

べっっ！

「ったあ！」

頭を軽く平手で打たれ、強引に意識を覚醒させられる。

「一夏。制服のまま寝るな。しわが付くだろうが。それにもうじき食堂が終わる時間だからさっさと行くぞ」

同室である筈がいきなり寝転んだ一夏を叩き起こした。

「少し位いいだろー？疲れてるんだから休ませてくれても」

「いかん。食は健康を保つための重要な物。めんどくさがらずキチンと摂らんといかん。ほれさっさと行くぞー！」

そう強く言い放ち、一夏を引っ張り食堂に連れていく筈。

「ってか、食堂に着いたらまた人が集まってきそつで嫌なんだがな」

「もうじき食堂も閉まる時間だ。そんなに人は居ないと思うぞ」

「そつだといいんだけどなあ……………」

試合が終わってから、一夏とリオンは大変だった。

終わった直後、客席からの歓声に応えるためしばらくはそこに残り、ロッカールームに戻ると、そこに先回りしていた人達に質問攻めにあい、

着替えが終わり帰ろうものの、出口に居た更なる大人数に質問・握手・果てはサインと怒涛の勢いが待っていた。

本来10分程で寮に着くはずが1時間も掛かり、試合の疲労とは別の疲れが2人にのしかかった。

「はあ……………ホントに疲れたあ……………」

食堂に向かうも、足どころか体中を引きずるように移動する一夏。

「しゃっきりとしろ！そんなにだらだらとして恥ずかしくないのか
「！」

「恥ずかしいも何も、マジで疲れてんだよこっちは。実際に戦っていない人には分かんと思うけどよ」

気だるそうな顔を向けると、篤は少し気まずそうな顔をして一夏から顔を背けた。

「それは…そうかもしれないが、そんなにだらけると明日にも響くぞ！」

「厳しいな。全く、お前は息子にスパルタな母親か？」

「は、は、母親って！い、いや、その………」

一夏に母親と言われた瞬間、篤の顔がリンゴの如く真っ赤に変化してオロオロし始めた。

「は、ははは、母親って……ま、まだ早すぎるぞ一夏。私たちはまだ学生だし、それに親にも挨拶してな……いや、しかし、その……お……お前が望むと言うなら……私は！」

赤みが残っている顔を意識しながら体を一夏の方に向けると、

「……………へ？」

そこには、誰も居なかった。

そして、篤が居る所から数メートル先に、

「織斑君！今日の試合凄かったね！」

「あ、ありがとう」

「千冬様から直接指導してもらったんだって？試合の動き、凄く速かったよ！」

「ま、まあ、そのお陰で何とか勝てたよ」

「あの、悪いんですけど、サイン下さい！」

「悪いけど、俺、そんなの書いた事無いからちょっと……………」

「じゃ、じゃあ、握手お願いします！」

「それ位なら……………」

篝の視界に映ったのは、先に行った一夏が数人の女子に取り囲まれている姿だった。しかも現在は握手に応えている。

……………ゾクッ……………

「……………ん？何だ？急に寒気が？」

急に悪寒を感じた一夏が握手を終え、寒さを感じる後ろを振り向くと……………

「……………疲れた、とか言ってた割には、健気に女の子の期待に応えているな……………い、ち、か！……………」

「ほ、篝さん？な、何でこめかみ引きつらせてるの？そしてその手に持っている竹刀はどこから取り出したのですか？」

「……………天誅うううううう！！！！！！……………」

「何で！？理不尽だあああああ！！！！！！」

バシーーーーー！！！！

心地よい竹刀の面打ちの音が、IS学園の寮内に響き渡った……………

……………寮内・1048（リオン・日華）室……………

「済まねえな日華。せつかくの新装備台無しにしちまって」

「気にしないでいいよ。今日が初めての使用だったから、何かしらの問題はあつてもりだったから。一夏君のおかげでいいデータが手に入ったよ」

ベットに仰向けで寝転がっているリオンが、椅子に座りパソコンで今日の戦闘のデータを確認している日華に話しかけた。日華は顔をリオンの方を向き応えるが、パソコンの上を走る指が全く減速せず正確に打ち込んでいる光景は驚きを越えて戦慄が走ると思う。

「そついや気になったんだが、一夏の剣から出たあのエネルギーの刃って何だ？ちょっと触れただけでシールドが結構削られたんだけ

ど」

「ああ。僕も気になって調べたら、あれは『零落白夜』だった」

「れ、れいらく……………どっかで聞いたような」

「ISに関係する人なら1回は聞いてるはずだよ。なんたって、元世界最強の織斑千冬が使ってた能力だからね」

「千冬さんの……………ああ！あれか！？確か自分のシールドを使つて……………」

「そう、自身のシールドエネルギーを使って、相手のシールドエネルギーに直接攻撃する現存するISの攻撃能力でも上クラスの単一仕様能力だよ」
フ・アヒリテイ

データを打ち終わり、椅子をリオンの方に向け話す日華。しかしリオンには疑問が浮かび上がる。

「でも、たしかワンオフって基本的にISが第二形態移行してから使える物なんじゃなかったっけ？白式はまだ第一形態たる？」
セカンドシフト

「まあ、そうだね……………」

「それに、白式は千冬さんが使ってる訳でも、千冬さんの使ってたISとも違うのに、姉弟だからって同じ能力が使える物なのか？」

「それは……………ごめん。僕にも分からない。きっと、何か理由はあると思うんだけど……………」

「ま、分かんないなら別にいいか」

「って、自分から話を振っというてそれは無いよね!」

一瞬で興味が無くなったリオンに突っ込む日華。観客のいない漫才のようなやり取りだった。

「ま、それも一応は気にしておくよ。それじゃあ僕は整備室の方に行くから」

椅子から立ち上がり、パソコン片手に部屋から出る準備をする日華。

「こんな時間にか?何かやる事あるのか?」

「あるよ。結構ボロボロになったライオンハートの修復に最新データの取り込み。壊れたゲイルとライトニングの新しいやつ製造にこれにもデータ。多分徹夜になるから気にしないで寝ていいよ」

「あー……済まん。俺のせいで」

「気にしないで。これも仕事だし、他のISも置かれてるから見ただけで勉強になれるし」

「そっか……ま、体壊さない程にしとけな」

「ああ。それじゃあね」

そう言い残し、部屋を出ていく日華。部屋に取り残されたリオンは、

「さて、じゃあ時間だし、やるか」

ベットから立ち上がり、椅子に座り机の上で自分のパソコンを起動した。

そしてそのパソコンで……………

『あ、リオンお兄ちゃん！』『兄ちゃん元気かー！？』『女の子ばつかでどんな感じ？彼女出来たー？』

「皆、元気か？こっちは元気だぞー！」

インターネット電話サービス、『Skype』で故郷の家族と連絡を取っていた。異国の地に居るリオンにとって週1回の家族との会話は数少ないリラックス出来る時である。

『日本はどう？日華兄ちゃん喜んで？』『ねえ彼女出来たの？どうなの？』『リサ、何回同じ事聞いてんだよ？どんだけブラコ……………』『うっさい！黙れえ！』『がはあ！』

「こらこら、そう何人も同時に話しかけるな。誰が何言ってるのか

「すみません。長い時間掛かって」

それもそのはずである……………リオンの家は、

「久しぶりです……………院長先生」

『元気そうで良かったわ。リオン』

数十人の兄弟と家族がいる、孤児院であるからだ。

リオン・マードックが両親と過ごしたのは5歳の時までだった。

オーストラリア人の父に、黒髪に茶色の眼を持つ、異国の日本から嫁いできた母の3人家族。母から受け継いだ茶色の眼は、周りから『自分たちと違う』と疎遠されたが、大好きな母と同じだった事も

ありこの色が好きだった。

それに、同じ色の眼を持つ友とめぐり合う事も出来た。月のように白めの肌に、日のように明るく花のように綺麗に整った顔の彼と出会ってすぐに仲良くなり親友となった。

しかし、家族と過ごす時は永遠に続く事は無かった。

リオン5歳の誕生日。一家はプレゼントを買いに車で買い物に出た。運転席に父が座り、助手席の母の膝の上に座って出かける。そこには家族の温かな一時があった。

そして、その帰り道……悲劇が起こった。

赤信号で一番前で停止していたリオン達の車に、居眠り運転をしていた大型トレーラーが突っ込んできたのだ。トレーラーは運転席を直撃し、リオンの父親は即死だった。

リオンは衝撃で外に飛び出されたが肩に斬り傷が出来ただけの軽傷で済んだ。

リオンの軽傷は、全身でリオンを庇うように包んだ母のお陰であった。母はリオンが受けるべき傷を全てその身で受け、愛する我が子の小さな体を守ったのだ。

そしてリオンの無事を確認すると、リオンを抱いたまま夫の後を追って行った。

その後、親戚と疎遠だった父親と、遙か彼方の日本に居る母の親戚との生活ができなかったリオンは、病院での治療と入院が済むと孤児院での生活が待っていた。

しかし、父と母を失ったりオンには心に大きな穴ができたかのような虚無感と、自分はもう1人ぼっちなんだという絶望に小さな体と心は限界まで追い込まれた。

しかし、そのリオンに救いの手が差し出される。

幼なじみで親友である白月日華。そして孤児院にいた年長者や職員に院長。その人達のお陰で少しずつだが、追い込まれた体と心が癒されていき、1年後にはリオンは50人近くいる家族の一員になったのだった。

それから約10年後。中学卒業を控え、リオンは就職の準備をしていた。

世話になっている孤児院は成人するまでは居る事が出来、高校までは進学をさせてくれるのだったが、孤児院の経営が資金不足で上手

く行く事が出来なくなつたため、リオンは働き少しでも経営の足しに出来るように就職を決めたのだつた。

そんなある日、孤児院に久しぶりに日華が訪ねてきた。日華は生まれつき頭がよく、小学校を卒業するころには大学に自分のISの論文を出している程だつた。

最近ではISの開発に関わり政府に貢献していた。その日華が久しぶりに来た事にリオンは喜んだ。

2人はリオンの就職の事や日華が今どんな仕事をしているかについて話し盛り上がった。

するとリオンが、一目だけでいいからISを見てみたいと言い出し、日華は就職の祝いも兼ねて自分のラボを見学させる約束をした。

そして、リオンの就職が決まろうとしていた冬から春になるうとしている季節の折り目、全世界が驚愕するニュースが世界を走つた。

リオンが見学していたラボで、オーストラリアIS量産機の『ティガーズ』を起動させてしまったのだ。最初は日華達も何かの間違いだと思つたが、リオンが動かしているのを確認すると日華もラボのスタッフ達も驚きを隠せなかつた。

“男がISを動かす”

まさに歴史的瞬間が目の前で起こっていたからだ。

その後、リオンは日華や政府に人間と一緒に精密検査を行った。その検査でもリオンはIS適正が正式にあると分かり、真正正銘のISを起動させる男であると確認された。

その後、政府から、

『オーストラリア専属のIS操縦者となり、日本のIS学園に入学して欲しい』

とお願いされた。

一瞬、リオンは迷ったが、条件を2つ言った。

1つは、孤児院にオーストラリアドルで毎月5万ドル（現在のレートで日本円で言うと約450万円）の送金をする事。

2つ目は、白月日華も一緒に行く事。

であった。それが駄目ならもつと良い条件の国の専属になると言つと、政府に人間は冷や汗をかきながら条件を呑んだ。

それからIS学園に行くまでの約1カ月、日華や現役のIS操縦者達の指導のもとISに関する事を叩き込まれIS学園と向かい………

「それで、その一夏。幼なじみが好きなくせにはつきり言わないんだ。見ててあきれるぜ」

『その様子なら、いいお友達になれたみたいね』

「ああ、日華と同じくらい好きだぜ」

母の故郷である地に立ち、同じ境遇の者に出会い、友となる事が出来たのだった。

「じゃあ、明日も学校が早いし、そろそろ切るよ。皆によろしくね」

『ええ。日華君や、その、一夏君と元気で仲良くね。喧嘩しちゃうめよ』

「分かってるよ。心配してくれて、ありがとう、先生」

『ええ。おやすみなさい。リオン』

「おやすみ」

最後の会話の後、Skypeの画面が閉じそれからパソコンの電源を落とす。

「……………いい友達か」

もし、日華と仲良くならなかつたら……………

もし、孤児院の皆と会わなかつたら……………

もし、ISに触れる機会がなかつたら……………

「……………ほんと、感謝しかないな」

自分をここまで導いてくれた全てに、

「……………ありがとう」

そして、自分をこの世界に残してくれた両親に心をこめて感謝した。

……………その頃……………

「明日、授業でISを使うはずだから、まずはライオンハートの修復から始めないとな」

部屋を出て整備室に向かう日華。歩きながらすべき事の順序を考えていると……………

ドン！！！

「うわっ！」

「ふにゃ！」

曲がり角から出てきた誰かとぶつかってしまった。

「す、すいません。大丈夫で……」

尻餅をついているぶつかった相手に手を差し出すと、

「う〜ん、ごめんね〜ぶつかっちゃって〜」

全身を包む黄色の衣。

ダダボな袖口に猫耳の付いたフード。

そして、眠たそうな半開きの眼をした整った顔が白月日華の眼に飛び込んできた。

「……………」

「ホントごめんね〜。それじゃね〜〜」

差し出された手を掴んで立ちあがると、ぶつかった相手は気にしなかったように歩いて行った。

「……………」

その場で立ち、女の子が歩いて行った方を見ながら日華は、

「……………可愛かったな」

普段からは想像できない言葉を吐き出した。

「っ！！！！……………整備室に行かないと」

自分で口走った言葉に驚きながらも足早に整備室向かつ日華。

その顔が赤めに見えるのは気のせいではないだろう。

織斑一夏、リオン・マードック、白月日華、

彼らの様々な想いは明日へと繋がっていく……………

第10話 ありがとう（後書き）

Skypeは自分が家族と利用しているのもっと多くの人に知ってほしくて掲載しました。

日華とぶつかった女の子は誰か分かりますよね？

次回はセカン党お待ちかねの、あの中華娘の登場です。

感想・評価お待ちしております。

第11話 NEW STORM(前書き)

鈴の初登場のシーンを変えてみました。

それではぶじぞ。

第11話 NEW STORM

……IS学園・1年1組……

1年1組の代表を決める一夏とリオンの試合の翌日。

「えーっ、と、言うわけで昨日の試合の結果、1年1組の代表は織斑一夏君に決まりました」

壇上に立つ1組副担任の山田真耶はそう言ったが、

「ぐおおおお……」

「がああああ……」

当の一夏は椅子に背もたつていびきをかきながら眠り、その後ろのリオンも机に突っ伏してこちらも豪快にいびきをかいていた。

「お、織斑君の寝顔……イイ！」

「子供みたいにかわいい……」

「リオン君の寝姿！レアだわ！」

「カメラ、カメラは無いの！？こんな姿一生に一度あるかないかよ！？」

と、クラスの女子が騒いでいると、

「とつとと起きる馬鹿どもが！」

バシン！！！

「ったあ！」「おっつ！」

手に持つ出席簿で2人を叩き起こす千冬。出席簿の打撃音が1回しか聞こえなかったのに、同時に痛みで起き上る一夏とリオンを見て、クラスに居る者はその光景に恐怖を覚えた。

「朝のHRから眠るやつがどこに居る？とつとと目を覚ませ」

「も、もう起きたよ。というか起こされたよ」

「昨日の疲れが溜まってんです。少しは穏便に見て下さいよ」

赤くなった鼻を押さえる一夏に、後頭部をさすりながら体を起こすリオン。2人の目が涙目になっているのは気のせいではないだろう。

「そうか。そんなに休みたいなら保健室で休める状態にしてやろう。もしかしたら二度と授業に出る気が無くなるかもしれない？」

「そう言い、今度は出席簿を縦に構える千冬。」

「もう大丈夫です！心配掛けてすいませんでした！」

上体をびしっと起こして正面を向く2人。次寝れば丸1日は眠らされる羽目になってしまうのが見えている。

「では、HRはここまでだ。次の授業はISによる実習だ。各自、ISスーツに着替え速やかに第1アリーナに集合だ。以上！」

……第1アリーナ……

クラスの全員がISスーツに着替え、アリーナのグラウンドに立っているとジャージに着替えた千冬と山田先生が現れた。

「全員、揃っているな？」

着くなり強めの口調で確認する千冬。ちなみに遅刻者など居ない。遅刻しようものなら命知らずもいいところである。

「それではこれからISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。専用機持ちの3人。前に出てこい」

千冬の指示の後、並んでいた生徒の列から、一夏・リオン・セシリアの3人が前に出てきた。

「では、ISを起動して見せろ」

「はい！」

同時に応えた3人は各々自分のISを起動し展開させていく。

「よしっ!」「ふう……」

瞬間に、時間にして0.5秒程で展開し終えたりオンとセシリア。その2人の横で、

「っ!……っい!」

2人に遅れて、3秒程かかり展開し終えた一夏。まだ2人に比べ圧倒的に訓練が足りない一夏はまだ迅速な起動が出来ずにいた。

「最初のころと比べて早くなったが、もっと早く展開出来るようにしろ、織斑。」

「ど、努力します……」

遅れた事を姉に駄目出しされ少しブルーになる一夏。

「それでは飛んで見せる。行け!」

「っ!はい!」「っ!」

指示され同時に応え飛び出す3人。持ち前の機動力を活かして真っ先に空に飛翔したりオン。そしてその後続く一夏にセシリア。今度は2人に遅れずに飛翔していく一夏。だが、リオンはともかくセシリアとは抜きず抜かれずの状態であった。

「どうした?スペック上での出力では白式の方がブルー・ティアーズより上だぞ」

ISの通信回線から聞こえてくる遙か地上にいる姉の更なる駄目だしに顔をしかめる一夏。

「そうは言っても、まだ空を飛ぶ感覚ってまだいまいち分からないんだよなあ。『前方に角錐を展開させるイメージ』って言われても……なあ、リオン。何かいいアドバイス無いか？」

通信を使い、自分の前方を飛んでいるリオンに話しかける一夏。

『アドバイス？ そうだなあ………体に染み込ませろ？』

「疑問形！？ じゃなくてもっとこう、具体的に」

『感覚で覚える？』

「抽象的すぎて分かるか！ 幕とほとんど一緒じゃねえか！」

ちなみに、幕のアドバイスは、

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

擬音ばかりのよく分からないものだった。

と、2人であーだこーだと言っていると、

『そんなに難しく考えずに、イメージは所詮イメージですわ』

突如、セシリアが通信に入ってきて話しかけてきた。

『自分が1番やりやすい方法を模索する方が建設的ですわ』

「自分が1番やりやすい方法か……さすがセシリア。いいアドバイス、ありがと」

『いえいえ、これぐらいで礼は結構ですわ』

「いや、前に居る別の候補生と比べたら格段に参考になるよ」

と、前方に居るアドバイスでないアドバイスをした人物を意識して感謝した。

『………だったら一夏。お前には最高にイメージ出来る素材があるだろ』

「何だ？」

『前方に箒が待つてくれるの想像したらどうだ？』

「おまつ！何て事言っ……」

『アドバイスを求めたのはそっちだろ？だから言っ……やったんだよ、ア・ド・バ・イ・ス！』

「11のっ……」

と、3人で話し合っていると、

『3人とも聞こえるか？聞こえたらそこで静止しろ』

地上から聞こえてくる千冬の声に制止する3人。ISを身につけてない一般人の声がこつも聞こえるのもISのハイパーセンサーのおかげだ。このセンサーなら今地上にいる人間の目のまつ毛や顔のシミ1つ1つが鮮明に見える。

『そこから地上に向けて、急降下と急停止をしてみる。目標は地表から10センチだ。順はオルコット・マードック・織斑の順で来い』

「それでは、お先に行きますわ！」

指示を受け、最初に高速で降下していくセシリア。ぐんぐんと小さくなっていき瞬く間に地上に到達した。どうやら指示通りにクリア出来たらしい。

「じゃあ、次は俺だな。先に行くぜ一夏！」

セシリアの成功を確認し次に降下していくリオン。そのスピードは先のセシリアより格段に速かった。

（速すぎる。地上に激突しないか？）

その直後、リオンは地上に大きめの土煙を巻き起こしながら地面に急停止。地上から5センチの所で静止して見せた。

「さすがリオンだな。すげえ」

リオンの技量に感心していると、

『最後だ織斑。降りてこい』

最後の1人となり、降下の指示を受ける一夏。

「よし、やってみるか！」

先のリオンの急降下を見て影響された一夏。リオンの降下速度に負けない速度で降下していき……

ドオオオオオオオン！！！！！！

凄まじい突撃音と土柱がアリーナに広がった。

「織斑………誰が地面に墜落しろと言った。馬鹿者が………」

地面に大穴を空けた弟に冷たい言葉を贈る千冬だった。

……放課後・IS学園・正面ゲート前……

放課後。太陽が海に沈みかけ、山吹の夕陽が学園を照らす中、学園の正面ゲートに1人の少女が立っていた。茶色の髪をツインテールにし、大きめのポストンバッグを肩から下げていた。

「ここがIS学園……やつと着いたわね！」

そう言い、肩のポストンバッグを持ち直し気分良く門を抜け中に入っていく。

「ふふつ、元気がしらアイツ？会うの楽しみだなー！」

まるでスキップをするような軽やかな足取りで更に中に入っていく。その姿はまさに天にも昇りそうな浮かれ具合である。

……同時刻・食堂……

『織斑君、クラス代表決定おめでとー！』

パンパン、とクラッカーが鳴り響く中、食堂の一席で1組全員参加のパーティーが行われていた。手に持つグラスで飲み物を飲む者がいれば、取り皿に取った料理を食べている者もあり各自盛り上がっていた。

「なんでこんな事を……………」

「いいじゃねえか。俺は好きだぜこついうの」

一日の授業が終わり、部屋でくつろいでいた一夏だったが、夕食の時間近くになると部屋に訪ねてきたクラスの女子に連れてこられ、今現在の状況になっている。

座っている状況は、端から箒・一夏・リオン・セシリアの順になっている。

「リオンさん。どうぞ、お飲物です」

「おお、ありがとセシリア」

「一夏。腹が減ってるだろ。食べ物取ってきたぞ」

「サンキュ、箒」

と、4人もパーティーになじんできた時、

……………パシャッ！

「っ！？」

いきなりのシャッター音とフラッシュが現れた。

「はいはい！新聞部です！織斑君とリオン君にインタビューし

に来ました！」

2年、新聞部副部長の黛薫子の登場に一同は驚いたが、その勢いのまま薫子は2人にボイスレコーダーを向ける。

「はい。ではまず代表となった織斑君からいいかな？」

「え、は、はあ……」

ずいつ、とボイスレコーダーを向けられる一夏。しかしこういった事にまだ慣れていない一夏は戸惑ってしまふ。

「えーっと、精一杯頑張っています」

「うーん、普通すぎるよ。『俺の目の前の敵は全て斬り伏せるぜ！』とか言ってくれないと」

「俺はどここの斬り裂き魔ですか？」

自然な突っ込みを一夏がすると、今度はリオンに向けレコーダーを向ける薫子。

「じゃあ次はリオン君ね。いいコメントお願いね！」

「うーん……じゃあ、

近づくと奴は撃ち落とすぜ！……こんな感じでしょうか？」

「うん！いいよ！捏造しがいがあるよ！」

「何を伝える気ですかあなたは？」

そのうち、根も葉も無い事を書かれるかも知れない。そう不安になる一夏とリオンであった。

「あーっ、お腹すいた。食堂まだかなー」

茶色のツインテールを揺らしながら歩く少女。その足は食堂に向かっていた。

「アイツ、1組の代表になって、しかもそれを決める試合を昨日してたなんて……もう1日早く来てたらなあ………一生の不覚だわホント」

総合事務所で転入の手続きをしている時、その対応をした事務員の話聞いてから少女は少し落ち込んでいた。この少女がここに来た理由の“少年”のカッコいい姿を見れなかったのがとても残念に思っているからだ。

そう思いながら歩き、食堂の近くに着くと、

ワーワー！

オーイ！ノミモノタリナーイ！
ソーレ！イツキイツキ！

「ん？何？お祭りでもしてんの？」

食堂の中から騒がしい音と声が聞こえてきたのだ。

（ゆっくり食べたいし……少し時間潰そうかな？）

と思い、来た道を戻ろうとすると、

「もうそろそろ勘弁して下さいよ。撮るなら隣の奴撮ればいいでし

よ」

「……………へ？」

聞こえた。はっきりと聞こえた。
その声を。

聞き間違っはすのないその声を。
離れて1年。ずっと思っていた少年の声を。

「……………っ！……！」

その声を聞いた瞬間、少女は笑みを浮かべながら食堂へと突入した。

「分かった。じゃあこれが最後だから。お願い！」

「分かりました。じゃあ最後ですよ」

席から離れ、テーブルの傍に立つ一夏は薫子の最後の写真撮影に参加していた。もう10枚近く色々なショットを、リオンと並んだり、セシリアも入れた3人で並んだり、無理を言った筈とのツーショットを撮ったりとしたが。疲れてきた一夏は最後の1枚と釘を打って撮影を終えようとした。

「それじゃあ行くよ……ハイ……」

続くチーズに合わせて姿勢を正す一夏に……

「い……ち……か……」！

「へ？」

突如として響いた、久しぶりに聞こえた声の方を向くと、

バツ！

茶色の髪の少女が勢いよく飛びついて来たのが見えた。

「っうおお！ー！」

飛びついて来た少女に飛び付かれて倒されないように、衝撃を和らげるように抱きしめた瞬間、

パシヤ！

と、その瞬間を撮影するシャッター音が切られた。

「て、お、お前、鈴？鈴か？」

抱きしめた少女を下に降ろしながら聞く一夏に、

「そうよ！久しぶりね一夏！」

一夏に降ろされ、満面の笑みを浮かべる鈴と呼ばれた少女。その顔には赤みが浮かんでいた。

すると、

「いいちいかあ……」

「っ！ー！」

地の底から響く、魂をも凍らせそうな低く重々しい声が一夏の後ろ

から聞こえてきた。

恐る恐る振り向くと、

「その娘は誰だあ……………」

いつもより5割増しの鋭さを持った目で睨んでくる箒が仁王立ちしていた。その恐ろしさに周囲のクラスメートは結構な距離を取っている。

「い、いや、箒、この娘はだな……………」

その恐ろしさに、発言の機能障害が起こっていると、

「私は中国の代表候補生、ファゼンイン鳳鈴音！」

一夏の後ろにいて箒の恐ろしさがあまり見えてない鈴が自分から自己紹介した。

「じつこの、一夏の……………」

幼なじみよー！」

ISを動かせる男、織斑一夏。

その男の、2人しかいない幼なじみが初めて対面した瞬間だった。

第11話 NEW STORM（後書き）

初めて対峙した2人の幼なじみ。

更なる嵐がIS学園を包むでしょう。

一夏の近くに居る生徒は巻き込まれないように気を付けてください。

と、天気予報風の後書きでした。

感想・評価お待ちしております。

第12話 幼なじみなライバル！（前書き）

自分の1番苦手分野がギャグと分かってきた今日この頃。
それでは第12話をどうぞ。

第12話 幼なじみなライバル！

……IS学園・食堂……

「……」

「……」

昨夜のパーティーの翌日の朝、朝食を食べているリオンとその隣に座っているセシリアは気まずかった。その理由は……

「……なあ、いつまで怒って……」

「怒ってなどいない！」

「いや、どう見ても……」

「ん？な・ん・だ！」

「……なんでもないです……」

2人に向かい合って座って、同じく朝食を食べている一夏と篝である。

一夏が何とか話そうとするも、怒りの感情全開で取り繕うとしない篝に全てはじき返されてしまう。

「……こんなに重い朝食は初めてですわ」

「耐えようセシリア。後は一夏任せよう。巻き込まれたくない」

と、向かいの席に聞こえないように小さな声で話すりオンとセシリア。

「じゃあ、私は先に行くからな！」

食べ終えた箸は一夏を待ちつことなく、食器を乗ったお盆を持ち席を離れて行った。

1人、寂しく席に残った一夏は……

「はああああ……」

地面を突き抜け、マントルにまで届きそうなため息を吐き出した。

「どんだけ落ち込んでんだ？お前は乙女か？」

「うるせえ、同室の奴に昨日の夜からずっとあんな態度とられてみる？へこみたくもなるわ」

「具体的にはどのような状況ですか？」

「昨日の夜から部屋に戻っても基本スルー。話しかけてもさっき見たいに怒って拒絶。あつちから話しかけてくる事は無くなって……
…なにより、睨んでくる眼光が痛い。胃が痛くなってきたる」

「「かなりの重症だな（ですわね）」」 （篝さん） 「「

一夏の話だけでかなりの嫉妬を撒き散らしていると分かったリオンとセシリア。無理もない。自分のアドバンテージである幼なじみという立場にいる者がもう1人居ると知り、なおかつ目の前で思いい人に抱きつくと言う自分がまだした事もない行動を取られたのだ。一夏に非がある訳ではないが恋する乙女にとっては怒りがなければやっつけられないかもしれないのだ。

(このままだと2人の関係もやべえな……俺が一押ししてやるか)
見るに堪えなくなったりリオンは、2人の為に一肌脱ごうと決めたのだった。

そして時間は流れ、4時間目の授業が終わり、昼食の時間……

「ああ、腹減った……食堂行くか」

授業が終わり、食堂に向かおうとすると、

「一夏。俺、ちょっと用事があるから食堂の席取っといってくれないか？昨日の夜に俺たちが座ってた所でいいから」

「分かった。取っつくから早く来いよ」

リオンの頼みを聞き、一足先に教室を出ていく一夏。それを確認したりオンは、

「ちよつといいか、箒？」

「……………なんだ？」

席から全く動こうとしない箒の所に向かい話しかけた。

「俺にまでそんなに睨むなよ。一夏じゃないんだから」

「べ、別に睨んでなど……………それに一夏は関係ないだろ」

「まあ、それは置いといてだ。先に食堂に一夏を向かわせた。俺達も一緒に行こうぜ」

「なっ！」

顔に赤みが浮かんだ箒の手を取り、強引に引っ張って食堂に向かうリオン。手を握った瞬間、クラスの女子達が黄色い声を上げたが気にせず食堂に向かった。

「ま、待てリオン！なんでこんな事を！」

「なんでもなにも、今は昼飯の時間なんだ。食堂に向かっても何も変じゃないだろ」

「そうではなく、なんで一夏の所に行く。別にその席でなくてもい

いだろ」

「よくもまあ、そこまで思ってる事の正反対の言葉が出てくるなその口は。これが聞いてた日本人の『ツンデレ』ってやつか？」

「ツンデレ！……わ、私は別に一夏にデレてなど……」

「いいからとっとと行くぞ。昼休み終わっちまう」

「ちょ、待て、リオン！」

聞く耳持たず。篝の言葉を右から左に受け流して、リオンは足を止めることなく進んでいく。

……そしてたどり着いた食堂では、

「……………」

篝を入口に待たせて、先に入ったリオンの目に……

「お前相変わらずラーメン好きなんだな。昔と全然変わってないな」

「いいでしょ好きなんだから。麺は中国が生んだ最強の食べ物よ。消化だつていいんだから」

「まあ、好きなら無理に止めないけど、もう少し栄養バランス考えろよ。野菜が少ないぞ」

「全く。そつちこそ相変わらず年寄り臭い考えね」

言った通りに席を取ってくれていた一夏が、昨日のツイントールの幼なじみと話しながら昼ご飯を食べると言う、箸が見れば嫉妬度が倍増しそうな光景が映っていた。

ツカツカツカツカ……

無言でその席に早足で近づき、

「おお、リオン。思ったよりはや……………」

バシイーン！！！！

全力を込めた平手打ちを一夏の頭に叩き込み、その流れでヘッドロツクを決めた。

「イテテテテテテ！！！！ちょ、リオ、ギブギブ！ってか何で？何？俺何したの！？」

「強いて言うなら、俺の影の努力を何も知らずにぶち壊した事だ！」
頭をキリキリと絞められ、バシバシとギブの意味を込めリオンを叩く一夏。そこにこっそりと小さな声で耳打ちするリオン。

（俺が気をきかせて、箸を合わせた3人で食事しようとしてたのに、何でこの娘まで誘ってたんだよ？）

（マジで？それはスマン！でも、食堂の前で待ち構えてたから断れ

る状況じゃなかったから、つい)

(つい、で済ませれると思ってるのかああああ!!!!!)

ギユウウウウウウ!!!

一夏の発言に絞める力を込めるリオン。絞められている一夏はもう虫の息だ。

「ちょ、ちょっとあんた!? 何してんの? いい加減止めなさいよ!」

突然の事に黙って静観していた鈴だったが、一夏の危機に席から立ち上がりリオンの腕を外そうとする。

と、そこに、

「どうした一夏!? お前の悲痛の音が、聞こえて、来て……………」

食堂内の騒ぎに気づき、入ってきた篤は、絞められている一夏、それをしているリオン、そしてそれを止めようとする鈴の姿を見て固まった。

「…………… リイオオン……………」

「は、はい……………」

昨日、一夏に向けられた凍えそうな声を自分に向けられ大人しくなってしまうリオン。

「とりあえず、後でゆっつっつくりと話をしようか……………」

「ラ、ラジャー……………」

裁判の死刑執行を聞くのってこんな感じかな、と思うリオンだった。

「つまり、私が去って1年後に知り合ったのだな？」

「この娘が一夏の最初の幼なじみって事？」

「ああ。鈴が来る1年前に引越したから鈴は知らなかったけど俺の最初の、まあファースト幼なじみってとこだな。で、鈴が2番目のセカンド幼なじみってとこだ」

その後、キチンと説明すると言う一夏の言葉に、素直に一夏の両隣に座り話を聞く筈と鈴。2人それぞれにどういった幼なじみであるかを一通り話し終えた一夏は機嫌が治ってきた筈に心が落ち着いた。

「私が、ファースト……………」

最初という意味のファーストを聞き、わずかに頬を綻ばす筈に、

「……………別にファーストは誉め言葉ではないと思うんだが……………」

3人から少し離れた位置で大人しく昼食をとるリオンだが、

「お前は（あなたは）黙ってる（黙ってなさい）！！！」

「……はい……」

先程の一夏のヘッドロックを咎められ、発言するのも命がけの状態になっていた。

「ふうん。あなたの事は一夏から少しは聞いてたわ」

「そうか。覚えてくれてたのは光荣だな。鳳、だったな？」

「別にそんな他人行儀にしなくても、下の名前でいいわよ」

「それは私も同じだ。これから色々（・・・）とよろしくな。鈴音」

「こっちも、色々（・・・）とよろしくね。篝」

テーブルを挟んで、がっちりと握手をする2人……

バチィ！

だが、握手をした瞬間、2人の目から火花が散る幻覚を一夏は見えた気がした。

（……………篝の機嫌は戻ったけど、これからまた別の意味で胃が痛くなりそうだな……………）

これから先に訪れそうな嵐に、少し気分が滅入る一夏だった。

……一方その頃……

「リオンさん？どこですのー？一緒に昼食に行きませんか？」

1組近くの廊下で、リオンを求め彷徨うセシリアの姿があったとき。

「リオンさん……ん？一体どこですのー……？」

昼休みの終わりまでリオンを見つけれず、この日セシリアは昼食抜き空腹状態で午後の授業を迎えたのだった……

第12話 幼なじみなライバル！（後書き）

次回は同室同居権争奪戦です。

感想・評価お待ちしております。

第13話 約束と涙（前書き）

今回、リオンの出番が少なめとなっております。

それではどうぞ。

第13話 約束と涙

……放課後・第1アリーナ……

昼休みに色々とおった1日が終わり、一夏達は放課後の時間を使いアリーナで特訓をしていた。

アリーナの着替え室でISスーツに着替え、アリーナのグラウンドに行くと、

「え？」

「お！」

そこに居たのは、

「随分と遅かったな一夏。早く訓練をするぞ！」

ISスーツに着替え、日本製第2世代IS『打鉄』を装着している筈がいた。

「ほ、筈！？お前何でここに？それにそのIS……」

「訓練機の使用の許可が今日から貰えたんだ。今日から私も、お前の訓練に付き合おうと思ってな。それに、私自身も早く上達したいからな」

手を開き閉じしたりして、打鉄の装着具合を確かめながら基本装備の大型の刀を取り出し、両手で構える筈。

「さあ、準備はいいぞ。おまえも早く構えろ」

「お、おお」

箒に急かされ、急いで白式を展開し雪片式型を構える一夏。

「手加減はいらん。行くぞ一夏！」

「おお！来い！箒！」

刀を持った2人が、ぶつかり合い火花散る試合顔負けの訓練が繰り広げられるのリオンは見ていた。

（箒はまだISの経験は少ないはずなのに、結構動きはいいんだな。打鉄との相性が、全国優勝した剣道の経験を活かしてか………何にせよ、またライバルが増えそうだな）

と、1人取り残され、これからどうしようかとリオンが思っている

「……………リオンさん」

「っ！？」

今日、食堂で聞いた低い重低音の声で呼ばれ、恐る恐る呼ばれた方を向くと、

「セ、セシリアさん！？何のご用でしょうか？何で自分にそんな物騒な銃口をお向けに!?!」

ISを完全展開し、主装備のライフルをまだ生身状態のリオンに向けてセシリアがいた。

「私をほおっておいて、自分は箒さん達と気長にランチをしていたそうすわね……私は、居なくなつたあなたを探し回ってお昼休みもランチの時間も無くしましたのに……」

アリーナ内が無風のはずが、セシリアの長い金髪がユラユラと揺れ、漆黒のオーラが視認出来そうな雰囲気の数歩後退するリオン。

「いえ、それは、その、一夏と箒の為にと思つて箒を誘つたのであって、別に他意は……それに、俺に構わず自分だけで食べとけば……」
『ズギユウウン!!!』………「っ!」

自分の発言中に、頬の傍を通過した青の光線に、かつてない命の危機を感じ取つたリオンは、回れ右をし、ライオンハートを展開してセシリアから逃避を開始した。

「狙い撃ちますわ!?!覚悟おおおお!?!?!」

「畜生!今日は、厄日だあああああ!?!」

金色のISの身に纏う少年が絶叫しながら逃げ惑い、それを追う青い光線を豪雨の如く撃ちまくる青いISが、日が沈むまで追いかけてまわす光景が続くのだった。

「おい、生きてるか？」

「……………た……たぶん……………」

日が沈み、夕焼け空も暗くなっていく中、白いISを待機状態の白のガントレットにして地面に立つ一夏が、汗だくになり息も絶え絶えで応える声もかなり小さくなった、地面に横たわるリオンに声を掛けた。

「セ……………セシリアは？」

「日が暮れたからって箒と一緒に先に帰った。まだ怒りは消えてなさそうだったけど。明日は昼食に誘ってやれよ」

「分かってる……………もう今日みたいな日は嫌だ。今夜、夢に出そうだよ」

「じゃ、俺も先に帰るから、早く回復して早く帰れよ」

「ああ……………また明日な」

と、地面に横たわるリオンをそのままにし、一足先にアリーナの口

ツカールームに帰る一夏だった。

……アリーナ内・ロッカールーム……

「さて、さっさと汗拭いて部屋に戻……………あれ？」

制服が掛かっているロッカーの前で汗を拭き着替えようとした一夏だったが、ロッカーの中にタオルが無い事に気付いた。

「タオル忘れたか……………なら、さっさと着替えて部屋でシャワー浴び……………いや、そしたら制服に汗が染み付くし、でもISSスーツのまま出るわけにもいかないか……………」

と、頭を抱え悩んでいると……

「はい！お疲れ一夏！」

「ん？おお鈴。居たのか？」

タオルと飲料の入ったボトルを持った鈴が、ロッカーの影からひよっこりと現れた。

「はい。差し入れ。中はもちろん冷えてないスポーツドリンクよ！」

「お！好み覚えててくれたか。サンキュー！」

タオルとボトルを受け取り、汗を拭きながら近くの椅子に座りスポ

「ツドリリンクを飲み始めた一夏。

「ング……ング……ング……っはあ！生き返るう！」

「いい飲みっぷりね。届けた甲斐があるってもんね」

腰かけた一夏の傍に立ち話しかける鈴。態度には出ていないが、一夏と2人っきりの状況に内心かなりウキウキとしているようだ。

「頑張ってるみたいね。聞いたわよ。クラスの代表を掛けて、今日アンタにヘッドロックした奴と決闘したって」

「ああ、まあ成り行きでそうなったんだけどな。けど、なったからには精一杯やらないとな。これで負けたりしたらリオンやクラスの皆に申し訳ないからな」

「言うわね。そこまで頑張ってるなら、対決するの楽しみだわ」

「へ？対決楽しみみて、お前まさか……」

気になる単語が出てきたので、鈴に顔を向けて聞く一夏。

「ええ、あたし2組の代表になったから。もちろん、今度の対抗戦にも出るからね」

「代表って……でも2組の代表ってお前が来る前に決まってたって聞いたぞ？」

「うん。“お願い”して変わってもらったの」

「……………ああ、そうか……………」

只の“お願い”だけで決まった代表が簡単に変わる訳が無いと思っただが、これ以上の追及は嫌な予感しかしなかったのだと決めた一夏だった。

「しかし、まだ4月の中旬だったのに転入なんて聞いた事無いぞ。なんで最初からIS学園に入学しなかったんだ？」

一夏は頭に引つかかっていた疑問を問いかけた。ここIS学園は政府直轄の最先端学園。入学ならまだしも転入など簡単に出来るものではない。それなのに鈴は恐らく結構な無理をしてここに入ってきたはずだ。その理由を聞くと……………

「な、なんでって！……………それは、その、えっと……………い、一夏が……………その…あの……………」

と、顔を赤くさせ、指をモジモジと動かし、視線をあちこちに彷徨わせていた。

「お、おい。どうした鈴？」

「ひえ！べ、別に何でもないわよ！大丈夫！大丈夫！」

気になった一夏が声を掛けると、顔と手をブンブンと振りまわす鈴。

「ま、言いたくないなら別にいいが……………じゃ、俺そろそろ部屋に戻るぜ。箒ももうシャワー終わってると思うし、腹減ったから飯も食べたいし」

「……………へ？」

一夏の発言に一瞬で元の状態に戻り、一気に一夏に喰いつく鈴。

「ちょ、ちょっと、今のどついう事？アンタ、箒とどついう関係なのよ！？」

「どつって、言ったら、幼なじみだよ。ファースト幼なじみ。で、鈴がセカンド幼なじみ」

「それは知ってるわよ！だから、その幼なじみとシャワーがどつ関係してんのよ！？」

「ああ、そついや言っでなかつたな。俺、箒と同室なんだよ」

「はいい！？」

いきなりの一夏の爆弾発言に驚く鈴。まさかこの学園に来た理由の愛しの幼なじみと、今日判明した最大のライバルが同室だという認めたくない現実を突きつけられたのだから。

「……………」

展開に付いて行けず、頭をガクツと落とし分かりやすく落ち込む鈴。今すぐにも現実逃避したくなってしまふ現実を受け入れたくないのである。

「まあ、箒が同室でよかったよ。見ず知らずの人より……………」

少しでも親しい幼なじみのほうが嬉しかったからな」

ピクッ！

一夏の『幼なじみの方が嬉しい』発言に機敏に反応した鈴は伏せていた顔を上げ、一夏に顔を向けた。

「……………つたらしいわけね……………」

「はい？」

「だ、か、ら！幼なじみだったら嬉しいわけね！」

「あ、ああ、まあそうだけど……………」

「そうか……………そうなのね……………待ってなさいよ一夏！アンタの幼なじみは1人じゃないんだからね！」

そう言うと、猛烈な勢いでロッカールームを飛び出した鈴。いきなり行動に一夏は何もせず取り残されるのだった。

……………寮内・1025室……………

「と、言う事だから、部屋変わって」

「なにが、と言う事だからだ！ふざけるな！何で私がそんな事を！」
あれから数時間後、部屋に戻りシャワーを浴び、食堂で夕食を食べ、部屋に戻ってベットの上でくつろいでいる一夏と篝の部屋に、ドアを荒々しく開けバツグ片手に現れた鈴が篝に部屋の変更を申し出たのだった。

「いやあ、篝も幼なじみとは言え、男と同室なんて嫌でしょ。気を遣わないといけないし、ゆっくりくつろげないし。その点、あたしは全然平気だから！」

「誰が何時何処で嫌だと言った？それに、これは私と一夏の問題だ。部外者に口を出される理由は無いぞ！」

「大丈夫よ。あたしも一夏の幼なじみだから」

「そんなのが理由になるか！さつさと部屋に戻れ！」

「だから、ここが私の部屋になるの！」

「どつしてそうなのと言うのだ！」

鈴が部屋に入ってからずっとこの調子。変わりたい鈴に梃子で動かうとしない篝。互いに自分の言い分を通し、交わる事なく平行線が続いていく。

「……………」

話の核となっている一夏は特に口を挟むことなく2人の言い合いを眺めていた。下手に口を出すと筭か鈴。もしくは2人一緒に逆鱗に触れる可能性があるからだ。

しかし、思い届かず、

「おい！一夏！黙ってないでお前も何か言え！」

「へ？」

「そうね。一夏に聞くのが一番ね！一夏！あたしと筭とどっちが正しいの！？」

「あ、…………えっと…………」

予期せぬ流れ弾に戸惑う一夏。そして自分にとって一番の答えを言ってくれると期待の眼差しを向ける2人の幼なじみ。

(…………とりあえず、鈴に諦めてもらう形で行く)

「なあ、鈴。部屋変えは別にいいんだが、お前ここに来るまでにちやんと言っべき事を言っべき人に言っただけか？」

「はい？」

「いや、ここは自分の家なんかじゃなくて寮だ。部屋変えなんて簡単にコロコロと出来るわけないのは分かるだろ。事務の人や寮長に先に話すのが筋じゃないのか？」

「……………それもそうだったわね。何も考えずに来ちゃってた」

てへ、という感じで可愛らしく舌を出す鈴。お前はぺ○ちゃんか？

「それに、寮長にそんな話は通用しないと思うぞ」

「なんでよ？」

「1年の寮長は千冬姉……じゃなくて、織斑先生だからな」

ピシィツ、とギリシヤ彫刻のように固くなってしまった鈴。周りの空気も凍てついているように見える。

「そ、そんなのどう足掻いたって無理に決まってるじゃない！」

まあ、よほど正当な理由でもない限り無理であろう。無理やり変えようものなら出席簿が繰り出されるのは見えている。

「ま、そんな訳だから部屋変えは諦めてくれ。すまん」

「ええ〜そんなあ〜」

一夏の答に頬を膨らませながらブーイングをする鈴。

「……………やった！」

対して小さな声で喜びの声と小さなガッツポーズを繰り出す筈。

「我儘言つな。今度部屋に行ってやるからそれで勘弁しろ」

「うう、分かったわよ……………」

持ってきたバッグを肩にかけ、来たときとは対照的な暗い雰囲気
纏いながら部屋を出ていく鈴の後ろ姿に少し心打たれる一夏。

(スマン鈴。明日遊びに行つてやるから勘弁してくれ。箒との同室
を簡単に手放すわけにはいかないんだ)

と、心の中で暗くなっている鈴に心の中で謝罪すると、

「……………ねえ、一夏……………約束、覚えてる?」

ドアまで行き、ドアノブに手を掛けようとしていた鈴が一夏に声を
掛けた。

「ん?何だ?」

少し小さな声だったので、箒を残しドアの近くまで行く一夏。

「約束つて聞こえたけど、何だ?」

「え?覚えてる……………よね?」

(約束……………約束……………あ!)

「もしかして、あれか?」料理の腕が上がったら、毎日酢豚を食べ
さしてあげる』ってやつか?」

「っ!ー!う、うん!それぞれ!覚えててくれたの!」

「そりゃあ、まあ、結構真剣な顔つきで言ってたからな。それでど

うなんだ。腕上がったのか？」

「もちろんよ！また今度、食べさせてあげるからね！じゃあね！—
夏！おやすみ！」

「ああ、おやす……………」 『ちゅ』……………」

ガチャ……………バタン！

(……………えっと、今出てった鈴に何された？なんか頬に柔らかい物が当たって……………もしかしなくても、今、頬にキスされたの、俺！？)

幼なじみの今までされた事のない行動に、一瞬で頭に血が昇り顔が真っ赤になる一夏。無意識に手を頬に伸ばし、さっきの柔らかな感触が現実の物だと感じていると……………

「……………一夏……………」

「っ！」

奥のベッドルームから小さな声で一夏を呼ぶ筈の音が聞こえた。

「な、何だ？」

「……………今、鈴に何された」

「へ？い、いや、そのな……………」

「良かったな。あんな可愛らしい娘にキスされて」

「っ！」

近距離で話していたため、話の内容は聞こえなかったらしいが、頬にキスの場面は見られたと一夏は気づいた。

「い、いや、あれは、スキンシップみたいな物……………」
「うるさいっ
！」「っ！……………」ほ、篝……………」

「もういい！一夏の馬鹿者！私はもう寝る！」

一夏に怒鳴ると、部屋の仕切り板を荒々しく引き出すと、そのままベットのもぐりこんだ篝。

(マズイ……………篝……………涙目になって……………)

声を掛ける事の出来ない雰囲気、何も出来ない一夏は明日また話そうと決め、ベットのの中に入り眠りに着いた。

そして翌日、1週間後の4月の末に行われる1年生クラス対抗戦の組み合わせが発表された。その1回戦は、

クラス対抗戦1回戦

1年1組 織斑一夏

|

1年2組

鳳

鈴音

第13話 約束と涙（後書き）

対抗戦本番は次回からです。

お楽しみにしていてください。

感想・評価お待ちしております。

第14話 クラス対抗戦開戦！ (前書き)

サブタイトルって難しいですね。センスも必要ですし。

第14話 クラス対抗戦開戦！

……IS学園・屋上……

「……………」

クラス対抗戦の前日。日も傾き山吹の光が学園を照らす中、長い黒髪を風になびかせている1人の影があった。

(……………初めて見た時から分かっていた。鈴も一夏の事が好きだと。しかも私と違って積極的に一夏に好意を示してる)

彼女、篠ノ乃箒は1週間前の出来事から悩んでいた。頬とは言え、6年間思っていた彼にキスした鈴の姿を見た瞬間、全身から血の気が引き自分があるこの世界を全て否定したくなった。

(……………こんな思いをするなら、いつその事2人を応援して……………)

「夕陽の中、黄昏る黒髪の日本の女子。良い画だねえ」

「っ！……！」

突如声を掛けられ飛び上がる箒が声の方を向くと、屋上の入り口近くで壁にもたれかかっているリオンが立っていた。

「い、何時からそこに居たんだ！」

「ついさっき。柵に手を掛けてズーッと夕陽見ながらため息ついていた所から」

「……………一体何の用だ」

「そんな怖い顔して睨むなよ。1週間前から一夏と一緒で“心ここにあらず”って感じだったくせに。あ、これ、日華に教えてもらったんだが意味合ってるよな？」

まるで日本刀の鋭さの雰囲気を持つ箒に、気にすることなく近づき柵に背もたれるリオン。金色の髪が風になびく姿が箒の目に映った。

「一夏と何があったんだ？一夏に聞いても何も言ってくれないし。あのリオンって奴と何かあったのか？」

「お前には関係ない！さっさと帰れ！」

「いいから何があったか話してみろよ。心に閉じ込めるより、ぶちまけた方が楽だと思っぜ」

「関係無いと言ってるだろ！何でそこまで……………」
「友達だから……………」

「……………友達の悩みは、俺の悩み……………」
「……………な、俺達、友達だろ」

「……………言っても呆れるなよ」

「内容次第だな。ほら、何があったか話せよ」

「……………あぁ……………」

そして、あの夜の出来事を箒が全て話し終えると……………

「……………呆れを通り越して悩む事自体がアホらしい……………」

目頭を押さえて首を上に向けたりオンが呟いた。

「そ、そんな言い方無いだろ！」

「いや、そうとしか言えねえよ！何？頬にキス？なーにたったそれだけの事で一夏もお前も悩みまくってんだよ！お前らは弟か妹にはつか構ってる親に対して駄々こねる子供か！」

「もう止める！それ以上言うなら斬るぞ！」

何とも言えない表情のリオンに、夕陽のせいか恥ずかしさのせいか、顔が真っ赤になっている箒が叫んだ。

「……まあ、とりあえず一夏は明日一発ブン殴っとくとして……
… 箒はどうしたいんだ？」

「えっ？」

「えっ？ じゃないだろ。一夏と鈴に対してどうするかって言ってんだ
よ」

「ど、どつと言われても……」

リオンに話を振られ、困惑の表情を顔に出す箒。

「……ま、他人の恋愛事情に無理やり首突っ込むつもりはないぜ。
どう決めるかはそいつ自身だからな」

「……私は……」

「けど、経験上これだけは言っとくぜ」

「？」

柵から体を話し、箒に背を向けて出口の方を向くりオン。

「伝えたい事は伝えなきゃ届かない。それが大切な想いならなおさ
らな。……伝えたくても、伝えたい相手が居なくなったら
どうにもならないしな……」

「……リオン？」

背を向けたリオンからなにやら寂しげな雰囲気を感じた箒は、何と

も言えない感覚を感じた。

「じゃ、また明日な。遅刻しないよう早く寝ろよ」

「あ、ああ。また明日な……………」

そう言うと屋上を後に去っていくリオン。屋上に残った篝の顔には先程までの弱みは消えていた。

……………翌日・クラス対抗戦当日……………

……………第2アリーナ・ピット内……………

「どうだ？調子は良いか一夏？」

「とりあえず、今朝出会ってすぐブン殴られて、今も痛い右頬以外は大丈夫だ」

クラス対抗戦、第1試合が行われる第1アリーナのピットでは、制服を着たりオンが白式を装着して右頬が赤くなっている一夏に話しかけた。

「うん。大丈夫そうだな」

「どこがだ？何もなかったかのようにスルーするな」

「り、リオンさんなりに、初めての公式戦に挑む一夏さんの緊張をほぐそうとして……」

「こんな緊張のほぐし方聞いた事無えし、されたくなかったよ」

2時の方向に視線を逸らしたりリオンに突っ込む一夏。そしてなんとかリオンをフォローしようとするセシリア。

そしてここには一夏、リオン、セシリア以外にもう1人の人物が……

「……………」

キツイ目つきのまま一夏を睨みつける筈の姿があった。1週間前から変わらなくなった筈の表情を見て一夏が苦笑いしていると、

『お、織斑……………』一夏。準備は良い？向こうのピッドから鳳さんが出てきたよ』……………君』

ピッドのスピーカーから、最初に聞こえてきた副担任の山田先生の声を除けて、日華の声が聞こえてきた。恐らくアーリーナのモニタールームから話しているのだろう。

「そっか。なあ、そっいや俺、鈴のISの事何も知らないんだけど何か情報あるか？」

『あ、はい。ここに……………』ここにデータはあるよ。鳳さんも白式の

データを見てるはずだから今から送るね』……………」

日華が言うと同時に、白式のモニターに鳳鈴音の中国製第3世代IS『甲龍』の画像とデータが映し出された。

「リオンやセシリアと同じ第3世代ISか……………」って、何て呼ぶんだコレ？こゝ、こつりゆうでいいのか？」

『あ、それは…………』それで『シエンロン』って呼ぶよ。まあ、自分が呼びやすい言い方で良い…………』白月君！さつきから私の台詞を取らないで下さい！わざとですか！？わざとやってるんですか！？』

さつきから自分の発言を邪魔されていた山田先生がついに怒りを日華に放った。

『い、いや、そういうつもりは…………』

『今日、白月君は選手達とISの観察を兼ねた、私たちのサポートは可能ですよね！？さつきから私の発言を遮って！年上の人をからかうのが好きなんで…………』『バシン！』…………キユウ…………』

「……………」

大人げなく日華に説教と言えるかどうか分からない事を言っていた山田先生が、何かの打撃音と共にダウンしたのが聞こえてきた。山田先生を殺った（死んでないが）犯人は言わずとも分かるが、ピッドに居る3人は絶対に触れないでおこうと思うのだった。

『そろそろカタパルトに乗れ織斑。いい加減に出ないと鳳が怒るぞ』

「な、何でしょう……」「勝ってこい!」……へ?」

再び放たれた大声に委縮していた一夏に予想していなかった言葉が聞こえてきた。

「……………えつと、箒、今……………」

「勝ってこい!一夏!無様に負けたりしたら……………承知しないからな!」

「……………箒……………」

1週間前の鈴との出来事からまともに口も顔も合わせてくれなくなった、きつく乱暴で自分勝手に我儘で激励とも言えるか分からない幼なじみの言葉に一夏は、

「……………おお!行ってくるぜ!」

何よりも力強く感じ笑顔で応えた。

「ああ、行って来い!一夏!」

ガコン!ドシュウウウウウン!!!

最後に聞いた箒の言葉の後、カタパルトを射出しアリーナの空中へと飛び立った。そこに待つ自分のもう1人の幼なじみの元へと……

……………

「しかし、もうちょい優しく言えなかったのか？一夏の奴はあれで十分みたいだったけど」

「うるさい。黙れ。やかましい」

「おお、ひどい。それが昨日アドバイスしてやった奴に対する言葉かよ？」

「?????……一体何のことですか？」

一夏が飛び立ち、3人で中央制御室へ向かう中、篝の発言の反省会と言つ名の会話が繰り広げられていた。

……………第1アリーナ・戦闘フィールド……………

「やっと来たわね。遅かったじゃない一夏」

アリーナの上空、赤みがかつた黒の塗装、背中に背負つた馬鹿でかい2つの青龍刀、肩に付いた棘のある丸い非固定浮遊部位^{アンロックユニット}。中国製第3世代IS『甲龍』を身に付けた鈴が浮いて一夏を待ち受けていた。白式と対峙するその姿は、白式が華麗な鎧をまとつた騎士^{ナイト}なら、甲龍は荒々しさがある力強い戦士^{ウォーリアー}だろう。

「まあ、ちよつと色々あつてな。待たせて悪い」

「ふん。ま、別に良いわよ」

アナウンスから聞こえた特定位置にまで移動しながら開放回線オープンチャンネルで会話する2人。

「あんた今日が初めての公式戦なんですよ。ハンデがたら手抜いてあげよつか？」

「必要無えよ。そんなの要らねえから全力で来い」

「いい度胸じゃない。いいの？仮にもあたしは代表候補。技術も経験もあんたを軽く上回ってんのよ？」

「戦う相手に手を抜くって言うのは失礼だろ。それに、さっき約束したからな」

「約束？」

「ああ、絶対に勝つって、筈とな！」

「っ！」

筈と約束。そう聞いた鈴は顔を曇らせる。そうこうとっていると互いに特定位置に着き、空中で静止する両者。

「そんなに言うなら全力で行くわよ。知ってると思うけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃が当たった

「ただじゃ済まないんだから」

「ああ。分かってるよ。気にせずかかってこい！」

左手を上げ、親指以外の指でクイクイツと“かかってこい”のジェスチャーをかます一夏。

「っ！……いいわよ。そこまでいうなら全力で相手してやるわ！」

『それでは両者、試合開始してください！』

試合開始のアナウンスと同時に、背中に背負った青龍刀を抜き一夏に突っ込んでいく鈴。同じく一夏も雪片二型を取り出し青龍刀の一撃を食い止めたが……

「っ！……な、何だよこの馬鹿力は！」

予想以上の力に押されていく一夏にニヤツと笑みを浮かべる鈴。

「まだまだ、甲龍の力はこんなじゃ……ないわよっ！……！」

グオン………ガアアアン！

「っっっ！……！」

交わっていた雪片二型を払いのけ、そのまま1回転して勢いを付けた青龍刀を叩きつけた鈴。それを雪片弐型で受け止めるもそのまま弾き飛ばされる一夏。そのまま地上に落とされる一夏だが、地表にぶつかる直前にPICでスレスレに浮遊した。

「とんでもない威力だな。その青龍刀」

「まだまだ、この『双天牙月』をもっと味わいなさい！」

そう言い、2本目の双天牙月を持ち器用に手で回しながら構えな
おす鈴はすかさず一夏に再アタックをしかけた。

ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！

「っ！お、抑えきれねえ！」

1刀でもかなりの力だったのに、2刀となり連携も増した攻撃に
一夏は押され始めた。

（っ！このままじゃジリ貧になる。一旦距離を取って体勢を……）

双天牙月の重い連撃に危機感を感じた一夏は、後方に急移動しそ
のまま距離を取ろうとするが、

「逃がさないわよ！」

それを見逃す鈴ではない。ガゴン、と重いスライド音と共に肩の非
固定浮遊部位シロックユニットが開きそこに光が集まっていき……

ドオオオン！！！！

重い砲撃音が響き、一夏に向け肩の装備から何か（・・・）が放たれ
た。

「っおおー！」

砲撃音に素早く反応した一夏は体を捻り回避行動を取り、掠めただけとなったが、その後ろの地上では土柱と共に地面が抉られていた。

「へえ、今のジャブを避けるなんて」

「っ！」

「今度はストレートよん」

最初の砲撃に気を取られた一夏の前に移動した鈴が、再び肩の装備を開き……

ドゴオオオオン！！！！

「ぐああー！」

ドン！ズザアアアア！！！！

正面から放たれた見えない（……）砲撃を受けた一夏は、衝撃で地面に叩き落とされた。

………第2アリーナ・モニタールーム………

「な、なんだ！あの今の攻撃は？」

「あれは『衝撃砲』です」

「衝撃砲？」

見た事のない鈴の攻撃に戸惑う筈に山田先生は説明するが、リオンも初耳の言葉に首を傾げる。

「空間に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じるエネルギーを弾丸にしてぶつける武器です」

「私のブルー・ティアーズと同じ第3世代兵器ですわね」

「しかもさっきの砲撃を見る限り、不可視の砲身で不可視の砲弾を撃ち出す武器ってことか」

「うん。しかもあの衝撃砲は形状的に真下と真上以外は撃ちだせるみたいだから、死角は無いに等しいと思う」

続く皆の説明を筈はもう聞いておらず、モニターに映る一夏を集中して見つめていた。

(……………頑張れ、一夏……………)

胸の前で両手を強く握り、約束をした人の勝利を強く願った。

「くそっ！厄介な攻撃だな全く！」

「ほらほら！まだまだ行くわよ！」

戦いが続くアリーナでは、距離を取っている一夏に衝撃砲を連射し追いつめていく鈴の、一夏が不利な状況が続いていた。

「どうしたの？このままじゃ私の勝ちよ！」

「絶対に負けねえよ！勝つって約束したんだ！」

「……………」

再び一夏が口にした『約束』の単語を聞いた鈴は表情を少し暗くした。

「何よ……………さっきから、約束約束って……………」

「どうした鈴！戦いの最中にポーツとすんなよ！」

「ひゃあー！」

鈴の動きが鈍つたのを見逃さなかった一夏は急接近し雪片式型を振る。

反応に遅れた鈴は、迫ってきた刃を避けるもバランスを崩し、空中でふらついた。

（隙が出来た！イケニッション・ブースト瞬時加速で零落白夜を当てる！今しかない！）

鈴に出来た隙を狙い、一気に勝負を決めようとする一夏。

(よし、行く……………)

一夏が勝負を決めようとしたその瞬間……………

バリン！、ドオオオオオオオン！！！！！！

「っつ！！！！！！」

突如、アリーナの遮断シールドを撃ち貫いた光線が地面に直撃し大爆発が発生。

「な、何……………」

何が起こったが分からない鈴は戸惑う。

しかし、一夏は別の意味で戸惑っていた。

「何か………居る………」

アリーナの中央で立ち起こる爆炎と黒煙の中。赤い光を放つ何かが一夏を捉えていた。

第14話 クラス対抗戦開戦！ (後書き)

次回、あらゆる面々が動いていきます。
感想・評価お待ちしております。

第15話 VS UNKNOWN ENEMY (前書き)

話にでてくる量産機の特徴はオリジナル設定です。
日華が今までで1番活躍してくれます。

それではどうぞ。

第15話 VS UNKNOWN ENEMY

……第2アリーナ・選手控え室……

「かんちゃくん！はじめての公式戦がんばってね〜！」

「余計に緊張するから止めて……」

クラス対抗戦1回戦第2試合を控えた1年4組の代表、更識簪は選手控え室において付き人の布仏本音こと1組の癒し、のほほさんを傍に次の自分の出番を待っていた。

「せつかくの専用機持ちなのに〜、完成できなくて普通の打鉄での参加は残念だね〜」

「仕方がない……時間が足りなかったし……それよりそろそろ装着して簡易最適化かんいフィットインゲするから手伝って」

「あいあい〜！りよ〜かいだよ〜！」

量産機である打鉄は、専用機のような個人に合わせた初期化も最適化インゲもしない。しかし、毎回装着者が変わる量産機には、最低限に装着者に合わせる簡易最適化という特性があり、専用機ほどでは無いが装着者に適応してくれるのだ。

そして、簡易最適化を行うため簪が打鉄に乗りこもつとした瞬間、

ドオオオオオオオン!!!

「きゃあ!」

「うにゃあ!」

アリーナのグラウンドの方から、とてつもない爆音と振動が襲ってきた。

……アリーナ・モニタールーム……

「何?何が起こったのです?」

「おいおい!一夏と鳳は大丈夫か!?」

モニターに映ったアリーナの異常を目にしたセシリアとリオンは不安を口に出した。

「大丈夫。2人とも無事だよ」

「何かがアリーナのフィールドに激突!ア、アリーナの遮断シールドを貫通して侵入するなんて、一体何が……」

2人の安全を言う日華と不安がる山田先生をよそに、マイクを手に

し指示を出す千冬。

『試合は中止だ！観客席に居る者は即座に退避！緊急シールド展開！客席を守れ！』

指示通り、客席に厚めの防壁が展開され外からは完全に見えないようになった。

「おい日華！一体何が襲って来たんだ？」

「爆煙の中に居るみたいでまだ良く見えないんだ」

「煙が晴れてきました。見えて……きまし……」

煙が晴れ、襲撃者の姿が見え始めた。その姿を見た山田先生は言葉を失い、その場に居る全員が驚愕した。

「あれ………何だ？」

「IS………なのか？」

その姿は、黒く機械的な構造。顔も含めた全身を覆う全身装甲。フル・スキンそして、顔を覆う装甲の5つある赤い眼を模した部分から発した狂気を感じさせる赤い光。

見た事のないISが姿を現した。

……第2アリーナ・フィールド……

観客席が完全に見えなくなったアリーナで、いきなりの乱入者に驚愕していた。目の前に現れた存在は一夏はもちろん、代表候補生の鈴ですら見た事のない姿だったからだ。

「一体あいつは……」

『一夏！試合は中止よ！すぐにピッドに戻って！』

オープンチャンネル
開放回線で鈴からの指示が一夏聞こえてきた。

「戻れって、お前はどうすんだよ！」

『あたしはアンタや観客が避難するまで時間を稼ぐわ！いいから早く！』

「馬鹿言つな！お前を置いて逃げれる訳ないだろ！」

『アンタ素人でしょ！いいからここはあたしに任せなさいって言うてるでしょ……』

「けど……『ピピピ』……っ……やっぱり逃げるのは無理っばいな」
『なんでよっ？』

「あの乱入者に、完全にロックオンされた。あいつの狙いは俺みただ」

白式のモニターに警戒のウィンドウが表示される。

『警告 ステージ中央に熱源反応 所属不明ISにロックされました』

『はあ！？なんであんたが？』

「ごうなりや、俺も残ってアイツと戦うしかないな」

『本気なの？言うておくけど危険すぎるわ……………』

ドオオオン！

「鈴！危ねえ！」

正体不明の黒いISから鈴に向けビームが発射された。一夏は最大スピードで移動し鈴を抱えビームを避けた。

「っ！セシリアのISと同じビーム兵器！しかもセシリアより出力が上かよ！」

「……………つて！ちょっと一夏！あんた何してんのよ！」

「何って？助けたんだろっが」

「こんな風に抱えて助ける事ないでしょ！」ゲシゲシ

「ちょ、おま、危ないって」

「うるさいうるさいうるさい！」ガンガン

いつかのリオンとセシリアのようにお姫様抱っこの状態の鈴は慌て

ふためき、助けてくれた一夏をガンガンと殴っていた。流石にISのシールドがあるとはいえ少し痛む一夏だった。

「止めるこら！もう1発来るぞ！」

ドオオオン！！！！

「っっ！！」

再び迫る攻撃を避ける一夏。そして煙が完全に晴れ敵の姿を確認する2人。

「何だこいつ……………なあ鈴。お前あんな奴見た事あるか？」

「ううん。初めて見るわ、こんなの」

「そうか……………おい！お前！聞こえてるか！」

『……………』

通信を通じて襲撃者に語りかける一夏。しかし、相手は返事どころか身動き一つとしない。

「おい！聞いているのか！お前は何者で何が目的なんだ！」

『……………』

……………
イイイン

変わらず返事はしないが、首を動かさずある赤い複眼の顔を一夏

にむける襲撃者。

「どうやら、戦う気はあるみたいだな」

『織斑君！鳳さん！聞こえてますか？すぐに避難してください！すぐに教員達がISで制圧に行きますから！』

通信回線から山田先生の慌しい声が聞こえてきた。しかし、一夏には後退の考えは無かった。

「いや、先生たちが来るまで俺達がアイツを食い止めます」

『な、何バカな事言ってるんですか！？早く逃げて……………』

「まだ、観客席の皆は逃げてないはずですよ！俺たちが逃げたら皆が危険ですよ！」

『そ、それはそうかもしれませんが……………でも、危険すぎます！お願いですから避難して……………』

「戦闘に集中したいんで通信を切ります。信じて下さい！」

『で、でも……………聞こえるか？織斑？……………織斑先生？』

「何ですか？」

『……………無理だけはするな。あと、間違っても死ぬなよ』

「……………了解です！」

モニタールームからの通信を切り、再び相手を見つめる。

「と、言うわけだ一緒に叩くぞ鈴」

「わ、分かったからそろそろ降ろしなさいよ！動けないじゃない！」

「ああ。悪かった」

腕の中で暴れ出そうとする鈴を放す一夏。解放された鈴は空中で静止し一夏の横に移動する。

「じゃあ一夏。私がサポートするから、アンタはあいつに突っ込みなさい。武器、その刀だけなんでしょ？」

「ああ、それじゃあ、行くぜ！鈴！」

「えええ！」

迫りくる敵に向け、それぞれ雪片二型と双天牙月を構え臨戦態勢をとる一夏と鈴。

練習試合でも模擬戦でもない本当の戦いが始まった。

……………第2アリーナ・モニタールーム……………

「ちょっと織斑先生！何を言ってるんですか！」

「どうしたも何も、あいつらが戦ると言っているんだ。だったら任せてみるのもあいつらにはいい経験だ」

「何をそんな悠長に。弟の一夏さんが心配じゃないんですか？」

「落ちつけオルコット。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

近くにあるコーヒー煎れからカップにコーヒーを注ぎ、傍の箱から白い粒を入れかき混ぜた。その姿は常に冷静沈着な頼れる指揮官のようだが、

「あの……織斑先生……今、お入れになったの、塩ですわよ」

「っ！……」

内心、かなり戸惑って一夏を心配しているらしい。

千冬が慌てて見直すと、『砂糖』と書かれた箱の隣に『塩』と書かれた箱があり、その蓋がずれて今使った事を表していた。

「……なぜここに塩がある？」

「さあ、なぜと言われましても……」

「……」

「わ、私！何も見ていませんわ！凜々しく厳しく氷のように冷たく

「おいセシリア！B級ホラー映画みたいになってるから止める！現実に戻ってこい！」

コーヒーを流しこまれ、軽いトラウマが生まれたセシリアを現実に戻し戻そうとする筈。しかし、鬼の教官に叩き込まれた恐怖は簡単には消せそうにない。

「織斑先生！俺とセシリアにISの使用許可を！一夏と鳳の救援に行かせてください！」

事態の悪さを認識したりオンが千冬にISの使用を申し出る。

「そうしてやりたいが、これを見る」

千冬が指さすモニターの1つを見るとそこには、

『遮断シールド設定・LEVEL4』

「遮断シールドがレベル4……しかも、全部の扉が完全ロックされてるなんて何でだよ！」

「おそらくですけど、あのISの影響だと思います。こちらでシステムを回復しようとしてるんですけど、完全に拒否されてるんです。今の状況じゃ外部との通信もままならない状況です」

更なる悪い状況に焦るリオンに、何とかシステムを回復しようとする山田先生。しかし、なんとかシステムに入ろうとしても、侵入拒否されその画面に大きく『ERROR』と表示されてしまう。

「こっちが何も出来ないなら、緊急事態として外部からの助けを…」

…」

「もうやっている。今現在も3年の精鋭部隊がアリーナへの突入準備を進めてるはずだ。妨害されるギリギリで通信で指示は出しておいた。今はもう通信出来ないがな」

手も足も出せない状況に、リオンは歯軋りをする。今の状況はもちろん、何も出来ない自分が腹立たしく思うのだ。

「それにどの道、お前ら2人に起動許可は出せん。かえって邪魔になる」

「な、何だと!」「どういう意味ですの!」

いつの間にか復活したセシリアと一緒に千冬に迫るリオン。

「ISの特徴で言えばマードックはまだ行けるが、オルコットのISは1対多向きの装備だ。それに、お前達2人はまだまともな連携訓練をしていない。そんな奴らに起動許可が出せるか」

「そんな事ありません!」「そうですわ!大丈夫ですわ!」

「では、この状況でのお前らの役割は?各々のピット兵器をどう使う?味方の構成は?敵のレベルはどの位を想定している?連続起動時間は………」

「分かりました。もう結構ですわ………」

怒涛の口撃に勝ち目が無いと悟り、素直に降参し従うセシリア。しかし、

「……………っ！」

リオンは何も言わずに早足でモニタールームから出て行くこととする。

「マードックー！ー！」

その姿に大声で呼び止める千冬。その迫力に足を止めるリオンだが、千冬に背中を向け扉の方を向いていた。

「どこに行くつもりだ？」

「2人の所に向かいます」

「許可は出さんと言ったはずだ」

「それでも行きます」

「行くなら命令違反で懲罰を課すぞ」

「構いません。好きにして下さい」

「……………分かんのか。これは本当の……………“命”も無くなるかもしれん戦いだ。そこに自分から行く奴が……………」

「じゃああの2人は死んでも構わないのかよ!!!」

「「「っ!!!」」」

部屋に響くりオンの怒声に驚く千冬と日華以外の3人。敬語で無くなったその言葉に委縮してしまった。

「……………確かに、自分から死地に行く奴は馬鹿のする事です」

「なら、言う事を……………でも!」……………」

「でも、助けられる力を持つてるのに、助けようとしなない奴は馬鹿にも劣る畜生以下です」

「……………」

「どちらかを選べと言うのなら、俺は馬鹿のすることをします!」

そう強く言い放つと、自動扉を開け駆け足で外へ向かって行った。

「マ、マードック君!お願いしますから戻ってきてください!」

「構わん。放っておけ」

「織斑先生!?何を言って……………」

「マードックが自分で選んだ事だ。仮にも男が決めた事に口を出し

「やるな」

「け、けど……」「山田先生。すいませんけど、席を代わって下さい」「……し、白月君？」

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ……

戸惑う山田先生をどかして席に座り、モニターを見ながらキーボードの上で指を高速動かし、記号を打ちこんでいく。

「……かなり強いパワーで侵入してるな。あのISからこつちを妨害する何か発してるはず。範囲は多分このアリーナとその周辺の設備だけのはず。そうじゃないとこのアリーナのシステムを完全に乗っ取れるはずないし……なら学園の中央システムは無事のはず。その辺りを解析してる回線をアリーナのシステム復旧に回して……他にも回せる回線は……織斑先生！」

「何だ？」

「セシリアさんにISの使用許可を！観客席の出口を無理やりこじ開ければ観客は逃げれますし、その分の回線と出力をシステムの復旧に回せます！」

「出来るのか？」

「なんとかしてみせます！」

「聞いたなオルコット！IS使用を許可する！先にアリーナ出入口をこじ開けて、外に居る3年生部隊を招き入れる。その後観客席の出口を開放したら正徒及び来賓客の避難誘導をしろ！3年生部隊

にも同じように避難誘導するように伝える！扉の破壊許可は出してやる！」

「わ、分かりました！」

千冬に指示され、駆け足でモニタールームを後にするセシリア。

「それまでにも何とかシステム復旧をやってみます！山田先生！サポートお願いします！」

「はい！分かりました！」

日華の横の席に座りキーボードを打ちこんでいく山田先生。常人から見れば結構な早さだが、日華と比べればウサギとカメに近かった。各々が動き出す中、1人部屋に立ち竦む筈。特に能力が無い自分には出来る事が無いと自覚しているからだ。しかし、この状況でも出来る事はある。

(……………一夏……………頑張れ……………絶対に死んだりするな！)

ただひたすら強く祈る。想い人の無事を。敵を討ち、勝利してくれる事を……………

……アリーナ・フィールド……

「ほらほらほらあー！」

ドドドドドドドーン……！！

甲龍の衝撃砲を一夏を撃った砲弾式から拡散式に変えアリーナを逃げ惑う敵に打ち込む鈴。くねくねと動きながら回避していく襲撃者だが、

ドオオオン！

1発が命中し、地面に叩きつけられる。

「今よ一夏！」

「おお！」

すかさず斬りこみに迫る一夏。地面に横たわる敵に対し零落白夜の青白い刃を上段からの降り降ろしを放つ……

グオン！ブウン！

が、いきなり飛び起き顔を一夏に向けないままトリッキーな動きで一夏の背後に周り回避する。

「まだまだあー！」

背後を取られるも、雪片二型を逆手に持ち自分の脇下を通し突きを放つ。

グイン！

しかし、上体を反らし体の上を通過させてまたも攻撃をかわす襲撃者。その体勢のまま器用に蹴りを一夏に放ち距離を取る襲撃者。

「ぐあ！くそあ！」

「一夏何やってんのよ！これで4回目よ！」

「分かってるって！アイツの動きが人外じみてるんだよ！軟体動物かよアイツ？」

距離を取り、空中から2人を見下ろす襲撃者。2人の会話を見たまま何もしてこない。

（くそ。まだなんとか行けるが、零落白夜を使えるのは後3回位か？）

白式のシールドエネルギーを見ながらペース配分を考える一夏。零落白夜は強力な武器だがその分リスクも大きい諸刃の剣。頻繁に使えるものではない。力が未知数の襲撃者に対しそれは大きな切り札なのは一夏も鈴木も分かってはいるが中々命中しない。一夏の経験不足か、相手がその危険性を認識しているかなのかは不明だが、互いに決定的な一打を打ちこめていない現状だ。

「なんとかして早くアイツを倒さないと……」

「分かってるわよ！だからまた隙を作って……って、一夏！撤退よー！」

(動け!動いてくれ!)

.....
ウウウ.....

(.....ん?)

.....
ウウウウウン.....

(何だ?壁の向こうから何か聞こえて.....)

.....
ウウウウウウン!

(すぐ後ろに来た!)

その後、

ドカアアアアアン!!!!!!!!!!

「「っ!」」

一夏の横2メートルの所の壁が爆散し、一夏も鈴も襲撃者もそつちの方を向いた。

「何よ!?!もしかしてもう1人いるの?」

襲撃者の追加という鈴が最悪の想定をするが、土煙に隠れた破壊された壁の中から、

シユンシユンシユンシユン!

小さな4つの影が襲撃者を襲った。その様子から鈴は敵ではないと分かったがまだ誰が来たか分かっていない。

……………一夏を除いて。

「あれは、ゲイル&ライトニング!……………って事は!」

一夏が土煙の方を向いた瞬間、

ドオオオン!

1発の銃声が鳴り響き、

カアアアン!

襲撃者の額部分に命中し吹き飛ばした。

その瞬間、ゲイル、ライトニングは出てきた壁の方に戻り、

「助っ人サービス、お届けにあがりました！」

壊された壁から土煙を払いのけながら登場した、金色のISを纏った主の傍に舞い戻った。

「リオン！」

「なんとか大丈夫そうだな一夏？立てつか？」

「ナイスタイミングだ！ありがとな！」

壁にもたれてる一夏に手を伸ばして起き上らせるリオン。

「今回の助っ人料金は、昼食5日分で請求するぜ」

「命を助けてくれたのは嬉しいけど、ちょっと高くな？」

「10日分にするか？」

「御助けいただきありがとうございます！リオン様！」

「一夏あ！大丈夫！？」

「なんとかかな」

「助かったわ！一夏を助けてくれてありがとね！リオン！」

「礼は、アイツを倒してからにしようぜ！」

学生の懐にはキツイ請求をされるも、軽い冗談を言いながら並ぶ3人。3人が襲撃者の方を見ると弾丸が命中した所を搔きながら起き上るところだった。

「なんだよ。結構タフそうな奴だな」

「…………… 篤や皆はどうなんだ？」

「心配すんな。皆無事だ。ただ、あいつがこのアリーナのシステムを掌握しちまって、まだ観客が避難出来てねえ状況だ」

「ヤバいじゃない！なんとかならないの？」

「今頃、日華がなんとかしてるはずだが、いつシステムを取り戻せるか分かんねえ状況だ」

「なら、1番手っ取り早いのは……………」

「目の前のアイツを……………」

「ぶっ潰す!!」

決意新たに襲撃者に向かう3人。その眼には先程より大きな闘志が宿っていた。

……アリーナ・モニタールーム……

「す、凄い所から出てきましたね。マードック君……」

モニターに映るリオンの登場の仕方に啞然とする山田先生。と、その時……

「よし！システムに入れました！」

その横で、アリーナの中央システムに入りこんだ日華が喜びの声を上げた。

「では白月！そのままシステムを取り戻してくれ！」

「分かりまし……」

ビーービーー！ビーー！ビーー！

「……駄目か……」

「どうした？」

「やっぱりと言うか、ここが一番相手の妨害が大きいです！システムのコードもパスワードも全てアイツに変更されています。この部屋の出力じゃ突破どころか関わられる事すら無理です！」

「そ、そんなあ……」

「何とかならないか？」

「……………せめてここにISがあれば」

「ISがですか？」

「ISをこの部屋の回線に接続して、出力を上げればアイツの妨害を突破は出来るはずです……………けど……………」

「マードック君はアリーナで戦闘中。オルコットさんは3年生達と避難誘導してますし……………何より今の状況では連絡を取る事も出来ません！どうします織斑先生？」

「……………織斑達が侵入者を倒してくれるのを待つしか……………」

「そうだ！織斑先生！こことあそこって他とはつながってない直通の回線でしたよね！」

「あそこ？」

……………第2アリーナ・選手控え室……………

「かんちゃ〜ん！しっかりして〜！目え覚まして〜！」

「ううん……………」

選手控え室で布仏本音は困惑していた。突如アリーナを襲った衝撃と爆音。その時に打鉄に乗りもつとしていた簪が地面に落ち、頭を強く打ち意識を失う。その応急処置をしたものの、助けを呼ぼうと通信しようも応答は無く、外に行こうとしても扉は開かずに出れなくなっていた。まさに八方塞がり。簪の回復を願うしかできなくなっていたが、

「うう〜、怖いよ〜誰か来て〜……………」

経験のした事のない緊急事態に1人ぼっちの孤独感が増す状況に精神は追い込まれていた。

そこに一筋の光明が差し込まれた。

『ザザツ、ザー、ザザザー……………』

「?」

部屋のスピーカーから聞こえてきたノイズに耳を傾ける本音。

『き、聞こえる?誰かいますか?聞こえたら返事してください。こつちに声は届きますから』

そこから聞こえてきたのは聞いた事のない男性の声だった。

「は、はい!いる!いるよ〜!」

……アリーナ・モニタールーム……

『は、はい！いる！いるよ！』

（よかった。人がいた。……でも、この声どこかで聞いたような……）

繋がった控え室から聞こえた声に安心する日華。しかし、まだ不安は拭えきれない。そこにISが無ければ何の意味もないからだ。

『ねえねえ！何があったの？何で誰も助けにきてくれないの！』

「い、いいから落ちついて。大丈夫。君が協力してくれたらこの状況を早く解決出来るんだ」

『きよ、協力？』

「その近くに打鉄でもラファールでもいい。ISが近くにあるかな？」

『う、うん。打鉄ならあるよ』

この瞬間、システム回復の大きな可能性が生まれ日華は大きく喜ぶ。

「なら良かった。協力って言うのは、その打鉄を装着してアリーナ

のモニタールームに来てほしいんだ」

『ええ！そ、そんなの無理だよ！わたし、まだちゃんとISに乗った事もないのに！』

「大丈夫。装着の手助けはこっちから出してあげるから。言つとおりになれば大丈夫だから」

『だ、だけど、先生も居ないし、こんな状況で1人でそこまで行くの無理だよ！』

「っー！」

予想以上に通信相手の怯え具合に困惑する日華。しかし、ここに打鉄が来ない限り状況を打破することはできない。

「……………いい。落ちついて聞いて。君の名前は？」

『の、布仏本音です……………』

「布仏さん。今アリーナで問題が起きていて一夏や鳳さん。リオンがその対応をしているんだ」

『お、おりむゝ達が？』

「はつきり言つて、この3人でも問題を解決出来るかどうか分からない状況なんだ。観客もまだ完全に避難出来てないし、何時何が起こってもおかしくないんだ」

『……………』

「でも、今、布仏さんが打鉄をここに運んできてくれたら、今のこの状況を何とかできる可能性があるんだ。君は今、このアリーナで唯一の希望なんだ」

『……………』

「サポートも指示もこっちから出す。だから布仏さん。お願いだから打鉄に乗ってくれないか？」

『……………』

「……………僕を信じて下さい」

『……………分かった。打鉄に乗ってそっちに行く！』

「ありがとう！まず打鉄の傍に行って今どついう状態か教えて」

『うん。え〜っとね……………』

何とかやる気になってくれた本音に、不安にならないように指示を出して行く日華。

アリーナでの一夏、鈴、リオンと襲撃者の戦い。

モニタールームで、システムを取り戻そうと奮闘する日華。

2つの戦いは決着に向け、ラストスパートに突入する……

第15話 VS UNKNOWN ENEMY (後書き)

予想以上に長くなりそうなので2分割します。決着は次回。

原作1巻分のストーリーはあと2話で終わらせるつもりです。

感想・評価お待ちしております。

第16話 大切な人（前書き）

襲撃者、ゴーレム？戦。最終局面です。

それではどうぞ！

第16話 大切な人

……アリーナ・モニタールーム……

『き、起動できたよ〜!』

「よし!じゃあ、今から道順を言うからその通りに進んで。まずは扉から出たら右に向かって……」

控え室の通信で、本音が打鉄を装着し終えたのを聞いた日華は控え室からモニタールームへの道順を説明していく。本音が控え室から出たら、もう通信する事は出来なくなるので1回で分かるように教えていく。

「最後にその道を進んで行ったらモニタールームに着くはずですよ。覚えられましたか?」

『う、うん。大丈夫だよ〜!じゃあ今から行くね〜!』

「よろしくお願いします!」

最後をお願いした後、スピーカーから重々しいISの起動音が聞こえ次第に小さくなっていった。そして最後には何も聞こえなくなつた。

「後は布仏に託すしかないな……」

「大丈夫。きつと来てくれるはずですよ。間に合つはずですよ」

たった1つの小さな希望に不安を口する千冬に、キーボードを打ちシステム介入の準備を進める日華はその不安を一蹴すように反論した。

「なぜそこまで信じられる？1度も顔を合わせた事の無い相手の事を……………」

「彼女はこの不安な状況の中、僕を信じて乗った事のないISに乗ってここまで来てくれるんです。彼女が僕を信じてくれるのなら、僕も彼女を信じて待つてこのシステムを取り戻す。それだけです」

「……………ふっ、若造が言うじゃないか」

と、言う千冬だが先程からのコンピューターテクニクに指示の出し方に状況把握能力、そしてなによりもこの“人を信じる心”から只の16歳の少年でなく1人の男、白月日華として千冬は見ていた。

(この冷静さ、一夏とマードックの2人にも見習わせたものだな)

そう思いモニターを見ると、リオンを加え3人で襲撃者を警撃する一夏の姿が映っていた。

(動きが良くなってきて……………マードックが加わってモチベーションが上がったか……………もしくは私達を含め、篠ノ之の無事をリオンから聞いたか……………)

弟の動きの上達の理由を思いながら、筈がいる所に視線を向けると、

(……………どこに行ったあの馬鹿者があ！！！！)

居るべき人物が居るべき空間に居なくなっていたのに気付く千冬だった。

……………第2アリーナ・フィールド……………

「はあっ！」

「らあっ！」

ガキーン！！！！

一夏とリオンが襲撃者の左右から同時に手にした刃を繰り出す。しかし、襲撃者は驚く素振りも見せず腕突き出し2人の刃を受け止めた。

「鈴！今だ！」

「叩きこめえ！」

「うりゃあああああ！」

襲撃者の両手を塞いだ所に、鈴が両手に持った双天牙月を全力で降り降ろす。生身の人間が受けたら両腕が簡単に斬り落とせる威力の斬撃を放つが、

グーン！

「な？」

「はあ？」

両手で止めた一夏とリオンの刃を迫る双天牙月の軌道に乗せ、

ガツゴオオオオン！！！！

鈴の渾身の一撃を防御した。

「な、なんて防御してんのかなコイツ！」

味方の攻撃を利用した予想外の防御に戸惑う鈴。攻撃を止めた襲撃者は追撃を警戒したのか3人から再び距離を取る。

「あゝ！もう！なんだってアイツに中々攻撃が当たらないのよ！もう1回行くわよ！一夏！リオン！」

「……………」

「……………」

「一夏？リオン？」

返事のない2人の方を向くと、2人ともそれぞれの剣を手から放し、腕を押さえてうずくまっていた。

「ちょ！2人ともどうしたの！？まさか知らない間にアイツに攻撃されたの！？」

「……………」

喉から振り絞るように、小さな声で話す一夏に耳を傾ける鈴。

「うっ。」

「腕が……痺れた……」

「……はい？」

しかし、そこから聞こえたのは予想外の返答だった。

「だから！さつきアイツに利用されて鈴の攻撃を防御した時に！思いつきり鈴が攻撃したからその衝撃で腕が痺れたんだよ！」

「俺なんか、腕どころか右上半身が痺れてる………どんだけ全力で降りおろしたんだよ………」

痺れた腕を押さえながら叫ぶ一夏に、がっくりとうなだれながら何とか応えるリオン。

双天牙月は持ち手、刀身を含めて小学生の子供かそれ以上のサイズ。その重量は普通の生身の人間が振るう所か持ち上げることすら無理な代物だ。それを一切の加減無しで振り下ろした一撃を受け止めたなら、腕が衝撃で痺れて当たり前である。

「俺、こんな痺れ体験したの初めてなんだけど………ねえ、腕付いてる？まさかとは思うけど干切れたりしてないよな一夏？」

「心配すんな。ちゃんと付いてるぞ」

「お、大げさよ！何味方の攻撃でそこまでダメージ受けてんのよ！
て言うか、アンタ達あたしに対して失礼すぎるでしょ！」

地面に倒れている理由に納得のいかない鈴は2人に怒鳴り散らす。

数秒後、地面に落ちた自分の武器を拾いながら立ち上がる2人。その足取りはまだ危なっかしいものだった。

「さて、敵に予想外の攻撃をされたが、次はどう行く？」

「ねえちよつと。攻撃しちゃったのあたしなのよ。アンタの言う通りならあたしが敵になってんだけど？」

「次はそうされねえように更に注意して行こう！」

「次って何？あたしがまたアンタらに攻撃するの決定事項なの？ねえどうなのよ？」

2人の発言に突っ込む鈴だが、一夏とリオンはそれをスルーし襲撃者の対応を考えていた。

「ペース配分に注意したら、零落白夜は後2・3回は使える。その内1回でも当たればこっちの勝ちだ」

「じゃあ、俺と鳳で隙を作る。そこを叩け！」

「ああ、頼んだ！」

「行くぜ！鳳！」

「はいはい！分かったわよ！」

リオンに言われ一緒に襲撃者に突っ込む鈴。その後ろで、2人の後ろ姿を見ながら自分が攻めるタイミングを計る一夏。

「おおおおお！」

「はあああああ！」

ブンブン！ ドンドン！

襲撃者に対し振るわれるライディングと双天牙月。撃ち込まれる弾丸にファングバルカンに衝撃砲。疾風怒濤如く攻撃を放つも直撃せず掠る程度にしか当たらない。

しかし、リオンの攻撃はそれだけに留まらない。

（行け！ゲイル！ライトニング！）

リオンと鈴、2人の位置とは逆の襲撃者の背後から迫る刃鳥。

ザザン！

前方の2人の攻撃に気を取られていた襲撃者はかわせず攻撃を背後に受ける。その攻撃で動きが鈍る襲撃者。

「もう一丁！」

ドゴン！

動きが鈍った襲撃者の頭部に全力の回し蹴りを放ち、顔を地面にめり込ませたりオン。

「行けえ！一夏あ！」

「おお！」

出来た隙を逃さず零落白夜の刃を発動させ襲撃者にする一夏。

雪片式型の間合いに入った時は、襲撃者は地面から顔を離し起き上った瞬間だった。

「おおおおお！」

このチャンスを逃がさないよう、全力で左手で握った雪片式型を振るう一夏。しかし、その攻撃に合わせ襲撃者はバックステップでかわした……

「…………… かつた！」

が、振るった一夏の左手に雪片式型が無く、遅れて振るわれた右手に握られていた。

ただ攻撃するだけでは回避されると思考した一夏は、左手での攻撃を故意に意識させた。そして、武器を持っている左手の攻撃放つふりをして、左手を振るう途中で雪片式型を離して右手に持ち変えるというフェイントをしたのだった。

（かわす動作はもうした！今度こそ捉えた！）

捉えきつた確信を持って振るわれた刃は、

グウン！

「なっ！」

襲撃者は迫りくる零落白夜の刃を、反射的は動きでない滑らかな動きで上半身を反らす“マトリックスよけ”で刃を体の上に通して回避した。一夏はその攻撃の勢いで地面を滑りながら移動し距離を取ったが、内心はそれどころでは無かった。

（ありえない。タイミング・速度・相手の立ち状況。全部完璧なタイミングだったはずだ！なのに何でだ！？）

困惑する思考を頭に残しながら襲撃者を再び見るが、空中で静止してこちらに顔を向ける存在に一夏は更に困惑する。

（あいつ、攻撃は腕のビームや直接殴打するぐらいだが、その分人離れた動きしやがって！本当にあいつ人間なのかよ！？……………
…人間……………なの……………）

突如、思考に現れた1つの疑問に一夏は熟考し始めた。

（桁はずれの威力の攻撃……………変則的な回避行動……………余り攻めに来なくてこちらを観る様子……………なにより、さっきの反射的でなく明らかに見てからの冷静な回避……………）

が聞こえてきた。そして、

ドオオオオオオオオン！！！！

「の、布仏、本音~~~~、と~~~~ちゃくしました~~~~……はふううう~~~~」

モニタールームの入口に、打鉄を装着したのほほんさんが到着した。サイズ上、モニタールームには入れないが入口の前でもケーブルの接続の距離は十分にある。

「御苦労だったな布仏。よくやってくれた。では白月。システム回復を頼む」

「じゃ、じゃあ布仏さん。もう動かなくてもいいから、そのまま打鉄を装着したままでいて。起動させている状態じゃないといけないから。山田先生。ケーブル接続お願いします。僕は妨害システム突破の準備に入りますから」

「はい。分かりました」

指示され打鉄とモニタールームのコンピューターを接続させていく山田先生。そして妨害突破の準備を進める日華。キーボードを打ち込むその姿は先ほどと何も変わらなく見えるが………

(何でこの娘なのー！なんか聞き覚えのある声だと思ってたけど、なんでよりによってこの娘！？)

内心、今までのクールで冷静な姿とは180°違う心境になっていた。

白月日華。16歳にしながらオーストラリアのIS関連において最高クラスの人材。生まれつき頭が良く、12歳で大学にISの論文を提出、14歳の時にオーストラリア初の第3世代ISを開発した天才である。その影響か、リオン以外に仲の良い友人はあまり居なく、ISの研究チームも年上の人間ばかりの環境に置かれていたため……………

(落ちつけ。落ちつくんだ日華。今はあの娘が来たからって関係無い……………けど、あの娘に結構無茶な事頼んだかなあ……………嫌われた！？もしかして僕、嫌われたかなあ……………)

恋愛経験は全くと言っていいほど無く、今現在も負の螺旋思考に突入していた。その思考中でも手を休めず準備を進めているのは流石と言う所だろう。

「白月君。接続出来ました！」

「では頼むぞ白月！」

「は、はい！分かりました！」

打鉄からの接続が完了し全ての準備が整った。後は日華に全てを託

すのみとなつた。

「よし、では……」「あ、あの……ん？」

システム奪還をはじめようとすると、打鉄に乗っているのほんさんが日華に声を掛けた。

「ひ、控え室のわたしに声を掛けてくれたのって、きみなの？」

「ええ、そうですけど……」

「わたし、あの時あそこで一人で怯えてたから、声が聞こえて、わたしを呼んでくれてすっごく嬉しかった！わたしもがんばったから……きみもがんばってね！」

ニコッ！

「っ！！！」

自分に向けられた声、嫌われていない様子、頑張れという励まし、そして見た事のない輝かしい笑顔を見た瞬間、白月日華の中で雷が落ちたかのような衝撃が駆け回った！

「……………よし、行くか！」

視線を再びモニターに映し、そして、

「IS出力接続！これより、アリーナシステム奪還作業に入ります！」

カタカタカタカタカタカタ！！！！

これまでとは比べ物にならないスピードでキーを打ち込んでいき、瞬間間にコードを打ち込み、ウィンドウが変化する中システム奪還を進めていった。

「な、なんですかこの速さ！さっきとは比べ物になりませんよ！」

「……………ISを繋いだからか、それとも心境に何か変化があったか？」

と、女性教師2人が日華の更なる速さに驚いていた。何か理由があるかと思っていると、

「ほえ〜、すつ〜い！いつけ〜い！」

カタカタカタカタカタカタカタ！！！！

のほほんさんが更に励ました瞬間、速度がまた少し上がった日華の様子を見て、

（なるほど、そう言うことか）

（青春ですね〜）

即座に原因が分かり、生温かい目で日華とのほほんさんの2人を見ていた。

……アリーナ・フィールド……

「そこだあ！」

スゴオン！！！！

アリーナでの戦闘では、一夏がリオンと鈴が新しく作ってくれた隙をつき、襲撃者に攻撃をヒットさせていた。

「よし！捉えたあ！ナイスだ一夏！」

「で、でもなんでそんな脇下なんか狙ってんのよ！なんで斬りかからないのよ！」

鈴の言う通り、一夏は雪片式型の柄頭（持ち手である柄の一番下の部分）で襲撃者の脇下をめり込む程深く突いていた。何でそんな所を狙ったのかと鈴は思っているが、

（この感触……それにこいつの反応……間違いない！）

先程の疑問が解ける答を手に入れた。

ブウウン！

「おっと！」

襲撃者が腕を振るい、一夏を振り払うように腕を振り回した。一夏

はすぐさま飛び退き距離を取った。襲撃者もまた距離を取り3人の間合い外で地面に立った。

「さて一夏。もう1回隙を作って確認させてやったんだ。分かった事はあるのか？」

「そうよ。わざわざあんな攻撃して。何が知りたかったのよ？」

一夏の傍に来たりオンと鈴が問いただす。

「ああ。結論から言うがぁいつは、いや“アレ”には……………」

人が乗っていない」

「……………はぁ？」

いきなりの一夏の発言に驚く2人。しかし驚いて当たり前だ。

「何言ってるのよ一夏？あれはISよ。ISは人が乗らないと起動しないのよ」

そう、ISは人間が装着しない限り起動出来ない物。人が乗らずにISが起動する事はあり得ない。

「ってことはあれは人が乗っていない……………いわゆる無人機って奴か？」

「ああ。そつだ」

「その根拠は？」

「さつき俺が脇下に攻撃したよな。脇下つてのはみぞ打ちと同じ人体急所の1つなんだ。さつきみたいに深く突いたら呼吸困難になる程の所だ」

「でも。ISにはシールドがあるからそんなに深く入らなかったんじゃないの？」

「だとしても衝撃は完全には消せないだろ。なのにアイツは気にする素振りも無く俺に反撃してきただろ。しかもその時の感触、明らかに人の体の感触じゃなかった」

「…………でも、だからって無人機って事は……………」

「いや、それなら納得できる点もある」

一夏の考えに共感したりオンも無人機の可能性を支持する。

「あいつの回避行動、明らかに人間がそう簡単にできるような物じゃない。それに前のフェイントを織り交ぜた一夏の攻撃をかわしたのも、無人機って言うが正しかったら納得がいく」

「それにアイツ。こつちがこうして会話している時はほとんど攻めてこない。まるで俺たちを、“人間”を観察してるみたいだしな」

「……………じゃあ、あんたらの言う通り、アイツが無人機だっ

ていうならどうなのよ。さつきからこっちの攻撃は通ってないのよ」

鈴も2人の考えに折れ、無人機である事を前提に2人に聞いた。鈴の言う通りさつきから3人の攻撃はクリーンヒットせず、決定的なダメージを与える事が出来ない。このままならジリ貧になり負けるのは目に見えている。

「いや、無人機だからこそだ。それなら、なんの遠慮も無しに全力で斬る事が出来る」

「……………零落白夜か」

一夏は手に持つ雪片式型を見ながら倒す可能性を口にする。零落白夜は己のエネルギーを使い、相手のシールドを完全に無効化する最強クラスの単一効果能力。ワンオフ・アビリティしかしその分、相手を直接傷つけてしまう可能性がある。だから生身の人間相手では全力で使用できる能力では無い。そう、相手が“人間”である限りでは。

「アイツが人が乗っていない無人機なら、気にすることなく全力で斬る事が出来る」

「でもアイツ、あたしとリオンの2人がかりで作った隙でも中々攻撃が当たらないのよ。それなのにどうやって、」

「まだ、イグニッション・ブースト瞬時加速からの攻撃方法はしていない。それなら今度こそ必ず捉える事が出来るはずだ」

「……………じゃあ、残った手もそれだけだし、とつと決めましょ！」

1番早く臨戦態勢を取った鈴に言われ、続いて臨戦態勢を取る一夏

とリオン。

「じゃあ、悪いけどリオン。先にアイツの相手をしてくれ。そこで隙について俺が行く」

「おお、任せな！」

「鈴は俺が合図したら、全力の衝撃砲を俺に撃ってくれ」

「ええ、分かつ………って！何言ってるのよ！アンタMだったの？」

「違えよ！イクニッション・ブースト瞬時加速のエネルギーに回すから撃ってって意味だよ！」

「あ、そゆこと」

イクニッション・ブースト瞬時加速はスラスタからエネルギーを放出し、それを内部に取り込み圧縮して再び放出する。つまり、外部からエネルギーをも利用できると言っわけだ。しかもそのエネルギーが大きければその分速度も出せれるのだ。

「いいか？リオン、鈴？」

「おお！」

「何時でも！」

「よし、それじゃあ………』一夏あああああ！………はあ？」

襲撃者に最後の突撃をしようとする、突如聞きなれた声が大ボリ

ユームで響き渡った。3人が見渡し発生源を探すと、

「一夏！あそこだ！」

先に見つけたリオンが指さす方向を見てみると、

「何であんな所に居るんだ！箒！」

モニタールームに居るはずの篠ノ乃箒が、一夏が出てきた方とは逆の方のピットの所から大声を発していた。

……………数分前・モニタールーム……………

「よし……………もう少しだ……………」

モニタールームで妨害システムを次々に突破し、徐々にアリーナのシステムを取り戻している日華は変わらずキーを打ち込んでいる。しかし、顔は汗まみれになり打ち込んでいる指も最初の頃と比べると遅く、鈍くなってきていた。

（とんでもない集中力だな……………ここ数年でオーストラリアのIS
関連が右肩上がりなのが納得できるな）

日華を見ている千冬はここまで続いている日華の集中力にもはや尊

敬の念を抱いていた。すると、

「よしっ！全システム取り返しました！」

最後にEnterキーを押した日華がシステム回復を伝えた。

「良くやってくれた白月。あとはこっちに任せてゆっくりしてろ」

「じゃあ、御言葉に甘えて……………」

千冬の言葉を聞くと、日華は眼鏡を外して机に置き、座っている椅子に背もたれ目を瞑った。

「通信回線は……………よし、繋がった。聞こえるかオルコット！聞こえたなら応答しろ！」

『は、はい！こちらオルコットです！』

「アリーナのシステムは全て回復した。そちらの様子はどうなっている？」

『今こちらでは、6つ目の観客席の扉を開放しました。後4つあるはずですがシステム開放出来たと言う事は……………』

「ああ。扉は開くようになったはずだ。観客が流れ込む可能性があるから慎重かつ冷静に負傷者の出ないように避難誘導をするようにしろ。通信回線は回復しているから、他の3年生部隊にはお前から伝える！」

『了解しましたわ！』

プツン……

「よし、後は一夏達はどうなって……………」

一通りの指示を出し、通信を切った千冬がアリーナの状況をモニターで見ると、

『一夏ああああああ！！！』

「なっ！篠ノ之！なぜあんな所に……………っ！システム回復で扉の口ツクも開放されていたか！」

モニターから聞こえてくる幕の叫びに驚く千冬。まだアリーナの遮断シールドシステムは完全に戻っていない。つまり、あそこに居れば攻撃を為す術なく受けることになってしまう。

「白月！」

「もうやっています！でも、間に合うかどうかはギリギリです！」

一足早くシールドシステムの回復をしようとする日華だが、そう簡単に復旧出来る状況でない。間に合うかどうかは運に任せるしかなかった。

（一夏！男なら自分の大切な人間ぐらい守ってみせろ！出来なかったら承知しないぞ！）

千冬は現場に居る一夏を信じた。自分の生徒であり、自分の弟である1人の男を……………

……アリーナ・フィールド……

『男なら、男ならそれぐらいの相手！とっとと倒して見せる！』

「ちょ、何やってんのよ箒！早く逃げ……」

「箒い！何やってる！早く逃げろお！」

「っ！い、いち……」

鈴の声をかき消す大きな声を一夏が放つが、箒はその場から動こうともしない。そうしていると、

ウオオオン……ガコン！

「っっっ！」「っ」

離れた位置に居る襲撃者が箒に気づき、腕をそちらに向けた。その腕の砲口が輝きだしエネルギーを充填し始めているのが分かる。

「ヤバいわよ！早く何とか……」

「リオン！箒を……！」

「任せろお！」

ドオオオン！

一夏に言われる前に最大加速で飛び出し幕の方へと向かうりオン。

「鈴！衝撃砲を撃て！」

「え？でも……」

「速くしろお！間に合わなくなる！」

「っああもう！行くわよ！一夏！」

すぐに一夏の背後に回り、そして、

ズツドオオオオオオオン！！！！」

全力の衝撃砲を一夏の背中に放った。

「つぐうううう、おああああああああ！！！！！！！！」

背中に受ける衝撃砲の衝撃に耐えながら、それを瞬間加速イグニッション・ブーストのエネルギーへと変換していく。そしてそれと同時に、

（行くぞ！雪片式型！零落白夜！！！！）

エネルギー変換率90%突破 零落白夜起動！

雪片式型から現れた青白く輝く刃。その形状は今までの様な太く大きいものではなく、細く長い綺麗な日本刀のような繊細さが表れて

……イマコイツハナニヲシタ……

……ムボウビノホウキニコウゲキシタ……

……オレノタイセツナヒトラコロソウトシタ……

ユルサナイ……ユルサナイ……ユルサナイユルサナイユルサナイ
ユルサナイユルサナイ……

斬り壊す

斬った後、動かなくなった一夏に向け襲撃者は残された左腕で殴り
かかる……

ザン……！

ゴト……

が、一夏に向けた左腕は下半分を斬り落とされ、ビーム砲口のある上半分だけが残った。

「……………おい…お前に声が聞こえるかは分かんねえ」

一夏が今まで発した事のない冷徹な声を掛けるも、襲撃者は気にも掛けず残った砲口を向けるも、

ザン！

今度は肩が斬られ左腕全てが斬り落とされる。

「お前が何を考えてるのかも知らないが、お前は、俺の大切な人を狙った……………」

『……………』

変わらず声を発する一夏に変わらず何も発しない襲撃者だが、

……………ズウ……………

足を半歩引き一夏から離れた。今までの軽快な回避の動きで無く明らかに『怯え』からくる行動だった。

「だからこそ俺は、お前をこの世界に作られた事が後悔するほど……………」

斬り壊す！！！！！！」

零落白夜を消し、両手に握った雪片式型を振るい襲撃者の体の装甲を斬る一夏。先に零落白夜で斬っているためシールドは完全に消しているため攻撃が直接通る。

「おおおおお！」

続けざまに滅多斬りを放ち、装甲を斬り落としていく一夏。

襲撃者も応戦しようと右足で蹴りを放つが、

ザン！

雪片式型を振るった一夏に付け根から完全に斬り落とされる。

「おおおおお！」

その勢いを活かしたまま、今度は左足を斬り落とし襲撃者を文字通り、『手も足も出せない』状態にした。

「まだまだあ！」

ザアアアン！！！！

両足を斬り落とされ、地面に落ちていく襲撃者の首を切り落とし、地面に落ちた時には手足も首もない胴体部分のみとなった。

「これで……………」

地面に横たわる胴体の真ん中に刃を突き立て、

「終わりだああああ！！！！」

ズドオン！！！！

一切の手加減なく振り下ろし深々と突き刺した。

『ギギギ……………ガアアアアア……………』

ウウウウウウウン……………

機械音を撒き散らすも次第に小さくなっていく音。最後に突き刺した部分がコアの部分だったらしく、襲撃者は完全に停止し、複眼である顔の5つの眼の部分からも赤い光が消え、ただ小さく転がる鉄塊となった。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

完全に停止した事を知った一夏は雪片式型を引き抜いた。

「おお。見事にバラバラに解体したな」

リオンの声が聞こえ、一夏がそっちの方を見ると、

「凄いな一夏！いい太刀筋だったぞ！」

「……………あ……………」

空中に浮いているリオンと、その腕で抱えられた箒の姿があった。

「……………箒……………」

白式をガントレットに収納^{クローズ}し、地面に降ろされた箒に近づいて行く一夏。

「本当に凄かったぞ！これも私の……………『ギュッ』……………へ……………」

箒が近づくと一夏に声を掛けてみると、その一夏に正面から全力で抱きしめられていた。

「な、ななななな、何をする一夏！こ、こんな人目がある所で！」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、一夏から逃れようとする箒だが、逃れようとするればするほど一夏の抱きしめる力は強くなった。

「お、おい一夏、本当にもう止める！恥ずかし……………」「心配した……………」

「……………あんな危険な事して……………俺がどれだけ心配したか分かっ……………」

てんのか……………」

「……………一夏？」

状況上、すぐ横の一夏から先程の勇敢な戦闘の様子とは違つ、弱弱しく震えている声が聞こえてきた。

「リオンが助けしてくれたから良かったけど、もし間に合わなかったらどうなつてたと思う」

「……………」

「また俺に、目の前からお前が消える経験させるつもりか」

「……………」

「お願いだから……………もう……………あんな無茶しないでくれ」

「……………」

「お前が居なくなるのは……………1回だけで十分だから……………」

「すまない。でも、一夏の為に何かしたくて……………すまなかった」

箒が腕を伸ばし一夏を抱くと、一夏もさつきより強く箒を抱き寄せた。

「ま、あの2人は何とか丸く収まったか」

遠目で一夏と箒を見ているリオンは視線を2人から離すと、

「……………問題は、あっちの方だな」

3人から離れた場所に居る、一夏と箒の様子を何とも言えない目で
見ている鈴の姿があった。

こうして、クラス対抗戦に現れた襲撃者との戦闘は幕を閉じたので
あった……………

第16話 大切な人（後書き）

次回で原作1巻のストーリー終了です。

感想・評価お待ちしております。

第17話 だってアタシは……………（前書き）

前回の投稿から結構時間が経ってしまいました。

人生初の夏バテと、それによる遅めの地元への帰郷などで遅れてしまいました。

また頑張っていきますのでよろしくお願いします。

それではどうぞ！

第17話 だってアタシは……

……アリーナ・モニタールーム……

「ふう………終わったか………」

モニターに映る、一夏が襲撃者に止めを決めた映像を見て、日華は体の力を抜き椅子にもたれた。千冬と山田先生は一夏が襲撃者を倒したのを見るとモニタールームを出て、それぞれ現場で直接指示を出しに行った。

「それにしても………あれは一体なんだったんだ？」

見た事の無いIS。しかも人が乗っていない無人機の登場に研究者として疑問を抱く日華。

だが、

「ねえ、もう打鉄外していいかな？」

「へ？」

モニタールームの入り口で、今も打鉄を装着しているのはほんさんが日華に聞いて来た。

「あ、ああ、もう降りてくれても大丈夫だよ」

「良かった！もうヘトヘトだよ！」

日華程ではないが、顔に汗を滴らせ表情にも疲労の色が見えている。初めてのISの装着に、緊急事態での運用に思った以上に疲れが溜まったらしい。

(やっぱり結構無茶な事頼んだかな……………今度なにかお詫びを入れないといけないな)

と、日華が思いながらのほほんさんが打鉄を降りる様子を見ていると、

「つとお……………きゃ！」

打鉄から降りる途中、疲れのせいか足がもつれ打鉄から滑り落ちるのほほんさん。

「危ない！」

それを見た日華は椅子から勢いよく立ち上がり……………

ガシィ！

のほほんさんが地面に落下する前に受け止めた。

「だ、大丈夫ですか？」

「う、うん……………あ、ありがとね……………えっと……………」

「白月です。白月日華って言います」

何とか受け止めそのまま落ちついた様子で自己紹介をする日華だが、

(触ってる！触っちゃってるよ！知り合って間もないのに思いつきり触れちゃってるよ〜〜〜！)

内心、慣れていない状況にかなりテンぱっていた。

(落ちつけ！こう言う時は素数を数えて落ちつくんだ！…… 1 , 2 ,
3 , 4 , 5 , 6 , 7 , 8 , 9 , 10 ……)

日華よ。それは素数でなく整数だ。

その後、休憩し落ちついた2人は打鉄を元に戻すのと、今も倒れている簪を助けに控え室にまで移動した。(のほほんさんはまた打鉄を装着して)

……… 学園・保健室 ……

「全く、貴様はあんな危険な事をして……… もう少し考えて行動しろ」

「そんなに言わなくてもいいだろ、千冬姉」

バシン！！！！

「織斑先生、だ！」

「い、今ぐらいいいだろ……………それに俺、この中では1番の怪我人なんだから叩かないで……………」

「……………まあ、今ぐらいは構わんか」

一夏達は今、千冬に連れられ学園の保健室で治療を受けていた。治療と言っても、リオンと鈴はほとんど怪我は無い。一番の重傷者は甲龍の全力の衝撃砲を背中を受けた一夏である。瞬間加速のエネルギーイグニッション・ブーストに転換するためとは言え、ISの攻撃を何の工夫もなく受けたのだ。ISの絶対防御があるとは言え体にはダメージは残るものがある。

そのため一夏は現在、背中に打撲に効く薬を塗り、包帯を一緒に来た箒に巻いてもらっていた。

「さて、とりあえず織斑、鳳、マードックはご苦労だった。よく無事で侵入者を撃退してくれたな」

初めての千冬からの誉め言葉を聞き、驚愕と嬉しさが混ざった顔になった3人。しかし、その厳しい顔は次には箒に向けられていた。

「さて、篠ノ之……………お前は自分が何をしたか分かっているか？」

「……………」

「教師の眼を盗み勝手な行動。それだけならまだしも、お前は自分から命を捨てかねない行動を取った。これは生徒、教師関係なく許されない物だ。どのような処罰でも受ける覚悟はあるな？」

「……………はい」

教師としてはもちろん、1人の大人としての千冬の説教に口答えすることなく聞き続ける箒。箒自身も一夏達のためとはいえ、自分の行動がどのような物だったか自覚はしているらしい。

だが、

「ちよつと待ってくれ。あそこで箒が来てくれなけりや俺たちはアイツを倒せなかったんだ。むしろ今回の1番の健闘者は箒じゃないのか？」

保健室の椅子に座っていたリオンが横から会話に入ってきた。

「そうかもしれんが篠ノ之の行動は簡単に看過出来るものではない。仮にも待機命令を無視して……………」

「それなら戦闘に参加した俺も命令違反ですね。箒を処罰するなら俺も一緒にして下さい」

「マードック……………」

あくまで箒を庇う様子を変えないリオンに顔を曇らせる千冬。

「俺からも頼む。千冬姉」

「一夏……………」

「そもそも俺と鈴がアイツをさっさと倒せなかったのがいけないんだ。リオンも箒も俺達の為にあそこまで頑張ってくれたんだ。だから……………お願いします」

「……………」

包帯を体に巻き、今回の戦いの1番の負傷者である弟に深々と頭を下げられる千冬。しばらく黙った後、呆れたような表情をし、

「……………分かった。そこまで言うなら、今回のお前らの行動を処罰はせん。ただ、後でお前ら全員に今回の戦いを口外せんという誓約書を書いてもらうからな」

「っ！……………はい！」

「ありがとうございます！」

「良かったな皆！」

処罰無しの結果に喜びの声を挙げるが、

「ああ、だがマードック。お前には反省文を追加で書いてもらうからな」

「……………はい？」

1人は逃れる事が出来なかった。

「ちょ、ええ！？な、何ですか？さっき全員処罰は無しって……」

「確かに、今回の“戦闘”においての処罰は無しだとは言ったが、お前には他にも処罰される行動を取っただろ」

「い、いつどこですか？」

「強いて言うなら、“器物破損”だ」

「器物破損……………はっ！」

器物破損……………そのキーワードに当てはまる行動を思い出したりオンは“しまった”という表情をする。

「貴様……………アリーナのフィールドに入るのにどうして入った？」

「……………ライオンハートで、アリーナの壁をぶち抜いて行きました……………」

リオンがアリーナへ向かう時、襲撃者の影響で扉は開けられず簡単にアリーナに向かう事が出来なかった。そこでリオンはライオンハートで邪魔な壁を全て破壊して向かったのだった。

「さて、何か言いたい事はあるか？」

「……………何枚ほど書けばいいでしょうか？」

この件には全面的に自分に責任があるので、素直に罰を受ける覚悟を決めたのだった。

「心配するな。今日は色々あったからな。疲れてるお前にそこまでの枚数を書かせるつもりは無い」

「そうですか。それは良かった……………」

「4000字の原稿用紙200枚の所を1000枚にしといてやる」

「全然良くないですよ！俺に腱鞘炎になれって言ってるんですか！」

予想の斜め上を行きすぎてる処罰に全力で突っ込むリオン。

「なんだ？本来なら戦闘の件も合わせて500枚書かせるつもりだったんだ。1/5になっただけありがたく思え」

「500って、俺をどこかの出版社でデビューさせるつもりだったんですか！？」

「ぐだぐだ言うな。男なら潔く書いてみる」

「な、なら一夏達も……………」

「さつきも言ったろ。今回の“戦闘”における処罰は無しだ。だが、それ以外に処罰物の行動を取ったのはマードック。お前だけだ」

「くっ！……………」

全員を庇っての行動と発言のはずが、自分だけが処罰される状況を作ってしまったリオンは完膚なきまでに論破されてしまった。

「とにかく、もう決定事項だ。今、誓約書と一緒に持ってきてやるから待っている」

そう言い、千冬は扉を開けて外に出て行った。

その姿が見えなくなると同時に、

「頼む一夏！反省文書くの手伝ってくれ！このままじゃ寝る時間が完全に無くなる！そうなたら不眠の状態で授業受ける羽目になっちまう！」

意地もプライドも関係なく友人に頭を下げ頼み始めた。

「いや、俺一応重傷者だから。今日はこのまま大人しくして休んでるって言われてるからな……………応援することしかできない。頑張ってくれ！」

「じゃあ箒！お前はどうか？」

「一夏を傍で看てるよう頼まれたからな。私も無理だ」

「……………終わった……………明日、出席簿を食らうのが確定した……………」

明日の希望を失ったのが確定したりオンが手を頭に置き顔を伏せ、絶望感漂う姿になったのを一夏と筈は何とも言えない表情で見た。

「……………アタシ……………手伝ってもいいわよ」

「「「え?」」」

聞こえてきた声の方に3人が顔を向けると、

「だから、助けてもらったお礼も兼ねて、手伝って上げてもいいわよ」

保健室に来てから1度も声を発していなかった鈴がベットに腰かけながら、リオンの手伝いをすると言い出した。

「ほ、ホントか?今の?」

「そのかわりこれでお互いに貸し借り無しにするわよ」

「今、お前が天使に見える。ありがとうございます！」

「………大げさすぎるわよ」

オーバーな感じのお礼をしながらリオンは思っていた。

(………話をするには良い機会だな)

………カリカリカリカリカリ

………カリカリカリカリカリ

「………」

「………」

あれから数時間後、保健室に居るのは机の上の反省文にペンを走らせているリオンと鈴の2人だ。千冬は誓約書と反省文を持って来るとすぐに次の場所へと向かった。一夏と箒は誓約書を書くとき冬の前で保健室から出て行った。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

(予想以上に息が詰まる！話し掛けるきっかけが無え！)

ただ黙々とペンを走らせる音だけが響く保健室。中々言いたい事が言えない雰囲気になるリオン。

(どうする……………いつそこちから話しかけるか？でも、それで鳳の心を抉る事になったら……………)

「……………ねえ……………」

「ん？……………」

どうしようか悩んでいると、鈴の方から話し始めた。

「今日、皆無事で良かったね」

「ああ、まあ観客席の生徒や来賓客はセシリア達の誘導のおかげ怪我人は無かったしな」

「そうよね。これも皆……………一夏の御手柄よね」

「まあ、直接アイツに止めを刺したのは一夏だからな。けど、俺達も頑張ったじゃねえか」

「アタシなんか、あんたらの足引っ張っただけみたいなもの……………」

…敵に利用されてあんたら攻撃しちゃうくらいだし……………代表候補が聞いて呆れるわね……………」

「いや、あれは仕方なかったし……………」

思った以上に話しかけてくる鈴に少し戸惑うリオン。一夏と箒の抱き合つのを見たから何か影響が出ていると思っていたからだ。しかし発する鈴の声はいつもの明るそうな雰囲気は無く、簡単に掻き消せそうな物だった。

「特に一夏、箒が出てきてから凄かったね……………アタシ達がい
た時より、凄いやる気で……………必死で……………」

「……………」

「あんなに必死だと、箒の事が好きなのバレバレじゃない……………
ホント、アイツ分かりやすいんだから……………バカね……………」

「……………」

「でも……………一番バカなのは……………」

箒みたいに大事に思われてないのが分かってるのに……………一夏の事

が好きって思ってる……………アタシだよね」

リオンが見ると、鈴は両目から涙を流して悲しげな顔をしていた。

「何か別な事してたら忘れられるかなって思ったからあなたの手伝いしてるけど……………忘れようと思えば思っただけ……………忘れられなくて、思いだしちゃう……………」

「……………」

「こんな思いするなら……………なんで一夏の事好きになっちゃったのかな……………」

「……………」

「あなたに話しても何も変わらないのに……………ホント……………アタシ……………バカ……………ね……………」

ポタポタと涙を落としながら話す鈴に黙っていたリオンは、

「ああ、ほんと馬鹿だなお前」

「……………」

ストレートに鈴をぶった切った。

「ア、アンタ…………… そんなにはつきり言わなくても……………」

「いや、俺から言えばお前も箒も似たようなもんだ。アジア方面の女はどれだけ恋愛で悩みまくってんだよ？いいか？」

グダグダと長い弱音を聞いていたからか、リオンは一気に自分が思った事を言い始めた。

「確かに、一夏は箒の事が好きだな。俺でもあんなに分かりやすい反応見れば分かる…………… けどな、それがどうしたってんだよ？」

「え？」

「そうだからって、簡単に一夏を…………… 自分の大切だと思ってる人を諦め切れるのか？」

「それは……………」

「そのまま簡単に諦めて引き下がるのは自由だ…………… けど、俺だったら何もせず簡単に諦めるより、届かなくても精一杯がむしゃらに頑張る方が好きだな」

「…………… 精一杯…………… がむしゃらに……………」

(よし、あと1押し)

「ま、今みたいにひよるひよるに弱ってポロポロ涙流して泣いてる奴には無理かもしれないけどな」

「なっ！な、何勝手に言ってるのよー！」

「だってそうだろ。さっきだって、『アタシ、何で一夏の事好きになっちゃんたんだろ』とか言ってたくせに……………」

「にゃああああ！言うなああああああ……！……！」

見せたくなかった自分の弱気な部分を真似され勢いよく飛び出しリオンの口を両手で防ぐ鈴。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

「……………少しはいつもの元気そうな感じになったな」

「あ……………」

「で、どうするんだ？諦めるのか？それとも……………がむしゃらに行くのか？」

「そんなの……………決まってるでしょー！」

……同時刻・IS学園・地下施設……

IS学園の地下に設けられた特別な空間。ここにはレベル4の権限にしか入れない重要施設であった。今ここでは一夏によって完全に破壊された例の無人機ISが運び込まれ精密な検査をされていた。

「まさか、本当に無人機だなんて……今でも信じられませんね」

「ISは、発表されてからまだ10年程しか経ってないのですから。どこで誰が開発してもおかしくはないですよ」

検査を行っていたのは山田先生に千冬。そして直接現場にいたという事もあり、日華も特別に検査に立ち会っていた。その時に、モニターの1つに無人機のコアの情報が出てきた。

「このISのコアは……やっぱり、全467機あるISのどのコアでもないものです」

「え？それってつまり……」

「完全に新しく作られた機体にコア、と言う事だな」

「ええ。そうなります。織斑先生」

そこに出された結果は、現在世界中に存在するIS 4 6 7機のどのコアにも属さない、全く新しいコアが作られたという物だった。

「全く新しいコア……やはりな」

「織斑先生？何か心当たりがあるんですか？」

「いや、無い……今の所はな」

山田先生の疑問に軽く返す千冬だが、日華は1人考えていた。

（新しいISのコアを1から作るなんて……ISのコアは完全なブラックボックスだ。どの企業も研究者も新しく作れるなんて不可能………出来るとすれば“あの人物”だけだ）

頭に浮かびあがる1人の人物の事を考えるが、何の確証もないため深く考えず目の前のモニターに目を移す。そこには違う部屋の台に置かれた無人機だった残骸が横たわっていた。

「一体……誰が送り込んだんだ………」

その問いに、応えられる者は居なかった……

……翌朝・食堂……

翌日のIS学園は、昨日の事件の影響が少しあるものの、普段と変わらない様子であった。昨日の事件は『試作段階のISの暴走事故』という事になっており、クラス対抗戦は中止となり全1回戦の分だけの試合が行われるだけとなった、という事が全生徒に通達されたのだった。

そして現在、食堂では……

「ほらほら一夏！酢豚作ってきたわよ！食べてみてよ！」

「あ、朝から酢豚かよ……」

片手に酢豚の乗った皿。もう片手に酢豚が乗ったレンゲを一夏に向ける鈴と、困惑した表情の一夏の姿があった。

「いいからほら！食べなさいって！約束してたでしょ！」

「はいはい。分かったってのレンゲ貸してく……」「ハイ、アーン！………れ………って鈴？何してる？」

一夏の前にレンゲを差し出し、食べさせようとする鈴。

「いや、そんな事しなくても自分で食べ……」「アーン！………アーン………」

っていた。

なぜこうなっているかと言うと、

昨日の鈴の様子をリオンが箒に伝える

箒、負けないと意気込む

だから、今日1日は一夏と鈴はできるだけ一緒に居させてやれ。昨日自分は抱きつかれたんだから、とリオン

1日なら構わない、と箒

現在の状況

と、いうことである。

(ま、とにかく、また賑やかな毎日になりそうだな)

この先の楽しい学園生活を思い浮かべるリオンだった。

「お昼はエビチリ！夜は麻婆豆腐定食だからね！」

「1日中、中華かよ！」

「いいでしょ別に！2つともアンタの好きな物なんだから！」

「まあ、そうだけど………全く、そんな事よく覚えてるなお前………」

…
」

「当たり前でしょ！だってアタシは……」

「夏の幼なじみなんだから！」

第17話 だってアタシは……………（後書き）

と、WHITE BLADE & LION SOUL。原作1巻ストーリーの第1章、終わる事が出来ました。

第1話を投稿してから約4カ月。遅いペースだと思いますが何とかここまで来れました。これも多くの読者様達のお陰だと思っています。こんな素人の作品をここまで応援してもらいありがとうございます。

さて、これからの流れですが、原作2巻のストーリーの第2章を始める前に、番外編として一夏が家に帰って弾と過ごす話をリオンも加えたオリジナルストーリーと、その間のIS学園で女子達と日華がどう過ごしていたかの計2話を掲載する予定です。なので第2章そのものは9月末か10月になると思われます。

これからも不定期な更新になると思いますが、頑張って行きますのでよろしく願います。

それでは！

第18話 初めてののお泊り（前書き）

前話からまた結構な時間が掛かりましたが、何とか投稿出来ました。

この話でのリオンは制服ではなく私服です。イメージとしては、無地の白Tシャツの上に黒の上着を羽織り青のジーンズを装着しています。

それではどうぞ！

第18話 初めての泊り

日本の春の花、桜が散り、若葉が現れる時期……そんな日本の四季の移り変わりを感じながら、男にしてISを操縦できる男の1人、リオン・マードックは今……

じゅじゅ……バリバリバリ……

……とある一軒家の縁側に座りながら緑茶を啜り、海苔煎餅を頬張っていた。

「……日本の緑茶って、飲むと何か落ちつくよな」

「お前、もう完全に日本に慣れたな」

「半分日本人の血が流れてるからな、適応しやすいんだろ」

「普段からは想像できない間延びな声になってるな。どんだけゆるんでるんだよ？」

「別にいいだろ、今日から確か……ゴールデンウィークってやつなんだろ？」

「まあ、そうだけど……………」

5月初週、日本人ならだれもが待ち焦がれる最大の連休、ゴールデンウィーク。今年は火・水・木曜日がそうなっており、月・金曜日を休みを取って大型連休にする人もいれば、一夏やリオン達学生のように平日は平日らしく過ごす人もいる。

そして今日は連休初日の火曜日。珍しい大型の休みと言う事もあり

……………

「いやあ、それにこの一夏の家の雰囲気もまた、落ちつける要因なんだろうな」

「ま、誉め言葉として受け取っとくぜ」

一夏は実家に帰っており、リオンはそれに付いて来たのだった。

「それにしても、先週に外出届出してる時に現れて、家に帰るって言ったら『遊びに行ってもいいか?』って言われた時はちょっと驚いたな」

「いいじゃん。俺、IS学園以外では日本のどこにも行った事無いんだから」

「俺の家は観光地じゃねえよ!」

縁側に座り、緑茶を啜りながら漫才のような会話をする2人。この

ままこの時間が続けばいいなとリオンは思っていたが……

「このお茶飲んだら、帰ってくる前に言ってた通り少し働いてもらうからな」

「ええ、一応だが客だぞ。客に働けせるって……」

「昔からある日本にあることわざに、『こういものが有る……』働かざる者食うべからず！』ってな」

「意味は？」

「何もしない奴に、食わせる飯は無くてことだ」

「……分かったよ」

観念し、一気に緑茶を飲みほしたりオンは一夏と一緒に立ち上がった。

……数十分後……

「なあ一夏？雑巾どこだ？」

「階段下の物置きだ。モップ使わないなら貸してくれ」

「あいよ〜」

仕事と言っても、寮生活のせいで長い間帰ってきていなかった実家の掃除を手伝う物だった。

頼んだ一夏もリオンの掃除スキルがどのようなものか分からず不安だったが、いざ見てみれば不安要素が全く見当たらない腕だったので安心していった。

(向こうじゃ、ここの何倍の大きさのある家を、弟妹の世話しながら家事手伝いしてたからなあ……………こんな落ち着いてる掃除は初めてだな……………)

海の向こうに居る大家族の事を思いながら掃除を手伝っていると…

…………

「じゃあ次はこの部屋だな」

2階にある一室のドアノブに手を伸ばす……………

「そこを開けてはいけない！！！！！！」

「っ！？」

が、一夏のこの世の終わりがそこにあるかのように扉を開けるのを止めた。

「いいか！落ちついてそこからゆっくり！後ずさるようにして距離を取れ！決して走ったり、背中を向けるようにして逃げるんじゃないぞ！」

「……………それは野生の獣に遭遇した時の対応じゃないのか？」

いきなりの一夏の変貌に驚くりオン。しかしそこまでされるとここに何があるのか見たくなくなった。

「いいじゃねえか少し位。なにも減るもんじゃないんだし」

「いいから言う通りにしろ！命が欲しいなら！」

「……………一体ここは何なんだ？」

一向に埒が明かないので、直球にこの部屋が何なのか聞くりオン。そして返ってきた答は……………

「千冬姉の自室」

「……………」

決して開けてはいけないパンドラの箱の名称だった。

「……………ごめん……………俺が悪かった……………」

「……………いいんだ……………分かってくれば……………」

一夏の懸命の説得の理由を知ったりオン。

実家に居るのに生きた心地が消えた一夏。

2人の少年が精神的に少し大人になった時だった。

……………同時刻・IS学園・職員室……………

ピキィ！

「お、織斑先生！？湯呑みに亀裂が走ってますよ！」

「ああ、済まない。何でも無いぞ山田君。何故かうちのクラスの男子2人が頭を過つてな」

「そんな理由で握力だけで亀裂を！」

……………IS学園は今日も平和である……………

九死に一生の瞬間を経験しながらも掃除を終え、お昼の温かな日差しを浴びながらまたお茶を一服する2人。

「それにしても、リオンて掃除上手なんだな。かなり助かったぜ」

「向こうでも家事手伝いはしてたからな。料理以外なら一通りは出来るぞ」

花の15歳の男子がする会話でない。お前らは『主夫』かという突っ込みがどこからか聞こえてきそうだ。

そのまま2人してのんびりしていると、掃除を手伝っていた時に思った事を聞くリオン。

「なあー夏？」

「なんだ？」

「せつかくの連休だったのに、なんでお前の家族誰も居ないんだ？」

「なんでって、千冬姉はIS学園で仕事してるから無理だろ」

「いやそうじゃなくて、

両親はどうしたんだよ？只でさえお前家に帰ってくるのも難しくなってるのに。会えるのこんな休みの時ぐらいなのによ？」

「……………」

「一夏？どした？」

「あ、いや……………家の親……………2人とも外国働きでさ。日本に帰ってくるのも年に2、3回あるかないか位忙しくてな。滅多に会えないんだよ」

「あ……………悪いな。聞かなくても良かったのに……………」

「気にすんな。もう慣れてるし……………それより、そろそろ昼飯の時間だな」

「そっか……………ってどうすんだ？今から自炊するのか？」

「いや、行きつけの所があるからそこに行くぞ」

「行きつけ？」

「いいから行くこうぜ。意識したら腹減ってきたぜ」

そう言い立ち上がり家から出ていく一夏に付いて行くリオン。

(なんか両親の話した時の一夏………かなり悲しそうだったな)

………家を出て数分後………

「なあ、一夏」

「なんだ？」

「ここが行きつけの所か？」

「そつだぞ」

リオンの目の前に現れたのは、古めな家の入り口に漢字が書かれた布を掛けている光景だった。

「え〜つと………「ごはんたくいとう」………か？」

「違う違う。『五反田食堂』^{「たんだしよくどう」}だ。ま、この読み方は日本人でも難しいから気に済んな」

「お、おお……………」

改めて日本語の深さを確認し、一夏に付いて中に入ると……………

「……………こんな所、オーストラリアじゃまず無いな」

店に入りリオンの目に入ってきたのは、年代を感じる木の机に椅子にカウンター。汚れが染み込んで黒ずんだ壁。そして油っぽさが凄いキッチンだった。

「ま、歴史ある個人経営の店だからな。でもこの古臭さが良いんだ……………」

「誰が古臭いだ！！！」

ブーン！！！！

「つとおおー！！」

突如響いた怒声に、風を切るような音を立てて飛んだ来たお玉が一夏目掛けて襲ってきた。一夏は額に命中する寸前、真剣白刃取りの要領で止めていた。

「って……おお！一夏じゃねえか！久しぶりだな！」

「相変わらずお元気ですね、^{げん}厳さん」

「当たり前えよ！」

奥のキッチンから現れたのは、長袖の調理服を肩までまくり、そこからむき出しの筋骨隆々の腕。健康的に焼かれた浅黒い肌が特徴的な老年の男性だった。

(……こう言う人が、『大黒柱』って人なのかな？)

「って……何だ？今日は野郎連れか？」

「はい。IS学園で知り合った友達のリオンです」

「あ、初めまして。リオン・マードックです」

一夏に紹介され、頭を下げ丁寧に自己紹介するリオン。

「おお、礼儀正しい奴じゃねえか。すぐ飯作ってやつから席座ってな」

「は、はい」

と、2人して席に座ると、自宅につながっている階段から、

「じーちゃん。何か調理してる音が聞こえてんだけど、客でも来た……って一夏じゃねえか！」

赤みのある茶髪を長髪にした男性が現れ一夏の存在に気付いた。

「なんだよ、帰ってきてたのかよ！帰ってくるなら連絡ぐらいしろよ！」

「いや、ちょっと驚かそうと思ってな。変わりなく元気そうだな」

「なあ一夏。この人誰だ？」

盛り上がってる2人の蚊帳の外に居るリオンが一夏に話しかけた。

「ああ、こいつは五反田^{ごたんだ}弾^{だん}。ここの五反田食堂の長男で俺の友達だ」

「うおお！金髪外人！一夏お前何時の間に交流広めてんだよ！」

この時初めてリオンの存在に気付いた弾が驚きの声を上げた。

「え、え〜つと……………H、HELLO?」

「今俺、日本語で会話したよな。なのに何で一々英語で話しかける?」

「え、いや〜何か流れるに?」

「ふつ、何か面白い人だな」

「お！高評価!?!」

「いや、馬鹿にされてもおかしくないぞ」

その後、蔵さんの作ってくれた食事を3人で頂いた後、弾の自室に移動しTVゲームで遊び始めた。

「それにしても、女だらけの女性の園にたった2人の男か………何そのハーレム？招待券ないのかよ？」

「無えよそんなの」

「動物園のパンダの気分を味わいたいなら止めはしないけどな」

1対1のIS対戦ゲームを3人で交代しながらプレイし、IS学園の事を聞く弾に答えていく2人。

「リオンが居てくれるだけで、女だらけの環境はまだましに感じるな。それに、この間鈴が入ってきたから話し相手も増えたしな」

「ああ、鈴ねえ……………」

弾は鈴の気持ちを知っているの、その鈴の行動力に驚いていると、
ドオン！

勢いよく部屋の扉が開けられ、そこに弾と同じ髪色のラフな格好をした女の子が立っていた。

「お兄い、洗濯物乾いたからたたむの手伝って。後、醤油と味噌が無くなったから買いに……………って！い、一夏さん！？」

扉を開けしばらく、一夏の存在に気付いたのか、慌てふためく様子になった。

「おお蘭らん！久しぶりだな！」

「……………つき、来てたんですね……………ぜ、全寮制の学校に言ってるって聞いたんですけど……………」

慌てて視界上から消え、自分の身格好を整えてからまた姿を現した様子を見てリオンはすぐさま理解した。

(この子も一夏にホの字か……………)

「折角のGWだから、家の様子の見ついでに帰ってきてるんだ」

「そ、そうでしたか……………」

「っーか蘭。ノックぐらいしろよ。恥知らずの女と思われ……………」

ギーン！！！！！！

「っー」

“蘭の鋭い眼光炸裂”

“弾は怯えてしまった”

(なんで教えなかったのよ！)

(俺だつてついさつき知つたばつかなんだよ！)

(とりあえず、後でO H A N A S I N E！)

(……………うす……………)

兄妹だから為せる技か一瞬のアイコンタクトを済ませ自分の未来を
絶望する弾。その姿を見て、

(どこの国でも、やっぱ強いのは女って事か)

自然と悟るリオンだった。

「買い物か……………俺も自宅用品色々買いたいから俺が行つてもいい
か？」

「え！？で。でも一夏さんはお客さんですし、そんなのこのバカ兄
に任せれば……………」

「いいじゃねえか。一夏と一緒に行って来いよ。2人つきりで！」

「ちょ、お兄い、何言つて……………」

「なんだ？俺なんかとはやっぱ嫌な……………」

「すぐに準備してきます！待つてて下さいー！」

ドドドー、と一目散に駆けて行き居なくなった蘭に苦笑いを浮かべるリオンと弾を余所にクエスチョンマークを頭に浮かべる一夏だった。

……一夏が蘭と出かけ数分後……

「あの様子、蘭ちゃん一夏に惚れてるな？」

「ああ、俺が初めてここに連れてきた時に一目ぼれしたみたいだ」

一夏が居なくなった場で蘭には絶対に聞かせられない会話をする2人。聞かれたら確実にあの世行きの特急列車に乗せられるだろう。

「けど俺はあんな年の近い義弟なんて欲しくないけどな」

「なら心配するな。一夏にもちゃんと相手は居るからな」

「えーマジで！一夏に！あの一夏にそんな相手が！」

リオンの発言に驚きを隠せない弾。予想以上の取りみだし方にリオンは戸惑った。

「あのおつて……俺が見る限り一途で純情な感じなんだが」

「信じられねえ……あの立てた対価に必ずへし折る『フラグの錬金術師』の異名を持つてた一夏が……」

「なんだ？その奪われた体と弟を探す旅に出る小さい主人公のマンガもどきの異名は？」

「で？誰だ？相手は誰だ？」

「プライベートに関わるから詳しくは言えないが、これだけは教えるぜ」

「何だ？」

「一夏とその相手……現時点で相思相愛の関係だな。2人とも素直になりきれないからまだ付き合っているが」

「まじでかあああああ！！！」

この弾の絶叫はご近所にまで聞こえ、後に母親と巖さんに叱られるのであった。

「そっぴや、俺も聞きたい事があるんだけど」

「なんだリオン？」

「一夏の昔からの友達って事は、一夏の両親の事何か知ってるか？」

「っ！……………」

「ここに来る前、一夏に聞いたたら外国で働いてるって聞いたから、
どんな人が知りたくて。何か知ってるか？」

「……………お前にはそう言ったのか。一夏……………」

「弾？」

「……………遅かれ早かれ知ることだし、一夏に聞いた以上、お前
は本当の事を知るべきだしな……………」

「ど、どつという意味だよ？」

「……………実はな、一夏の両親は……………」

「じゃ、じちそつちままでした」

「おいしかったです」

「おお！また来るの待ってるぜ！」

陽も沈み、街が暗闇に包まれていく中、一夏とリオンは五反田食堂の前に立って敵、弾、蘭に見送られていた。その後、買い物から帰ってきた一夏と蘭を交えて会話とゲームを続け、そのまま夕食の時間になったためまたごちそうになった。ちなみに一夏の買った自宅用品は帰路の途中で家に寄り置いてきた。

「一夏。次帰ってくる時は連絡しろよ」

「一夏さん。リオンさん。また来てくださいね」

「ああ、またな弾。蘭。」

「また来るの楽しみにしています」

そう言い2人揃って一夏の家へと帰って行った。

「……………皆良い人だったな」

「ああ、そうだろ。気にいってくれたか」

「……………まあな」

五反田食堂から離れ、2人以外は誰も居ない道を歩く2人。一夏は普段通りだが、リオンは食堂を出てからは少し落ちついた様子だった。

「買い物に行つてた時に蘭と話したんだけど、アイツ来年IS学園受験するみたいだぜ」

「そうか……………」

「ってどうした？食堂出てから何か元気ないぞ？」

「ちょっとな……………」

一夏の少し後ろを元気無く歩いてるリオンを心配するも何とも無いように答えるリオン。なら、と再び歩き始める一夏の後ろ姿を見たリオンは、意を決した面持ちで一夏に言葉を発した。

「一夏！」

「どうした？そんな大声出し……………」
「済まなかった！」……………は？」

声の方を向くとリオンが自分に向け謝罪の言葉と頭を下げる光景を見た一夏は戸惑った。

「お前……………俺に何か悪い事したっけ？」

「俺お前に……………両親の事聞いただろ」

「っ！……………な、何も悪い事じゃないだろ。居なかったから疑問に思つて仕方な……………」
「弾に本当の事聞いた！」……………そうか……………」

……………」

リオンが知った本当の一夏の過去。それはリオンと同じ両親が居ない状況とは似ているが、一夏の過去は『愛』を残してくれたリオン

とは違い、愛も希望も無い壮絶な物だった。

「何も知らなかったとは言え、お前に聞いちゃいけない事聞いちゃった………本当に済まなかった!」

再び頭を深く下げるリオンに、一夏はここまで自分の事を思ってくれる友達を持って良かったと思った。

「……………頭上げてくれリオン」

「でもよ……………」

「遅かれ早かれ、本当の事は何時か分かるって思ってた。つーか最初に本当の事話さなかった俺の方が悪い。それに、こんなに頭下げても俺の事思ってくれた奴攻める訳にはいかないだろ」

「……………良いのか?」

「良いも悪いも、悪い奴なんでもどこにも居ないだろ」

「……………そっか」

一夏の言葉に安心し、頭を上げ明るい表情に戻るリオン。

「ほら帰ろうぜ。早く風呂入りたいしな」

「そっだな」

再び歩き始めた一夏の隣を並んで歩くりオン。

「そついやリオン。俺が居ない間、弾と何してたんだ？」

「何って、IS学園の事とか、そこでお前がどうしてるかって事かな？」

「具体的には？」

「う〜〜ん……………あ！箒の事は言っといた」

「え！？」

「箒の事が大好きで、他の女の子の事なんか眼中に無いって。あ、心配すんな、箒の名前は出してな……………」

ゴオウウウウウ……………

「っ！?!?!?!?!」

突如、今まで感じた事のない悪寒を感じたりオンは、恐る恐るその発生源であろう隣の友人を見ると、

「……………うおいい……………」

「あ、あの、い、一夏……………さん？」

そこには阿修羅をも凌駕してしまいそんな雰囲気を纏った一夏が降臨していた。

「俺……………今まで筈の事は極力、他人には知られないように生活してたんだけどなあ……………」

「へ？そ、そだったの？」

リオンはこの瞬間、自分がどれだけ危険な地雷原に突入したのかと理解した。

「とりあえずリオン……………」

「は、はい……………」

「ゆっくりと……………」

O H A N A S I、しようか！

「全力退避！」

「逃がすかおらあああああ！……！」

結局、友人宅への外泊日1日目は壮絶なリアル鬼ごっこで幕を閉じたのだった。

第18話 初めてののお泊り（後書き）

今回遊び心で随所に色々なネタを入れました。気にいってもらえれば光栄です。

今回はIS学園のガールズサイドと残った唯一の男のお話です。

気長に待っていて下さい。

感想・評価お待ちしております。

第19話 GIRL'S HOLIDAYS(前書き)

連休中の彼女達のお話。

今後の複線をいくつか張りました。

それではどうぞ！

第19話 GIRL'S HOLIDAYS

..... GW初日・5月3日・朝.....

温かな陽光が降り注ぐ中、開け放たれた扉から入ってくる涼しげな風を受けながら剣道場で竹刀を振るう1人の姿があった。

「..... 498..... 499..... 500!」

振るった竹刀を壁に傾けて置き、首にかけていたタオルで汗を拭く。長い黒髪をポニーテールにしたその人物は、篠ノ之箒であるのと言うまでもない。日本でも有数の連休にも関わらず竹刀を振るうのは彼女しか居ないだろう。現に彼女以外に剣道場には誰の影もない。

「ふう.....」

一通り汗を拭き終わると、竹刀の傍に置いていたペットボトルに口を付け水分を取る箒。運動をし、汗っけが残る彼女の姿はかなりの絵になっている。実際に一夏が見れば惚れ直すのは明らかだ。

「朝のこの空気の中、竹刀の素振りをするのはやはり最高だな.....
...それにしても一夏の奴め、家に帰るのなら早めに言っべきだろう.....」

剣道場の床に座り、ここには居ない同居人に愚痴を言う箒。なぜこ
うも箒が怒っているかというと、一夏が箒に家に帰ると言ったのは
前日の夜。つまり昨日の夜に『俺、明日から3日間ここには居ない
から』と言われたようなものなのだ。この連休中、一夏とゆっくり

過ごそうとしていた筈にとっては正に、天国から地獄へと叩き落とされたような物である。

(……………ま、こうして一人で居るのはある意味好都合だな)

そう思い筈はIS学園に入ってから1カ月の濃密な出来事を思い出す。

一夏との再会。一夏、リオン、セシリア、鈴の4つの専用機の力。その専用機同士の凄まじい試合。そして、クラス対抗戦の襲撃者と命を懸けた戦闘。

そして、その中で何も出来なかった自分の非力さを……………

(……………たとえ、一夏達のように専用機が無くとも、私は私らしく強くなるんだ！もう……………“あの時”のような事を繰り返さない為にも！そして、一夏の隣で堂々と並んで過ごすためにも！)

新たな決心を決め、立ち上がると再び竹刀を取り素振りを再開する筈。結局この日、筈は1日中竹刀を素振りして過ごした。

……………5月3日・昼過ぎ・食堂……………

学園に居る生徒達がお昼ご飯を食べようと賑やかになる時間。あるテーブルに2人の生徒が居た。

「あら？どつどつでしたのですか？いきなり机に顔を伏しまして？」

1人は金色の髪をロールにしている、イギリス代表候補生のセシリア。そしてもう1人は……

「……………」

片手にスプーンを握りながら、テーブルに顔を伏せている、中国の代表候補生の鈴。そしてその鈴の傍らには……

ボコ……………ボコボコボコ……………ボコオ……………

不吉な音を立てながら気泡を出し、赤を通り越し、黒くなりかかっている液体が入った皿があった。

なぜこのような状況になったかと言つと、

朝から食堂の厨房を使い、リオンへの手料理をセシリアが調理。

完成すると、そこに鈴がやってきてリオンが一夏の家に行ってるから今は居ないと教える。

折角作ったのに残念だ、と落ち込むセシリア。

もったいないし、お腹も空いてるから食べさせてと鈴。

盛り付けて頂きます。

口にパクリ。

机にバタリ。

と、言う事である。

「……………つ、はぁ！」

顔を伏せていた鈴が意識を取り返したように起き上がった。その顔は、まるで三途の川を渡りかけたような必死さが表れていた。

「ア、アタシ……………一体何を？」

「どうかしましたか鈴さん？私の手作り料理を一口食した途端に倒

れまして……………」

「そ、そうよ！アンタ！何て物食わせたのよ！」

「何って、ビーフシチューですが？」

「料理名聞いてんじゃねえよ！」

今まで感じた事の無い憤りをぶつける鈴だが、何が問題か分からないセシリアは首を傾けていた。

「こんな辛すぎるビーフシチュー初めて食べたわ！っーかコレ、ビーフシチューなの！？『辛すぎるナニか』にしか思えないわよ！」

「し、失礼ですわね！私のレシピの『見た通り』に作った料理にケチをつけますの！？」

「……………『見た通り』って……………アンタまさか、レシピに映ってた絵とか写真みたいに作っただけ？」

「そんな事ありませんわ！ちゃんとそこに書いてあった材料を使用しましたわ。ついでに、隠し味に少々色々と入れましたが」

「……………聞きたくないけど聞くわ。その隠し味、何を入れたの？」

「赤みがと辛み足りなかったので、タバスコを“3瓶”程入れましたわ」

「それが原因かあああああ！！！！アンタ味見してないからそんな事言えんのよおおお！！！！」

自分の舌を襲った辛さの正体を知り、更なる怒りを爆発させる鈴。しかし自分の初めての手料理をそこまで非難され黙っているセシリアでは無い。

「先程から失礼ですよ鈴さん！そこまで言われる筋合いありませんわ！」

「だったら食ってみなさい！そしたらアタシの怒りも分かるわよ！」

「分かりましたわ！私の誠心誠意を込めた料理！自信があって食べませんでした。そこまでおっしゃるなら食べますわ！」

鈴に言いたい放題言われ、鈴が使っていたスプーンを使いシチューを掬い……………

……………しばらくお待ちください……………

「……………」

「ね？アタシが言った事、分かったでしょ」

「……………（コクコク）」

口を押さえてうずくまるセシリアに鈴が話すが、舌が辛さで機能せず頷きで対応するセシリア。

「はい。水。早く辛さ取りなさい」

「ゴクゴクゴクゴク……！」

鈴から渡された水の入ったコップを受け取り、水を勢いよく飲みこんでいくセシリア。

「つぷはぁ！……………申し訳ありませんでした。このような酷い物を食べさせてしまって」

「いや、何も知らずに食べさせてって言ったアタシも悪いから良いわよ」

「でも、リオンさんに作ったつもりでしたが、鈴さんに犠牲になってもらったお陰で大事にならなくて良かったですわ」

「おいこら。アタシはリオンの為ならどーなってもいいってか？今度強引にアンタの手料理食わせてもいいのよ？」

「それだけは勘弁して下さい！」

自分が今一番されたくない脅迫をされ深く頭を下げるセシリア。

「しかしどうしましょ。このままでは私の料理を頂いてもらう事ができませんわ」

「あんだ。自分の腕自覚してんのにまだ料理する気？下手すりゃりオン死ぬわよ！？」

「自分の料理の酷さは先程分かりましたわ！ですが、その、殿方は料理が出来る方の方が好感を持てると言いますし……………」

「……………」

目の前で自分の料理に悩むセシリアに、鈴は料理を猛特訓していた過去の自分の姿が重なって見えた。

「仕方無いわね。この連休中、料理の事教えてあげるわ」

「ほ、ホントですよ！？」

「このまま同級生が『死因 料理（劇物）』で亡くなるの嫌だしね。アタシもこの連休暇だし。イギリスの料理の練習させてもらうわ」

「あら鈴さん。ようやく油っこい自国の料理より、気品あるイギリスの価値を理解して……………」

「気が変わったから帰るわ。アンタはそのまま劇物製造してなさい」

「嘘です。冗談です。ジョークです。どうかご鞭撻を！」

その場を去ろうとする鈴の服の裾を握り、涙目になりながら引き止めていた。

…………… 5月3日・夜・整備室……………

「……………ライオンハートの装甲の厚さはやっぱりここまでが限界か……………」

整備室のエリアの1つに、白衣を纏った日華がライオンハートを展開した状態で自前のipadで画面をスクロールしながらデータを見ていた。

「ま、仕方ないか。これ以上厚く重くしたら自前のスピードが相殺されるし、『アレ』を展開するのもやりにくくなるしね」

と、自分の考えの整えていると、

pipipi! pipipi! pipipi!

白衣のポケットにあるiphoneからコール音が鳴り響いた。それを取り出し画面に映る話し先を確認すると通話ボタンを押した。通話相手はオーストラリアに居る上の立場の人間だった。

「もしもし。僕です。……………うん。そっちはもう秋になりつつある
って所ですか？こっちはまた夏を経験することになりそうです。…
……………え？『新型』の方はどうなってるって？まあ、確かに基本構造
とスタイルとかはもうほとんど出来てますけど……………え？
操縦者はどうかって？ほとんど出来るとは言え、重要な所はまだ
出来てませんし、新型はそうとう癖が強い機体です。よほど、『ラ
ピッド・スイッチ』が得意、いえ、呼吸のように出来るパイロット
でない限り上手く扱えない機体です。……………え？適合者がこち
らにはそんなに居ない、って、それはこっちの問題ではありません
よ。僕は機体を。そちらは操縦者を。そうしないと成り立ちません
よ、ISの世界では。それでも居ないっていうのなら、こちらから
ここの生徒からスカウトしましょうか？……………はい。分か
りました。それでは」

通話が終わり、iphoneをしまつとライオンハートに視線を向
ける。

「ISはこのまま、戦いの中だけでしか使えないのかな……………も
っと違う何か……………」

ISに対する自分の本当の思いを胸に秘めながら整備室を出る日華。

……………その帰り道……………

「砂糖と塩、醤油とソース、マンガみたいない間違えすんじゃないわ
よー」

「仕方ありませんの！見た目が同じなのですから！」

「そういうのは容器の違いを見るのよ！ほら！計量測量！後30回！」

ある1室（家庭科室）が賑やかな音を響かせているのが聞こえたのだった。

……5月4日・昼・食堂……

「ほ~~~~~」

「ねえ、本音……」

「ほ~~~~~」

「おい！本音！」

「ふへ？なに？」

食堂のあるスペース。その机には乃仏本音ことのほほんさん。そしてそのクラスメイトであり、友達でもある2人の女子、鷹月静寐と谷本癒子が居た。静寐はオムライス、癒子はハンバーグ、そしての

ほほんさんは、“鮭の切り身乗せウーロン茶お茶漬け生卵入り”をそれぞれ食していた。のほほんさんの品は一緒に食事する身としてはあまり見慣れない物だが、もはや慣れて何とも思わない静寂と癒子は何も言わずに食事を共にしていた。

「なに〜？、じゃないわよ！あんた最近どうしたの？」

「ほへ？なにが？」

「なんか最近何時にも増してぼーっ、としてるし。今だっでご飯粒つけたまま上の空だったじゃない」

「そ、そんな事ないよ〜！」

2人がかりで尋問してくる姿勢にうるたえるのほほんさん。

ここ数日、彼女がぼーっとしていたのは知り合って1カ月程しか経っていないが分かる物は分かっってしまうのだった。

「い〜や！確実にあんた何か変わった！特にクラス対抗戦の次の日辺りから！」

「確か本音。その時何か手伝ったんだよね？詳しくは知らないけど？」

「ま、まあ〜、ちょっとね〜」

「う〜ん……………アンタもしかしてその時何かあった？特に男関係！」

「へ？」

「お！今、あからさまに反応したね？もしかしてホントに！？」

「な、なにいつてんのかな。私わかんない」

分かりやすすぎる動揺をし、更なる追及を始める2人。

「あの時、織斑君もリオン君もかなり活躍したみたいだしね」

「年中、ゆるゆるの本音も男の子の魅力に遂に気付いたか」

「だ、だから、そうじゃなくて」

「それでどっち？織斑君？リオン君？ねえ、どっちなの！？」

ガンガンと攻めてくる2人に、本音は少し大きめの声で反論した。

「だからそうじゃないよ！“その2人じゃない”ってさっきから
言ってる……あ……」

「その……」

「2人じゃない……………」

我を忘れ叫んだ内容に本音は耳まで顔を真っ赤にした。

「ねえ。確かにオン君と一緒に来た研究者と同室に住んでるよね」

「うん。私、前に遠目で見たけど結構良い人に見えたよ。年も同じくらいだったし」

「研究者ならこの間の騒動の時関わってたはずよね」

「そして本音はその時何かを手伝った……………」

そのまま見事な推測と推理を展開していき、再びのほんさんの方を見ると赤くなった顔を両手で挟んで何とか隠そうとしていた。

「さあ〜て、本音ちゃん」

「じ〜っくりと、話しましょうか」

「ふえええええん!!!」

その後じ〜っくりと時間をかけ、無人機事件の事は話さないよう気をつけながら、根掘り葉掘り聞かれたのほんさんだった。

……5月5日・夕方・IS学園正門……

「やっと帰ってきたな」

「ああ、そうだな……」

IS学園の正門、モノレールに乗りこのIS学園のある人工島に到着した2人の男子が背に荷物を背負って帰ってきた。一夏は普通の状態だが、何故かリオンは顔が少しやつれ、頬に絆創膏を貼っていた。

（もう見知らぬ他人に一夏と箒の事は話せねえ。あと一夏とはもう鬼ごっこはしねえ！）

GW初日の夜の出来事を引きずりながら、一夏と一緒にIS学園の寮へと向かう2人。そして視界に寮が見えてくると、その入口に、

「あ！あれ……」

「……さっさと行って来いよ。お前を待ってたんだろっからよ」

「……おう」

リオンに後押しされ、足早に寮の入り口に向かう一夏。

そこには、

「随分と遅い帰りだな一夏」

「前もって今日の夕方には帰るって言ってただろ」

寮の入り口に、柱に身をもたれて一夏を待っていた箒が立っていた。

「で、どうだった？久しぶりの家は？」

「ま。落ちついて過ごせたな。向こうの友達とも会えたし」

「そうか……………」

「箒はどうしてたんだ？」

「わ、私はだな……………」

そう言われ、モジモジとし両手を背に回した箒に気づき、その手を掴んで前に出す一夏。

「……………ずっと竹刀振ってたみたいだな」

そこには、白いテーピングをグルグルに巻いた手が現れた。

「な、何か文句でもあるか！」

「そんなに怒る事ないだろ。それにいいじゃないか」

「何がいいと言うのだ？」

「何って、一生懸命竹刀振ってる箒が一番箒らしいからな。箒も充実した休みみたいだったな」

明るい笑顔を向けられ顔を赤くして視線を逸らす筈。夕陽のお陰で顔の赤みがあまり分らないのが助けだった。

「な、何を言つて……………こんな休みの日にまで剣道ばかりしてる女に充実も何も……………」

「そんなに自分を卑下するなよ、筈」

自然と手を握る力を込める一夏。それに比例するように顔の赤みを増していく筈。

「俺は、真剣に竹刀振る筈の姿……………」

「愛してるぜ、とか言いたいのか？」

「……………は？」

突如聞こえてきた、もはや聞きなれた声。その方を向くと、

「おい。いつまでそうしてんだ？俺、さっさと部屋に戻りたいんだけど」

ジト目をこちらに向けながら不満全開の顔を向けるリオンが居た。

「お、お前何言ってる!」

「あん?見たくもないのに『イチヤイチャバカップル寸劇』見せられたこっちの身にもなれ。なんで長い時間かけてここまで帰ってきたのに、最後の最後に砂糖を吐けそうなるモン見なきゃいけないだよ」

「イチヤイチャって……………」

「そんな物見せた覚えは無い!」

「なら今も握りっぱなしのその手はどうなんだよ?」

「「あ……………」」

指摘され同時に声を上げると、今も握りっぱなしの手に視線を向ける。すると一瞬で互いに手を放し、一夏は照れくさそうに頬を掻き、箒は再び両手を背に回した。

「ま、お邪魔虫はこの辺りで退散するか。じゃあな一夏。箒。また明日な」

そう言うと、一足先に寮の中に入って行くリオン。その場に取り残された一夏と箒は何とも言えない空気の中にいた。

「じゃ、じゃあ……………部屋戻るか……………」

「そ、そうだな。荷物持ってやろうか?疲れてるだろうし」

「心配しなくても大丈夫だって。そんなに疲れてないし」

先に歩き始めた一夏の後を歩く筈。その2人の姿は、『妻は夫の3歩後ろを歩く』を連想できる光景だった。

こうしてIS学園の連休は終わった……………

のだが、

その数時間後の食堂では、

「……………」

「さぁりオンさん。召し上がって下さい」

その1席で、嬉しそうな笑顔のセシリアに、冷や汗を顔中から流す
リオンが居た。そしてその席の机の上には、

カタカタカタカタカタ……

何故か小刻みな震えをしている皿に盛られた料理(?)が存在して
いた。

その料理は、半分にはお米。もう半分にはドロドロした液状の物が
かけてあった。

「セシリア……これは……カレー……なのかな？」

「ええ。そうですね。私が腕によりをかけて作りましたの」

「そっかあ。頑張ったんだなあ……」

誉め言葉を掛けるも、その声に覇気は無い。なぜなら……

(そっか。これはカレーか………なら何で、ルーが群青色に
なってるんだ!? 錯覚か? 俺の錯覚なのか? むしろ錯覚であって
くれ!?)

いくら現実から目を背けようとしても、目の前に存在する群青色カ
レーは消え去ったりしない。

(仕方ない。ここは古典的だが、腹が痛くなったと言って離脱を……
……)

しようとして、セシリアの方を向くと、

キラキラキラキラキラ……！！

「……………」

そこには無垢な子供にしか出せそうにないキラキラした表情を向けているセシリア。もしここで何かと言って食べなかつたら一生物の傷を与えそうだった。それを理解したりオンは……

（父さん……………母さん……………もしかしたら今日、そっちで会えるかもしれない……………）

臨死体験を覚悟し、

「それじゃあ……………いただきまーす！」

無理やり明るい声を出し、目の前の物を口に放り込んだ。

翌日の、リオンが体調不良で欠席になったと朝のHRで知る一夏達一同だった。

第19話 GIRL'S HOLIDAYS (後書き)

と、第1章完走しました。

次回からは、原作第2巻ストーリー！。IS党屈指の党員がいるあの2人が登場！

更には新たなオリキャラが！

第2章 YOU ARE (NOT) ALONE

ごっご期待下さい！

感想・評価お待ちしております。

第20話 季節はずれの紅葉（前書き）

ここから第2章のスタートです。

この第2章では、人との繋がりを求める少女。そして繋がりを不要とする少女。

『絆と孤独』をテーマに描いて行きます。

けど、そのキーパーソンの登場の前に、当話では新オリキャラの初登場です。

それでは第2章 YOU ARE (NOT) ALONE

始まります！

第20話 季節はずれの紅葉

……GW後の日曜日・その夜・1048室……

「……………大丈夫？リオン？」

「やっと胸やけが収まってきた所だ。3日前の事は思い出したくないからこれ以上言わないでくれ」

「分かったよ」

3日前のセシリアによる臨死体験ツアーと言う名の食事からなんとか帰還したリオンは、先程まで寝ていた保健室からやっと自室に帰って来れ、そのままベットにダイブし寝転がっていた。

するとリオンはある事に気づく。日華の私物がまとめられていたのだった。

「なんだ日華？荷物なんか纏めて？引っ越しでもするのか？」

「うん。そうだよ」

「はい？」

まさかそのままの答が返ってくるとは思っていなかったリオンは驚きを隠せなかった。

「引っ越しって……………どういう事だよ？」

「いや、一応こつて学生寮でしょ。でも僕は生徒じゃなくて研究者……いや、教員にあたる立場だから、教職員宿舎の方に移る事にしたんだ」

「マジかよ！何でもっと早く教えてくれなかったんだよ！」

「決まったのがGWの時で、帰ってきてから話そうと思ったら保健室で苦しんでたでしょ。そんな人に話そうにも話せないよ」

「そっか……………」

自分の苦しむ姿がどんなだったのか気になったが、詳しく聞くと今後セシリアに会うのが怖くなりそうだったので止めた。

そうこうしていると、最後の荷をまとめた日華が立ちあがり荷物を手に持った。

「なんだ？もう出るのか？」

「向こうで荷物の整理とか、パソコンの接続とかしないといけないからね」

「じゃあ、俺も手伝……………」

「病み上がりの人に無茶はさせれないよ。気にしないで明日の授業に備えて早く寝たらどう？」

「それもそうだな……………じゃあお言葉に甘えてそうさせてもらおうかな」

「じゃあ名残惜しいけど、もう行くね。じゃあ」

「おう。じゃあな〜！」

両手に荷物を持ち部屋から去っていく日華を見送るリオン。

ボタン、と扉が閉まり完全に見送ると……………

「さて、skypeでもするか」

気にすることなく1人部屋となった状況を楽しみ始めた。

……………翌日・早朝……………

まだ太陽も昇らず、東の空が少しずつ明るくなっていく時間。

ある1室で1つの影が動いていた。

「……………ん……………んあ……………あれ？……………なんで、こんな早く？」

1025室の住人、織斑一夏が意識を覚醒していた。

「……………この間、家に帰ってたから、生活バランスがズレたか？」
早起きの原因を思いながらベットで横になっていた上体を起こす。
いやに頭が覚醒していたため二度寝という選択肢は無かった。

「箒はまだ寝て……………っ！！！」

同居人の姿を視界に入れた瞬間、更に意識を覚醒させていく。

そこに広がっていた光景は……………

布団からはみ出たスラリと伸びる白く長い足。

胸元がはだけ、存在を強調する双丘。

そして……………

「すう……………すう……………」

規則正しい寝息を立てながら瞼を閉じ眠る箒の綺麗な顔だった。

「…………………………っ！」

完全に意識を箒の姿に持って行かれ、食い入るように見入る一夏。
次第に、理性を失いそうになるが何とか踏みとどまった。

「……………自販機の所で何か飲み物買ってこよう」

このままここに居れば何をしでかすか分からないため、頭を冷やすべく財布を持ち部屋から出ていった。

……………学生寮・ロビー……………

ピッ……………ガシャン！

ロビーの自販機から購入した、ダンディな男の横顔が描かれたコーヒードリンクを取り出し、ロビーにあるソファに腰を下ろす一夏。時間のせいかな、そこには一夏以外の人間は見当たらない。

「……………幕。あの姿は反則だろ……………綺麗すぎ……………」

ここに居ない同居人の先程の光景を思い出す一夏。

「昔は、一緒に昼寝した時はこんな風にはならなかったんだけどな……………」

まだ2人が小学生のころの思い出を引き出し、軽く笑みがこぼれる一夏。

その事を懐かしく思うと同時に、また昔のように過ごしたいと思う一夏。

(また昔みたいに……俺も、尊も、千冬姉も、後……)

と、昔を懐かしんでると、

「おや！？そこに居るのは、もしかして織斑君かな？」

「ん？」

背後から声を掛けられ、振り向くと、

「やっぱり。珍しく早起きしてみるもんだね。かの有名人とこうして2人つきりになれるなんてそうそうないよ」

そこにいたのは、上下に黒いジャージを身に纏い、パツチリと開いた山吹色の目と、同じ色の髪を背中まで伸ばし、紐で括って簡単なポニーテールをした女の子が現れた。

見慣れぬ姿に少し戸惑う一夏だが、話しかける事にした。

「えっと……君は……誰ですか？」

「ははっ。そんな固い言葉遣いしなくても良いよ。同い年の同級生なんだから」

「同級生？」

「まずは自己紹介だね。僕の名前は、羽桜紅葉^{はせくら もみじ}。1年2組在籍の、上から87、62、89のDカップの女の子だよ？」

「いや、そこまで聞いてないから。名前だけで十分だから」

「ふふつ。聞いた通り固くて真面目だね。鈴の言う通り」

明るく、楽しそうな雰囲気纏う紅葉は一夏に近づきその隣に座る。

「そっか2組の人か。なら、今日から始まる2組とのIS合同演習で授業では初めて関わるって事か」

「そうだね。ま、本当ならもっと早く織斑君とは関わるはずだったんだけどね」

「本当なら？」

「……………鈴が来るまでは、僕が2組の代表だったんだ」

「あ……………俺の知り合いが無茶言っただけだね」

少し顔を暗くして俯く紅葉に自分は悪くはないが謝罪する一夏。

「やっぱり、鈴の言った通りだね。自分は悪くないのに謝るなんて。そんな人そうそう居ないよ」

「そっかな？」

紅葉の言葉を疑問に思いながら手に持つ缶飲料を口に入れる一夏。

「そうだよ……………良いなあ、こんな優しい人に好かれてる篠ノ之さんが羨ましいよ」

「っ！！……………ゲホゲホ！」

そして紅葉の言葉に、嘔き出しそうになり、飲んだのが気管に入りむせる一夏。

「だ、大丈夫？そんな動揺するなんて……………」

「な、何言ってるのかな？羽桜さん？お、お、俺が筭に好意を持ってるなんて……………そそそ、そんな事ある訳……………」

「そのうるたえ具合が真実だって証拠じゃない。心配しなくても、他の誰かに言ったりはしないよ。それに僕の事は紅葉って呼び捨てで良いよ」

「……………じゃあ、俺も一夏でいいよ……………そつか。ま、知られてのが、はざ……………いや、紅葉だけならまあ構わないけ……………」

「何言ってるの？1組の大半の人なら一夏君の篠ノ之さんへの気持ちちは大体知られてるよ」

「なん……………だと……………」

「後ろの席の人達から聞いたけど一夏君、授業中に何回も篠ノ之さんの席の方に視線向けてみたいだし、一夏君は気づいてないかもしれないけど、他の女子が話す時と篠ノ之さんと話す時の表情って、

曇天と快晴ぐらい違っつて気づいてる？」

「そ……………んな……………」

まさか自分の気持ちがあんなにも知られていると思わなかった一夏は少しブルーになった。

「……………そ、そんなに落ち込まなくてもいいよ。それを利用して何かバカな事しようとする人なんて基本居ないはずだから」

「……………何でそう言えんの？」

「……………最強のお姉さんが居る人に、悪質な事する人が居るなら見てみたいよ」

途端、2人の脳裏に頭に角を生やし、眼から赤い眼光が放たれ、牙の様な歯をむき出しにして炎は吐き出している、最終兵器『姉』の姿が浮かび上がった。

「重ね重ね……………俺の関係者が済まない……………」

「いいよ……………あの人の厳しさと恐ろしさはもう分かってるから……………」

もしここに当人が居れば確実にこれから昇ってくる朝陽を拝めなくなるのは確定する会話をする2人。

「じゃ、僕はそろそろ部屋に戻るよ。それじゃあね一夏君。また今日
日の授業で」

「ああ。それじゃあな」

そう言い立ち上がると、互いに自室に戻っていく一夏に紅葉。

(それにしても、羽桜紅葉か。あんな子が居たのか。久しぶりだな、あんな友達感覚で話しかけてくれた子……それにしても、まさか箒の事があんなに知られているとは、何か手を打つべきかな?)

帰路の中、これ以上他の人に箒の事を知られないようするため何とか策が無いか考える一夏。

(……とりあえず、自分の行動をもう少し自制するしかないか。箒に嫌われて、はたかれたりされたくないからな)

ガチャ……

考えを纏め、そのまま自分の部屋のドアを開け……

「箒。もう、起き……て……」

「……え?」

バタン!

勢いよく閉めた。

(……落ちつけ一夏。確かにまだ箒が寝てるからと思って容易にドアを開けた。けどだからって何で起きてる所をすっ飛ばして着替え中の時に開けたんだ俺は!)

ドアを開けた先の光景に動揺の色を隠せない一夏。

(マズイ。このまま入ろうとすれば竹刀の餌食になるのは確実だ。箸が落ちつくのと、さっき見えた白い下着姿を忘れるためにも時間を稼ごう。とりあえずもう1回自販機の所に行って……………)

そこまで考え、足を再びロビーに向けた瞬間、

Bannon!

ドアが勢いよく開かれ、

ガシイ!

腕を尋常じゃない握力で掴まれ、

ブウン!

勢いよく室内に放り投げられる。この間およそ1・5秒だった。

この数秒後……………

ドゴオオオオオオン!!!!!!

謎の爆音が1025室から鳴り響き、朝陽に照らされた学園寮の生徒全員が起きる目覚まし音として活躍した。

…… IS学園・1年1組……

「……なあ、一夏……」

「なんだ？リオン？」

「お前の頭に出来た、マンガでしか見た事のないデカイこぶは何だ？今朝の爆音に関係してるのか？」

「……ノーコメントだ……」

自分の席に座る一夏が、今クラスにやってきたリオンに問われた。

一夏の頭にはマンガで見るような馬鹿でかいこぶが出来ていた。こ
丁寧に白いテープが十字に貼られている。

そんな一夏の様子を見たりオンが箒に視線を移すと、

「~~~~~っ！」

こちらは顔を赤く染めた箒が顔を伏せながら、一夏を射殺さんばかりの視線を発生させていた。

「……………なんとなく分かった」

「……………頼むからもう追及しないでくれ」

と、話していると、

キーンコーンカーンコーン！

と、朝のHR開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。その音と共に、
クラス内が慌しく動き、全員が席に座ると同時に、

「席についてるな。では、HRを始める。山田先生。頼む」

「は、はい」

担任の千冬と副担任の山田先生が同時に入室し、HRを始めた。

「え、まずはですね。皆さんに嬉しいニュースです。なんとです
ね……………今日は、転校生を紹介します」

スラリと全体的に細めの体に、艶やかに輝く金髪を靡かせる……

男子の制服を身に付けた、“男”だったからだ。

第20話 季節はずれの紅葉（後書き）

遂に現れた、最多党員を誇る2人の登場。しかし私の中では第こそ
NO1！これは譲れない！

新オリキャラこと、羽桜紅葉ですがもう少し設定を固めましたら、
オリジナル設定に詳しいプロフィールを書きます。

感想・評価お待ちしております。

第21話 風姫の初陣（前書き）

最近の更新ペースが自分でも驚く位凄い……… 第の次に好きなキャラクター2人が登場したからなのか、自分でも分からない。更新出来るから嬉しいですけど。

第21話 風姫の初陣

………転校生、シャルルの登場により、クラスの空気が完全に止まった。

「お………男の………子？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国から転入を………」

クラスの誰かが、驚きを隠せないまま疑問を口にした。無理もない、今までISを操縦できる男性は一夏とリオン。この2人しか確認されてない。そんな中、今日の前に3人目の男性操縦者が現れたのだ。

なので、

「「「「「「「「きやあああああああああああああ………!!!!!!」」」」」」」」

まるで窓ガラスを割りそうな大爆音が発生した。

「へ？」

その発生源であるシャルルは戸惑いの表情を見せる。

「男子！3人目の男子！」

「今度は美形！守ってあげたくなるような！」

「王子様みたいに綺麗！」

「ああ、IS学園に来て良かった！」

と、マシンガン並みに次々と感想を飛ばしてくる女子達。一夏とりオンはこの騒音に付いて行けず全力で両耳を塞いでいた。このままたカオスな状況が続くと思われたが……

「静かにせんか！馬鹿者共があ！」

しーーーーーん……

クラス担任の鶴の一声（鬼の一声）で一瞬にして静寂を取り戻す教室。恐るべき統率力だ。

「で、では次の子に自己紹介してもらいますね。お願いします」

静けさを取り戻した中、山田先生がもう1人の転校生に自己紹介を促したが……

「……………」

「あ、あの……………自己紹介を……………」

「……………」

当の転校生は完全に無視し、眼帯のない右目を閉じながら教壇に立っていた。まるでこの空間全てを否定している雰囲気を出しながら。

「……………挨拶をしる。ラウラ」

「はい。教官」

しかし、千冬が彼女の名、ラウラと言いながら指示するとそれに素直に従った。

教壇に一番近い一夏が、ラウラが千冬に向け言った『教官』の単語に反応する。

(教官……………確か、千冬姉……………『あの事件』の後、1年程ドイツで……………って事は、その時の関係者なのか?)

「ここで教官は止せ。ここでは私は教師で、お前は生徒だ。私の事も教官では無く、織斑先生と言え」

「分かりました。……………ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………へ?……………い、以上ですか?」

「以上だ」

まるで機械的に、千冬以外の存在など眼中にない態度をとるラウラ。

「っ!……………貴様が……………」

「は？」

ラウラが目の前の一夏の存在に気づき、静かに近づき……

バチーン！

「~~~~っ！！！」

「な……………」

容赦なく一夏の頬に平手打ちを放った。いきなりの痛みに頬を押さえる一夏の後ろでリオンが驚きの表情を見せる。

「私は認めない……………貴様があの人の子であるなど、認めるものか！」

いきなりの発言と展開に叩かれた一夏は戸惑うが、後ろにいたりオンは動きだした。

「お前。いきなり……………」

椅子を倒す勢いで立ちあがった瞬間……………

……………ビキィ

クラス内の空気が凍りついた。

5月の温かな空気は完全に消え、見る見る体感温度が下がるのを感じる1組の生徒達。

「あ、あれえ？な、何か冷房強くない？」

「ねえ、いつ冬になったっけ？まだ夏も秋も来てないけど……………」

ざわざわと騒ぐ中、リオンが荒れ狂う冷気の発生源を捉えた。

「……………ほ……………幕……………さん？」

を進める筈。このまま教室が殺害現場になるつかという瞬間、

ガシィ!

筈の肩に手を置く勇者が現れた。

「落ちつけ篠ノ之。さっさと席に座れ」

クラス担当、織斑千冬だった。この人ならこの阿修羅と化した筈を止めてくれる。平和なクラス空間に戻れると誰もが思ったが……

「ハナセ。ジャマスルナ」

千冬に振り向き、機械的な声を発する筈。誰もが恐れる鬼教師、織斑千冬に対して恐れることなく命令口調で話す筈に、クラスは更なる恐怖に包まれ、当の千冬もこの変わりように恐怖した。

まさかこのお方にも止められない。このまま事件が起こってしまうのか……

と、誰もが諦めた時、

「篤。俺は大丈夫だから落ちつけ。」

叩かれた当人の一夏だった。流石にここまで変貌した篤を、一夏の発言でも大人しくさせるのは無理……………

「分かった。落ちつく」

素直に従い席に座る篤。

ドンガラガツシャーーン!!!!

あまりの従順さと元の様子への変わりように、ド〇フ顔負けのリアクションを取るクラス一同。

今も教壇に立っているシャルルも苦笑いを浮かべていた。

「で、ではHRはここまでだ。今日は2組との合同でISの演習を行う。各人、すぐに着替えて第2グラウンドに集合だ!あと、織斑にマードック!」

「はい？」

「同じ男子同士として、デュノアの面倒を見てやれ。頼んだぞ」

「分かりました」

「では解散！1分1秒を無駄するなよ！」

そう言い教室を後にする千冬に、それに付いて行く山田先生。

それを見届けてから教壇に立ったままのシャルルに近づくと一夏とリオン。

「あ。2人が織斑君にマードック君だね。僕はね……………」

「ああ、そういうのは後でだ」

「話は、アリーナに向かいながらな。行くぜデュノア」

ガシツ……………

「へ？」

と、早口に言われ、リオンに手を握られたシャルルが驚きの声を上げるも、そのままリオンに引っ張られ一夏と一緒に早足で教室を後にした。

「さて、私も向かうか」

それに続き、アリーナに向かう筈。

そして……

「……………」

教室に残った、未だに倒れたままの1組の一同が動き出したのその数分後だった。

そしてこの後1組、いや、IS学園1・2・3年生共有の裏のルールが誕生した。

『篠ノ之箒の前で織斑一夏に手をあげるな』

と、言う物であった。

……………第2アリーナ・更衣室……………

「はあ……………はあ……………」

「ふう……………ふう……………」

「あ……………IS学園で……………いつもこんな感じなの？」

「早く教室からアリーナ更衣室へ移動した男子3人組が、目的地の更衣室で息を切らしてへばっていた。なぜこつも疲労の色を見せているかというつと、教室を出て数秒後、廊下を早足で移動していたのだが、どこからか聞きつけた『3人目の男子がやってきた』という噂を確認するためあらゆる場所から女子が3人の前に現れ道を塞いだのだつた。だがこれを突破しなければ授業を遅刻してしまう。結果は死。それだけは防ごうつと、迫りくる魔手を潜り抜け、この1カ月少つでマツピングした学園の地理を活用し全力で走りこつまでたどり着いたのだつた。」

「きよ、今日は、デュノアが来たつて知つたからああなつたんだと思つ」

「へ？どうして？」

「どうしてつて……………男でIS使えんの俺達だけだし、3人目の男子生徒だから皆一目でも見たかつたんだろ」

「……………あ！そ、そうか！そうだね！ハハハハ……………」

改めてIS学園と思春期の女の子の力を思い知つた一夏にリオン。そうこつしている内に息も整い落ちつきを取り戻した3人は改めて自己紹介をする。

「じゃあ改めて、俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺はリオン・マードック。俺もリオンでいいぜ」

「じゃあこれからよろしくね一夏。リオン。僕の事もシャルルでいいよ」

と、3人の紹介と互いの呼び名を決めると、

「じゃあ早く着替えようぜ。走ってきたからまだ時間の余裕はあるけど、さっさとアリーナに行こうぜ」

「そうだな」

と、2人同時にロッカーの扉を開け、ISスーツに着替えようとする。が、リオンはシャルルに言って無かった事があるな、と思い振り返る。

「そうだ。シャルル。ここは俺達専門のロッカールームだから、どのロッカーを使っても……」

「へ？な、何かな？」

そこには、制服を脱ぎ、上下共にISスーツを装着したシャルルの姿があった。

「着替えんの超はや！なんかコッでもあるのか？」

「へ？な。さあ………どうだろうね………ハハハハハハ………」

軽い笑みを浮かべるシャルルに何か疑問を浮かべるが、特に気にせず着替えを続けるリオン。

数分後、着替え終えた3人はアリーナに向かっていた。と、シャルルは先程の教室での出来事を口にした。

「それにしても、さっき一夏が叩かれた時、それにも驚いたけどその後のあの女子の怒り具合にもっと驚いたよ」

「ああ、箒か。確かにあれは怖すぎたな。子供が見たら3秒で泣いて、5秒で気絶するレベルだった」

冗談交じりで会話する2人だが、一夏は真剣に話してきた。

「でも箒も落ちついてくれて良かったよ。あのまま木刀で殴ったら只では済まないし、箒にも重い処罰が課せられてた筈だから無事に済んで良かったよ」

「箒って言うんだ。良く知ってる口ぶりだけど知り合いなの?」

「知り合いも何も、一夏とは幼なじみでしかもルームメイトだけ。知り合いとかで済む関係じゃないぜ」

「へえ………ねえ、普段もあんな風に怖いのか?」

遠慮がちに聞くシャルルに、一夏は少し必死になって答えた。

「違う違う。普段はあんなに怖くないって。さっきのボーデヴィツヒみたいな理不尽な行動には黙ってない正義感が強くて凄く良い奴だよ。努力家だし、しっかり者だし、優しいし、綺麗だし。あと、手料理も凄く美味いんだよ。特に煮物。砂糖と醤油のバランスが最高な割合の肉じゃがなんかマジで頬が落ちそうになるし……って、どうした2人とも？なんか茫然としてるけど」

一夏のマシンガントークに気圧され、黙って聞いていたシャルル。その顔には生温かい笑みがあり、その隣のリオンは呆れたような表情をしていた。

「いや、その……一夏って、箒の事よく知ってるなあ、と思って」

「まあ、そりゃあ幼なじみだし大体は……」

「ううん。そうじゃなくて……心から信頼してて、誰よりも大事に思ってる……そう、愛情が凄く強いなあ、と思って」

「あ……」

その瞬間、一夏は気づいた。シャルルの箒に向けられた悪いイメージを消すために自分が発した言葉は、確かにその悪いイメージは消えただろう。だがその結果、自分の箒への思いを隠すことなく暴露したようなものなのだ。

「え、えと、つまり、そのなんだな……」

もはや日本語にもなっていない言葉を口から吐き出し、何とかして誤魔化そうとしたが……

一夏が走り去った後、リオンとシャルルは並んで歩きながらアリーナへと向かっていた。

「そっぴやシャルル。そのネックレス気になつてたんだが。もしかしてそれって……………」

「うん。僕の専用機の待機状態だよ」

シャルルの胸元で橙色の輝きが目立つネックレスの事を問うと、あつさりと教えたシャルル。

「へえ、専用機を持つてるって事は、やっぱり代表候補なのか？そのISSスーツも結構いい所の奴みたいだし、もしかして向こうのIS関係の会社の出なのか？」

「うん。僕の家……………デュノア社製の専用機とスーツなんだ」

「デュノア……………確かシャルルの名字も……………て事は、社長の子供って事か。なら納得だな」

「納得って？」

「いや、何か、体中から気品というか、何かいいオーラが出てるっ

て感じだったからな。良い所育ちってなら納得だな」

と、明るい雰囲気全開で話すリオンだが、

「うん……………そう、かもね」

少し顔を俯けたシャルルの返答が返ってきたのに、リオンは違和感を感じた。

「どうかしたか？」

「あ……………ううん。なんでもないよ。ホラ。もうすぐアリーナに付くから早く行こ」

そついい先に歩を進めるシャルル。

「……………」

その後ろ姿を見たリオンは何かを思い出しそうになったが、頭を軽く振るとシャルルに付いて行った。

……………第2アリーナ・フィールド……………

「はあはあはあはあ……………」

「……………何やってんだあいつは？」

アリーナのフィールドに着くと、そこにはもう来ている女子が会話を弾ませていたが、その一角に、膝に手を着き大きく息をしている一夏がいた。

「おーい。何してたんだ？」

息を整えてる一夏の後ろに立ち、シャルルを傍に置いたりオンが聞いた。

「い、いや。何か無駄にエネルギー消費しないと暴走しちゃいそうだったから、少しランニングしてた」

「何だ？お疲れ様とでも言ってほしいのか？」

「いや、止めてくれ。自分の行動が空しくなる」

「ははっ、一夏っておもしろいな」

「あの、シャルル……さっきの事は……」

「分かってる。内緒でしょ」

（ま、でもあまり意味は無いと思うな）

と、同時に内心で一夏の無駄な努力を思っていると

「やつほー一夏君！今朝ぶりだね！」

「あ、紅葉。もう来てたのか」

3人の傍に、山吹色の髪を靡かせながら紅葉が現れたのだった。

「まあね。初めての一夏君達との授業だもの。遅刻はもちろん遅れて来る訳にはいかないでしょ」

「一夏？誰だこの子？知り合いなのか？」

「ああ。今朝知り合ったばかりだ。2組の元クラス代表の羽桜紅葉って人だ」

「どもども、こうして話すのは初めてだねリオン君。1年2組在籍の羽桜紅葉だよ」

手をフリフリと小さく振りながら挨拶する紅葉に、親しみやすさを感じるリオン。

「ああ。よろしくな……一夏が紅葉って名前で呼んでるって事は、俺もそれでいいか？」

「もちろんだよ。よろしくね〜！」

こうしてリオンに新たな交友関係が築かれた。

「ところで、さっきのHRの時1組の方が色々騒がしそっだったけど何かあったのかな？」

「ああ、実は……………」

その後、1組の2人の転校生。その内1人は男でここに居るシャルル。ラウラの一夏への平手打ち。そして第の『死神化・狂気の先の処刑刃事件』（後にのほほんさんが命名）を話すと、ちょうど時間だったのか、千冬がいつもの白ジャージを身につけやってきたのを見ると、4人はそれぞれのクラスの方へと移動し整列した。

……………その十数分後……………

……………ウウウウウウウウウウウ、ドオオオオオン！！！！

空中で撃退された何かが、クルクルと回りながらアリーナのフィールドに落下しクレーターを作った。その落下物は、

「もう、さっきから何してんのよ！面白いように回避先読まれて！」

「鈴さんこそ、無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないんですわ」

クレーターの内部で互いの頭を掴みながらミスをなすり付けあうせ

シリアと鈴だった。そして上空から2人を撃退した人物が降りてきた。

「大丈夫ですか？オルコットさん？鳳さん？」

いつものような朗らかな雰囲気はそのままだが、身に付けたISSスーツと深緑色をはなつISS『ラファール・リヴァイブ』を操る1組副担任、山田真耶だった。

なぜこの3人がこのような事をしてるかというところ、本日は合同とはいえ、初めて生徒達に授業でISSを装着させ操縦させる。さらには簡単な射撃や格闘もさせるのだ。

いきなりその訓練をさせる訳にもいかないのでは候補生でもある鈴とセシリアに演習をするように千冬が指示。その相手に後からラファールを装着して現れた山田先生となり、生徒と教員の2対1の模擬戦闘が行われ……………結果が見ての通りのものとなった。

「さて、これで諸君らにも教員の實力が分かっただろう。今後はもっと敬意を払うように」

珍しく誉められてせいか、照れくさそうに笑みを浮かべる山田先生。

千冬は次に、このまま各生徒達の授業に移行しようとする……………

2組の生徒の列から手が挙げられた。

「織斑先生。僕も山田先生と模擬戦闘したいんですけどいいですか？」

誰であろう、2組の元代表だった羽桜紅葉だった。

「なぜだ？理由を言ってみろ」

「以前から言っていた、僕の専用機がこの間の連休で完成したんです。初期化と最適化はもう済んでいるんですけど、まだ実戦データがまだ不足しているんです。なるべく早くと実家から言われますから、この際山田先生にお相手してくれたら嬉しいんですけど……」

「……………」

紅葉の言葉に手を顎に置き考える千冬。そんな中、生徒達にもざわめきが広まった。

「え？羽桜さん、専用機持ってるの？」

「確か羽桜さん。日本の大きい会社の分家の出って言ったから……」

……………」

「でもいいのかな？こんな時にお披露目何かして……………」

「それに、」

今も悩む千冬に言葉をかける紅葉。

「このまま鈴が無様に負けたままなら、2組の沽券にも係わりませんし、どうかお願いします」

その一言に生徒達から、フフツ、と軽い笑いが巻き起こった。

当の鈴はグググツ、と口を三角にして屈辱の表情を浮かべるが、言い返したくても言い返せない状況にもどかしくなる。

「ふっ……いいだろう。ただし5分間だけだ。5分経ったらどのような状況でも止めさせるからな」

「了解です！」

許可をもらい、列から外れて前に出て山田先生の前に立つ紅葉。

「戦うからには、本気でいきますよ山田先生！」

「ええ。よろしく願いしますね。羽桜さん」

臨戦態勢になった山田先生を確認し、自分の右腕を掴む。

自分の右腕の手首、そこに装着された小さめの深緑のエメラルドが数か所に飾られたシルバーのチエーンブレスレット。さらにそこから小さいチエーンに繋がれている中指に付けている、深紅のガーネットの指輪。ブレスレットと指輪のセット。これが羽桜紅葉の専用機の待機状態だ。

「さあ、初陣だ………行くよ！」
『刃風………！』

第21話 風姫の初陣（後書き）

と、紅葉の初戦闘と、当小説2機目も専用機の登場は次回です。

また、紅葉の新たな1面をお見せします。お楽しみに。

感想・評価お待ちしております。

第22話 弾丸と刃（前書き）

紅葉と山田先生の初戦闘描写です。

ほとんど戦闘のみなので少し短めです。

それではごしご。

第22話 弾丸と刃

……………ガーネットとエメラルドに光を照らし、その反射光のよ
うな眩く温かみのある光を放ち、羽桜紅葉は自分の専用機を展開し
た。

その姿を見た一夏はもちろん、これまで日華と一緒にIS見てきた
リオンもその姿に驚いていた。

紅葉の展開したIS。名を『刃風』。上半分。腰から上はいたって
普通。基盤カラーリングをメタリックブラックになっており。所々
にメタリックシルバーの装飾のある打鉄。その装甲に光沢と鋭さを
増したものと言ってもいい。だが、異質なのは下半分。太ももから
先の脚部だ。

異常に大きいのだ。白式やライオンハートを常人の脚とすれば、ま
るで鍛えられた競輪選手のような太く逞しいのを思わせる。

カラーリングは変わらずメタリックブラックとメタリックシルバー
なのだが、爪先と踵の部分の鋭く輝く金色の爪のような刃。爪先には
大きなのが1つ。踵は小さいのが2つ重なるように並んでいる。

それだけではない。ふくらはぎの後ろの部分、そこに左右に3つずつ
丸い装置が埋め込まれている部分がある。それが両足に計12の
装置があるのが見える。

「さて、それじゃあ上空に行きましょうか先生」

「はい」

展開し終えた紅葉に言われ一緒に空に上がっていく山田先生。しばらくすると2人は先程セシリアと鈴が戦闘していた地点で静止した。

「じゃあ、行きますよ。戦るからには、本気でいきますからね」

「はい。よろしくお願いしますね」

ライフルを構えた山田先生に対し、呼びだした長刀を両手で構える紅葉。

「2人とも準備は良いな。さっきも言った通り、今回の模擬戦は5分だけだ。5分経ったら止めるからそれに従うように」

地上から話してくる千冬のをISのセンサーで拾い、了解の意味を込め手を振る紅葉。そして改めて山田先生へと視線を戻し……

『それでは………始め!』

千冬の開始の合図と同時に、スナイパーライフルを構え紅葉に向け弾丸を放つ山田先生。

放たれた弾丸を紅葉は、

キユウン！

手にした長刀で弾道を読み、斬った。

「行きますよ！」

弾丸を斬り伏せ一直線に迫る紅葉。しかし、山田先生は冷静に第2、第3射と弾丸を放っていく。しかし距離が近づき弾丸を対処しにくくなるも弾丸を斬り伏せ接近する紅葉。

このままの攻め方では埒が明かないと判断した山田先生はライフルを収納し、両手にサブマシンガンを装備した。

だが紅葉はそれを見て……いや、“それよりも速く”長刀を収納し、小太刀を展開し両手に一振りづつ持ち構えた。

そして、向かってくるライフルより連射速度が勝るサブマシンガンの弾丸を全て斬り弾いていく。そして山田先生との距離を更に狭めていく。

「あの武器の展開速度……尋常じゃないな」

「ああ。俺、ここに来る前に向こうで色んな人にしごかれたけど、あそこまで速いラピッド・スイッチ初めて見るぞ」

地上で上空の戦闘を見ていた一夏とリオンは、紅葉の戦い方を見て

それぞれ意見を言っていた。

「俺達みたいな専用な武器を使わず、状況に合った武器を展開していく戦法か」

「しかも展開してる武器を見るからに、近距離用の武装がメインみたいだな」

「あ！山田先生に攻撃が当たった！」

シャルルの発言通り、接近した紅葉の小太刀が山田先生の腹部に命中していた。

他の生徒から『おお！』と驚きの声が上がった。

「くっ！」

攻撃を受け、近距離装備の警棒型のロッドを2本取り出し、紅葉の小太刀二刀と交えて行く山田先生。

「やりますね羽桜さん」

「これでも結構訓練してますから」

近距離の攻防を繰り広げながら短い会話をする2人。その中、山田先生の警棒が紅葉を捉えようとすると……

シュン！

一瞬で背後へと距離を取りながら小太刀を収納すると、

両手に大きな十字型に真ん中に穴が開いている物を取り出すと、

ギユウウウウン！！！！！！

物凄い風斬り音を出しながら山田先生に投擲した。

「な！」

予想外の武器に戸惑うも冷静に回避する山田先生。しかし、一瞬投擲された物に意識を反らしてしまい

……………ジャリン！

紅葉の追撃に気付けなかった。

「へ？」

気付いた時には、その腕に分銅の付いた鎖が巻きついており、その先の紅葉は左手に鎖鎌の鎌を持ち、右手には黒のトンファが握られていた。

グウン！

腕に巻かれた鎖により、紅葉に引き寄せられる山田先生。そして紅葉の間合いに入り、

フォンフォンフォン……ゴオン！

回転させ、遠心力で威力を増したトンファの1撃が山田先生を捉えた。

「おいおい。紅葉凄えな。セシリアと鈴の2人掛かりでほとんど攻撃が当たんなかったのに、もう2回目のクリーンヒットだぞ」

「まあ、機体の相性とか、2人のタッグだと連携とか色々複雑だけど、セシリアと鈴のは打ち合わせも何もない即席のタッグだったからな。そう考えたら1人で攻める方が今の俺達には1番の戦法だろうな」

地上で、完全な解説役になった一夏とリオン。2人の会話は何気ない物だが、今の戦闘の的確な解説をしているので周りの生徒は感心と『さすがの専用機持ち。自分達との場数が違うなあ』と思いつながら真剣に聞いていた。

「そついや聞きたかったんだが、さっき紅葉がブン投げた武器なんだ？見慣れなかったんだが」

「あれは、手裏剣って言って、昔日本にいた忍者って集団が使って

た投擲武器だ。牽制に使う物みたいだったけど、あんな馬鹿でかい
実物は見た事無いな」

「ああ、そっか。どっかで見たと思ったたら日本のマンガで見た事あ
ったな」

「マンガ？」

「なんか、主人公の名前が……メンマだかなんだか、ラーメンに
乗ってる具材の名前のやつ」

深くは追求しないでおこう。そう思った一夏だった。

「っ！」

ここに来て山田先生は気持ちを切り替えた。さっきまでは、5分間
だけの紅葉の機体お披露目を兼ねた模擬戦だと思っていた。しか
し今は違う。目の前の専用機を纏う少女、いや1人の戦士は純粹に
勝利を求めて自分を倒そうとしている。けど、このまま押されま
まの訳にはいかない。自分の中に存在する教員と元代表候補としての
プライドがこのまま一方的な展開を許さないと震える。

「まだまだです！」

腕に巻かれた鎖を、刃が超振動する切断力を増したナイフで斬り裂

き拘束を解くと紅葉に蹴りを入れ距離を取る。

スチャ、スチャ！

ナイフを収納し、デザートイーグル型の大型ハンドガン2丁を取り出し、紅葉に接近する山田先生。

（遠距離の武器なのにこっちに近づいてくる？）

山田先生の行動に戸惑うも、鎖の切れた鎖鎌を収納し左手にもトンファを取り出し構える紅葉。

そして紅葉の間合いに入った山田先生は、ハンドガンを紅葉に叩きつけた。

「っ！」

ガン！と金属が衝突する音を撒き散らす。

（ハンドガンで殴打してくるなんて一体何を……………）

と、紅葉が思っているとトンファと交差しているハンドガンが少し動き銃口がこちらに向いた。

ドオン！

近距離から放たれる弾丸を何とか回避する紅葉……………の眼前にもう1丁のハンドガンの銃口が待ち構えていた。

「しまっ……………」

気づくももう遅い。容赦なく放たれた弾丸は紅葉の胴体に直撃し初のダメージを受ける。

そのまま立て続けに3発の弾丸を受ける。すぐに離脱しようとするが、

右手のハンドガンが殴りつけるような動作で迫り、

ガン！

叩きつけると同時に弾丸が放たれ凄まじい衝撃を受ける紅葉。そしてその衝撃を利用し距離を取るのだった。

「そのスタイル……もしかして、ガンⅡカタって奴ですか？」

「ええ。自分なりに考えてみたんです。良く分かりましたね」

山田先生の戦闘スタイルを誉めながら、トンファを2つとも収納し、右手に槍、左手に薙刀を取り出す紅葉。

「羽桜さんこそ……どれだけ武器を持ってるんですか？」

「企業秘密です」

山田先生も片手にアサルトライフル、もう片手にセシリアと鈴を落としたグレネードランチャーを取り出し、紅葉と視線を交わらせる。

その時、

『そこまでだ！5分経った！2人とも降りてくるよう！』

地上から千冬の声を拾い、空中で静止する2人。

「……………ここまでですね」

「ええ」

「山田先生。お手合わせありがとうございました。できればまたお願いしますね」

そう言い、両手の武器を収納し一足先に地上に降りて行く紅葉。

「……………」

その後に続き降りて行く山田先生は思っていた。

(後5分でも長く戦っていたら負けていました)

そう思う要素は2つあった。

1つは彼女の闘いへの姿勢。たかが5分の模擬戦。ほとんどの人が軽く思う時間と戦闘の中でも、勝利への渴望がその瞳から強く感じただからだ。

そして2つ目は、1度も攻撃しなかった脚部だ。金色の爪に、ふくらはぎの後ろに埋め込まれた丸い装置。明らかに専用機たる特性が詰まったであろう脚部だが、自分へは1度も使おうとしなかった。

手持ちの武器だけで十分だと思ったのか、それとも山田先生が使う相手でも無かったのか。

複雑な思いを抱きながら地上に降りると、紅葉がクラスメイト達に囲まれているのが見えた。

それを見ると、先程の戦闘の複雑な思いは消え自然と笑みが浮かびあがった。

「どうだった山田先生。羽桜の実力は？」

「もっと強くなりますね。将来が楽しみです」

一教員として有力な生徒の実力と成長を思いながら山田先生は明るい声で千冬にそう返した。

その後、本来の目的通り各生徒にISの装着と操縦が、各専用機持ちを班長とした班で行われた。

その際、リオンの班のある子が打鉄を立ったまま降りてしまったため、次ののほほんさんを抱えて乗せるイベントがあった。

リオンのほほんさんも特に変わった様子も無かったが、のほほんさんがリオンに何かを聞くため、話しかけた時少し接近してしまい、その様子をセシリアに見られなんとも言えない表情を浮かべていた。

後に、一夏が何を聞かれたのかと尋ねると、

「何か、日華の事教えてくれって言われた」

と、普通に答えた。

当日の日華は、ちょうどリオンのほほんさんを抱き上げた時間……

へきっ！

「……………」

紙の上を走らせていたボールペンの先が壊れてしまい、インクを紙にぶちまけてしまった。

「……………何でかな？リオンの恥ずかしい過去を皆に暴露したくなっ
たな……………」

その瞬間、眼鏡の先に黒い光が浮かんだとか………

第22話 弾丸と刃（後書き）

今回は屋上での昼休みと、リオンとシャルルの同室イベントです。

紅葉の新たな一面と、篝との初対面も描きます。

楽しみに！

感想・評価お待ちしております。

第23話 暖桜と冷夜（前書き）

サブタイトルは『だんおうとれいよ』と読んでください。

またまた紅葉の新たな1面が現れます。

あと、後書きにてお知らせを書きましたので目に通して下さい。

それではどうぞ。

第23話 暖桜と冷夜

1組と2組の合同演習は何事もなく終了した。

ただ、2人掛かりで山田先生に負けたセシリアと鈴。5分という僅かな時間で1人で善戦した紅葉への、同級生達の価値観はかなり変わったと思われる。実際、班ごとのIS実習の時、セシリア・鈴と、紅葉の班の進み具合や熱心さはかなりの差があった。

そして、その日のお昼休み……

……IS学園・屋上……

「いやあ、いい天気だな。なんかピクニックに来てるみたいだな！」

「……おい、どうゆう事だ？」

「ん？」

のんきに話すリオンに篝がドスの効いた声を放った。

「どうしてお前“達”がここに居るんだ！」

小さめの弁当箱を2つ持った篝の周りには、一夏・リオン・セシリア・鈴・シャルル・紅葉のメンバーが揃っていた。

「私が昼食に誘ったのは、その、い、一夏だけのはずなのになぜだ！」

「ああ、スマン箒。多分俺のせいだ」

「何？」

「実は合同授業が終わった後……」

合同授業が終わり、一夏達が制服に着替えていた時、

「なあ一夏。今日の昼飯、大きめの席で食おうぜ。シャルルと紅葉とも一緒に食べたいからよ」

ズボンだけ履き、上半身は裸で汗をタオルで拭いていたリオンが昼食の相談をすると、

「ああ、悪い。今日は俺、別の所で食うから」

着替終え、制服の上着だけ羽織っていない一夏がペットボトルの水を飲みながらリオンにそう答えた。

「別の所？」

「いや、箒が弁当作ったから、天気もいいから屋上で食べようって

誘われたからそうする予定だ」

「ほう……………」

「で、せっかくだから大勢誘ってここに案内した……………って！俺の腕の関節があらぬ方向にいいいいいい！！！」

「何がせっかくだから、だ！わざわざここに来なくてもいいだろうが！」

箒がリオンの腕を捻って絞めながら怒りを露わにした。

「せせせせ、せっかく紅葉にシャルルと知り合っただから親睦を深めるために設置したんだ！別に悪い事じゃねえだろ！」

「それはそうだが……………」

「だからお願いだから離して下さい箒さん！このままじゃ新しい境地に目覚めそうになるうううう！！！」

「……………いいだろう」

何とか納得させ箒の絞め技から開放されるリオン。その腕をブラブ

ラさせて痛みを霧散させる。

「い、いいのかな？僕までお邪魔しちゃって？」

リオンの隣に座っているシャルルが少し緊張しながら口を開いた。

「いいに決まってるんだろ。今日から同じ部屋になるんだし、男同士仲良くしようぜ」

と、リオンがシャルルのよそよそしさを吹き飛ばす勢いで話す。そのリオンの様子から残っていた緊張が消えたシャルルは、

「ありがとう。リオンて優しいんだね」

5月の暖かな雰囲気を見現化させたような笑顔でリオンに向けお礼を言った。

「お……おう……」

その笑顔に何故か顔に熱が浮かぶりオン。

「リオンさん……何を照れていらっしやいますの？」

リオンの様子にセシリアが不機嫌そうな表情を浮かべてリオンに問うのだった。

「べ、別に照れてなんかねーって！」

セシリアの指摘に慌てるリオンだが、

「ねえ、話すのもいいけど、ご飯食べながらにしょーよー！僕もっお腹ペコペコだよ」

ここに着いてから初めて口を開けた紅葉が食事にしようと言いだした。

「そっだな。このままじゃ飯の時間も無くなるし、さっさと食べよーぜー！」

一夏がそう言つと各々の容器を取り出していく面々。

箒の布に包まれた2つの弁当箱。

セシリアの高級感感じるバスケット。

鈴の何の飾り気のないタッパー。

そして紅葉の縦・横・高さ30センチの巨大な箱。

「「「「「つて、デカ！！！！！！」「」「」「」

紅葉から取り出された物体に驚く鈴以外の面々。

「じゃじゃーん！今日のご飯エリアは日の丸だよ！」

周りの騒ぎ何か気にせず箱の蓋を取り、梅干しが数個真ん中に置いた日の丸ご飯を見せる紅葉。

「え、えっと…………紅葉つて、そんなに食べるの？」

「まさか！そんな訳無いでしょ！」

「そつだよな。そんな量一人で食べるわ……………」全部ご飯じゃないよ。おかずは真ん中の段にあるから！」……………へ？」

そう言い、ご飯のある段をずらすとそこには色取り取りの様々なおかず。卵焼きやウインナーや唐揚げ等が敷き詰められている段が現れた。

「ちなみに、一番下はサラダとかの野菜関係。後デザートにチーズケーキ（1ホール）だよ！」

「……………」

もはや声を出して驚く事も出来ず、目の前のフードファイターの存在に気圧された。

「……………やっぱりこうなるか」

唯一知っていた同じクラスの鈴の呟きが屋上に寂しく響いた。

「もぎゅもぎゅもぎゅもぎゅもぎゅもぎゅ……………」

「美味そつに食つな紅葉」

「ふおおかな？ぼきゅ、いふもほんなふぁんじらけど」

「口の中片つけてから話せ」

紅葉の隠れた大食いのスキルに驚きつつ、一夏達もそれぞれ食事をしていた。

一夏は筥の手作りの弁当と、鈴の酢豚がおかずのチャーハン弁当。

シャルルは、購買で買ったパン数個。

そしてリオンは……………」

「……………」本当に大丈夫なんだよな？」

「ええ……………」

「……………」本当の本当だな？」

「大丈夫ですわ！」

「……………」

リオンが手に持っているのは、セシリアのバスケットの中のサンドイッチの1つ。シンプルな卵サンドだ。後はそのまま口に運び味わうだけなのだが、

（本当なんだよな？食べたらまた保健室で数泊するなんてオチじゃないよな？）

先日のカレー（という名の群青色の物質）の悲劇がまだ忘れられないリオンはなかなか食する事が出来ない。

と、冷や汗をだらだらと流すリオンの背を鈴が押した。

「大丈夫よ。今回はあたしが最後まで監視してたし、2人で味見もしたから卒倒する事なんてないわ。男ならとっとと食べてみなさいよ」

「……………いただきます！」

意を決して、1口食べたリオン。

「……………俺は今、猛烈に感動してる。普通に食べる！」

「大げさですけど、良かったですわ」

リオンは普通に食せる事に、セシリアはリオンに食べてもらえて、それぞれ喜びを感じていた。

「まあ、この間のカレーはアレだったけど、今回は普通に美味しいよ。頑張ったなセシリア」

「あ、ありがとうございます………また、お作りしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、今度からは楽しみにしてるよ」

リオンの誉め言葉に頬を綻ばすセシリア。その頃一夏は、

「私の方が美味しいだろ一夏！」

「いや、あたしの方よね一夏！」

「だからどっちも美味しいって言ってるだろ！」

箒と鈴が、互いの弁当の優劣を一夏に決めさせるといふ、弾が見れば『リア充もげる！』と言っだろう展開になっていた。

「そういえば、紅葉って何で専用機持ってるんだ？」

昼食を食べ終え、紅葉のチーズケーキを人数分にカットして全員で食していると、リオンが疑問に思っていた事を口にした。

「そついやそつね。あたしみたいな候補生とかだったら分かるけど、紅葉ってそういうのでもないし、『自分の家を作った』って言うってたけどどうなのよ?」

「そついや言うてなかったけど、僕は、羽桜家は、『四季家』の分家の1つなんだよ」

と、紅葉が何の前触れもなく言うつと、

「し、四季家え!?!」

紅葉の正面に座っている一夏が驚きの声を上げた。

「四季ってまさか! 『東北の氷華』 『関東の羽桜』 『関西の日向』 『九州の葉風』 の4つの分家を持つ、日本最大の企業のか!?!」

「そつ、その四季だよ」

「何だ一夏? そんなに凄い所なのか?」

「凄いなんてもんじゃねえ! 四季って言えば、産業関係だけで言えば日本一のグループ! 年間売上毎年不動の1位は当たり前! 四季が傾けば日本は終わるって言われて当たり前前の所だ!」

「そんなにか。つーかお前詳しいな」

「四季家はIS関係の事業を日本で初めて取り組んだ所だからな。俺の白式を管理してる『倉持』って専門の研究所に引けを取らない程って言われてるから自分なりに調べてたんだ。まさかその分家の子が目の前に居るとは思わなかつたけどな……………」

「そういえば、イギリスでもその四季というのは聞いた事がありますわ。何度か香水等でお世話になった気がしますわ」

「しかし、家が良い所であつ専用機持ち……………また鈴とクラス代表変わつたらどうだ？」

『そうかも』

と、リオンの言葉に賛成の意を表す鈴と紅葉以外の面々。

「な、何言ってるのよ！そんなの今更でしょ！」

「その今更な時に無理やり代表になつたお前がそれを言うか？」

「で、でも、あたしの方が勝ってる所もあるでしょうが！」

「勝ってる所ねえ……………」

鈴に言われ、紅葉と比較していくリオン。

……放課後・寮へと続く道……

「……………」

「……………」

「……………」

「……………固いなあ、もっと気楽にしてよ！」

「……………なんで私と一緒に帰っているんだ？」

「偶然だよ！偶然！」

日が水平線へと落ちて行く中、帰路に付いている篠ノ之箒は隣に並んで歩く羽桜紅葉に鋭めの眼光を向けた。

「怖いなあ。そんな疑いの目で見ないですよ」

「……………わざわざ1組の前で私を待っていた奴が何を言う。今日知り合ったばかりの私を待つ理由があるのか？」

「うん。だってもっと篠ノ之さんと仲良くなりたいもん」

明るい笑顔で箒に顔を向ける紅葉だが、箒は立ち止り数歩先の紅葉を見る。

「それだけか？……………本当は、もっと別の目的があるんじゃないのか？」

「何の事かな？」

「……………私とて、お前が只の専用機持ちならここまでの疑いはせん。だが、疑わざるを得ないからこうして疑っているんだ」

「その根拠は？」

「先程も言った通り数少ない専用機を持ち、日本最高の企業の分家の出身。これだけならまだ疑う事もなかったが、もう1つ疑う要因がある」

「何？……………その1つって？」

「一夏、リオンと知り合ったのが同時期だと言う事だ」

「……………」

「私たちがこの学園に入学して約1カ月。2人と知り合うならもつと早くてもいいはずだ。だがお前は、滅多に早く起きない一夏とタイミング良く会い、その一夏の紹介でリオンとも知り合った。しかもお前の専用機が完成したタイミングでだ。一夏やリオンに接近して2人の事やISの事を調べるために近づいていると思っても不思議ではあるまい……………実際の所はどうなんだ？」

「……………凄い観察力だね篠ノ之さん。さすが全国一の剣道の選手だね」

「っ……………」

箒に背を向けたまま言葉を放つ紅葉。箒はそれをただ黙って聞いて行く。

「そんなに……………」

「そんなに一夏君の事大事なんだね」

「……………は？」

こちらに変わらない笑顔で明るい口調で話してくる紅葉に篤は戸惑った。先程まで纏っていた疑いの雰囲気忘れてしまう程に。

「一夏君の事そこまで思ってるなんて、女なのに何か妬げちゃうね」

ぎゅううう……………

「お、おい！一体……………」

篤に近づき背後から首に抱きつく紅葉に、少し顔を赤くさせて抵抗する篤。そうこうしている内に篤の耳元で話していく紅葉。

「さっきの篠ノ之さんの疑問に答えるね。僕が一夏君と今朝知り合ったのは本当に只の偶然。リオン君と一緒に知り合おうと思ったのは、そっちの言う通り専用機が出来たからだよ」

「やはり2人を……………」

「でも誤解しないで。専用機みたいに少しでも特別な人の方が2人に話しかけると思ってたからだよ」

「そんな事思わなくてもあの2人なら、わけ隔てなく仲良くしてくれるさ」

「そうだね。それは今日分かったよ……………それに、今朝一夏君にも言ったけど、最強のお姉さんがいる人に悪質な事なんかしないよ……………」

……………」

「……………それもそうだな」

「ね？分かってくれたかな？」

「……………疑って失礼だったな。済まなかったな羽桜」

「ありがとでも、僕の事は名前でもいいよ。僕もこれからは名前で呼ぶから」

「分かった……………で、そろそろ離してくれないか紅葉。寮まで行けないんだが」

今も背後から抱きついている紅葉に離れるよう言う筈。まだ寮までは結構な距離がある。

「そうだね。でも、最後に1ついいかな？」

「なんだ？」

「僕の事はいいけど、家族の事は余り持ちこまないで。そういうの筈も嫌でしょ」

「それもそうだが、気に障ったか？」

「誰にでも家族に不満の1つ2つはあるよ。そうでしょ……………」

「IS……インフィニット・ストラトスの生みの親……」篠ノ之
「束」の妹……篠ノ之箒さん……」

「……………」
今、耳に入ってきた、さっきまでの明るさなど微塵も感じない、冷気と恐怖しか感じれなかった声に、篝は何の反応も出来ずに立ちつくした。

「それじゃあね、篝……………また、明日……………」

そう言い立ち去る紅葉に何も返さずその場に立つ篝。肩に乗っていた重みが消えたが、まるで鉄塊にのしかかられたかのように手足どころか指先1つ動かす事が出来ず、そのまま時間が流れるのだった……………

……………学生寮・1048室……………

日が落ち、夜の闇が辺りに広がった時間、1つの部屋の会話が弾んでいた。

「ああ……………まだ頭痛の感覚が残ってる……………」

「女の子の体の事言うから、ああなるんだよ。デリカシーが無いよ

「？」

「いや、言っていない。頭の中で考えてただけだぞ！なのに何で分かるんだよ！？」

「表情と視線で僕でも何となく分かったよ」

「……………次からは気をつけよう」

1048室の最初の住人のリオンにアドバイスする新たな同居人シャルルは、昼食時のリオンの反省会をしていた。ちなみに今はシャルルは荷物を整理し終え、リオンは備え付けのキッチンでお茶を煎れていた。

「それにしても、荷物整理手伝わなくてホントに良かったのか？結局何もさせてくれなかったけど」

「あ、う、うん。整理って言っても、荷物自体そんなになかったから1人で十分だよ。それに今日からお世話になる人に迷惑はかけられないよ」

「そんなに気い使わなくてもいいんだけど……………よし、煎れた」
そう言っていると、お茶を入れた湯呑みを持ってシャルルに渡すりオン。

「変わった容器だね……………それに、緑色のお茶って珍しいね」

「日本の緑茶だ。この間一夏の家で初めて飲んだ時、気にいってから自分で買ったんだ。美味しいから飲んでみてくれ」

リオンに勧められ恐る恐る、薄い湯気の立つ液体を口に含めるシャルル。

「……………なんだが、落ちつける味だね……………うん、美味しいよ」

「そっか。良かった」

シャルルの好評に喜びリオン。自分の湯呑みを机に置いて、ベットの腰かけてるシャルルの前に立つリオン。

「ま、とにかく。これから色々よろしくなシャルル」

そして自分の右手を差し出すリオン

「……………うん。こちらこそよろしくね」

それに自分の右手を出し、握手で答えるシャルル。

……………その直後、

ドンドンドンドン……………

「……………?」

部屋のドアからかなり重い、ノックと言つよりは叩きつけているかのような音に驚くリオンとシャルル。

「なんだ？一体？」

初めての事に戸惑うも、すぐにドアを開けると、

「リオン！篝来てないか！？」

血相を変えた一夏がドアの前に現れた。

「ど、どうした一夏！？そんなに慌てて？篝がどうかしたのか？」

「まだ帰ってきてないんだ！部屋に居ないし、食堂にもロビーにも居ないからここに来たんだが、篝居ないのか！？」

「居ないけど……もう完全に夜なのに帰ってきていないなんて、何かあったのか？」

「まさか……誘拐なんて事……」

「落ちつけ。ここは完璧な安全が約束されてるIS学園だぞ。侵入者どころか、ネズミ1匹も入って来れないって」

「じゃあ一体……」

「いいから落ちつけ……寮内に居ないって事は、まだ外のどこかに居るんじゃないか？俺も一緒に探してやるから、手分けして探そう」

その後、万が一寮に戻ってきた時の為にシャルルを寮の入り口に残り、一夏は校舎までの道を、リオンは各アリーナの方へと分かれて簞を探し始めた。

「簞……簞……どこに居るんだよ？」

外灯で照らされた道を、息を切らしながら走る一夏はあらゆる場所に視線を泳がした。

(……どうしたんだ簞。こんな突然居なくなるなんて……
『また』俺の前から居なくなるのか………そんなの嫌だ………)

段々と不安な感情が溜まっていく中、ある場所を曲がると、

「………簞」

小さな池の上を通る橋の上。外灯に照らされた、そこに設置されたベンチに頂垂れながら座る簞を見つけたのだった。見つけてほっとし、リオンに見つけたとメールを送りながら簞に近づくと一夏。

「箒。こんな所でどうしたんだ？心配したぞ」

箒の傍に立ち、声を掛ける一夏。すると……

「……………一夏……………」

蚊の泣くような小さな声で、酷く怯えた表情の箒が一夏の名を呼んだ。

「ど、どうしたんだ？何があった？」

見た事のない箒の怯えに慌てて隣に座る一夏。しかし、箒の様子にどう接したらいいのか分からず戸惑う一夏。

「一夏……………一夏一夏一夏あ！！！」

突如、一夏の名を連呼しながら全力で一夏に抱きつく箒。その行動に驚き一夏だが、箒の怯えようからそのまま背に腕を伸ばし優しく抱きしめた。

「一夏あ……………私……………わたし……………」

「大丈夫だ箒……………ここに居る……………俺はここに居るから……………」

自分の名を継るように呼ぶ震えた少女を、一夏は落ちつくまで優し

く包み込んでいた。

こうして、金色の貴公子・銀の冷水・春の紅葉と出会った初日は幕を閉じたのだった……………

第23話 暖桜と冷夜（後書き）

前書きに書きましたお知らせですが、お気付きの方もいると思いますが、オリジナル設定を新しく書きこみました。

追加したのは、新キャラクターの紅葉の現在のプロフィールと、各オリキャラのイメージCキャラクターボイスVを追加しました。CVは作者の好みと各キャラクターの雰囲気決めました。『何か違う！』とか思われましたら感想にて取り扱います。

また、新IS『刃風』はまだ全てをお見せした訳ではないのでまだ記入していません。刃風についてはもうしばらくお待ちください。

感想・評価お待ちしております。

それでは！

第24話 STAR DREAM（前書き）

今回は完全オリジナルの日華主人公のお話。

なぜ彼がISの世界に入っていたのかが判明します。

もちろん、彼のヒロインも登場します。

それではどうぞ！

第24話 STAR DREAM

……………早朝・IS学園・教員宿舎……………

IS学園にて生徒たちに教鞭を振るう教員達が寝泊まりする宿舎。

ブーーーーー……………

その1室の机の上で、重々しい稼働音を響かせているパソコンと接続された機器。発光しているモニターには多くのウィンドウに、そこにデータ処理をしている様子が映っていた。そしてその傍らには……………

「ぐう……………ぐう……………」

椅子に座り、机にもたれかかって眠っている部屋主がいた。

数分後……………

ピーピーピー……………

データ処理が終わった事を知らせる音がパソコンから鳴った。

「……………ん……………ううん……………」

その音を目覚ましに起き上がる部屋主。

「……………処理中に寝れてよかった……………処理時間が長かったから睡眠に回せて良かった……………3時間以上寝たのは久しぶりだな……………」

頭を搔き、外していた眼鏡を掛けて、白月日華は窓から入ってきた、昇り始めた朝陽を浴びながら意識を覚醒させた。

（今日で5月の中旬……………シャルルさん達がここに来てもう10日程経ったか……………）

備え付けのキッチンで煎れたブラックコーヒーを飲み、TVとパソコンで同時にニュースを確認する日華。

（……………アメリカとイスラエルの合同でのIS開発に着手か……………
……………合同開発って事は、軍事用かな？）

パソコンの画面に映った情報を見て新しいISの情報を見る日華。

（軍事用とはいえ、またISの研究が進むか……………素直に喜ぶべきか……………）

と、思っていると、

ぐう~~~~

「……………時間も時間だから食堂に行くか」

まだ生徒が使っていない時間帯に合わせ、コーヒーを飲み干して食堂に向かう日華。

「すみません。いつものお願いします」

「はいはい。ちょっと待っててね」

食堂に付き、担当のおばちゃんに注文する日華。

…………… 3分後。

「はい。“ほうじ茶の梅お茶漬け・とろろ昆布と海苔佃煮のせ”お待ち」

「どうもです」

茶碗と小皿に乗った漬物に乗せたトレイを持って席に座る日華。

(やっぱり朝はこれだね。これが無きや始まらない)

以前、リオンの前でこれを食べた時、『二度と俺の前でこれを食べな!』と、言われ、なぜこんなに美味しい物が受け入れられない理由が分からない日華は本気で悩んだ事もあった。

ジュルジュルと、音を立ててお茶漬けを食していると、備え付けの

TVからニュースが聞こえてきた。

『続いているニュースです。フランスの大手IS企業、デュノア社の株価がまた下落しました。これで半年連続での下落となります』

「……………」

再び耳にするISの情報。しかし今度は発展とは真逆のマイナスでの情報だ。

『フランスでも最大級のIS企業のデュノア社。社長のアルフレド・デュノア氏によれば今年中にも立て直せるメドがあるとの事ですがどうなるのでしょうか……………では、次のニュースです……………』

「……………」

じゅじゅじゅじゅ……………！……………ポリポリポリ……………

一気にお茶漬けと漬物を胃に流し込み席を立つ日華。

「さて、送られてくるアレの準備でもするか」

気を切り替えていつもの場所へと向かう日華。

その数分後……………

「さて、今日はなにお茶漬けにしようかな……………」

日華とは入れ違いで、ぶかぶかのフード付きパジャマを着た少女が朝食のため食堂に来たのだった。

…… IS 整備室・日華専用スペース……

「……………よし、学園用に合わせたプログラムはこんな物か」

いつもの場所で、パソコンにあらゆる記号とコードを打ち込んだ日華は一通り終わった事に安堵の表情となる。

「しかし、国も結構太っ腹だな。ウチの量産機の『ティガーズ』を3機だけとはいえ提供するなんて」

先程完成した、IS 学園用に調整したオーストラリアの第3世代量産機『ティガーズ』のプログラム。

(ま、結構な無茶をして、リオンと僕をここに送ったから、これぐらいはして当然か……………)

と、日が少し西に傾き始めた空を窓から眺めていると、

「……………はあ、まだ駄目か……………」

「ん？」

隣のスペースから聞こえてきた溜息。気になり身を乗り出して覗くと、

「中々うまくプログラミング出来ない……………やっぱり無理なのかな……………」

そこには、この整備室でもう何度も目にしている、眼鏡を掛けた水色の髪の女生徒が、目の前の機体に向かいながら憂鬱な表情を浮かべていた。

「……………ううん。あの人には出来たんだ……………私も頑張らなきゃ……………」

表情に鋭さを戻して再び機体に近づいて行く彼女を見ながら身を引つ込まず日華。

(ここで作業し始めて、1カ月程経つけど、彼女を見ない日は正直無いな……………あんなに必死になる理由があるのかな……………)

機体を……………見た感じでは量産機『打鉄』の発展型であろう機体を真剣に組み込んでいく彼女。数少ないオリジナルな機体なのを見ると、彼女もどこかの候補生なのかもしれないと思考する。

(正直、僕が手を貸せば結構な早さで組み上がれるんだけど……………)

しかし、それは無理なことである。日華はオーストラリア政府直属のISの技術者。自国所属、もしくは今居るIS学園の機体を調整するなど手を加えるのは何の問題も無い。

しかし、もし他国の専用機に少しでも手を加えたりしたら、良くて訴訟。最悪、国家間での戦争に発展してもおかしくは無い。現に、『大事でもない限り専門外のISに手を加える事は禁ずる』と、IS運用協定である『アラスカ条約』にも記載されているのだ。もしこれを犯してしまえば、二度と太陽を拝めれない事になりかねないのだ。

(……………ま、僕も初めての機体のティガーズを組み立てるのに1年丸々使ったからね……………彼女自身に頑張ってもらっしかないね) 頭の中でそう纏め、自身のスペースの明かりと電源を落として整備室を去る日華。

その数分後……………

「かんちゃくん！お手伝いに来たよ！」

ISスーツを身につけた、マスコットのキツネの髪飾りをつけた少女が、またも日華と入れ違いでやってきた。

……夜・日華自室……

「……………どうしよう……………珍しくやる事が無い」

自室のベッドでゴロゴロとし、本当に珍しくやる事が無くなった日華は何かすべきかと悩んでいた。

(I S の整備にプログラミングは……………ノルマ分は終わってる……………夕食も、生徒達となるべく会わないように早めに終わらせたし……………TVは……………今日は朝から見ればっかだから見る気が無い……………暇だ……………)

意味無くゴロゴロとベッドの上を行ったり来たりして、ただ時間が流れて行くのを何もせず過ごす日華。

(いっそ、向こうの家族に連絡でも……………駄目だ。メールだけなら嫌われてるって思われて泣きだしそうだし、電話を掛けようものなら最低でも2時間は電話は離せない状況に確実に……………これも無しだ……………)

海の向こうで生活している家族の事を思ったが、すぐさまその考えを頭から消し去る日華。

(仕方ないから、久しぶりにぐっすり睡眠をとろうかな……………)

そう思い、手に持っていた i p a d の電源を消して寝ようとする

「ん？」

i p a d に映っていた1つの情報に目が行く日華。

「……………そういや、ここに来てから一回もしてなかったな」

寝ようとしていた考えを蹴っ飛ばして、クローゼットを開け、そこから何かを取り出して部屋から出て行くのだった。

……………寮内・ロビー……………

「んぐ……………んぐ……………はぁ〜！……………やっぱ、お風呂上がりの牛乳はいいね〜！」

お風呂で温まった体に、瓶に入った牛乳をグイッと飲みほしたのほほんさん。もちろんいつものパジャマを装着してだ。いつもより遅めにお風呂に入ったので時間はもう消灯時間近だ。

「さ〜て、早くお部屋に戻ってぐうぐう寝よ〜っと」

自室のフカフカベットに心躍らしながら戻ろうとすると、

「……………あ……………」

視線の先の階段。そこに、白衣を纏った黒髪の少年が大きな何かを背負って、階段を上って行くのが目に入ったのだ。背負ってた荷物のせいか、自分に気づかずそのまま上に向かっていくのを見ていた。

「……………」

彼の姿が消えてからのほほんさんは考えた。階段を下っていけば、自分の部屋はすぐそこだ。そのままベットに入り明日の朝までぐっすりと寝るだけだ。

逆に、階段を上がっていけば、もしかしたら彼と一緒に時間を過ごせるかもしれない。しかし、時刻は消灯間近。上に行けば時間に間に合わず、寮監の千冬に怒られるのは確実だ。

「……………うん」

しばし考えたのほほんさんは目の前の階段を……………駆け上がっていった。

……………学生寮・屋上……………

「しかし、なんとか許可がとれたのがここだったなんて……………事前
に出来る所を確認しとくべきだったかな」

寮の階段を昇って行き、事故が起きないように仕切られた高いフェンス以外は何も無い空間の真ん中で、日華は背負っていた物を地面に降ろし、それを組み立てて行く。

「ま、許可を出してくれただけでも感謝しなきゃだね」

自分が今しようとしている事が出来る場所を、学園の事務で確認と許可をもらってから急ぎ足でここまで来た日華はいつと違い年相応な明るい顔になっていた。

「……………よし、出来た。今日は『雲1つない星空』みたいだから絶好のチャンスだね」

先程の i p a d の天気情報通りの夜空に嬉しさが沸き起こる日華。実際にコレをするのは I S 関連で忙しいため実に3カ月ぶりなのだ。

その日華の視線の先にある、組み立てた物は、

上に設置する物を支える3脚の脚立。

その上に置かれた、白が基調に大きな筒。

そしてその手元にある覗くように設置された接眼レンズ。

「じゃあ始めますか。『天体観測！』」

天体観測。 I S 以外の日華の数少ない楽しみである。

「お！あれは獅子座のレグルスか！初めて見たな！」

接眼レンズの先に見える、夜空の星々。しかもオーストラリアの南半球では見る事の出来ない星と星座が次々と見えてくる。

「日本で見る星も最高だな……ホント、いいなあ……」

目に入ってくる、この世で最も綺麗な自然の光景に惚れ惚れとしていると……

ギィ……

「ん？」

屋上の入り口の扉から軋む音が聞こえてきたので視線を向けると、そこに影になっていて良くは見えないが1人の人影が見えた。

「生徒さんですか？もう消灯の時間なんじゃ？」

「あ、あの、その……き、君がここに来るの見たから、気になつて……」

(ここに来るまでに誰かに見られたか……)

「事前にここに居る許可は僕は貰ってますから僕は大丈夫です。で

も君はそろそろ戻らないといけないんじゃないか……」

「わ、わかってるよ……でもね……」

すると、その人影は日華に近づき……

(あれ………そう言えば………この声って!?)

人影がはつきりと見える範囲に入る寸前、この人が誰か判別した日華の目の前に、

「ど、どうしても………会いたくなっちゃって………」

微かな月明かりに照らされた屋上で、日華は星空よりも魅力的な存在を目にした。

「あ、あゝ、そ、そうでしたか。でも、なんで僕に会いに？」

何とか平面上は冷静に対処する日華。しかし、いつもの事ながら内心は、

(だからなんで何時も不意打ちみたいに出会っちゃうの!何の事前準備もしてないってのに!)

いつものテンパリ具合となっていた。

(てゆうか、今の彼女の姿って何!?ダボダボのパジャマ……いや、パジャマというよりどこかの電気ネズミのコスプレか!?まあ、可愛いから別にどうでもいい………じゃなくてだ!)

「え、えとね……………そ、その……………なんでだろ？」

「はい？」

「その……………理由は無いけど……………会いたくなつた……………でいいかな？」

「いいかなって……………」

理由は無いのにここに来た。そう言われたのは初めてだった日華は少し失笑した。しかし、今は5月。暖かくなってきたとはいえ、夜は結構涼しくなる方である。自分は最低限の防寒をしているが、なんの準備も無くここに来てる彼女には結構厳しい環境である。

それを考え、もう帰った方が良いと言おうとするが……………

「迷惑じゃないなら……………いても……………いいかな？」

上目遣い+少しうるんだ瞳+おどおどとした声、の3連コンボを受けた日華は、

「いくらでも居てくれて結構です」

考えてた台詞とは180度真逆の言葉を口にした。

「ほえ、わたし、こつやって星見るの初めてだな〜きれ〜」

「そっか。喜んでくれて良かった」

しばらくし、天体望遠鏡で星を見るのほほんさん。その後ろでフェンスにもたれながら地面に座る日華。

（喜んでくれて良かった……今日、天体観測出来る状況で無かったらこの時間も無かったんだろうな……）

と、色々と幸せを感じていると、

「ねえ、隣いいかなあ？」

「へ？」

目の前で前かがみの体勢で隣に座る許可を求むのほほんさん。

しかし、今ののほほんさんの状況……

緩めのパジャマ

ゆるゆるなので空間が出来やすい

体勢上、首元に空間が出来て……………

存在感あふれる胸部が見えてしまうのだった。

「いいいいいいいい、良いですよ！どうぞどうぞぞー！」

「？」

日華に慌てた状態に不思議と思わず隣にちょこんと座るのほほんさん。

「どうでした？星空の感想は？」

「うん。あんなに綺麗なの初めて見たかも！」

「そうですね、良かったです」

肩が触れるか触れないかの距離で天体観測の話に入る2人。しかしお互いに、自分の隣存在に意識する2人だった。

「それにしても、ISの研究者って聞いてたから、こういう事するの意外だったな」

「そうかな？」

「わたしの知り合いに、IS以外の事は眼中に無いって子がいるからっいゝゝゝ」

(どんな人なんでしょう……)

その知り合いが近くに居るとは知らない日華だった。

「まあ、僕の場合、ISより先にこっちの方が趣味になつてたからね」

「そうなの？そんなに星が好きなのに、何でISの世界に入ったの？」

「なんでって……その……」

まさかの質問に、答えるのに躊躇う日華。正直、この話をするのはリオンと家族以外にはした事が無かったので話すのに恥ずかしい感情があつた。しかし、今は自分の想い人から聞かれている。ここは素直に言うしかないと思うのだった。

「僕には、小さい頃から夢があつてね。そのためにもISの発展が1番の近道だと思つているんだ」

「夢？」

「うん。僕はね……」

宇宙に大きな夢があるんだ」

「宇宙？」

「うん。きつかけは、小さい頃に父さんに見してもらったオーストラリアの夜の星空なんだ。かなり空気の澄んでた所で見ただけで、凄く綺麗だね。今もあの星のカーテンのような空は忘れられないよ」

自然と視線を上に移し、日本の夜空を見ながら話す日華。

「その時から、星とか宇宙に興味を持って凄く勉強してね。宇宙に行ってみたって子供な夢を持つようになったんだ。そんな時だよ、ISの存在を知ったのは。人1人を確実に安全に守る事の出来る、宇宙服の進化した形。これを発展させていけば必ず宇宙開発に役に立てる。そう思ってここまで研究してきた……………ま、今は軍事関係にしか使われていないけどね……………」

生き生きとした様子で話す日華を、隣で静かに見て話を聞くのほほんさん。

「けど、何時になるか分からないけど、本来のISの利用方法を発

「展させて行きたい……………『宇宙へのISの発展』……………それがIS研究者、白月日華の夢なんだ」

「……………」
「て、世界中に居るIS関連の人達に聞かれたら鼻で笑われそうな夢だけど……………って!？」

話した自分の夢を呆れたように言う日華の手に、暖かい感触が包み込まれ驚く日華。その手を包んだのは、

「……………笑ったりなんかしないよ」

隣で優しく口元を綻ばしたのほほんさんの手だった。

「私なんか、そんな明確な目標も夢も無いんだよ。君みたいにそんな素敵な夢を持つてる人を笑ったりなんか出来ないよ」

「そ、そうですね?」

「そうだよ。それに、もしその夢が叶ったら逆に君を笑った人達を笑い返したらいいよ」

「笑い返したりなんかしないけど……………」

のほほんさんの自分を支持してくれる言葉に嬉しさを感じる日華。

「でも、リオンは分かってくれたけど、僕のこの夢を知る人はそんなに居ないから、支えてくれる人なんかそう居ない……………」

「ここに居るよ」

「……………へ？」

「少なくとも、君の夢を応援してる人は……………ここに居るよ」

いつか見た最高の笑顔と共に、自分の夢を応援してくれる人がいてくれた事に、

（16年間……………生きてきてここまで嬉しい事はないかも……………）

今まで、夢を抱いて生きてきた事に心の底から感謝していた。

「……………ありがとうございます。布仏さん」

「本音」

「え？」

「本音……………名前で呼んで欲しいな。あと、そんな他人人口調じゃなくて、もっと親しい感じで話してほしいな」

「あ……………ありがとうございます……………ほ……………ほ……………本音…………………………さん」

「ん」

名前を呼ばれ、手を握ったまま日華の体に自分の体をもたれさせるのほほんさん。それに一瞬、戸惑う日華だが、

(彼女に会えて……………本当に良かった……………)

今感じる幸せを逃がしたくないので、そのまま時間が流れるのを感じながら、この時を過ごす日華だった。

その後、たまたま見回りをしていた清掃員のおじさんが見つかるまでそのまま居た2人。

寮でのほほんさんと別れた日華は、今までで感じた事のない暖かな幸せを感じながら眠るのだった。

そのせいか、翌日、人生で初めて、昼過ぎまで寝過ごした日華だった。

第24話 STAR DREAM（後書き）

今回は、原作通りのアリーナでの訓練をお送りします。

感想・評価お待ちしております。

第25話 銀の狂気 貴公子の秘密（前書き）

さて、再び原作沿いのお話。

色々と原作とは違う流れになっております。

それではどうぞ

第25話 銀の狂気 貴公子の秘密

…… IS学園・第2アリーナ……

本日は土曜日。IS学園は土日が休みになってはおらず、基本土曜は午前中は学業に当てられている。

そして今の時刻の午後は、学生のアリーナの完全開放の時間となっております……

キンキン……ドオン……ドドドン……ドオオオン！

アリーナのフィールドで巻き起こる騒音に土煙。そこから4つの影が現れた。

「ああ、くそ！相変わらず厄介な衝撃砲だな！」

「あのパワーだけは俺達の中でも突出してるからな」

白い鎧を纏った一夏と金色の鎧を纏ったリオンが並んで現れ、

「ああもう！もうちょっとで仕留めたのに！」

「シャルル君！あつちを余所見する余裕が、あるのかなっ！」

距離を縮め、シャルルを間合いの中に入れると、小太刀を収納し長刀を取り出し

「まだまだだよ！」

それを見て、サブマシンガンを収納し、両刃のロングソードを2本で応戦していく。

さて。なぜ全ての1年生専用機持ちがこうしているかと言うと、せっかくの専用機持ち全員がこうして仲良くなったので、いっそ訓練も一緒にしようと言い出したのはリオン。他の専用機持ちもそれに賛成した。他の生徒達から不評があるかと思われたが、『色々と参考になるかもしれないから別に良いよ』と、時間制限付きで許してくれた。現に他の生徒達は観客席で全員の戦闘を観察していた。こうして組に分かれてガチでの戦闘を繰り広げる事が出来るのであった。

そして……

「きゃあー！」

「うにゃあー！」

セシリアと鈴が地に着き、

「これで」

「終わりだな」

セシリアの前に、零落白夜でブルー・ティアーズの光弾を斬り伏せた一夏が。鈴の前に、持ち前のスピードをフル活用したりオンが立っていた。

そしてシャルルと紅葉は、

ガアアアン!!!

「……………ここまでだね」

「残念。また引き分けだね」

シャルルのハンドガンの銃口が紅葉の、紅葉の手のクナイがシャルルの、互いの眼前に突き刺さり2人の勝負は引き分けとなった。

「あーっ！もう！負けたー！ー！ー！ー！！！」

「結構いい所まで行きましたのに、残念ですわ」

「ま、次もまた違う組み合わせでやれば結果も変わるだろ」

各々、ISを待機状態にし先程まで戦闘をしていたグラウンドで感

想を言い合っていた。

「それにしても、シャルルと紅葉の『ラピッド・スイッチ対決』は中々白黒つかないな」

「ま、あっけなく終わるよりは良いけどね」

と、シャルルと紅葉。2人の得意技でもある、高速武器切り替え『ラピッド・スイッチ』。紅葉の剣など近接武器と、シャルルの銃などの遠距離武器と勝手は違うが、同じ技を得意とする者同士。優劣を決めるため、先日からこの専用機持ちの訓練において一騎打ちのスタイルで戦りあっているが決着はつかずにいた。と、そこに……

「凄かったな皆。参考になつたぞ」

観客席にいた篤が、飲み物とタオルを人数分持ってグラウンドにやってきた。他に観客席にいた他の生徒達も次々とやってくるのが見える。

「おお、サンキュ篤」

順に配っていく篤だが、

「ありがとね、篤」

「あ……………ああ……………」

最後に渡した紅葉に戸惑いの表情を浮かべる篤。

(……………またか。あの2人何かあったか?)

その様子に疑うリオンだが、その事を聞こうとしても、当の本人にはぐらかされてしまうので聞けずにいるのだった。

「そ、そういえば一夏とシャルルはどこだ？見当たらないが？」

「ああ、あそこよ」

篝の問いにある場所を指さす鈴。その方向に視線を向けると、

ドオン…………ドオン…………ドオン…………

「うん。良い感じになってきたよ」

「やっと、銃の感覚に慣れてきたかな？」

ライフルの使用許諾をシャルルから貰った一夏がそのライフルを構え、後ろから抱かれるようシャルルに支えてもらい、空に浮かんだターゲットに向け発砲していた。

この光景も専用機組の訓練ではおなじみのものである。装備が雪片という近接武器だけの白式。そのため、銃系統の特性などが掴めなかったため、豊富な重火器と言う後付武装イコライザを拡張領域バスターに搭載しているシャルルから手とり足とり銃について教えてもらっている一夏だ。

「……………」

かなり密着して一夏に教えているシャルルを見て、ジト目で視線を送る篤に鈴。

「あゝあ。あそこで一夏の後ろに居るのが私なら良かった……………
て、目で見るとは行ってこいよ」

「「っ！！！！！！！」」

自分達が今正に思っていた事をリオンに口に出され驚愕する篤と鈴の2人。まさか一字一句そっくりそのまま言われるとは思ってもみなかったらしい。

「ななななな、何を言ってるのだリオン！？」

「そそそそそ、そうよ！？何時何処で私達がそんな事思ってたのかしら！？」

視線を泳がせ、手を慌てて振りながら否定するも、その様子が何よりの肯定の証拠である。

「お。来てたのか篤」

「なに話してたの？」

と、そこに一通りの射撃練習を終えた一夏とシャルルがやってきて、
箒と鈴の慌てた様子を聞くが、

「なんでもないぞ！」

「なんでもないわよ！」

2人同時に大きな声で反論されてしまった。それと同時にアリーナの
一部がざわめいてきた。

「ねえ、あの機体って……………」

「うそ。ドイツの第3世代機？」

「まだ本国でトライアル段階って聞いてたけど……………」

アリーナのほとんどの生徒が視線を向ける先のピッド射出口に居た
のは、

紅葉の刃風の黒と違い、深く暗い深淵の闇を思わせる漆黒の装甲。

2基の大型スラスタに右肩部の大型レールカノン砲。

機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』ドイツ語で“黒い雨”の名
称の機体を身に着けるのは、

「ボーデヴィツヒか……………」

1年1組在籍、ドイツの代表候補のラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「アイツなの？一夏の事ひっぱたいた奴って？」

「ええ……………その後の篝さんの方が印象的でしたけど……………」

鈴の問いに、当時の事を思い出して顔を青くするセシリア。

「……………織斑一夏」

「……………なんだ？」

漆黒のISを身に纏い一夏に口を開くラウラ。両者の間には何とも
言えない空気が漂っているのが分かる。

「貴様も専用機持ちみたいだな……………なら、私とここで戦え」
ラウラに戦闘を申し込まれ、自然と右腕のガントレットに手を伸ば
す一夏。だが、すぐに手を引っ込めまっすぐにラウラに視線を向け
る。

「断る。俺には戦う理由が無い」

「貴様には無くても私にはあるのだ！」

一夏の返答に荒々しく発言するラウラ。2人の様子にそっと立ち上
がり、一夏の隣に立つリオン。その目には一夏に負けず鋭く視線を
送っていた。

「これ以上我儘言わない方がいいぜ。生身の人間にISの兵器ぶっ
放すつもりか？」

「貴様は関係ない。引っ込んでいろ」

「……………冷てえお言葉」

「とにかくだ。今は戦わない。これが俺の答だ」

はっきりとラウラに向け自分の答を返す一夏。

だが、

「なら、戦わざるを得ないようにしてやるっ!」

一切の躊躇もせず、肩のカノン砲の砲口を一夏に向け

ドオン!

轟音を轟かせ弾丸を発射した。

「な!?!」

まさか本当に攻撃してくると思っただけでなかったため反応が遅れた一夏とリオン。だが、次の瞬間、

フォン!

2人の目の前を黒い影が横切り、

カアアアン！

甲高い音が鳴り響いた。

その黒い影の正体は

「ねえ、いくらなんでも非常識すぎないかな？銀髪ジャーマンさん？」

IS・刃風を纏い、片足を上げて応戦状態の紅葉だった。その傍らには、真つ二つにされた弾丸の残骸が転がっていた。

（まさか………弾丸を“蹴って”斬ったのか？）

金色の爪の脚部を見たりオンが、まさかな応戦方法に驚いているが、それには触れず会話が続く。

「何だ？島国の弱小な専用機を持つ分際で立ち塞がる気か？」

「礼儀知らずなドイツの人よりは強いと思っっているから、余計な心配だよ」

「ほざけ」

静かに蓄積されていく緊張感。いつ2人がぶつかりあってもおかしくない状況に他の生徒達も遠目に不安になっていくが………

その不安が吹き飛ぶ出来ことが起こった。

ムムム……………

注意！飛来物接近！

「な！？」

シュヴァルツエア・レーゲンのモニターからの警告にラウラが反応し、その方角を向くと、

ガツゴオオオオオオン！！！！！！

凄まじい衝撃と接触音を発生させながら、高速で飛んで来た物体を紙一重で掴んで停止させたラウラ。その飛来物は、

「……………近接ブレード？」

それはISでは一般的な、打鉄の基本装備である日本刀型のブレードだった。そんな物がなぜ飛んできたか疑問に思い、軌道を追っていくと1人の修羅が、正に射殺さんばかりの睨みをラウラに向けながら立っていた。

「……………またか」

そう呟いたリオンの視線の先には、

「ほ……………箒……………なのかな？」

シャルルが呟く通り、そこに居たのはISスーツを着た生身の箒だった。すぐそばに打鉄を装備していた他の生徒が腰を抜かしてへたりこんでいるのと、その打鉄にブレードが無いことから、

「（（（（強奪して、生身で近接ブレードをブン投げたのか!?）（（（（（

と、全員同時に同じ答が浮かんだのだった。

ちなみに、近接ブレードは重さを考えれば生身では投げる事はもちろん持ち上げる事すら無理な代物。

そして現在の箒とラウラの距離は数十メートルも離れている。野球の球などなら分かるが、ISが使用するのが前提な武器を生身で放るなどまず不可能だ。

この事から、生徒達が次に同時に思った事は、

「（（（（織斑先生より怖いかも）（（（（

だった。

「きいさあまあ……………閻魔に懺悔する覚悟は出来たかあ……………」

1組の面々はすでに体験した『修羅箒』が再臨したアリーナに重い

秀囲気が漂う。

「また貴様か。お前は一体なんなのだ!？」

前と違い、今回はISを展開しているからか余裕を持っているラウラ。このまま箒の元に向かおうとすると、

『その生徒!何をしている!学年とクラス!学籍番号を言え!』

アリーナのスピーカーから聞こえてくる声。恐らく担当の教師の物だと思われる。

「……………興が削がれたな……………今日の所は引こつ」

ISを粒子化させ、一瞬で待機状態に戻すと、足早にその場から居なくなるラウラ。

「……………次は四肢の一つは潰す」

立ち去ったラウラを見て、かなり物騒な発言の後に何とか怒りを抑えた箒。

その後は、流れるに各自解散となったのだった。

……………アリーナ・男子ロッカールーム……………

「箒。またあの状態になったな。何とか止めれないのか?」

「それが出来るならとつくにしてるって話だ」

ロツカールームで着替えながら会話する一夏にリオン。シャルルはISスーツの上に制服の上着を羽織っただけですぐに出て行ってしまった。

先の幕の事が話題になるが、あの様子からどうこう出来る物ではない。

「ま。ボーデヴィツヒのした事は誰が見ても許せない事だからな。あの幕があれだけ怒ってもおかしくないけどな」

ハハハ、と軽く笑いながら話一夏に、

(違う違う違う。幕があれだけ怒ってるのは、お前が理不尽に危険な目にあってるからだ)

リオンは心の中で突っ込む。

(……………やっぱり、聞くべきだよなあ……………)

「なあ一夏。お前、ボーデヴィツヒに何したんだ？」

「っ……………」

「転校初日にひっぱたかれて、さっきなんか生身なのにISで攻撃されて……………相当恨まれてないところまでされないぞ」

「……………思い当たる所はあるけど、言うわけにはいけないんだ」

少し表情を暗くした一夏が答えるも、その言葉にも暗さが含まれていた。

「何でだ？原因が分かってんなら、謝るなり解決するなり方法はいくらでも……………」

「お前には関係ないだろ！」

「っ……………一夏？」

「悪い、怒鳴ったりして……………でも、こればかりは……………迷惑掛けるわけには……………」

「……………悪い。何か無理やり関わろうとして……………」

「いや……………」

一夏の怒鳴り声に押し黙るリオン。気まずい空気がロッカールームに漂っていく。

「悪い……………先に帰る」

着替え終え、そう言うと足早に出て行く一夏の背中を見送りながら考えるリオン。

(ボーデヴィツヒの奴……………一夏には厳しい一方、千冬さんには絶対の信頼を置いて……………一夏だけでなく千冬さんにも何

か関わってる……………とりあえず、自力で調べてみるか)

そう決め、とりあえずパソコンの設置されている所に行ってネットで出来るだけ調べようと思うリオンだった。

……………アリーナから寮へと続く道……………

夕陽に照らされた整備された道を歩いて寮への帰路に着く一夏。だがその表情はいつもと比べ、影が濃く浮かんでいた。

(リオンに悪い事したな……………次会った時にでも謝らないとな)
先の自分の行動に反省しながら無意識に歩いていると……………

515

「なぜここで教師などしているのですか！」

「っ…」

ついさっきまで、自分に憎しみの感情をぶつけてきた相手の声が聞こえてきた。辺りを見て、傍にあった木の陰に隠れて声の聞こえてきた方を覗くと……………

「こんな極東な地であなたが教える事など無いはずなのに、どうしてこの地に留まっているのですか」

「私にはやるべき事がある。それだけだ」

夕陽の光が銀髪に照らされ、感情を大きく表に出しているラウラ。そしてその相手をしているのは、一夏が姉、織斑千冬だった。

「やるべき事？……………こんな所であなたがすべき事などありません！今一度ドイツに戻り再びご指導を！こんな所ではあなたの実力の半分も活かせれません！」

「ほづ……………」

珍しく饒舌になるラウラの発言に、短いが鋭さのある返事を返す千冬。だが興奮しているせいかその様子に気づけずにいるラウラ。

「大体この生徒など、ISをまるでファッションのような物と勘違いしています。そんな連中にあなたのような選ばれた人間が指導する必要など……………」

「そこまでにしておけ。小娘が」

「っ！……………教官……………」

はっきりとした拒絶の感情を込めた千冬の返事に、今度こそ口も態度も固くなるラウラ。

「しばらく会わない内に、偉くなったものだな。たかが15歳の小

娘風情がもう選ばれた人間気取りか？笑わせる」

「わ……………私……………は……………」

「もついい。とつとと寮に帰れ」

「っ！」

耐えられなくなったか、まるで逃げるかのように走って去っていく
ラウラ。その姿を見る事もなく千冬はその場に立っていた。

そして、完全にラウラが見えなくなると同時に……………

「……………その男子生徒。盗み見は感心できんぞ」

背後で隠れている一夏に向け、いつもの様子で話し掛けてきた。

「……………いや、盗み見する気なんか。ただ偶然……………」

「本気にするな……………それにしても、ひどく疲れてる顔だな」

「そんなこと……………ない……………」

「そうか……………もつすぐ日も暮れる。早く寮に戻れ」

そう言い建物の方に足を向ける千冬に一夏は口を開ける。

「あの！……………その、ボーデヴィツヒが、俺に怒ってるのって……………
やっぱり、例のあの事……………」

「お前が気にする事はない。もう過去の事だ」

一夏に顔を向けることなく返事を返す千冬。その言葉にはこれ以上言うなの意味が込められていた。

「で、でも……………」

「何度も言わせるな。もう過去の事だ……………お前は何も悪くない」

“何も悪くない”

その言葉は今の一夏には逆効果だった。

「そんな事ないだろ！」

「!?!」

一夏の怒鳴りに流石に振り返り正面から一夏を見る千冬。

「そもそも俺があの時！あんな事にならなかつたら！千冬姉もボ―デヴィツヒも！さっきみたいにならずに済んだんじゃないか！」

「いち……」

「全部俺が原因なのに！悪くないなんて言うなよ！全部……全部俺のせいなんだから！！！」

大声で言いたい事を全部言つと、全速力で寮までの道を走っていく一夏。

「……………一夏」

先のラウラと違い、今度はその後ろ姿を見えなくなるまで見つめる千冬。

その表情は、IS学園の教員としてではなく、1人の姉、織斑千冬としての表情が浮かんでいた。

……寮・1048室へ続く廊下……

ほとんど日も沈み、夜の闇が空間を覆っていく時間。リオンは自室へと足を運んでいた。

(…………… ネットじゃほとんど分からなかったな…………… 分かったのは、千冬さんが少し前までドイツに居た事…………… そして、そのまた少し前にISの世界大会、モンド・グロツソの決勝戦を棄権して2連覇を逃した事位だったな……………)

自分なりに調べた結果にまだ満足がいかないリオン。だが、さすがにこれ以上は調べられない事に悩むが、

(こうなりゃ、日華に頼んでみるしかないか。これで断られたらもう打つ手が無いけどな)

と、思いながら歩いて行くと自室の前にたどり着き、そのままドアを開け入っていく。

「シャルル。今戻ったぞ」

ルームメイトに帰ったと言うが、部屋には人の影が見当たらず、その代わりに、

シャアアアア……………

シャワールームから水が流れる音が聞こえてきた。

「先にシャワー浴びてるのか。ま、帰ってくるの遅かったから別にいいけど」

鞆を机に置き、ベットに腰かけそのまま寝転ぼうとするが、

(あ、そついや……………)

何かに気づき、傍の引き出しから何かのボトルを掴みシャワールームに入るリオン。

「おいシャルル。シャンプーもう切れてるだろ」

ウィイン……………

「替えのやつ……………持って……………来……………」

「へ？」

替えのシャンプーを持ってきたリオンの目の前で、シャワールームの扉が開かれ、その先でシャワーを浴びていたシャルルの姿が視界に入る。

だが、おかしな物が視界の中に入った。それは、男性の体には存在しない、ふくよかな胸の膨らみ……………すなわち女性特有の体つきの物だった。

「……………あ……………きゃあー！」

目の前のリオンに体を見せないよう後ろに下がる目の前の人物。

髪色や顔からシャルルだと分かるその人物は、

可愛い女子そのものだった……

第25話 銀の狂気 貴公子の秘密（後書き）

次回、シャルルの告白にリオンの説得。

男らしいカッコいい説得にしていきます。

次回もお楽しみに。

感想・評価お待ちしております！

それでは！

第26話 未来を生きよう(前書き)

と、原作2巻でも屈指のシャルのシーン。

相手がリオンなので一夏とは違う展開になりましたが精一杯頑張りました。

それではごっぞー！

と、落ちつきの無い様子で待つ事、十数分後……

ウィーン……

「っ！……」

シャワールームの扉が開く音が聞こえ、伏せていた視線を少し上げて見ると、

「……………」

いつものシャルルのジャージを着こんだ、“胸に膨らみ”がある人物がタオルを肩にかけて隣のベットに向かっていた。

（やっぱり、どうみても女の子……だよな？胸は何かで押さえてたのか？）

と、頭の中で思っていると、ギシイと音を軋ませてベットに腰かける女子。背中をこっちに向ける座り方をしているので表情が見えない様子に緊張が増すリオン。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

そのまま沈黙の状況が続き、中々話に切り出せない空気が1分程経ち……………

「あー、その、お茶でも……………煎れるか？」

「へ！？あ、う、うん……………貰うよ……………」

空気を変えるため台所で緑茶を煎れる準備をするリオン。だが気になるのか何度もチラチラとシャルル（？）の方を見てしまう。

（落ち着いて聞いたら、この声シャルルの声だよな。てことはやっぱりあの娘はシャルル……………なんだな……………）

2人分の緑茶を湯呑みに煎れると、それを持ち運んで部屋に戻る。

「はい。少し熱いから気をつけてな」

「う、うん。ありがとう」

湯呑みの1つをシャルルに手渡すと、

ピト……………

と、指と指が軽く接触し、

「ひゃあー！」

シャルルがそれに驚いて湯呑みを手放してしまった。

「って、ちょ……………あちちちちちち！！！！」

落下しそうになった湯呑みを空で掴んだりオンだが、その時の衝撃で中のお茶のほとんどが飛び出てリオンの腕にかかってしまい、慌

てて台所の水道で冷やし始めた。

「ああ！ご、ごめんね！大丈夫！？」

「あ、ああ。なんとか」

「ちょっと見せて」

心配そうにリオンの体に近づき、水を当てている腕を不安な顔持ちで見るシャルル。

「ああ、赤くなってる。ほんとにごめんね」

「い、いやあ、だ、大丈夫だから……………だから、その、離れてくれないか……………当たってんだけど、色々」

「へ？」

顔を少し赤くして途切れ途切れに話すリオンに言われ自分の今の様子を見るシャルル。冷やしている腕がよく見えるよう体を密着していたため、自分の胸をリオンに当てつけている体勢なのによろやく気付くのだった。

「あ……………」

慌てて離れ、リオンに背中を見せながら離れ、腕を胸の前でガードするように庇うとリオンの方に振り向き、

「リオンのえつち……」

と、赤く染まった頬を感じながら、そうリオンに言うシャルルだった。

「俺が悪いのかよ!」

そのリオンの突っ込みに応える者はいなかった。

で、しばらくし互いに落ちつき、互いのベットに腰かけ向き合う二人。

「えつと……とりあえず確認だな……お前は、シャルルなんだよな?」

「うん……」

「で、男じゃなくて……女の子……なんだな?」

「うん……そうだよ」

予想通りの返答が返ってきたが、性別を偽ってまでここに来た理由が分からないリオンは疑問に思った。

「でも、なんで男って偽ってまでこの学園に?シャルルの腕ならそ

のまま女の姿でも問題は無いはずだけど？」

「うん。男って偽ってたのはね、上の……………父の命令なんだ」

「父って……………デュノア社の社長の？けど、実の子供に『命令』っておかしいだろ？」

「僕はね……………愛人の子なんだよ」

「な……………」

シャルルの言葉に絶句するリオン。だてに15年も生きていれば『愛人の子』の意味も分かってしまう。そのままシャルルは言葉を続けた。

「僕がデュノアに引き取られたのは2年程前。ちょうど母さんが亡くなった頃に、父の部下って人が引き取りに来たの。その時に父がいる事も、会社の社長だつて事も知つたんだ。母さんからは、父はもういないつて言われてたから驚いたよ」

いつもと変わらぬ様子で話すシャルルだが、リオンにはその言葉に冷たい震えが交っているのが感じた。

「それからそのままISの適性検査をして、非公式ではあるけどそのままデュノア社のテストパイロットになったんだ」

「……………」

「父に引き取られたからつて、顔を合わせて直接会ったのは片手で数えられる位なんだ。その中の1回は、本妻も同席してた時もあった

ね、『この泥棒猫の娘が』って言われて叩かれたりもしたよ」

形だけ目と口で笑みの表情を作るが、その笑みにはなんの感情も込められてないように見えた。

「……………シャルルの出生と今の状況は分かった。けど、それがなんで男装までしてここに来た事と繋がるんだ……………」

なるべく無感情に聞くりオンだが、その胸の内はシャルルに理不尽を課した者達への怒りで一杯になっていた。

「うん……………去年の頃からデュノア社の業績は下落しているんだ。他の企業は第3世代型のISの開発に着手してるのに、未だに第2世代型の開発しか出来ないデュノア社はIS関連ではかなり後ろを走ってる状況なんだ。このままじゃ国からの援助も打ち切られそうな時に、全世界が驚愕したあのニュースが耳に入ったんだ」

「俺と一夏が存在か？」

「うん。それを聞いた数日後に、徹底的に男としての振る舞いを叩き込んでIS学園に行って……………デュノアの広告塔の役と、リオンと一夏と近づいて、2人の情報と他国のISの情報を盗んでこいって命令されたんだ」

「っ！」

そこまで聞いた瞬間、リオンは我慢の限界を超えた。

「特に白式とライオン……………もういい！」「っ！……………え？」

「もういい……………それ以上言わなくて……………」

ギリギリと指が軋むほど拳を強く握り締めたりオンが悲痛そうな声を出してシャルルの話しを止めさせた。

「……………そうだよ。皆を騙した僕みたいな悪人の話なんか、もう聞きたくないよね……………」

「確かに悪人だな……………お前の父親は」

「へ？」

「心の底から許さねえ。今すぐでも顔を殴ってお前に土下座させてやりたいほどにな！」

「そ、そんな事させなくてもいいよ……………て、リオンは、僕の事怒ってないの？」

「怒る？何でだ？お前は被害者だろ！悪いのは、血の繋がった子を道具みたいに利用してるお前の親だ！」

胸の内の怒りやモヤモヤをどうにするよう、荒々しくベットから立ち上がり、机に両手を全力で叩きつける。その音に驚くシャルル。背を向けるリオンに恐る恐る声をかける。

「ぼ、僕の言った事信じてくれるの？もしかしたら、またリオンを騙してるかもしれないのに」

「……………命を……………」

「へ？」

「人の命を……………しかも、自分の腹を痛めてまでこの世界で生かしてくれた母親の命を使って嘘を言う奴はいない……………」

微かに肩を震わせながら語るリオンの背中を見ながら、シャルルは『彼も過去に何かあったのか』と悟った。それと同時に自分の言葉を信じてくれた彼に感謝した。

「ありがとリオン。信じてくれて……………『最後』に本当の事を話せてよかった」

「……………最後？」

シャルルの放った最後という単語に反応し、振り返りシャルルの方を見るリオン。

「だって、僕が女だって事はばれちゃったんだし、この事がフランス政府に知られたらただじゃすまないよ。代表候補の肩書は取られて、その後は多分牢屋行きだと思うよ。だからそのまえにリオンに正直に話せてよかったよ」

再び、感情が籠っていない、見せかけだけの笑顔を見せるシャルル。心配させないためにしていると思うそれをリオンに見せた瞬間、

ギュッ……………

「……………？」

リオンに正面から強く抱きしめられていた。

……………リオンside……………

なんでだ……………

なんでこいつは、シャルルは当たり前のように自分を待つ悲観な未来を当たり前前の様に話す……………

なんで死ぬかもしれないのにそれが当たり前のように言うんだ……………

なんでそんな喜びの感情も無い笑顔を俺に向ける……………

なんで……………なんで『最後』なんて悲しい台詞言うんだよ……………

……………

ふざけんな……………

何が親の命令だ……………

何が最後だ……………

行かせない……………

絶対に、シャルルをそんな暗闇な未来しかない所になんか行かせて
たまるか！

そう思うと自然にシャルルの前に行き、その華奢な体を強く抱きし
めた。

「リ、リオン！？な、何して！」

顔の横からシャルルの慌てた言葉聞こえるが、そんなの今は関係ない

「行かせない」

「へ？」

「絶対に、お前をそんな暗くて絶望しかない所には行かせない」

「リ、リオン……………」

「シャルル。答えてくれ。お前はどうしたい？」

「どうしたいって……………僕には選べない……………」

「選ぶ選ばないじゃない。1人の人間として、シャルル・デュノアとしてお前はどうしたいんだ」

「どつって……………僕は……………」

「この先も道具みたいに生きていか、それとも1人の人間として自由に生きていきたいのか。どうなんだ……………」

「僕は……………僕も、自由に生きていよ……………でも、そんなの無理なんだよ」

少し涙ぐんだ声を放って生きてい意志を見せるシャルル。けど、まだデュノアに縛られているからか無理だと言い張る。その様子に俺はシャルルの親に対しての怒りが更に増していくのを感じた。

「……………IS学園・特記事項第二十一」

「へ？」

「本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意しない場合、それらの外的介

入は原則として許可されないものとする……つまり、ここに居れば少なくとも3年の間は会社だろうが国の政府だろうが手も足も出せないってことだ。3年もあれば何かいい案が出て来るって」

なぜか頭の中に過ったから言ったが、ここまで言えばシャルルも何とか安堵してくれるだろ。

「……でも、その間に何も出来なかったら？その間にリオンだけじゃなくて一夏達にも迷惑かけるかもしれないよ………そんなの耐えられないよ。僕に安心出来る居場所なんてどこにもないんだよ………」

……ここまで安心させようと言ったのに、まだ不安で心が一杯になってる。フランスにいた間、どんだけ辛い目にあっただ……

そう感じると同時にシャルルを抱く腕の力を自然と増していった。

「シャルルがその重荷に耐えられないなら、俺も一緒に背負ってやる………お前の苦しみも、辛さも、痛みも、悲しみも、全部一緒に背負ってやる。一緒に苦しんでやる………俺が……」

俺が、お前の居場所になつてやる。だから……………生きてくれ。
命を軽々しく投げ捨てようとしなくてくれ」

一旦シャルルから離れて、正面からシャルルを見据えて言つてやる。
お願いだからもう諦めようとしなくてくれ。お願いだから……………生
きていきたいと言つてくれ。

「……………いいの？」

伏せていた顔を上げ、両目から滂沱の涙を流しながら俺を見つめる
華奢な女の子。

「こんな僕でも……………リオンの傍で……………自由に生きていいの

「？」

「……………当たり前だろ。バカ野郎」

消えかけていた自由に生きる意志を俺に向けてくれたその女の子を俺はそっと優しく再び抱きしめた。

「とりあえず今は胸を貸してやつから、今日まで泣けなかった分、思いっきり泣きな」

「う……………う……………うああああああん！！！」

戸惑うことなく涙を流し、声を上げる少女を俺は胸で顔を受け止め、右手を少女の頭を撫で、左手で背中をポンポンと軽く叩きながら少しずつあやしていった。かすかな記憶の中に数少なくなっていた母さんの事を思い出しながら、泣きやむまで何度も何度もしてやった。

……………side out……………

「……………もう落ちついたか？」

「うん。ありがとうシリオン」

一通り泣いたシャルルは、リオンから離れお礼を言いながら微かに目に残った涙を拭った。

「でも……………3年は大丈夫だからって、何かしないといけないけどどうしようっ？」

「あゝ、そ〜だな〜……………とりあえずだな……………」

これからの事を考えようとした瞬間、

ぐぎゅ〜〜〜〜

「……………」
「……………」

リオンの前にいるシャルルから大きな空腹の音が聞こえ、互いに無表情になったが、

「……………ぷっ……………はは、はははははははははは！」

リオンが耐えきれず嘔き出すと、同時にシャルルの顔が完熟トマトのように真っ赤に染まった。

「あ、その、これは、えっと……………」

「ははは……と、とりあえず腹ごしらえしないとな」

笑いをこらえて言いながらリオンが時計を見ると、時刻は食堂にはもう生徒がほとんどいない時間だった。

「じゃあ、俺は飯食いに行くから、シャルルは少しここでまっつてくれ」

「え？なんで？」

「なんでって、そんな目元が泣き腫れてるのに外に出る気か？」

「あ……」

「心配しなくても、シャルルの分持つてすぐに戻ってくるから……
…また、腹が鳴く前にな」

「っ！？も、もう！リオンのバカア！」

「はははははー！」

シャルルの全く怖くない怒鳴り声を背中に受けながら部屋を出て食堂に向かうリオンだった。

……十数分後……

食堂に向かう途中、両腕が幕と鈴にホルドされ、『捕えた宇宙人』のような感じになっていた一夏と遭遇したが、あまり気にせず食事を終え、シャルルの分を持って部屋に戻ってきた

「お待たせ。残ってた物だけど構わないよな？」

「構わないよ。ありがとう」

食事の乗ったトレイを机に置き、シャルルに見せると、

「えっ！」

トレイの上に乗った、簡単な焼き魚定食を見ると、明らかに『まずいなあ』という声を出してしまうシャルル。

「ん？なんだ？苦手な物でもあったか？」

「え？ううん！何でもないよ！」

疑問思ったりオンだが、シャルルが不器用に割り箸を割り、慣れない手つきで魚を食べようとする様子を見て納得した。

「もしかして、箸が苦手だったか？」

「う、うん。一応練習はしてるんだけどね」

「そりゃ悪かった。スプーンでも持ってくるわ」

「えー？いいよそこまでしなくて」

あくまで迷惑をかけないようするシャルルにリオンはもう少し気楽にしたらいいのにと思うのだった。

「……………シャルルは、もう少し他人に甘えてみたらどうだ。何でもかんでも自分で解決させようとするのは少し悪い癖だと思うぞ」

「うう……………」

「いきなりは難しいと思うから、とりあえず俺からでいいから頼ってみたらどうだ？」

「……………うん。じゃ、じゃあね……………」

「ん？」

割り箸を持ちながら、モジモジとするシャルルだが数秒後、口を開け放った言葉は……………

「その……………リオンが食べさせて」

「……………はい？」

予想の遙か上空を飛んだ筈に面を食らうリオン。

(いやいやいやシャルルさん。たしかに甘えろとは言ったが、そんな予想GAIすぎるお願いですか!?)

と、心の中で葛藤するが、

「あ、甘えてもいいって言ったから……………ダメ……………かな？」

遠慮がちな顔で上目づかいで小さい声でお願いされたりオンはノックアウトした。

「わ、分かった。男に二言は無いつていうからな」

覚悟を決め、慣れた手つきで箸で魚を一欠片取ると、そつとシャルルの口元に運んで行き、

「じゃあ……………あーん」

「あーん」

見た感じ落ちついていている両者だが、心臓がかなりのハイビートで血液を体中に送っているのを感じている両者だった。

開けられた口に魚を送り、それをそつとパクリと食すシャルル。

「……………おいしい。ありがとう」

「いーえ。これくらい構わねえよ」

「じゃあ、次はご飯をお願い」

「了解です。お姫様」

この執事ごつことも親鳥の餌付けごつことも言える食事は、トレイ

上の食材が全部無くなるまで続いたのだった……………

月明かりで照らされたIS学園のアリーナの1つ。そこに長い銀髪を靡かせた少女が夜空を見上げながら立ち尽くしていた。

「教官……………あなたの強さこそ、私の目標であり、存在意義そのものの……………」

己の最も敬う存在を思いながら自分の左目を覆う眼帯を外しそつと地面に落とす。

覆われていたその目をそつと開くと、右目の赤い瞳とは違う、機械的な光を放っている金色の瞳が現れた。

「織斑一夏……………教官に唯一の汚点を与えた存在……………排除する。どのような手を使ってでも……………必ず！」

その赤と金の瞳に込められた狂気と暗い闘志。それに応えるかのように、月が雲に隠れアリーナに覆った暗い影が少女……………ラウラ・ボーデヴィツヒの姿と狂気をも覆うのだった……………

第26話 未来を生きよう(後書き)

次回はリオンの相方の彼の活躍を掻く予定です。長さによりませんが、ラウラとの戦闘を書くかはまだ不明です。

感想・評価お待ちしております。

それでは！

第27話 取引開始(前書き)

最近解禁されたOVAの画像で、箒の剣の巫女の舞のシーンを見て一刻も早く視聴したくなりました。早く12月になればいいのに。

それでは27話どうぞ！

第27話 取引開始

……日曜日・早朝・1048室……

(さーて、昨日はああ言っちゃったけど、どうするか……)

1048室のベットでリオンは重い瞼を開けた。昨夜、この15年生きてきた中で自分でも驚く行動をした事が鮮明に思い出される。

(あんな風に女の子を抱きしめたの初めてだった……女の子ってあんなに柔らかい体なんだな)

その女の子を見るため横に寝返ると、その先に隣のベットで眠る金髪の人物。まだ目元が少し赤くなっている女の子が目に入った。

(安心してきってる寝顔だな。それによく見るとかわいい顔だし……)

気づくと自然とベットから出て、起こさないようにシャルルの近くまで行き、寝顔を間近で覗きこむリオン。

(あそこまで言ったんだ……絶対に何とかしてみせる……絶対に)

そっと優しくシャルルの頭を撫でると、起こさぬよう静かに私服に着替えある場所に向かった。

「で、ほんの10秒前に2日ぶりの睡眠に入ってた僕を叩き起こしてまでここに来た理由は何かな？」

「もう見慣れてるが、眼の下の隈が凄え事になってんな」

少し充血した目を閉じぬよう踏ん張りながら話を聞く日華。だが彼の今の睡眠欲は他の三大欲求を押しつぶすほど膨れ上がっていた。

「大事な話があるんだ。コーヒー煎れてやるからちゃんと聞いてくれ」

「……………分かったよ」

親友が台所で煎れるコーヒーを待ちながら頑張つて頭を覚醒する日華。さっさと聞いてさっさと寝ようと思っていたが……………

「……………」

「……………これで全部だ」

「……………下衆な存在のいたものだね」

リオンから聞いたシャルルの事実を聞き、眠気など完全に消し去った日華が、苦虫を噛み潰すかの表情を見せる。

「……………で、どうしたいの？」

「彼女を自由にする」

「……………言つのは簡単だけど、具体的にはどうするつもり？」

「昨日、寝るまでに考えた俺なりの案は……………」

彼女をオーストラリアに引き抜く」

「は？」

「言つてたよな日華。俺のライオンハートの姉妹機でもある、新しい専用機の操縦者がいないって。しかも、ラピッド・スイッチに長けている人がいって」

「……………まさかフランス政府と取引する気？」

「いや、シャルルが言うには、非公認とはいえデュノア社の専属になつてゐるらしい。この点はフランス政府にどう言おうがどうにもならない。だから彼女を直接縛り付けている所と取引する」

「直接縛りつて……………まさか!？」

「ああ。そのまさかだ……………デュノア社最高責任者、アルフレド・デュノアに直に話す」

リオンの案に、「豆鉄砲を食らったかのような顔になる日華だが、すぐにその案に反論する」

「世界でも有数の大手企業の社長に直談判するバカがどこにいるんだ!」

「ここにいる」

「……………っ! 仮にだよ、仮に何とか話せる事が出来たとしてもどうやって取引する気?」

「シャルルの性別偽装をフランス政府に暴露されたくないかって脅す」

「それは取引じゃなくて脅迫だろうが!」

「先に犯罪紛いの事をしたのは向こうだ。こっちがどうこう言われる筋合いは無い」

「……………なんでそこまでのの？」

リオンの並ならない執着に気圧される日華だが、ここまでしようとするリオンを見たのは初めてだった。

「……………約束したんだ」

「約束？」

コーヒーの入ったカップを両手で持ち、椅子に座りながら頭を深く下げて話すリオン。

「俺が居場所になってやるって……………俺と一緒に自由に生きようって……………約束したんだ……………下らない呪縛を全て消してやるって」

「……………リオン」

その様子の日華は、

「その約束……………他人から聞いたらプロポーズにしか聞こえないんだけど？」

「ぶふっ！」

口に含んだコーヒーを慌てて噴き出してしまっリオン。だが日華の言う事も的を得ている。

「べべべ、別にそんな深い意味で言ったんじゃないよ！とにかくだ！何と言おうと、俺はやるからな！」

珍しく顔を赤くして話すりオンに日華は仕方ないといった顔を浮かべるのだった。

「……………無理だね」

「何？」

「世界に2人しかいない男性IS操縦者だからってそんなすんなり上手くいくはずが無い。適当にはぐらかされるのがオチだよ」

「日華、お前……………」だから僕がやる……………は？」

「デュノアに対する取引は全部僕に任せて」

掛けた眼鏡の指で上げながらまっすぐにリオンを見据えて日華が言った。

「僕の方が色々と優位に運べはずだよ。少なくともリオンよりかはね」

「いや、俺はお前にただ取引の協力をしてもらおうと……………」

「シャルルさんに酷い事をした人と冷静に話す事が出来るの？」

「それは……………」

日華の指摘に口を閉じるリオン。実際声を聞けばそれだけで怒鳴り散らしてしまうのが目に見えてしまった。

「リオンは少しでもシャルルさんの傍に居てあげて。まだ精神的に不安かもしれないから心配だから、支えてあげて。約束したんでしょ」

「……………悪いな。こんな難しい事頼んで」

「気にしないで。友達でしょ……………ただ……………」

「ただ？」

「悪いけど少しでいいから睡眠と下調べの時間を頂戴……………もうリオンが2人に分身してるように見える……………」

やはり限界だったのか。グワングワンと頭を大きく揺らしながら懇願する日華。

「おいしっかりしろ！日華ー！ー！」

事態の悪さに慌てて日華をベットに担いで運んで行くリオンだった。

……数時間後・フランス・デュノア社……

「……………」

一際巨大な高層ビル。その最上階の一室、豪華な肘掛椅子に腰かけ、机の上の書類に目を通し、確認した物に判を押していく1人の人物。金色の顎鬚を生やし、長い同色の色の髪を後ろで束ね、前の部分をオールバックにしている人物・デュノア社長にして最高責任者であるアルフレド・デュノア氏が業務に励んでいると……

ルルルル……………ルルルル……………

「ん？」

机の脇に置かれた電話からのコール音に反応し、手にした書類を机の上に置くと受話器を手にし耳に当てた。

「私だ。なにかあったか？」

『……………』

「？」

返事をするも何の反応も帰ってこない事に違和感を感じ、受話器を元に戻そうとすると、

『フランスIS企業、デュノア社社長アルフレド・デュノア様でしょうか？』

「あ、ああ……………そうだが？」

受話器の向こうから聞こえてきた声は、今まで聞いた事のない男性の物だった。

『突然のお電話、申し訳ありません……………自分は、白月日華と申します』

「シラツキ……………まさか、あのオーストラリアの天才開発者の！？」

『そちらにまで耳に入っているとは、嬉しい限りですね。ですがそんな事を言う為にわざわざ特別回線を使ってまでその社長室に直接電話をした訳ではありません』

「直接だと！？貴様、どうやってこの番号を！？」

『今は関係ないと言ってるでしょう。言っておきますがこの回線は、盗聴・録音・割り込み・逆探知等の対象には捉える事はできません。』

FBIやCIAでも解析不可能な類の物ですので無駄な事はしない方が賢明ですよ」

「……………それで、話とはなんだ？」

予想以上の周到さに驚くアルフレドだが、こうまでして話をしたい事は何か聞くしかなかった。

『では単刀直入に言いましょう……………そちらの専属パイロットである、シャルル・デュノアをこちらに引き入れたいのです』

「な……………んだと!？」

だが受話器の向こうから聞こえてきた話は、予想以上の話だった。

『今こちらが新しく開発中の機体に、シャルルさんが一番の適任者です。機体相性と高い操縦技能を見込んで是非こちらに引き入れたいのですが、どうでしょうか?』

「いきなり、そう言われてもだな……………」

『もちろん無条件でという事はありません。新しいスポンサーの提供。更には、第3世代の基礎開発技術をそちらに教える事を約束します』

こちらに来るメリットを考えれば、普通の相手なら喜んでYESと答えるだろう条件だが、アルフレドはそう答えられなかった。

「そ……………そう言ってもだね、そう簡単に家の子を余所にあげる訳にはいくわけには……………」

『……………家の子ねえ……………』

アルフレドからの返事に、口調に冷たさを宿して日華は次の言葉を言った。

『よくそんな言葉が言えますね……………娘を強引に男性に仕立て上げた分際で!』

「っ!?!」

冷静を保っていたアルフレドも今度ばかりはグウの音も出せずに押し黙った。『全て知ってるんだよ』と、言われたも同然だからである。

『そちらの事も何とか考えて取引を持ちかけてるんですよ……………もしここで断るって言うつもりなら、その瞬間、次はこの回線をフランス政府に繋いでそちらの悪事を全部ぶちまけてもいいんですよ?』

「……………」

『あなたに残った道は2つ。こちらの条件を呑んで素直に受け入れるか、全てを失って二度と光を見る事の出来ない人生を歩んでいくかの2つなんですよ……………』

「……………」

『ちあ……………どうします?』

「……………今一度確認しておきたいのだが……………」

『なんでしょう?』

「今のこの会話は、絶対に外部に漏れる事は無いのだな?」

『それはお約束します。だから、この会話を利用しようなんて事は考えない方が……………』

「いや違う。そうじゃないんだ」

『?』

先程のうるたえている様子とは変わり、まるで懇願するような話し方に変わったのに日華は気づいた。

「……………なら、言っておきたい事がある……………それをとりあえず聞いてくれないか?」

『……………良いでしょう。とりあえずお聞きしましょう』

「……………実は……………」

……………ピド。

「……………」

会話を終えたiphoneを机に置き、押し掛けている椅子の背もたれにもたれる日華。

「……………予想以上に厄介な件になりそうだな……………」

深いため息を吐くと、再びiphoneを手に持ちある所にコールした。

「……………どうも。白月です。実は調査依頼をしたいんですけど……………はい。次の専用機対応者に関わる事です。対象はフランスのある地域とその周辺の人物。そして……………アルフレド・デュノアと『リーシャ』と言う人物についてです」

それから約1週間後。6月に入った学園内は、2週間後に行われるあるイベントの話題で盛り上がっていた。『学年別トーナメント』。その名の通り、学年ごとに行われるトーナメント方式の大会である。4月に行われたクラス代表戦とは違い、腕に自信のある者なら誰もが参加でき、存分に戦う事のできる行事である。

そしてここにもトーナメントに闘志を燃やす者達がいた。

……………第3アリーナ……………

「あら？」

「え？」

反対方向の着替え室から現れた2人。イギリス代表候補のセシリア・オルコットと中国代表候補の鳳鈴音である。

「あらあら、私が一番乗りだと思っていましたが、お早いですわね」

「そういうあんたこそやる気あるじゃない。そんなにトーナメントで活躍したいんだ」

「活躍？いいえ、出るからには目指すは優勝だけですわ。もっとも、どこかのパワーばかりが取り柄の考えなく突進するお方は最初から眼中にありませんわ」

セシリアの発言にカチンと来た鈴。もちろんこのまま黙ってる訳にはいかない。

「あたしこそ、大口叩いといてあっさりリオンにボロ負けした、どつかの高飛車女の事なんか意識すらしてないわ」

鈴の反撃にこめかみに血管を浮かばせるセシリア。

「あら、なにかおっしやいまして？幼児体型の貧乳さん？」

「そつちこそ何よ？メシマズ製造機さん？」

話し方こそ冷静だが、向かい合う両者の間の空気は最悪そのものだ。目から発せられる視線が衝突してバチバチと火花が散る様子が簡単に見られる。

「いいですわ四の五の言わず実力で優越を決めましょう！」

「望む所よ！その鼻っ柱へし折ってあげるわ！」

互いに自分のISを瞬時に展開し向かい合う。

「行きましたよー！」

「ぶっ潰すー！」

そして超スピードで間合いを詰めて行くと……………

Warning! 敵性IS・攻撃襲来

ドオン！

「「な！」」

今まさにぶつかり合おうとしていた2人の間に大型口径の弾丸が襲

ってきた。

即座にそこを離れ、襲撃者の方を向くとそこには、

「シュヴァルツェア・レーゲン……………」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……………」

漆黒のISを身に纏ったラウラが2人に不敵の笑みを浮かべていた。

「何のつもり？いきなり攻撃してくるなんていい度胸じゃない」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……………データを見た時の方が強く見えるな」

ISの通信回線から聞こえてきた襲撃者の発言に怒気を増していくセシリアと鈴。

「何？わざわざドイツからやってきてボコられに来たなんて相当の変わり者ね？」

「鈴さん。失礼ですわよ。礼儀も知らない獣はきちんと躰をしませんと」

お返しとばかりに暴言を返す2人。だが向けられた本人は何も気にする事なく次の言葉を放った。

「下らない挑発だな。量産機に2人がかりで負ける程度ではやはりその程度の存在か。あの下らない種馬共を取り合うメスにはピツタリだな？」

その言葉を聞いた2人は完全にぶち切れそれぞれの主装備を展開し構えた。

「オーケイ、スクラップがご希望みたいね。セシリア。下半分は私が斬り落とすからアンタは上半分を撃ち抜いて」

「了解ですわ」

「時間が惜しいからな、2人掛かりでとつとと掛かってこい。少しばかり遊んでやるわ」

「上等ですわ！」

「ぶっ飛ばす！」

……………第3アリーナへと続く道……………

「今日はどこで訓練するんだっけ？」

「第3アリーナだよな？」

「そっだよ。もうセシリアと鈴も来てるはずだよ」

「足早に行ったりして、私達と一緒に行けばいいものを」

1つの集団が会話しながらアリーナへと向かっていた。上から、一夏・リオン・シャルル・篝の順である。

（それにしても、日華の奴あれから何も言っていないから取引上手く言ってるのか？今の所シャルルに何も起こってないから問題無いと思うけど……………）

自然と視線が隣を歩く、今は胸をコルセットで無理やり押さえて男装しているシャルルに向けた瞬間……

ドオオオオン！！！！

「!？」

向かっていた第3アリーナの方から爆音が響き、モクモクと土煙が上がっているのが4人の視線に入ってきた。

「何かあったのか？」

「急ぐぞ！」

何が起きているのか確認するため全力で走って行く4人。

……………第3アリーナ・観客席……………

「これは!？」

観客席に着いた4人が目にしたのは、セシリアと鈴がラウラと2対1の戦闘をしている物だった。しかも優位に立っているのはラウラの方だった。

「2人掛かりで劣勢だと!？なぜだ？」

「なにかしらの機能があつた機体にあるのか？」

第と一夏は疑問に思うが、その答えがすぐ判明した。

「喰らえ！」

ガゴン、と音を立てながら肩の衝撃砲を放つ鈴。爆音とともに放たれた不可視の弾丸がラウラ目掛けて放たれるが、

「何度やろうとこの《停止結界》の前では無駄な事だ！」

ラウラが片手を前方に掲げると、衝撃砲の弾丸がラウラに命中する寸前で散ってしまうのが目に入ってきた。

「ボーデヴィツヒのあの機体、シールドエネルギーとはまた違う防御機能があるみたいだな」

「だから2人掛かりなのにほとんど無傷なのか」

冷静に分析する面々。押され気味のセシリアと鈴だが、何も危険な事は無いだろうと考えそのまま見ている事にした。

……が、そうも言ってもらえない状況がやってきた。

セシリアの不意を突いた零距离のミサイル攻撃。それを受けながらもほとんどダメージの無い状態で黒煙から出て来たラウラが一気に攻勢に出てきたのだ。両手首プラズマ刃とワイヤーに繋がった実体刃を展開し2人に襲いかかった。見る見る内にシールドと装甲を削られていく2人だが、ラウラはそこからワイヤーを2人の首に括りつけ更に殴打し始めたのだ。

もう、レッドゾーン機体維持警告域どころか、デッドゾーン操縦者生命危険領域に突入しているのは見ただけで分かる。

「ひどい！あのままじゃ命も危険だよ!？」

「おのれ……」

シャルルの心配に、幕の怒りの眩きが終わった瞬間、その傍で2つの影が動いた。

「リオン!」

「おお!」

白式とライオンハートを展開した2人が、アリーナ目掛けて飛び込んだ。

白式が零落白夜でアリーナのシールドを切り裂き、そこをすかさずリオンが飛び込み、起動させたゲイルをセシリアと鈴の首に括られ

たワイヤーを切り裂いた。

「何？」

驚くラウラに、リオンが上空からファンゲバルカンを連射させ牽制しラウラを2人から離れさせる。その隙に一夏がセシリアと鈴を抱え観客席にまで運んだ。

「まさかここまでして私の邪魔をするとはな。度胸だけは認めてやるぞ」

「てめえ……………」

地面に足を付いてライディングを展開するリオン。目の前のラウラは変わらずうすら笑いを浮かべている。

「自分が何をしていたか分かってんのか！あのままだったら2人とも死んでたぞ！」

「そんな事私の知った事ではない」

「っ！……………自分にとって他人の命なんか、どうでもいいって言うのか！？」

ギリギリとライディングを握る握力を増していくリオン。だがそれに気付かないラウラは、

「弱者の命など、どうでもいい。弱者は弱者らしく強者に命を差し出せばいいのだ」

それを聞いた瞬間、

リオンの中の何かが完全にぶち切れ、血に飢えた獣が現れた。

第27話 取引開始（後書き）

今回は、今までの中でもっとも酷い戦闘を描く予定です。ほんと15禁の設定にするかどうかの物を。

感想・評価お待ちしております！

第28話 BEAST LION（前書き）

最近、弓弦さんがもう最新刊を書かないかもしれないとの情報を聞いてから少しへこんだ *rihito* です。

でも、最初から原作7巻以降のストーリーは完全オリジナルにする予定でしたので余り気にせず頑張っていきたいです。

それではどうぞ。

第28話 BEAST LION

……………第3アリーナ……………

現在、第3アリーナの観客席にいる一夏達は目の前の光景に驚愕した。

抉られた地面。

巻きあがった土煙。

ヒビや切り傷で損傷した壁。

そして……………

フィールドの真ん中でラウラを踏みつけ地に這い蹲らせているリオンの姿だった。

……………十数分前……………

「一夏！2人は？」

「なんとか大丈夫だ。けど、かなりやられてるな」

ラウラに暴虐の攻撃を受けたセシリアと鈴を救出して、箒とシャルルのいる観客席にまで運んだ一夏。

横にさせた2人は命は大丈夫そうだが、かなりのダメージが体に刻まれているのが分かる。

と、2人の心配をしていると……

ドッゴオオオオン！！！！

「「「！？」」」

リオンを残してきたアリーナから爆音が響き、地面の土が高く巻き上げられていた。

またラウラの攻撃かと思いアリーナの方に振り向くと、

「ボーデヴィツヒが吹き飛ばされてる！？」

見ればそこには、吹き飛ばされ壁に背中から勢いよく叩きつけられたラウラの姿が。

そして土煙の発生源から現れたラウラを吹き飛ばした人物は、

「リ……リオン？」

ライディング片手に持つ、ライオンハートを纏ったリオンだった。

……アリーナ・フィールド……

ドオン！

最大加速で壁にめり込んだラウラに向かうリオン。

「おのれえ！」

それに反応し、手首部のプラズマ刀をカウンター気味にリオンに向けたラウラだが、

グン！

超反射というべき反応でそれを紙一重でかわしたりオンは、

ガシ………ガゴオン！！！！

「ぐっ！」

左手でラウラの頭を掴むと、そのまま壁に押し付け、

ギャガガガガガガガ！！！！

壁沿いに空を走り、火花が散るほど強く擦り付けながらアリーナ内を滑走した。

「がっ…………ぎっ…………な、なめるなあ！」

何とか体を捻り、プラズマ刀を振るったラウラ。だが、初めて受けている攻撃方法に加えまともな体勢も取れなかったため、その攻撃はリオンに難なくかわされてしまう。

リオンはラウラを離し、その場で勢いを付けるため空中で回転し遠心力を加えたライディングの超振動剣を、

ドゴオオン！

ラウラの“喉元”にヒットさせた。

「が……………ごはあ！」

シールドに守られているとはいえ、超振動剣の衝撃をまともに首に受けたラウラは大量の唾液を口から吐きながらフィールドの真ん中にまで吹き飛ばされる。

「が…………おえ…………あぁ……………」

地に手を置き伏せながら、苦しそうに咳と唾液を吐いているラウラに、

ドスン！

追撃とばかりに、伏せている顔面目掛けて全力の蹴りを放つリオン。

「ぐう……………」

蹴りで吹き飛ばされながらも両足で綺麗に着地し、ようやく体勢を立て直すラウラ。

「な、なめるなよ。この程度で私が……………」

口元の唾液を拭き、両手のプラズマ刀にワイヤーブレードを展開しながらリオンに向き合うが、

ドオンドオンドオン！

「くっ！」

ラウラの発言も待たずに発砲するリオン。その弾丸を先程、鈴の衝撃砲を防いだ防壁で防ぐラウラ。

「この程度の攻撃が届く……………」

防壁を解き、リオンに近づこうとするラウラだが、

ガキイイイイン！

「ぐう……………」

防壁を解いた瞬間、イグニッション・ブースト瞬時加速でリオンが急接近し、振り下ろされたライディングの攻撃をプラズマ刀を交差させ頭上で防ぐラウラ。

「ぐう！？？」

だが、ラウラが受け止めた斬撃は、これまで感じた事のない重みが乗っていた。剣自体やリオンの筋力はもちろんだが、とても深くとても暗い、氷のように冷えた感情とでもいうべき物が、今受け止めている剣に感じた。

「図に……………乗るなあ！」

全開の力を込め、リオンを弾き飛ばすラウラ。すかさず、弾き飛ばされて空中で身動きの取れないリオンに向けて、肩のレールカノンを撃ち放った。

間髪入れずの攻撃。しかも相手は吹き飛ばされたばかりの空に浮いている状態。さすがのラウラも決まったと思いきや頬を緩ませる。

だが、リオンはその攻撃が来るのを読んでいたのか、吹き飛ばされながらも空中で器用に体を捻り迫るカノン砲の弾丸を、

カアアアアアーン！！！！

甲高い音を撒き散らしながら、超振動剣で真ん中から真っ二つに切り裂いた。

リオンが着地すると同時に、その背後で左右に分かれたカノン砲の弾丸の残骸が鈍い音を立てながら落ちていった。

「な……………」

これにはさすがのラウラも驚きの表情を見せるしかなかった。

距離・標的の体勢・タイミング、どの点から見ても逃れようのないカノン砲を避けるならまだ分かる。だが、今日の前にいる男はそれを切り落とした。

ここに来てラウラはようやく理解した。自分が今敵対している人物がどれほどの危険存在かを。

自分が、開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまった事に……………

その思考に捕われ、瞬き出来るか出来ないかと言う刹那な間に意識をリオンから逸らした瞬間、

ドズウン！

「かは！」

その一瞬で距離を詰めたリオンの拳がラウラの腹にめり込むほど深く入りラウラを吹き飛ばした。

……………観客席……………

「すげえ、ボーデヴィツヒを完全に抑え込んでる」

「とんでもない動きだな」

観客席から一夏と筭はリオンの鬼気迫る猛攻に驚いていた。だが、それと同時に不安にもなっていた。

「なあシャルル。リオンの攻撃……………」

「うん……………装甲の無い所ばかり狙ってる」

今の所見えているリオンの攻撃。それらが顔面を含めた頭部。首。腹などのISの装甲の無い部分を攻撃している。シールドエネルギーで体に傷などはつかないが、衝撃はそのままダイレクトに伝わると言ってもいい。その危険性はリオンはもちろん知っているはずだが、幾度も同じ箇所を攻撃している時点で偶然でなく狙って攻撃しているのは分かるのだった。

（本当に……………あれがリオンなの？あの、優しくて、僕に手を差し伸ばしてくれたリオンなの？）

まるで鬼の様な戦いを見せるリオンに胸が痛むほどの不安を覚えるシャルル。

再び目にしたフィールドから新たな土煙が上がった。

……………アリーナ・フィールド……………

「はあ……………はあ……………」

体に感じる痛みを表に出さないように無表情を装うラウラだが、最初の頃と比べ息もかなり上がり、顔に汗が何筋も流れていた。

そこに土煙から出てきたゲイルとライトニングが現れラウラを襲ってきた。

「これ以上好きには！」

片手を突き出し、全てにゲイルとライトニングを停止させるラウラ。

ドオンドオンドオンドオン！！！！

その停止された4つのピッドに4発の弾丸が停止範囲に入らないよう命中し、その場で爆発した。

「ぐう！」

目の前の爆発に停止結界を解き怯んだ瞬間、その爆煙から金色の腕が伸び、ラウラの頭を掴み力を込めて地面に叩きつけた。

「うん！！！！」

地面に深い足跡を残すほど強く叩きつけながらも何とか倒れずに堪えたラウラ。しかしリオンの猛攻は止まらない。

ガンガンガンガン！！！！

力任せの強引な振りで迫る斬撃を捌いて行くラウラだが、その力とリオンを纏う雰囲気気圧に気圧されていく。

そしてその中の一撃で両手を弾かれ、隙だらけになったラウラをリオンが足払いで一瞬宙に浮かせ、

ドオオオン！！！！

胸の部分を蹴り上げ空高く打ちあげた。

「っ！！！！」

もう声を上げる事すらできないラウラ。無抵抗に宙に浮いたその体に、

ガシィ！

腰に手をかけられ、頭が地面に向くよう逆さに抱えられる。

そして、そのまま超スピードで降下していき……

ドオオオオオオオオオオン！！！！

まるで隕石が落ちたかのような土と土煙が巻きあがりフィールド上を覆った。

その土煙が晴れると、そこにかろうじて意識を保ってなんとかISを纏っているラウラを踏みつけて地に這い蹲らせているリオンの姿が現れた。

かった。

……アリーナ・フィールド……

「う……うあ……」

（まだ、意識があるか……）

リオン・マードックは目の前の敵がまだ打ちのめされていない事を知ると、何の意識もなくライディングを振り上げた。

（命を軽んじた事を……後悔しろ……！）

そして躊躇なく振り下ろされた刃は、

ゴオオオオン……！！

凄まじい音を撒き散らしながら、交差されたように重ねられた“2本”の刃に止められていた。

その1本は白式を纏った一夏の雪片式型。

そしてその後ろのもう1本は、打鉄の近接ブレードで、それを持つ

ている人物は、

「おい、やりすぎだマードック……………」

生身でそれを持つ、世界最強のIS使い、織斑千冬だった。

「ち、千冬姉！？なんでここに！？てゆーか、よく生身でそんなの持てるな!？」

「だから織斑先生と……………ま、今はそこはどうでもいいか」

軽い姉弟の会話をし、2人同時に止めた刃の持ち主に視線を向ける。

「……………何すんだ?……………一夏……………千冬さん……………」

戦闘の中見れなかったリオンの表情。目の瞳孔は開いて、眉間にしわを寄せて正に慈悲の欠片もないその表情をようやく見た一夏は、目の前の男がリオンじゃないと一瞬だが錯覚してしまった。

それに加えて、いつもの明るさが消え去った低く重い声に少し押されながらも応えて行く一夏と千冬。

「やりすぎだ。リオン。もう決着はついた。剣を引いてISを解除しろ」

「まだこいつはISを纏ったままだ。決着はついてないから下がれ」

「これ以上は教師として容認出来ん。まだ続けると言うなら懲罰を課すぞ」

「上等だ。反省文500枚だろうが1000枚だろうが書いてやるからそこをどけ」

目上の千冬に対して敬語も使わず話すリオン。ここで千冬はリオンが尋常なくキレている事に気付いた。

「分かるだろ。これ以上やったら流石に命に係わる」

「お前がそこまで怒る程の原因があるって、ここで手を引かんともう戻れなくなるぞ」

「こいつは……こいつは人の命なんかどうでもいいと言っただ………だったらこいつの命がどうなるうがどうでもいいって事だろ………もう一度言う………そこをどけ、一夏、千冬さん」

「ダメだ!」「断る!」

それを聞いた瞬間、リオンが喉を咲くほどの大声を上げた。

「そこをどけつつつてんだ!どかねえって言うなら、力尽くでぶっ飛ばしてでもどかさぞ!」

そう言い、剣を弾いてバックステップで距離を取り、ライディングを構えなおすリオン。

「上等だ!そこまで言うなら相手になってやらあ!」

千冬を強引に後ろに下げ、リオンと正面から向き合つ一夏。

正に一触即発のこの状況の中、新たな闖入者が現れた。

「リオン！」

「？……………シャルルか……………」

それは、自身の専用機。現存のラファールを自分用にカスタマイズした、元のネイビーカラーをオレンジ色にした、ラファール・リヴアイブ・カスタム？を纏ったシャルルだった。

「お願いだから……………もうこれ以上しないで……………まだするって言っ
なら……………僕は君を撃つ！」

大型ハンドガンを展開し、それを両手で構えてリオンに銃口を向けるシャルル。

「……………撃ちたきや撃て……………それでも俺は止まんねえ」

向けられた銃を気にせず再び一夏と向かい合うリオン。

「お願いだからもう止めて！」

その背中に再び掛かるシャルルの叫び。再びシャルルの方を向いた
リオンの目に映ったのは、

「っ！……………シャルル……………」

目に溜まった涙を流さぬよう耐えながら、照準が定まらない程震え

ながら銃を向けているシャルルだった。

「……………お前は、こいつが……………ボーデヴィツヒのした事が許せるのか！俺は許す事が出来ない！……………だから！」

「だとしても！お願いだから……………もう、これ以上はしないで……………」

「っ！……………」

掛けられる悲痛なシャルルの声に揺り動くリオンの心。しかし、命を物扱いしたラウラへの怒りとが天秤にかかり大きく揺れる。

「俺は……………俺は……………」

ライディングを持つ手から、ギリギリと絞る音を鳴らしながら葛藤する。自分でももつどうしたらいいのか分からなくなってしまっているリオン。

「……………リオン、言ってくれたよね」

「？」

「自分と一緒にいようって……………僕、あの時嬉しかった。誰とも繋がってない自分にも、繋がってくれる人がいるんだって思えて嬉しかった」

「……………」

「けど……………けど！今のリオンは！あの時僕に優しく言ってくれた

リオンじゃない！今のリオンと居ても、僕ちつとも嬉しくないよ！」

「……………」

「もう止めてほしいから……………向けたくないのに君に銃を向けてるんだよ……………お願いだから……………」

「……………」

「お願いだから……………僕に君を撃たせないで！」

「……………」

目から涙を幾筋も流し、両手が大きく震え、もう形だけ構えている銃を向けながら心からの悲痛な声を上げ訴えるシャルル。それにリオンは……………

……………フォン……………

ライディングを収納^{クローズ}することで応えた。

「……………それはダメだ……………今お前に撃たれたら、あの時お前に言った言葉が全部口だけの物になる……………」

顔を伏せ、自らも悲痛な声を出す。

「……………今の俺ってなんだろうな……………親友に怒鳴って……………目上の教師に生意気言っ……………またお前を泣かせちまった……………最低な大馬鹿野郎だな……………」

重くなった足を動かして、銃を構えた格好から動けなくなっているシャルルの近くまで行き、そつと銃を構えている両手を包んだ。

「……………嫌な事させて……………悪かった。ごめんな、シャルル……………」
両手でシャルルの手をゆっくりと銃からはがし、銃を地面に落とすた。

「……………リ……………オン……………」

フラア……………

「っ！シャルル!？」

ISが解かれ、生身となったシャルルが倒れそうになるもリオンがそれを支えた。

その様子を見ていた織斑姉弟は、

「千冬姉……………リオンに処罰は……………」

「……………観客席に居るオルコットと鳳を医務室まで運べ。それが処罰だ」

「……………ありがとう」

「お前に怒鳴った相手の事で礼を言う必要があるか？」

「当たり前だよ。だって……………あいつは親友だから」

「……………そうか」

誰にも邪魔されない僅かな家族の会話を交わした。

……………第3アリーナ・観客席の死角……………

「……………あれが、ライオンハートの最高速度。想像以上だったね」

今、アリーナに居るどの人物からも見えない箇所。そこに山吹の目を鋭くさせ、先程までの戦闘を見ていた感想を口にする存在がいた。

「でも、あれなら想定内……………必ず見せつける……………世界に……………」

……………『四季』の……………『羽桜』の実力を！」

山吹の髪を靡かせながらその人物はアリーナを去って行った。

胸の中の燃え盛る闘志を感じながら……………

第28話 BEAST LION(後書き)

今回は、保健室での騒動と、リオンの過去の告白を書いて行きます。

感想・評価お待ちしております。

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8969s/>

IS [インフィニット・ストラトス] WHITE BLADE & LION SOUL

2011年11月13日19時23分発行